

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集

# 釈迦堂 III

山梨県東八代郡一宮町野呂原地区

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書



1987. 3.

山梨県教育委員会  
日本道路公団

# 釈迦堂 III

山梨県東八代郡一宮町野呂原地区

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1987. 3.

山梨県教育委員会  
日本道路公団

## 序

本報告書は、中央自動車道建設に先立ち、山梨県東山梨郡勝沼町から東八代郡一宮町にかけて発掘調査された釈迦堂遺跡群のうち、一宮町野呂原地区（野呂原遺跡）について、調査の結果をまとめたものであります。

釈迦堂遺跡群は1980・81両年度にわたって発掘された大遺跡群で、中央自動車道建設に伴う事前発掘は本遺跡群をもって完了いたしました。発掘調査の対象となったのは、京河川扇状地上に展開される34か所の遺跡のうち、5か所、約2万㎡に達する広大な地域であります。遺構や遺物は極めて豊富で、年代的にも先土器時代から平安時代に及びますが、質量ともに卓越するのは縄文時代であります。当埋蔵文化財センターにおきましては、これら発掘資料について鋭意整理を加えて参りましたが、昨年度は一宮町塚越北A地区など3地区について、そして本年度は残り2地区、すなわち野呂原地区並びに三日月平地区について、それぞれその成果を刊行することができました。

野呂原遺跡の発掘面積は約3,000㎡、発見された遺構は住居址21軒、土壇125基、土器捨て場1か所ですが、平安時代の住居址1軒を除き、すべて縄文時代に属しております。縄文時代の遺構のうち、出土の土器・土偶等によって時期のほぼ確定できる住居址17軒、土壇16基について精査した結果、中期の藤内期から曾利期に至る時期を主体とする遺構であることが判明いたしました。調査者は各期について、住居址と土壇並びに土器捨て場との関係を推論しておりますが、井戸尻期については、集落としての規模・形態をある程度解明することができました。またこの期に属する一土壇からは北関東系大木8a式土器の完形品が出土いたしました。県内では一の沢西遺跡に次ぐ二例目の確認であり、北関東地区との交流を語る貴重な資料が得られました。なお平安時代の住居址からは鉄製紡錘車・鑽などの鉄製品、袴帯金具、皇朝十二銭の一つ隆平永宝が出土いたしました。

釈迦堂遺跡群の調査も、このたび全3冊の報告書の刊行によって完了し、縄文時代を中心とするこの大遺跡群の全容をほぼ明らかにすることができました。本報告書がより多くの方々にご利用いただけますよう念じてやみません。

本報告書が刊行されるまでには、直接発掘作業に参加されたの方々をはじめとして、出土品の整理に当たられたの方々、専門の事項について種々ご教示・ご指導を賜ったの方々など、多くの方々のお世話になりました。また関係各機関や地元地区の皆様からは終始多大のご援助・ご協力を賜りました。

末筆ながら、お世話になった方々に改めて厚く御礼申し上げます。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

## 例 言

- 1 本報告書は、中央自動車道建設に伴う事前調査として発掘調査された山梨県東八代郡一宮町・東山梨郡勝沼町に所在する釈迦堂遺跡群のうち、一宮町の飛び地である野呂原地区（S-V区）の「野呂原遺跡」の報告書である。
- 2 調査は日本道路公団東京第二建設局から、山梨県教育委員会が委託を受けて実施したものである。
- 3 発掘調査は長沢宏昌、出月洋文、中山誠二が担当し、出土品の整理ならびに報告書の作成は山梨県埋蔵文化財センターで行ない、長沢が担当した。
- 4 本報告書の編集・執筆は長沢が行なった。ただし、第三章第2節は保坂康夫が執筆した。
- 5 調査区域の設定はI区～IV区の担当である田代、小野の設定したものを踏襲した。
- 6 写真撮影は遺構を長沢、出月、中山が、遺物を末木健が行なった。また、展開写真は小川忠博氏によるものである。
- 7 本遺跡出土石器の石材鑑定は、山梨文化財研究所第6研究室長河西学氏に依頼した。
- 8 本報告書にかかる出土品ならびに記録図面・写真等は、一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 9 出土品整理参加者  
新津重子、中山千恵、遠藤映子、宝福寿美江、山本治代、渡辺薫、羽中田恵子、丸山孝子、坂本穂波、広瀬千江美、石田文次郎、高野俊彦、石川龍子、石川澄子、鶴田良美、中山倫子、大森喜久枝、丸山栄子、古屋泰美、守屋真里、飯室幸子、広瀬仁恵
- 10 発掘調査から報告書の作成に至るまで、多くの方々から御教示、御指導を賜わった。本来なら御芳名を記し、謝意を表すべきであるが、別の方法をとりたい。

# 目 次

序	
例言	
第Ⅰ章 調査状況	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡概況	
第1節 遺跡の位置	2
第2節 遺跡周辺の環境	4
第3節 調査方法	5
第4節 標準層位	6
第Ⅲ章 遺構と遺物	
第1節 概要	7
第2節 先土器時代	8
第3節 縄文時代	9
1 住居址と出土土器	9
2 土坑と出土土器	53
3 単独埋葬	75
4 土器捨て場と出土土器	80
5 土製品および特殊土器	
a 土偶	103
b 顔面把手	119
c 獣面把手	124
d 土製円盤	124
e 有孔罅付土器	132
f 器台	135
g ミニチュア土器	139
h その他の土製品	139
6 石製品	140
7 石器	
a 打製石斧	140
b 磨製石斧	148
c 磨石・凹石	152
d 石皿	158
e 石匙	158
f 石鏃	161
g 石錐	166
h その他の石器	167
8 グリッド出土土器	168
第4節 平安時代	171
第Ⅳ章 まとめ	
・野呂原遺跡の縄文時代の遺構変遷について	176
・土器捨て場について	179

## 挿 図 目 次

- |      |               |      |                   |
|------|---------------|------|-------------------|
| 第1図  | 遺跡位置図         | 第39図 | 15号住居址実測図         |
| 第2図  | 釈迦堂遺跡群各遺跡位置図  | 第40図 | 同炉実測図             |
| 第3図  | 周辺遺跡分布図       | 第41図 | 15号住居址出土土器        |
| 第4図  | グリッド設定図       | 第42図 | 16号住居址実測図         |
| 第5図  | 基準層序          | 第43図 | 同炉実測図             |
| 第6図  | 野呂原遺跡全体図      | 第44図 | 同埋甕実測図            |
| 第7図  | 先土器時代石器実測図    | 第45図 | 16号住居址出土土器        |
| 第8図  | 2号住居址実測図      | 第46図 | 17号住居址実測図         |
| 第9図  | 同炉実測図         | 第47図 | 同炉実測図             |
| 第10図 | 2号住居址出土土器     | 第48図 | 17号住居址出土土器        |
| 第11図 | 3号住居址実測図      | 第49図 | 18号住居址実測図         |
| 第12図 | 同炉実測図         | 第50図 | 同炉実測図             |
| 第13図 | 同埋甕実測図        | 第51図 | 19号住居址実測図         |
| 第14図 | 3号住居址出土土器     | 第52図 | 同炉実測図             |
| 第15図 | 4号住居址実測図      | 第53図 | 19号住居址出土土器        |
| 第16図 | 同炉実測図         | 第54図 | 20号住居址実測図         |
| 第17図 | 4号住居址出土土器     | 第55図 | 同炉実測図             |
| 第18図 | 5号住居址実測図      | 第56図 | 20号住居址出土土器        |
| 第19図 | 5号住居址出土土器     | 第57図 | 21号住居址実測図         |
| 第20図 | 6号住居址実測図      | 第58図 | 同炉実測図             |
| 第21図 | 同炉実測図         | 第59図 | 同立石実測図            |
| 第22図 | 6号住居址出土土器     | 第60図 | 21号住居址出土土器        |
| 第23図 | 7号住居址実測図      | 第61図 | 22号住居址実測図         |
| 第24図 | 7号住居址出土土器     | 第62図 | 22号住居址出土土器その1     |
| 第25図 | 8号住居址実測図      | 第63図 | 22号住居址出土土器その2     |
| 第26図 | 8号住居址出土土器     | 第64図 | 23号住居址実測図         |
| 第27図 | 10号・11号住居址実測図 | 第65図 | 住居址出土土器拓本その1      |
| 第28図 | 10号住居址炉実測図    | 第66図 | 住居址出土土器拓本その2      |
| 第29図 | 11号住居址炉実測図    | 第67図 | 住居址出土土器拓本その3      |
| 第30図 | 11号住居址埋甕実測図   | 第68図 | 住居址出土土器拓本その4      |
| 第31図 | 10号住居址出土土器その1 | 第69図 | 住居址出土土器拓本その5      |
| 第32図 | 10号住居址出土土器その2 | 第70図 | 住居址出土土器拓本その6      |
| 第33図 | 11号住居址出土土器    | 第71図 | 住居址出土土器拓本その7      |
| 第34図 | 12号住居址実測図     | 第72図 | 4号土坑実測図           |
| 第35図 | 同炉実測図         | 第73図 | 31～33・44・45号土坑実測図 |
| 第36図 | 12号住居址出土土器    | 第74図 | 47号土坑実測図          |
| 第37図 | 13号住居址実測図     | 第75図 | 55・56号土坑実測図       |
| 第38図 | 13号住居址出土土器    | 第76図 | 74号土坑実測図          |

- 第 77 図 99号土坑実測図  
第 78 図 100号土坑実測図  
第 79 図 110号土坑実測図  
第 80 図 111号土坑実測図  
第 81 図 122号土坑実測図  
第 82 図 123号土坑実測図  
第 83 図 128号土坑実測図  
第 84 図 129号土坑実測図  
第 85 図 土坑群その 1  
第 86 図 土坑群その 2  
第 87 図 土坑群その 3  
第 88 図 土坑群その 4  
第 89 図 土坑群その 5  
第 90 図 土坑群その 6  
第 91 図 土坑群その 7  
第 92 図 土坑群その 8  
第 93 図 土坑群その 9  
第 94 図 土坑群その 10  
第 95 図 土坑群その 11  
第 96 図 土坑群その 12  
第 97 図 土坑群その 13  
第 98 図 土坑群その 14  
第 99 図 土坑群その 15  
第 100 図 土坑群その 16  
第 101 図 土坑群その 17  
第 102 図 土坑群その 18  
第 103 図 土坑群出土土器その 1  
第 104 図 土坑群出土土器その 2  
第 105 図 土坑群出土土器その 3  
第 106 図 土坑出土土器拓本その 1  
第 107 図 土坑出土土器拓本その 2  
第 108 図 土坑出土土器拓本その 3  
第 109 図 単独埋葬位置図  
第 110 図 1号埋葬実測図  
第 111 図 3号埋葬実測図  
第 112 図 4号埋葬実測図  
第 113 図 5号埋葬実測図  
第 114 図 6号埋葬実測図  
第 115 図 7号埋葬実測図  
第 116 図 8号埋葬実測図  
第 117 図 9号埋葬実測図  
第 118 図 10号埋葬実測図  
第 119 図 11号・12号埋葬実測図  
第 120 図 単独埋葬土器その 1  
第 121 図 単独埋葬土器その 2  
第 122 図 土器捨て場小グリッド設定図  
第 123 図 土器捨て場遺物接合図  
第 124 図 土器捨て場遺物出土状況  
第 125 図 土器捨て場セクション図  
第 126 図 土器捨て場出土土器その 1  
第 127 図 土器捨て場出土土器その 2  
第 128 図 土器捨て場出土土器その 3  
第 129 図 土器捨て場出土土器その 4  
第 130 図 土器捨て場出土土器拓本その 1  
第 131 図 土器捨て場出土土器拓本その 2  
第 132 図 土器捨て場出土土器拓本その 3  
第 133 図 土器捨て場出土土器拓本その 4  
第 134 図 土器捨て場出土土器拓本その 5  
第 135 図 土器捨て場出土土器拓本その 6  
第 136 図 土器捨て場出土土器拓本その 7  
第 137 図 土器捨て場出土土器拓本その 8  
第 138 図 土器捨て場出土土器拓本その 9  
第 139 図 土器捨て場出土土器拓本その 10  
第 140 図 土偶・顔面・獣面把手分布図  
第 141 図 土偶その 1  
第 142 図 土偶その 2  
第 143 図 土偶その 3  
第 144 図 土偶その 4  
第 145 図 土偶その 5  
第 146 図 土偶その 6  
第 147 図 土偶その 7  
第 148 図 土偶その 8  
第 149 図 土偶その 9  
第 150 図 土偶その 10  
第 151 図 土偶その 11  
第 152 図 顔面把手その 1  
第 153 図 顔面把手その 2  
第 154 図 顔面把手その 3  
第 155 図 獣面把手  
第 156 図 土製円盤分布図  
第 157 図 土製円盤その 1  
第 158 図 土製円盤その 2  
第 159 図 土製円盤その 3  
第 160 図 土製円盤その 4

- 第161図 有孔罎付土器分布図
- 第162図 有孔罎付土器その1
- 第163図 有孔罎付土器その2
- 第164図 器台
- 第165図 ミニチュア土器
- 第166図 その他の土製品その1
- 第167図 その他の土製品その2
- 第168図 珠状耳飾
- 第169図 打製石斧その1
- 第170図 打製石斧その2
- 第171図 打製石斧その3
- 第172図 打製石斧その4
- 第173図 磨製石斧その1
- 第174図 磨製石斧その2
- 第175図 磨製石斧その3
- 第176図 磨石・凹石その1
- 第177図 磨石・凹石その2
- 第178図 磨石・凹石その3
- 第179図 磨石・凹石その4
- 第180図 石皿
- 第181図 大型石匙
- 第182図 小型石匙
- 第183図 石鏃分布図
- 第184図 石鏃破損部位模式図
- 第185図 石鏃
- 第186図 石錐
- 第187図 その他の石器
- 第188図 グリッド出土土器その1
- 第189図 グリッド出土土器その2
- 第190図 織維土器拓本
- 第191図 14号住居址実測図
- 第192図 同カマド実測図
- 第193図 14号住居址出土土器その1
- 第194図 14号住居址出土土器その2
- 第195図 14号住居址出土鉄製品・銅製品・古銭
- 第196図 遺構変遷図その1
- 第197図 遺構変遷図その2



## 図 版 目 次

- 図版 1 野呂原遺跡全景（調査前）
- 図版 2 上・中 2号住居址 下 3号住居址
- 図版 3 上・中 3号住居址 下 4号住居址
- 図版 4 上・中 4号住居址 下 5号住居址
- 図版 5 上・中・下 6号住居址
- 図版 6 上 7号住居址 中 10・11号住居址 下 10号住居址
- 図版 7 上・中・下 10号住居址
- 図版 8 上 10号住居址 中・下 12号住居址
- 図版 9 上・中 13号住居址 下 15号住居址
- 図版 10 上・中・下 15号住居址
- 図版 11 上・中・下 16号住居址
- 図版 12 上 17号住居址 中・下 19号住居址
- 図版 13 上 19号住居址 中・下 20号住居址
- 図版 14 上・中・下 21号住居址
- 図版 15 上 21号住居址 中・下 22号住居址
- 図版 16 上 4号土城 中 24号土城 下 31・33・44・45号土城
- 図版 17 31・33・44・45号土城 遺物出土状態および花崗岩削り込み状態
- 図版 18 上 35～40号土城 中 41・42号土城 下 66～70号土城
- 図版 19 上 74号土城 中 100号土城 下 101号土城
- 図版 20 上 110号土城 中・下 111号土城
- 図版 21 上 111号土城 中・下 128号土城
- 図版 22 上 1号埋甕 中 3号埋甕 下 4号埋甕
- 図版 23 上 5号埋甕 中 6号埋甕 下 7号埋甕
- 図版 24 上 9号埋甕 中・下 11・12号埋甕
- 図版 25 上 土器捨て場セクション 中・下 土器捨て場遺物出土状態
- 図版 26 上・中・下 14号住居址
- 図版 27 14号住居址遺物出土状態
- 図版 28 住居址出土土器（上 2号 下 3号）
- 図版 29 住居址出土土器（上 4号 下 5号）
- 図版 30 住居址出土土器（6号）
- 図版 31 住居址出土土器（上 7号 中 8号 下 10号）
- 図版 32 住居址出土土器（上 10号 下 11号）
- 図版 33 住居址出土土器（上 12号 中 13号 下 15号）
- 図版 34 住居址出土土器（上 15号 中上 16号 中下 17号 下 19号）
- 図版 35 住居址出土土器（上 20号 中 21号 下 22号）
- 図版 36 住居址出土土器（22号）
- 図版 37 土城出土土器（上左 4号 上右 24号 中左 31号 中右 32号 下左 33号 下右 34号）
- 図版 38 土城出土土器（上左 56号 上右 72号 中左 74号 中右 99号 下 100号）

- 図版 39 土城出土土器（上左 101号 上右 111号 中左 112号 中右 128号 下 129号）
- 図版 40 単独埋藏（上左 1号 上右 3号 中左 4号 中右 5号 下 6号）
- 図版 41 単独埋藏（上左 7号 上右 8号 中左 9号 中右 10号 下左 11号 下右 12号）
- 図版 42 土器捨て場出土土器
- 図版 43 土器捨て場出土土器
- 図版 44 グリッド出土土器
- 図版 45 顔面把手
- 図版 46 上 獣面把手 下 土偶
- 図版 47 土偶
- 図版 48 土偶
- 図版 49 特殊土器（上 有孔罎付土器 下 器台）
- 図版 50 土製円盤
- 図版 51 その他の土製品（上 有孔円盤 中左 ミニチュア土器 中左 耳飾 下左 不明土製品 下右土錘・土玉）
- 図版 52 打製石斧
- 図版 53 上 打製石斧 下 磨製石斧
- 図版 54 磨製石斧
- 図版 55 石皿
- 図版 56 磨石・凹石
- 図版 57 石匙
- 図版 58 上 石礮 中 石錐 下 その他の石器
- 図版 59 展開写真（10号住居址出土土器）
- 図版 60 展開写真（10号住居址出土土器・74号土城出土土器）
- 図版 61 14号住居址出土遺物

## 表 目 次

第 1 表	住居址出土土器観察表	51
第 2 表	土埴一覽表	69
第 3 表	土埴出土土器観察表	74
第 4 表	土器捨て場出土土器観察表	101
第 5 表	土偶観察表	116
第 6 表	土製円盤観察表	129
第 7 表	有孔罎付土器観察表	134
第 8 表	打製石斧観察表	145
第 9 表	磨製石斧観察表	148
第 10 表	磨石・凹石観察表	156
第 11 表	石皿観察表	158
第 12 表	石匙観察表	161
第 13 表	石鏃観察表	164
第 14 表	石錐観察表	166

# 第 I 章 調査状況

## 第 1 節 調査に至る経過

昭和55年 2月15日	文化庁に発掘通知を提出する。
昭和55年 5月30日	文化庁より県教育委員会へ発掘通知の受理通知書が送付される。
昭和56年 8月 4日	S-V区(野呂原遺跡)の発掘調査を開始する。
昭和56年12月 5日	石和警察署へ遺物の発見通知を提出する。

## 第 2 節 調査組織

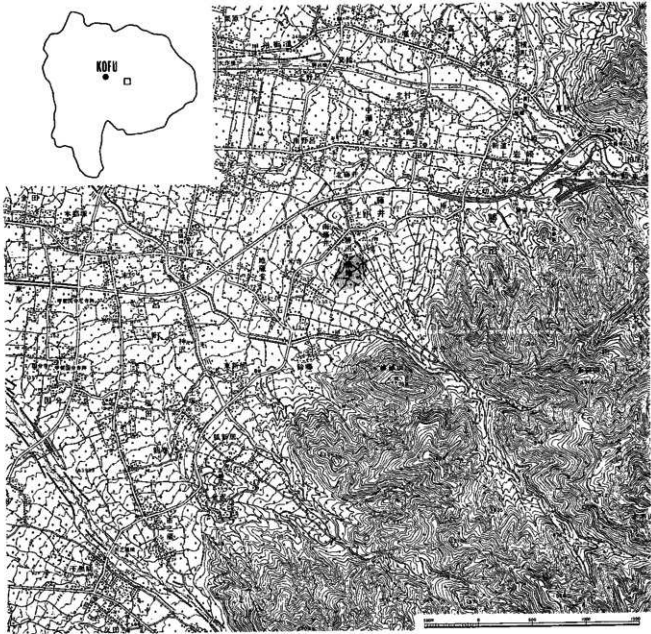
調 査 主 体	山梨県教育委員会
調 査 担 当 者	長沢宏昌(県文化財主事) 出月洋文(県文化財主事、現谷村第一小学校教諭) 中山誠二(県文化財主事)
調 査 員	山本直人(広島大学卒、現石川県立埋蔵文化財センター) 小林和夫(中央大学卒、現都立久留米養護学校教諭) 渡辺儀訓(明治大学卒、現山中東小学校教諭) 野田昭人(国学院大学卒、現御坂町教育委員会)
補 助 調 査 員	小宮俊久(中央大学学生) 中山裕明(中央大学学生) 池田浩之(中央大学学生)
作 業 員	田中きくの、奥村澄江、小河順一、小田切俊江、須田君子、渡辺薫、丸山美津子、守屋真里、古屋泰美、田中マリ、中沢益、久保田典雄、石川澄子、水上正樹、吉沢和弥、小沢公久、梶原生己吉、相原一仁、岩間裕記、今井健志、一ノ瀬修、前田孝英、山口静彦、神宮志文生、保坂公仁、日原信弘、三沢益弘、石原美智雄、奥山武則、新藤一登、望月秀樹、篠本耕二、古屋良二、雨宮淳一、水上由人、石黒久人、古屋順司、名執俊二、保坂浩幸、岩間修治、芦沢直樹、岩下浩、久保川潤、武井俊文、和田茂樹、三枝一彦、鈴木敏弘、佐久間浩幸、雨宮照子、金子美枝、小河いつえ、内藤和子、早川房子、松岡美恵子、武井茂子、山下いく代、小田切きく子、広瀬広美、村上一誠、雨宮和子、鎮目恵美子、窪田満子、古屋一恵、小沢さち江、田中仁子、古屋邦治、鈴木敏弘、佐藤孝彦、早川真路、金子優、小沢利秀、初鹿野晋一、中村有紀子、古屋昌千代、稲葉照江、手塚裕彦、飯島昭子、雨宮延子、雨宮久子、河野美津子、豊島勝美、川上勝子、武田良子、雨宮よし子、佐藤孝彦、古泉栄子。

## 第Ⅱ章 遺跡概況

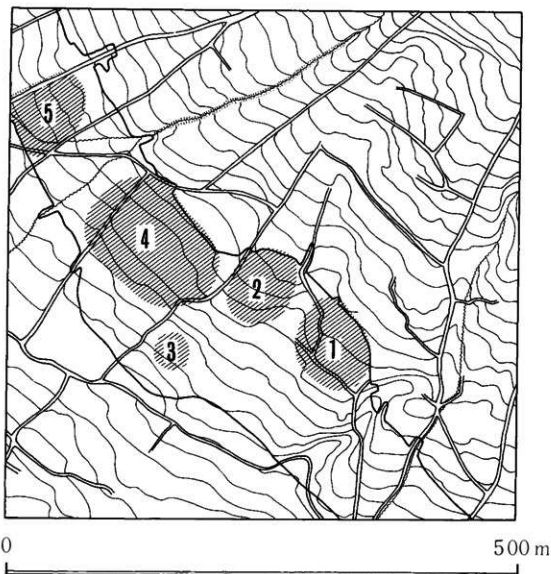
### 第1節 遺跡の位置

釈迦堂遺跡群は、甲府盆地東部の東八代郡一宮町から東山梨郡勝沼町にかけて所在する。遺跡群は山梨県でももっとも有名な扇状地の一つである、京戸川扇状地の扇中部に位置し（第1図）、標高は約450mを計る。蜂城山、茶白山を後背としたこの扇状地は、北西方向に緩やかに傾斜しており、遺跡群の調査区域内での標高差は10m以上となっている。この地域一帯は、このような扇状地形が発達しており、扇端部では複合扇状地を形成している。当地では、扇状地上部から扇端部にまで遺跡の分布が濃密に認められ、とくに、縄文時代、平安時代の遺跡が多く存在する。詳細は後述するが、遺跡群付近に限っても縄文時代中期を中心とした数多くの遺跡が確認されている。

釈迦堂遺跡群は中央自動車道のパーキングエリアにあたるため、調査区域も本線部分に比べ格段に広いものと



第1図 遺跡位置図



第2図 釈迦堂遺跡群各遺跡位置図

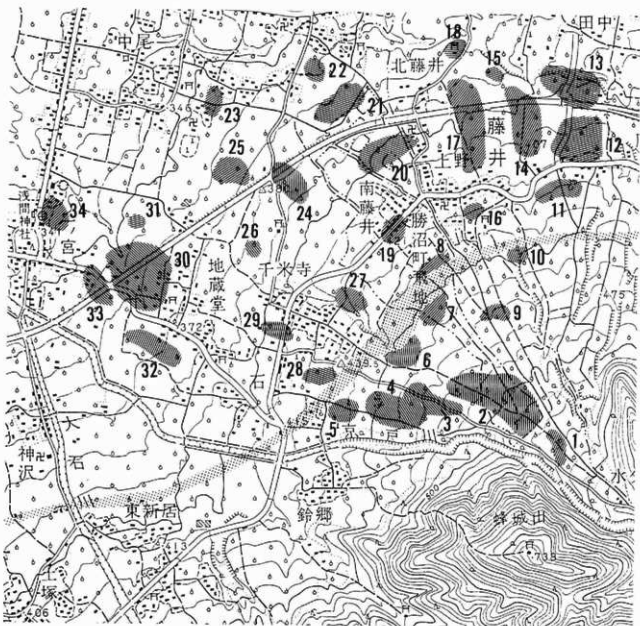
なっている。長さ約450m、最大幅約150m、面積約52000㎡が調査の対象となった。その中に一宮町塚越北A(第2図-1、以下第2図略)、塚越北B(2)、勝沼町釈迦堂(3)、三口神平(4)、一宮町の飛び地である野呂原(5)の五つの遺跡が存在している。野呂原遺跡は、釈迦堂遺跡群のうちもっとも東側の遺跡となる。このうち、釈迦堂遺跡は平安時代の土坑1基を調査しただけで、集落は確認されなかったが、他の4遺跡ではそれぞれ集落が確認されている。野呂原遺跡以外の3遺跡についてみると、塚越北A遺跡では早期の神之木台式期、前期の黒浜式併行、諸磯a・b式期、中期の藤内式期の住居址が確認されているが、とくに藤内式期の住居群は典型的な環状集落と言えるものである。塚越北B遺跡では早期、中期初頭・後葉、後期の住居址が調査されている。三口神平遺跡では、早期の住居址と200軒ちかい中期後葉の住居址群およびそれに伴う土坑群・土器捨て場などが調査された。ここでは中期の住居群、土器捨て場が東西に別れており、曾利式の各時期での住居址群の消長が認められ、なかでも曾利Ⅲ・Ⅳ式期では環状を呈していることが明らかとなった。

さて、野呂原遺跡では中期中葉・後葉の住居址群とそれに伴う土坑群、土器捨て場の一部が確認された。地形および土器捨て場のカーブから、野呂原遺跡の集落は三口神平遺跡東端に続く集落であると思われる。第2図では三口神平遺跡(4)と野呂原遺跡(5)との間に空白域が存在する。この部分の調査を行なったところ、表土下はすぐ砂礫層となって遺構・遺物は全く確認されなかったが、これは本来集落の一部であって、洪水などにより流されたものであろう。

## 第2節 遺跡周辺の環境

釈迦堂遺跡群については、本調査終了後「釈迦堂遺跡博物館」建設に伴う事前調査の一環として、一宮・勝沼両町の委託を受けた山梨県考古学協会による周辺遺跡の分布調査が行なわれている。それによれば、塚越北（第3図-6）、三口神平（7）両遺跡は更に南東側に遺物の分布が認められる。野呂原遺跡（8）についてみると、前述したような、三口神平遺跡の東側に絡がるように、弧状に遺物の分布が確認されている。

周辺の遺跡分布状況は第3図のようになっており、縄文時代の遺跡は扇状地の台地上を中心に分布し、奈良・平安時代以降は扇状地端部の平坦地に展開する傾向が見い出せる。縄文時代の遺跡分布を各時期ごとにみえてみると、早期では扇頂部に多く、前期になるとやや広がりを見せ、中期には扇状地全体に広がり、後期には再び標高の高い頂部付近に遺跡が展開する状況であるという。



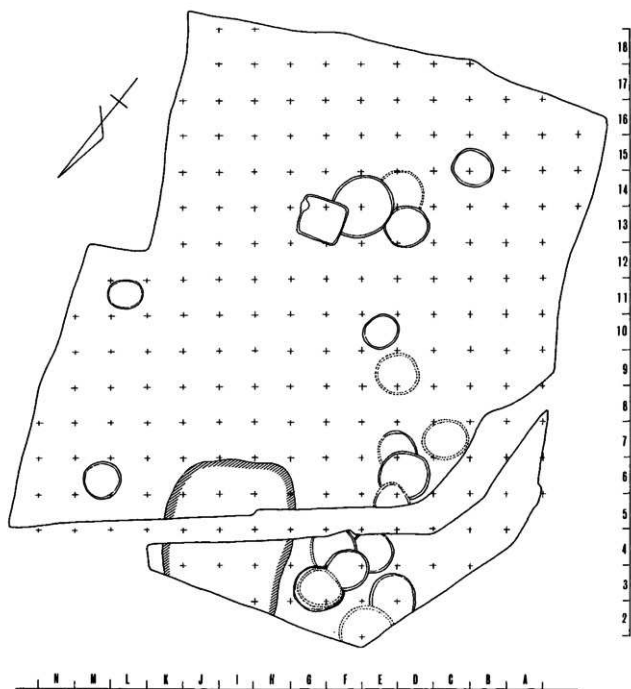
第3図 周辺遺跡分布図

1. 日向林 2. 物見塚 3. 山道浜 4. 鐘塚A 5. 鐘塚B 6. 塚越北A 7. 三口神平 8. 野呂原 9. 末新田 10. 西藤塚
11. 大箕地 12. 雁屋敷 13. 岩崎館跡 14. 御所畑 15. 天神堂 16. 上野 17. 白川・寺平 18. 鉢塚古墳 19. 藤井田
20. 松本 21. 馬込 22. 宮田 23. 地藏久保1 24. 地藏久保2 25. 養神 26. 本木 27. 釈迦堂 28. 若宮 29. 南屋敷
30. 西田 31. 西田北 32. 十二社 33. 田村 34. 桜坪

### 第3節 調査方法

釈迦堂遺跡群は、パーキングエリアのセンターラインを中心として南北にそれぞれS区・N区を設定し、さらに西側から100mごとに東に向かってI区～V区に区切って大グリッドとしている。塚越A遺跡はS-I区に、同B遺跡はS-II区に三口神平遺跡はS-III・IV、N-III・IV区に、釈迦堂遺跡はN-II区に、野呂原遺跡はS-V区となる。また、各遺跡間の谷・流出部はトレンチ調査とした。

野呂原遺跡は、S-V区の内、東西約60m、南北約70m、面積約3000㎡が本調査の対象となっており、調査はこの全域にグリッドを設定し全面調査を行なった。第4図に示したように、南北方向に1～19、東西方向にA～Oまでの記号を付け、それぞれを4mごとに区切ってグリッド設定を行なった。



第4図 グリッド設定図



## 第4節 標準層序

野呂原遺跡では、前述したグリッドのうち、L5グリッド内において深掘りを行ない、基準となる層序を確認した。

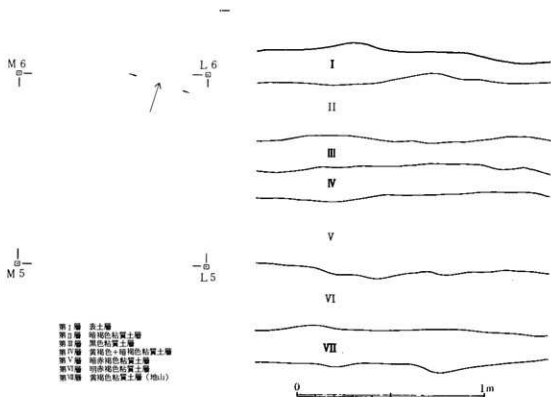
釈迦堂遺跡群は、前述したように原状地上に展開する遺跡群であるため、地山に巨大な花崗岩の転石を含んでいる。調査区域上部では表土も薄く、表土下すぐに花崗岩が顔を出す状況である。ただ、その花崗岩も風化が著しく、バラバラと崩れ落ちる状況である。

さて、野呂原遺跡で標準層序を確認した部分は、調査区域でも下側にあたり地山まではかなりの深さがある。調査区域上部でも同様のトレンチを入れて土層確認をしているが、地山までにこれほどの深さはない。ちなみに、C16グリッドでの断面によれば、表土（黒褐色粘質土）は20cm～70cmの堆積で、その下に10cmほどの漸移層（暗褐色粘質土）があり、さらにその下は巨大な花崗岩礫を含む地山となる。この地山は黄褐色ないし暗褐色を呈する粘質土である。

第5図に示したL5グリッドの断面では、地山を含み7層に分けられる。地表面（上層）から、第I層（表土：黒褐色粘質土）が10～15cm、第II層（暗褐色粘質土）が25～35cm、第III層（黒色粘質土）が10～15cm、第IV層（黄暗褐色粘質土：黄色の粘質土に黒ないし褐色の粘質土が混ざったものと思われるが、黒色粘質土はブロック状の混入ではない）が15～20cm、第V層（暗赤褐色粘質土）が35～40cm、第VI層（赤褐色粘質土：第V層に比べ明るい）が25～35cm、第VII層（黄褐色粘質土：礫を含む）が地山となっている。

7層のうち、遺物（そのほとんどが縄文中期）を出土するのは、おもにⅢ層・Ⅳ層・Ⅴ層の3枚の層であり、Ⅵ層上面にも僅かながら含まれている。

遺構は調査区上部では地山に掘り込まれ、下部ではⅢ～Ⅴ層中に掘り込まれている。このことから、調査区下側は浅い谷となっていたと考えられる。



### 第三章 遺構と遺物

#### 第1節 概要

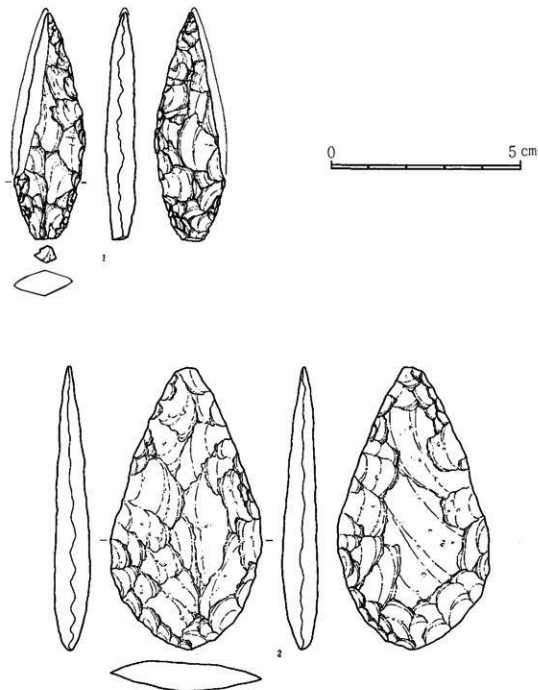
野呂原遺跡では住居址21軒、土坑125基、土器捨て場1ヶ所を確認・調査した。住居址の1軒が平安時代であるほかは、すべて縄文時代中期に位置付けられる。第6図に調査全体図を示したが、住居址は図中の14号が平安時代である。なお、1、9号は欠番となっており、存在しない。土器捨て場は、図では住居群の左側にあり、右側の三口神平遺跡へと続いてゆく。遺物では、古いものでは先土器時代の石器が僅かながらも出土しており、平安時代が最も新しいものとなる。以下に、各時期・各遺構ごとに述べていくことにする。



第6図 野呂原遺跡全体図

## 第2節 先土器時代

先土器時代の遺物は、槍先形尖頭器1点がある。また、縄文時代草創期と思われる石槍が1点出土しているが、本項で扱う。第7図1は、槍先形尖頭器である。細身の木葉形で、基部が尖らず平坦である。ただし、この平坦な基部は、製作途中で折れた剥離面である可能性もある。両面とも全面に調整剥離がなされており、素材の剥離面は残存しない。体部中央に大きく平坦な剥離方向の剥離面があり、刃部には中小規模の剥離が連続するが、小規模のものほど剥離角が大きい。シルト岩製。第7図2は、石槍である。しもぶくれで、幅広い形態で、基部が丸い。厚さもかなり薄く仕上げられている。非常に風化が進んでいて、剥離があまり明瞭ではないが、裏面中央に広い剥離面が残存し、剥片素材である可能性がある。特に基部の部分は、いわゆる交互剥離がなされ、刃部が規則的な波状をなす。ホルンフェルス製。



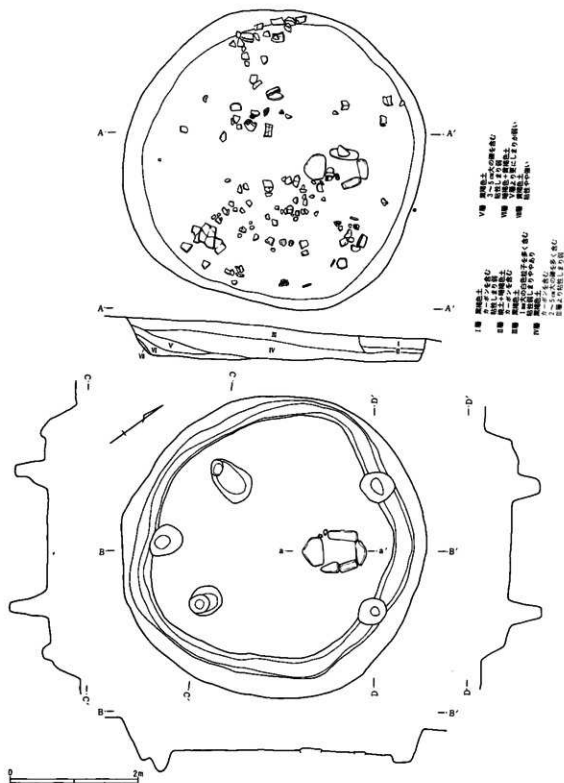
第7図 先土器時代石器実測図

### 第3節 縄文時代

#### 1. 住居址と出土土器

##### 2号住居址

(位置) E3・4、F3・4グリッド。



第8図 2号住居址実測図

(形状) 楕円形を呈するが、正円にちかい。

(方向) 南向向き。

(規模) 入口部と炉の中心線を結ぶラインが長軸となり、480cmを計る。それに直交する短軸は470cmを計る。また、壁高は40cm～50cmを測る。

(覆土) 傾斜面に位置するため、壁際の三角堆積土(流れ込み)は南側のみみられる。覆土は黒褐色土が主体であるが、焼土粒子、カーボンは含んでいない。

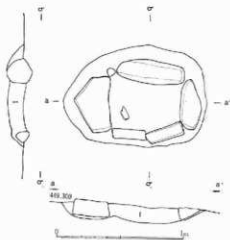
(床面) いずれの住居址も傾斜地に造られたものであるが、床は平坦ではば水平であるため、南側の壁が高く、北側の壁が低いものとなっている。本住居址の床面は非常によく踏み固められている。

(柱穴) 柱穴は4本で、その間隔は幅が約200cm、奥行きが250cmとなっている。深さは入口部からみて、前左が50cm、同右が60cm、後左が40cm、同右が50cmを計る。また、前2本は作り替えによるものか、底部が段状をなしている。

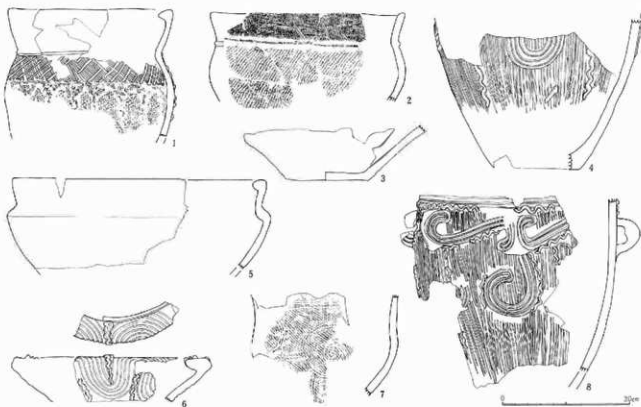
(炉) 石囲い炉である。掘り方は楕円形を呈し、長軸110cm、短軸80cm、深さ12cmを計る。石は平石を四角に配するが、入口部にちかい石は平石ではなくホームベース状の形状をなし、しかも、その先端部が入口方向を向くように配置されたものである。炉内には、焼土層は形成されておらず、焼土粒子、カーボンが暗褐色粘質土に混ざる程度であった。

(周溝) 周溝は全周している。幅は最小で20cm、最大で35cm、深さ10cm程である。しかし、後ろ側の2本の柱穴は中心部が周溝内に位置しているため、柱を立てた状態を想定すると、周溝は二ヶ所で途切れていたと考えられる。

(その他) 本住居址には埋裏が存在したと考えられる。住居入口部に周溝に接してピットが存在する。このピ



第9図 同炉実測図



第10図 2号住居址出土土器

ットは柱穴とは考えられないものであり、内部に土器はなかったが埋壘のためのピットであったと思われる。ただ住居を放棄する際、埋壘を掘り出すという行為は考えにくく、埋壘のためのピットは掘ったものの最初から土器は埋めなかったことも考えらる。

(土器) 住居址内からは様々な遺物が出土しているが、住居址の時期と係わる遺物である土器についてのみ述べることにし、他の遺物についてはまとめて後述することにする。また、破片については、原則として一覧表に示すこととする。3号住居址以降についても同様である。

1. 炉内および床面直上出土。深鉢。推定口径25.5cm、現存高20cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含み、とくに長石・石英粒が顕著である。2. 覆土出土。鉢。推定口径31cm、現存高14.5cmを計る。暗褐色を呈し、やはり焼成は良好である。砂粒を多く含んでいる。3. 覆土出土。浅鉢。底径13cm。よく磨かれており、褐色を呈する。砂粒は多く、焼成は良好。4. 覆土出土。深鉢。推定底径13cm。褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。内面にはススが付着している。焼成は良好。5. 覆土出土。鉢。推定口径40cm。褐色を呈するが、所々に赤色顔料が塗布されている。砂粒を多く含み焼成は良好である。6. 覆土出土。深鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好である。7. 覆土出土。深鉢。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。縄文地文に細い沈線で渦巻き文を施文したもので、本住居址の他の資料とは系統を異にするものである。8. 覆土出土。深鉢。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。

### 3号住居址

(位置) E1・2、F1・2グリッド。

(方向) 南西向き。

(形状) 一部の調査であり、壁も全く確認されなかったが、遺物の分布や一部残された周溝の状況から楕円形を呈すると思われる。

(規模) 推定で長軸600cm、直交する短軸550cm程度と考えられる。

(覆土) 本住居址は土壌群の調査中に床面を確認して、それを周辺に追い、住居址であることを確認したものであるため、断面図は作成できなかった。しかし、本住居址が調査区域の境界部分にあたるため、その部分で断面観察を行なっている。それによれば、壁際は不明であるが、中心部分の覆土は暗褐色粘質土で、焼土粒子、カーボンを含んでいる。

(床面) 確実に床面と言えるのは炉の付近だけで、一部の確認に過ぎないが、平坦である。

(柱穴) 第11図に示したように、本住居址内には非常に多くの土城が掘り込まれており、特定のピットを柱穴とすることは不可能である。ただ、もし4本柱穴であるとすれば、炉との位置関係から、22号土城内のピットが右奥の、14号土城に切られた3基のピットが右前の柱穴とすることができるかもしれない。その間400cm前後ということになり、かなり大型の住居址とすることができよう。しかし、住居址左側の柱穴が全く不明であるのでこれ以上の言及は避けておく。

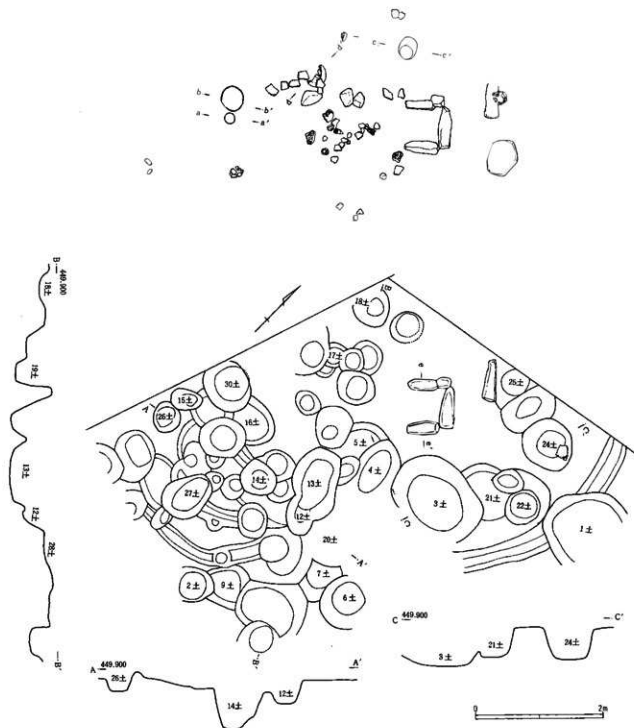
(炉) 石囲い炉である。掘り方は長方形を呈し、長径115cm、短径95cm、深さ45cmを計る。炉石は長さ50～60cm、幅30～40cm、厚さ10cmほどの平石4個を組み合わせたもので、しっかりした作りとなっている。また、火熱によるものか所々にヒビ割れと剝離がみられる。さらに、入口部側の炉石は抜き取られたのか破片が残っているだけであった。

内部は暗褐色粘質土を主体とするが、最下層には10cm程の焼土層が形成されている。この焼土層は炉の中心部分に形成されているのではなく、底面周縁部、つまり炉石に接した部分にみられるのであり、炉石を通して伝わった熱により焼土化したことが窺われる。

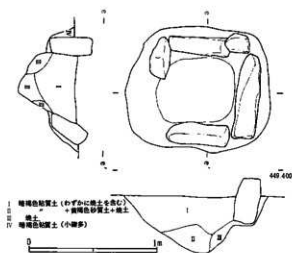
(周溝) 周溝は一部に認められる。まず、右奥には幅40cmの溝が3m程の長さで確認されたが、これは途中で途切れている。右前方にはごく一部であるが、3本の溝が確認された。図中の16号土城と2号土城を結ぶライン上に位置する3本がそれである。このうち、埋壘(位置的には30号土城内となる)との位置関係から、右奥の溝

と絡がるのは内側の溝である可能性が高い。また、外側の2本については、床面や焼土の集中部分が他に確認されていないことから、別の遺構に伴うとするより、本住居址の立て替え（縮小）によるものと考えられるべきであろう。

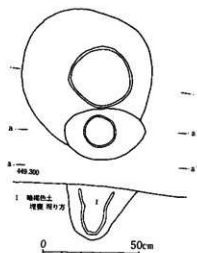
（その他） 本住居址内には埋篋が4基存在する。第11図の遺物平面図のうち、セクションポイントを有する4基がそれであるが、このうちc・c'、d・d'は位置から本住居址と無関係であることが明らかである。また、b・b'は埋篋自体が住居内に一般的に用いられるものに比べ大型であること、かつ土器の時期（曾利I式）と炉の形態とが合致しないことから、やはり無関係と考えられる。したがって、a・a'が本住居址に伴うものとなる。掘り方は楕円形を呈し、長径40cm、短径25cm、深さ30cmを計る。なお、ここでの切り合い関係は複雑で



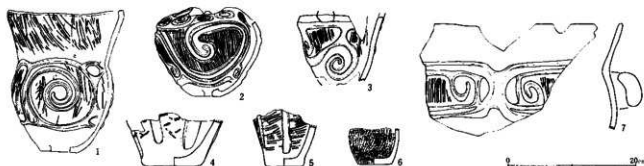
第11図 3号住居址実測図



第12図 同炉実測図



第13図 同埋甕実測図



第14図 3号住居出土土器

あり、本埋甕は単独埋甕の掘り方内に掘り込まれており、さらにその単独埋甕の掘り方は30号土坑内に掘り込まれたものである。

前述したように、本住居址は立て替えを行なっているが、 $a \cdot a'$  の埋甕は最終段階に伴ったものである。埋甕を立て替えに際し出して再び使用することは考えにくく、立て替え前の段階では埋甕は存在しなかったと思われる。

#### (土器)

1. 埋甕である。深鉢。口径18cm、器高22cm、底径6cmを計る。底部は中央が穿孔されている。穿孔後、打ち欠き部分を一部磨いている。褐色を呈し、砂粒を多く含む。内外面とも磨きが雑で、表面が荒れている。2. 床面直上出土。注口もしくは片口の鉢と思われる。口縁は水平でなく、一部が盛り上がっている。底面は摩れており、あるいは台が付いていたかもしれない。また、現状では底部に穿孔がみられ、打ち欠き部は丁寧に磨かれている。褐色を呈し、焼成、磨きとも良好である。胎土も精選されている。3. 覆土出土。深鉢。推定口径13cm。口縁には山形状突起が付く。暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好。4~6. 覆土出土。深鉢。いずれも褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好である。7. 覆土出土。推定口径40cm程度の大型の把手付き鉢である。褐色を呈し、砂粒を多く含む。磨きは丁寧である。

#### 4号住居址

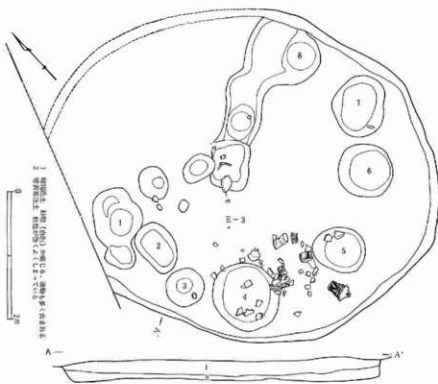
(位置) D2・3、E2・3グリッド。

(方向) 南東？

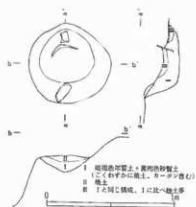
(形状) 北半は不明であるが、楕円形を呈すると思われる。

(規模) 一部未調査区域があるが、長軸650cm、短軸520cm程度と推定される。また、壁高は南と北で違い、20





第15図 4号住居址実測図



第16図 同炉実測図

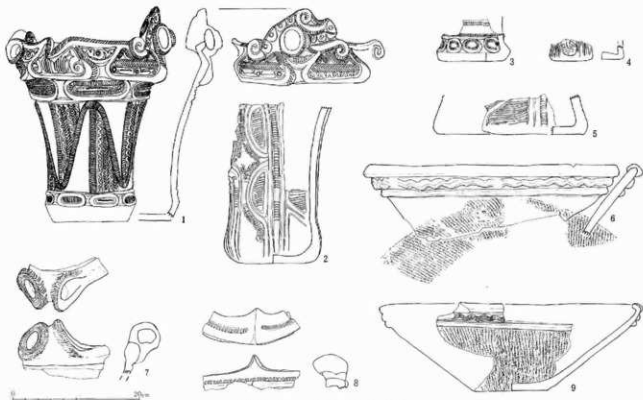
～30cmを計る。

(覆土) やはり暗褐色粘質土が主体でよく締まっている。大きく上下二層に分かれ、下層には黄褐色土が混入している。

(床面) 平坦ではあるが、水平ではなく、北西方向に緩

やかに傾斜している。ただ、確実に床といえるのは、やはり、炉の付近だけである。

(柱穴) 炉を中心に住居の南半にピットが集中し、北半は3号住居址及び土城との切り合いで不明である。南半にはピットが8基(図中の1～8)あるが、浅いものが多く、柱穴とすることのできる深さのあるものは1(約60cm)、3(約50cm)、8(約50cm)の3基だけである。この3基は直径がいずれも60cm程度で揃っており、



第17図 4号住居址出土土器

他のピットに比べ一回り小さいものである。他は20~30cm程度の深さの皿状のピットであり、住居内貯蔵穴といえるものでもなさそうである。

一応、柱穴は3基確認されたとしておくが、北半については前述の理由によって不明となっているのであり、本住居址は5ないし6本柱としておきたい。

(炉) 石囲い埋燵炉である。炉に接して攪乱が入っており、掘り方の大きさについては不明な点もあるが、直径60cm程の円形を呈し、深さ30cmと推定される。石は15cm程のものが1点残されているにすぎないが、おそらく同程度の石で掘り込みの周縁部を囲み、内部に土器片を立てて石囲い埋燵炉としたものと思われる。内部は暗褐色粘質土が主体であるが、焼土粒子、カーボンを多く含んでいる。また、焼土層は石の置かれていたと思われる周縁部に僅かではあるが形成されている。

#### (土器)

1. 床面直上出土。深鉢。底部を欠損している。口径21cm、推定器高33.5cm。口縁部に一對の突起を有する。褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成、磨きとも良好である。 2. 覆土出土。深鉢。底径11cm、現存高25cmを計る。褐色を呈し、砂粒を多く含む。 3. 柱穴3内出土。深鉢。底径9cmを計る。黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好。 4. 覆土出土。深鉢。底径6cm。褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好。 5. 覆土出土。深鉢。推定底径23cm。この時期の土器にしては珍しく張り出した底部となっている。褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は良好。 6. 覆土出土。浅鉢。推定口径41.5cm。赤褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好。 7. 床面直上出土。深鉢口縁の突起。暗褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は良好。 8. 覆土出土。深鉢口縁の突起。褐色を呈し、焼成・磨きとも良好。 9. 覆土出土。浅鉢。推定口径39cm、器高14cmを計る。褐色を呈し、砂粒を含むが、磨きは丁寧である。焼成は良好。

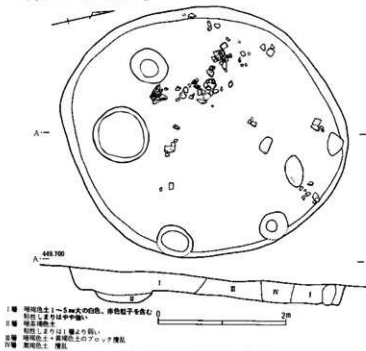
### 5号住居址

(位置) L6、M5・6グリッド。

(方向) 不明。

(形状) 不整楕円形を呈する。

(規模) 主軸方向が不明であるため、主軸とズレが生じる可能性が高いが、長径450cm、短径400cmを計る。壁高は30~35cmを計る。



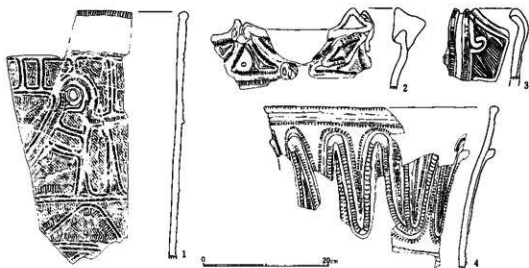
第18図 5号住居址実測図

(覆土) 暗褐色粘質土の一層だけである。焼土、カーボンはほとんど含まない。

(床面) 床面は平坦ではあるが、斜面とほぼ同じ角度で北側に傾斜している。全体に軟弱な部分が多く、床面部分には黄褐色土が飛散している。

(柱穴) 柱穴と思われるピットは3基確認されているが、いずれも深いものでない。西側の1基が33cmで、東側の2基はそれぞれ20cm、15cmの深さである。

(その他) 本住居址では炉が確認されていないが、これは住居址中央部に攪乱が入ったため、この部分に本来炉が存在したものと考えている。ただ、炉の部分に攪乱が入った場合は攪乱部分の覆土中に焼土粒子が飛散していることが多いが、本住居には焼土は全くみられなかったことを記しておく。



第19図 5号住居址出土土器

南側には直径90cm、深さ15cmの浅い円形ピットが掘られているが、この底面は踏み固められており、居住段階で掘り凹められた状態で利用されていたと考えられる。

(土器)

1. 覆土出土。深鉢。現存高38cm。褐色を呈し、砂粒を多く含む。施文、磨きとも丁寧になされている。焼成は良好。2. 覆土出土。深鉢口縁突起。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。3. 覆土出土。深鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好。4. 覆土出土。深鉢。推定口径36cm。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、施文、磨きとも極めて丁寧である。

### 6号住居址

(位置) D5・6・7、E5・6・7グリッド。

(方向) 南東。

(形状) 不整ではあるが、円形を呈する。

(規模) 長径550cm、短径540cmを計る。壁高は30~40cmを計る。

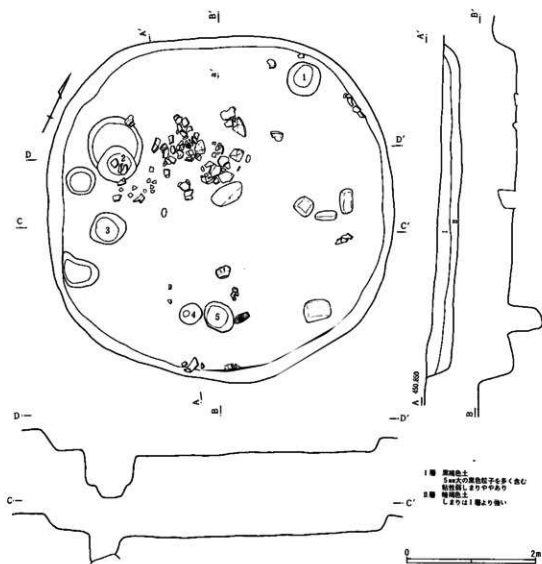
(覆土) 暗褐色粘質土を主体とする。大きく上下二層に分けられ、上層にはカーボンを多く含んでいるが、焼土粒子は多くない。二層とも良く締まっている。

(床面) 床は平坦でほぼ水平に作られているが、炉の付近だけが硬く、他部は軟弱である。

(柱穴) 第20図に示したように、本住居址内には8基のピットが掘り込まれているが、1(40cm)、2(70cm)、3(40cm)、4(60cm)、5(50cm)が深いものである。他の3基は10~30cm以内であり、柱穴とは考えられない。1~5も位置からすべてが同時に利用されていたとは考えられず、また、1と5の間に更に1・2本が存在したと思われる。炉の位置を中心のみでみると、1と2が奥の対になる二本と考えられる。4と5は作り替えによるものとしても、対になる柱穴が検出できなかったことになる。3についても同様である。したがって、入口部を南東(図中の石のある部分)として上記のような6本柱穴か、あるいは2と3も作り替えによるものとした場合の4本柱穴を想定しておきたい。

(炉) 炉石は割れて激しく移動しているが、石囲い炉である。掘り方は不整形を呈し、長径120cm、短径100cm、深さ30cmを計る。石は全部で10個の小片になっており、最大のもので40cm×20cmを計る。一般にこの時期の炉はもっとも堅固に作られており、4枚の平石を組み合わせたものが多い。火熱による割れを考へても残片があまりに少なく、抜き取られたことも考えられる。

内部は黒色ないし暗褐色土が主体であるが、焼土層は形成されるまでに至らず、暗褐色土中に粒子が飛散する程度であった。



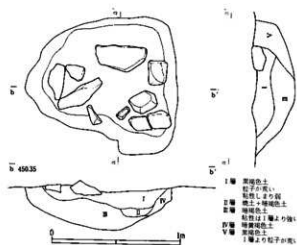
第20図 6号住居実測図

(その他) 本住居址の中央部に石(花崗岩)が立っている。これは更に地中深いものであり、また、何の加工も施されていないことから人為的なものではないと考えられるが、住居のほぼ真ん中に位置し、生活の邪魔になることが予想される。しかし、敢えて取り除こうとしないのも事実であり、想像が許されるならば、位置は一般的ではないものの、「立石」として存在したのではないだろうか。

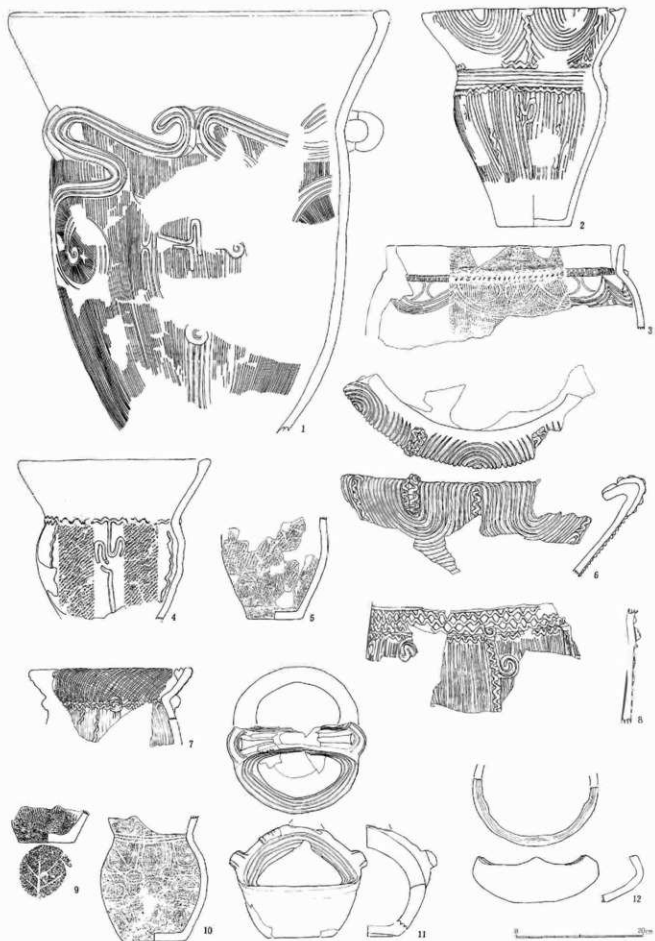
また、住居内東側には、ほぼ直角に40cm大の石2個が埋込まれている。両方とも厚さは10cm程で、当初は炉と思われたが、焼土、カーボンなどは全く見られず掘り方も不明で、炉であることは有りえない。この場所は前述した柱穴の5(4)と対になる位置であり、柱穴が検出できなかったことから、時期的には新しいものであるかもしれない。

(土器)

1. 覆土出土。大型の深鉢。底部を欠損している。口径58cm、現存高66cmで器高は72cm程度と推定される。頸部にX字状把手を6単位有する。暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。磨きは丁寧で、焼成も良好である。 2.



第21図 同炉実測図



第22图 6号住居址出土土器

覆土出土。深鉢。口径32cm、器高34cm、底径11.5cmを計る。褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好。外面下半は火熱により亦変している。 3. 覆土出土。鉢。推定口径37cm、現存高16cmを計る。黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれる。焼成は良好。 4. 覆土出土。深鉢。口径30cm、現存高25cmを計る。暗褐色を呈し、焼成、磨きともに良好である。 5. 覆土出土。深鉢。底径8cm、現存高16cmを計る。暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好であるが、内外面とも荒れてザラザラしている。 6. 覆土出土。深鉢口縁破片。褐色を呈し、焼成も良好である。胎土は精選されているが、雲母・長石が目立つ。 7. 覆土出土。深鉢。推定口径25cm。赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好。 8. 覆土出土。深鉢。色調、胎土、焼成とも7に同じ。 9. 覆土出土。深鉢底部。底径8.5cm。底面には木葉痕がみられる。内外面とも表面が荒れている。暗褐色を呈し、焼成は良好。 10. 覆土出土。壺。底径9.5cm、現存高19.5cmを計る。地文は目の細かい撚糸文で、沈線による規格的な施文がみられる。褐色を呈し、砂粒を多く含む。本住居址の他の土器と時期が違うとも思われるが、当地にはみられない施文であり、他地域からの搬入品と考えられる。焼成は良好。 11. 覆土出土。釣手土器。底径10cm、現存高18cmを計る。釣手上部を欠損しているが、この種の上部には人面突起が付くことが多く、本資料にもおそらく付いていたと思われる。また釣手は溝状をなし、両脇には溝を結ぶ小把手が付けられていることから、自重に耐えうるかはともかく、懸垂を意図したものであろう。黄褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好。 12. 覆土出土。浅鉢。口縁部は5単位の波状口縁と思われる。口径18.5cm、器高7cm、底径6.5cm程度と推定される。非常に丁寧な作りである。赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。

#### 7号住居址

(位置) L11、M11グリッド。

(方向) 不明。

(形状) 楕円形を呈する。

(規模) 主軸は不明であるが、長軸410cm、短軸310cm、壁高10cmを計る。

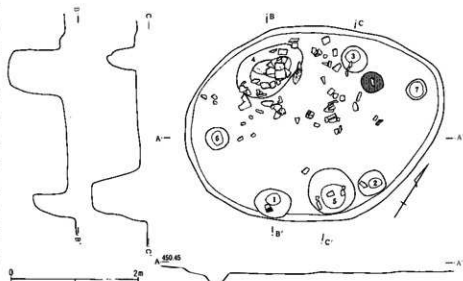
(覆土) 本住居址は掘り込みが浅く、覆土は暗褐色粘質土の一層のみであった。

(床面) ほとんど全面が軟弱であり、暗褐色土から黄褐色土に変化する部分(面)を床面とした。その意味で確実に床と言える部分はない。

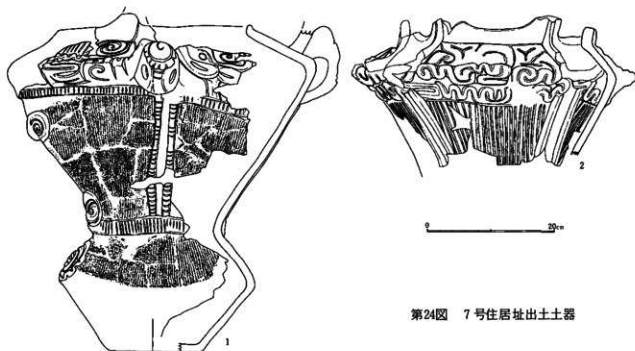
(柱穴) 本住居内には大小7基のピットが確認された。このうち、図中の1(50cm)、2(40cm)、3(40cm)の3基が柱穴と思われる。この位置関係からすると、4のピット内にもう1基柱穴が存在したと考えられる。5は、その形状、深さから別の土坑の可能性が高い。6・7はいずれも浅いピットである。本住居址は4本柱穴としておく。

(炉) 本住居址では確実な「炉」は確認されなかった。図中の斜線部分に焼土が認められたが、これは集中していた訳ではなく、飛散する程度であった。また、地床炉とした場合の掘り込みも認められず、確も、付近に存在しなかったため、一応未確認としておきたい。

(その他) 4のピットは不整



第23図 7号住居址実測図



第24図 7号住居出土土器

円形を呈するが、前述したように、内部に柱穴が掘り込まれていた可能性が高く、形状から、作り替えたことも考えられる。

(土器)

1. 覆土出土。深鉢。推定口径30cm、底径14cm、現存高51cmを計る。4単位の塔状把手を有する深鉢であるが、把手はすべて欠損している。地文は縄文である。褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好。内外面とも荒れている。 2. 覆土出土。深鉢。推定口径30cm、現存高23cmを計る。これも本来4単位の塔状把手をもつが、すべて欠損している。上半部の地文は条線である。褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、とくに雲母が目立つ。焼成は良好。

### 8号住居址

(位置) E3・4、F4グリッド。

(方向) 東か？

(形状) 長楕円形を呈する。

(規模) 2号住居址、12号住居址、さらには調査範囲の制約により確実な数値は出せないが、東西600cm、南北520cm程度と推定される。住居址は南北方向に主軸をもつものが多く、長軸は主軸方向になる場合が多いが、本住居の場合、壁のカーブから東西方向が長軸となるのは間違いないものであろう。なお、壁高は、南側で30cm、北側で10cmを計る。

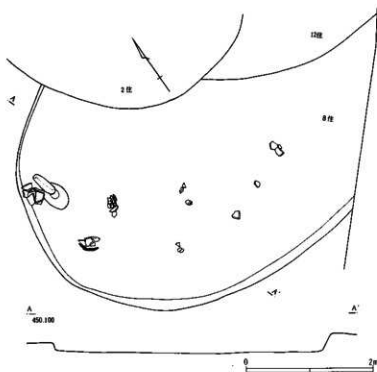
(覆土) 黒褐色粘質土の単一層で、焼土、カーボンを含んでいる。

(床面) 踏み固められた床と言える部分は存在しないが、黄褐色土が所々にみられ、その面を床面と判断した。この黄褐色土の面は、調査区域の境界断面による落ち込みの確認の際にも認められているもので、生活面とすることができるものであろう。

(柱穴) 本住居址には柱穴は全く確認されなかった。

(炉) 炉も確認されなかったが、位置からは2号、12号住居址による攪乱の影響は考えられず、また、中央部にも攪乱は入っていない状態であり、焼土粒子の集中する部分も認められなかったことから、炉は存在しなかったと思われる。

(その他) 本住居址内にはピットは1基が確認されている。楕円形を呈し、長軸50cm、短径35cm、深さ30cmを



第25図 8号住居址実測図



第26図 8号住居址出土土器

計る。このピットにかかって、太さ15cm、長さ40cm程の石がやや浮いて存在した。石そのものには何の加工も施されていないが、入口部を東側と考えた場合、この位置は最奥部となり、住居

内の奥に作られた立石と考えることができよう。

#### (土器)

復元できたものは1点だけである。覆土出土。深鉢。底径8.5cm、現存高26.5cmを計る。褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好であるが、磨きがやや雑で内面は荒れている。底部には網代痕がみられ、2本越え、2本潜り、1本送りとなっている。

#### 10号・11号住居址

(位置) F2・3、G2・3グリッド。

(方向) 西南西。

(形状) 全く同じ場所に2軒の住居址が重なって存在する。全体図では2号住居址に切られていることになっているが、10号住居址は掘り込みが深いため、完全に調査することができた。掘り込みの浅い11号住居址は2号住居址を切るものであろう。さて、10号住居址は楕円形を呈するが、入口部方向がやや幅の狭い卵形となっている。11号住居址は確認された壁がごく一部であるため確実とは言えないが、僅かに確認された壁が10号住居址とほぼ同じラインであることから、卵形ではないものの、楕円形を呈すると思われる。

(規模) 2軒ともほとんど同じ大きさである。長軸570cm、短軸470cmを計る。壁高は10号住居址が40～50cmで、南東壁が高く北西壁が低くなっている。11号住居址は20cmを計る。ただし、10号住居址の壁高については、後に11号住居址が10号廃絶の落ち込みを利用して作られたことを考慮すれば、11号住居址の壁高分を加えた高さを壁高とすべきであろう。

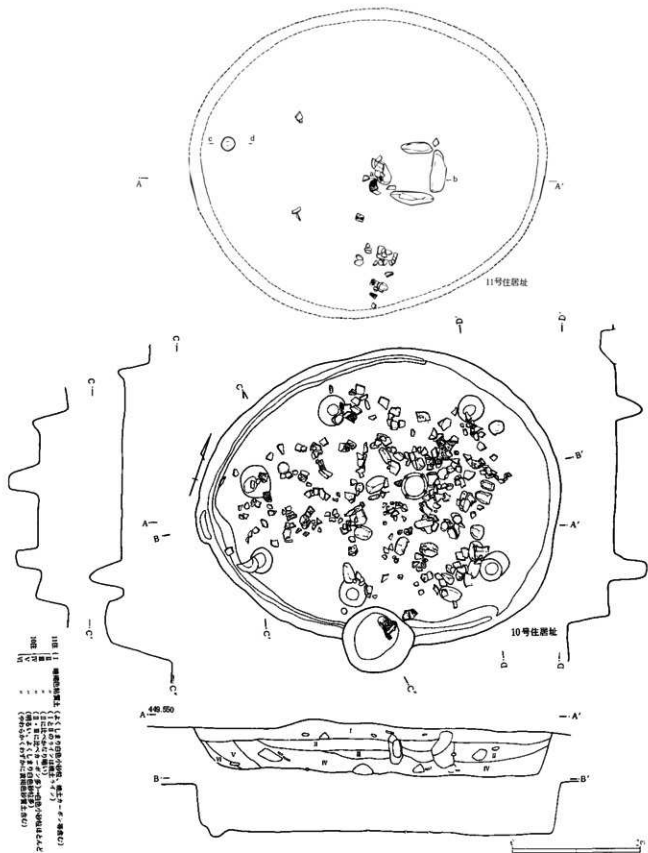
10号住居址の入口部には壁が段状を成す部分があり、そのために、住居址の入口部が飛び出すかたちとなっている。これは、後述する柱穴の位置からも階段を意識したものと考えられるが、幅が10cm程度で実用的なものとは思われない。

(覆土) 覆土は暗褐色粘質土を主体とする。まず、10号住居址では、大きく二層に分けられ、下層では多量のカーボンを含んでいる。また、南西側からの流れ込みによると思われる三角堆土が東西セクションの西側にみられ、黄褐色土が混入している。11号住居址覆土は白色砂粒や焼土、カーボンを含むもので、11号住居址床面と10



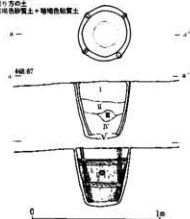
号住居址覆土とは焼土ラインによって分けることができる。

(床面) 10号住居址の床は平坦でほぼ水平につくられている。壁際はやや軟弱な部分もあるが、全体的に踏み固められた部分が多い。11号住居址はセクションで確認されたものであるため、全体の状況は不明であるが、セ

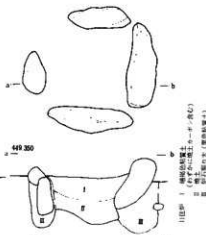


第27図 10号・11号住居址実測図

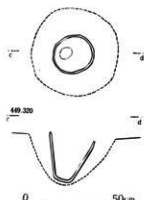
I 暗褐色粘質土・焼土粒子・カーボン  
 II Iと同じ(IIに比べ焼土が多い)  
 III 赤土  
 IV 暗褐色粘質土  
 V 灰白色の土  
 VI 暗褐色粘質土



第28図 10号住居址炉実測図



第29図 11号住居址炉実測図



第30図 11号住居址埋瘞実測図

クッションベルトに残された部分では、炉のちかくには踏み固められた良好な床が確認されている。また、床は水平で平坦である。

(柱穴) 10号住居址は6本柱穴で、炉を中心に整った左右対象形を成す。その深さは35～50cmである。とくに、奥側の4本は形状・深さとほぼ等しく、炉から等間隔となっている。また、入口部には2本の柱穴がみられるが、その間隔は卵形の形状に合わせて狭いものとなっている。11号住居址については10号住居址調査中の住居址確認であったため柱穴を確認することはできなかった。

(埋瘞) 10号住居址は埋瘞炉である。第31図1に示した大型の土器を埋め、埋瘞炉としたものである。一般に、埋瘞炉として用いられる土器は欠損品の口縁部もしくは胴部で、残存高も10～20cm程度のものが多いが、本資料は底部が欠損しただけの、しかも現存高が40cmにも及ぶ大型の土器を用いた例で、極めて稀である。さて、掘り形は径45cm、深さ45cmと小さいもので、土器が収まるぎりぎりの大きさである。土器内部は4層に分かれるが、焼土層は約10cmの厚さでレンズ状に形成されている。その上層(I・II層)にも焼土粒子・カーボンはかなり多く含まれている。

11号住居址は石囲い炉である。長さ50～70cm、幅30～50cmの大型の石4個を組み合わせた、非常に堅固な造りの炉である。掘り形は径110cm、深さ40cmと広いものである。炉内は二層に分かれるが、焼土層は20cmちかく形成されている。

(周溝) 10号住居址には周溝が存在する。全周はしないが、奥壁沿いの一部に存在しないだけである。幅は10～20cm、深さ10cm程度である。入口部ちかくでやや膨らむが、他はほぼ同じ幅となっている。また、周溝が壁のすぐ際に作られたために、壁が垂直にちかい状態となっている。なお、11号住居址については周溝の有無は不明である。

(埋瘞) 11号住居址には埋瘞が存在する。当初は住居址の存在が確認されていなかったため、覆土中の完形土器と思われたが、11号住居址の炉と同一レベルであり、炉と土器との位置関係及び時期的同一性から埋瘞と判断した。したがって、第30図の埋瘞掘り形ラインは推定である。

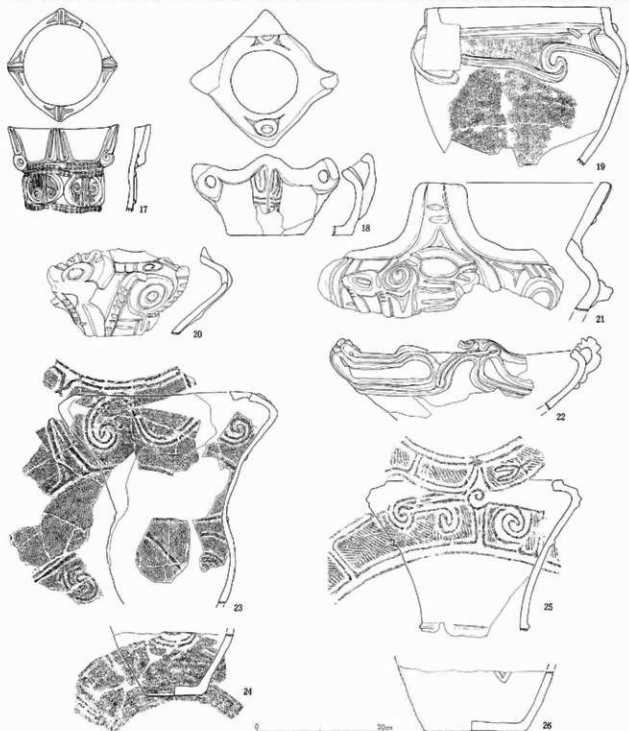
#### (土器)

10号住居址 1. 埋瘞炉に使用された土器である。深鉢。口径43cm、現存高42cmを計る。器面を4単位に分割し施文している。暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。磨き・施文とも丁寧で、炉に使用され、かつ10cmもの焼土が内部に形成されていたにもかかわらず、内面に剝離は全くみられない。 2. 床面直上出土。深鉢。口径25cm、底径11cm、器高37cmを計る。褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好。内外面とも荒れている。 3. 床面直上出土。深鉢。口径19.5cm、底径12cm、器高33cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は精選され、施文及び内外面の磨きも非常に丁寧に行なわれている。 4. 覆



第31図 10号住居址出土土器その1

土出土。深鉢。口縁部は1と同様4単位になると思われる。褐色を呈し、砂粒が多い。焼成は良好。 5. 覆土出土。深鉢。推定口径28cm。暗褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は良好。 6. 覆土出土。深鉢。褐色を呈し、焼成は良好。内外面とも磨きは丁寧である。砂粒を含む。 7. 床面直上出土。深鉢。口径14cm、現存高20.5cmを計る。暗褐色を呈し、内面は黒色を呈する。焼成は良好である。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。内外面の磨き・施文も丁寧であるが、内面には成形時の輪積み痕が残る。このような器形の深鉢は、山梨県内でも井戸尻Ⅲ式期～曾利Ⅰ式期にかけて数例確認されている。 8. 覆土出土。深鉢。7と同様の器形・施文である。推定口径16cm。暗褐色を呈し、胎土には雲母が目立つ。焼成は良好。 9. 床面直上出土。深鉢。大型の深鉢破片であるが、磨き・施文は丁寧である。暗褐色を呈し、焼成は良好。土器捨て場出土の破片と接合している。 10. 床面直上出土。深鉢。口径16cm、現存高14cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている



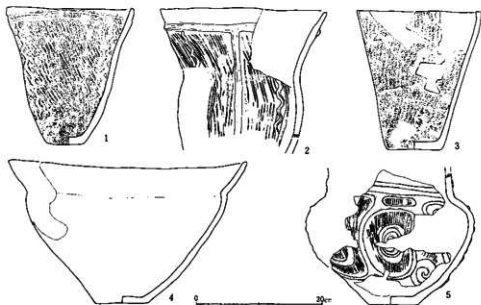
第32図 10号住居址出土土器その2

が、雲母が目立つ。磨きは丁寧である。 11. 床面直上出土。深鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒、とくに雲母が目立つ。磨きは丁寧である。 12. 覆土出土。深鉢。推定底径10cm、現存高25cmを計る。内外面とも荒れている。赤褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。 13. 覆土出土。鉢。推定口径17cm、現存高14.5cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く含まれる。 14. 床面直上出土。深鉢。底径10.5cm、現存高14cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に雲母が目立つ。 15. 覆土出土。深鉢。口径15cm、現存高17cmを計る。明褐色を呈し、焼成は良好。施文は浅く、表面が荒れている。砂粒が多く、雲母が目立つ。この時期の土器としては、比較的薄手である。 16. 覆土出土。浅鉢。推定口径30cm。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。内外面とも磨きは丁寧である。 17. 床面直上出土。深鉢。口径17cm、現存高13cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。 18. 覆土出土。鉢。口径10cm、底径12cm、最大径23cm、器高13cmを計る。明褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む、外面は荒れている。また、口縁内面は黒変している。 19. 覆土出土。深鉢。推定口径28.5cm、現存高25cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多い。 20. 覆土出土。深鉢。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を含み磨きは丁寧である。 21. 覆土出土。深鉢。黄褐色を呈し、焼成は良好である。砂粒を多く含む、内外面とも荒れている。 22. 覆土出土。深鉢。推定口径34cm。口縁に4単位の渦巻き状把手を有する。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、内外面ともよく磨かれている。 23. 覆土出土。深鉢。口径27.5cm、現存高33cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土には砂粒が多く、とくに雲母・長石が目立つ。内面の磨きは雑で表面が荒れている。摺糸文を地文とし、粘土紐を渦巻き状に施したもので、当地方の土器とは異なるものである。 24. 覆土出土。深鉢底部。23と同一個体と思われるが、褐色を呈する。 25. 覆土出土。深鉢。23に類似した文様であるが、磨きが丁寧である。 26. 床面直上出土。深鉢底部。底径15cm、現存10cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を含み、表面が荒れている。

#### 11号住居址 1. 埋

藏に用いられた土器である。口径20cm、底径5cm、器高21cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、磨きは丁寧である。底部から胴部への立ち上がり部分は丸味をおび、底面自体も平ではないため、極めて不安定な土器である。

2. 覆土出土。深鉢。推定口径26cm、現存高20cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、磨きは丁寧であ

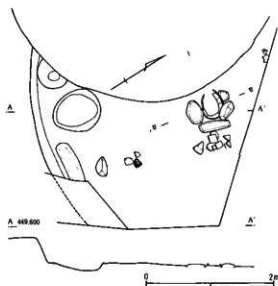


第33図 11号住居址出土土器

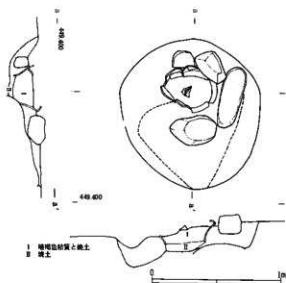
る。 3. 覆土出土。深鉢。推定口径18cm、底径8cm、器高21cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む、内面はやや荒れている。 4. 床面直上出土。浅鉢。推定口径38cm、底径8cm、器高21cmを計る。赤褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成、磨きとも極めて良好な、薄いつくりの土器である。 5. 覆土出土。壺。底径8cm、現存高21cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を含むが、磨きは丁寧である。

#### 12号住居址

(位置) F3・4、G3・4グリッド。



第34図 12号住居址実測図



第35図 同炉実測図

(方向) 東南東?

(形状) 2号、10号住居址に切られ、調査区域の制約もあって全体は知り得ないが、おそらく楕円形を呈すると思われる。

(規模) 不明。

(覆土) 調査可能な範囲が少ないため、セクションベルトを設定することができなかったが、調査区域との断面によれば覆土は暗褐色粘質土の単一層で、焼土、カーボン、白色小砂粒を含むものであった。壁際の流れ込みについては不明である。

(床面) 調査部分が一部であることによるものかもしれないが、確認された床は平坦で、よく踏み固められている。

(柱穴) 柱穴は1基だけ確認されたが、2号住居址に切られている。直径50cmの楕円形を呈し、深さ約30cmを計る。極めて壁にちかい部分に存在することから、最初からこの場所に作られたとは考えにくく、作り替えによるものであるかもしれない。

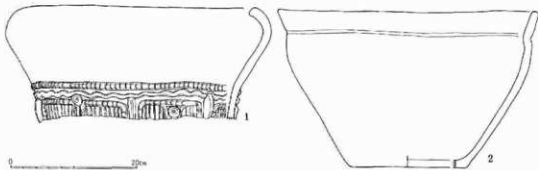
(炉) 石囲い埋燗炉である。石は4個存在し、最小で25cm、最大で50cmを計る。このうち一つは土器に乗るような状態で確認されたが、これは後に移動したものであろう。入口部方向の石が最も大きいもので、柱状の石を用いている。その反対側(奥側)には石がみられないが、これは2号住居址を構築するさい、取り外されたものと推定される。

掘り形は径110cm程の不整形を呈し、深さ約20cmを計る。掘り形が浅いのは、掘り形内に巨大な花崗岩礫が出てきたためである。第35図中の破線がそれである。そのため、南側の石は花崗岩の上に乗るかたちとなっている。さて、土器内部は二層に分かれ、下層には焼土層が5cmの厚さで形成されている。上層は暗褐色粘質土を主体とし、焼土粒子・カーボンを含んでいる。

(周溝) 周溝は一部が確認された。僅か70cm程であるが、幅20cm、深さ10cmを計る。ちょうど周溝が切れる部分にあたり、これから東壁方向に延びることになり、東壁を中心に南北壁の間隔りまで周溝は存在したものと推定される。このような周溝の配し方は全体の傾斜に合うもので、南東側からの雨水などを考慮した作り方と言えるものである。

(その他) 南壁際に浅いピットが確認された。径80cm、深さ15cm程を計る。5号住居址にも同様なピットが確認されているが、本住居址では底面は踏み固められていない。

(土器)



第36図 12号住居址出土土器

1. 炉に使用されていた土器である。深鉢上半部。口径36cm、現存高18cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好である。砂粒を多く含むが、磨きは丁寧である。炉体土器ではあるが、内外面とも剥離は全くみられない。2. 炉石に接して出土。鉢。口径41cm、底径18cm、器高24cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、内外面とも荒れている。

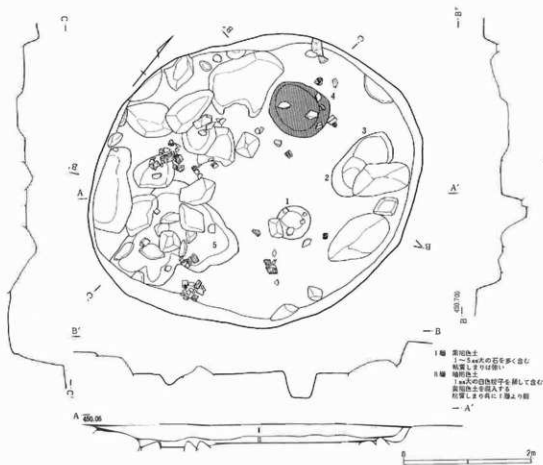
### 13号住居址

(位置) D12・13、E12・13グリッド。

(方向) 不明。

(形状) 楕円形を呈する。

(規模) 主軸は不明であるが、長径550cm、短径450cmを計る。壁高は東壁が最も高く50cmを計り、他部は20～30cmを計る。



第37図 13号住居址実測図

(覆土) 本住居址は礫の非常に多い部分に構築されたために、床あるいはピット内に礫が顔を出しているが、覆土中にも花崗岩が多く含まれている。覆土は大きく二層に分かれ、ともに暗褐色粘質土を主体とするが、下層には黄褐色土が混入しており、上層に比べ色調が明るい。焼土、カーボンは上・下層とも含まれているが、僅かである。

(床面) 地山をそのまま床面としており、全体に軟弱である。後述するように本住居址には炉が存在していないため、とくに踏み固められた部分もない。床面にも花崗岩が露出する状況であり、これからすれば、あまり居住に適した場所であるとは思われない。

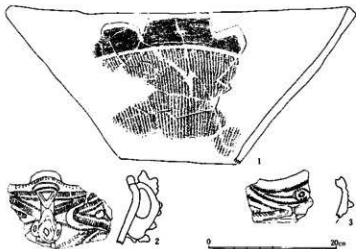
(柱穴) 本住居址にはピットが5基(第37図1~5)確認されているが、このうち柱穴と考えられるのは1(直径50cm、深さ40cm)と2(直径60cm、深さ40cm)の2基だけである。他には、5のピット中に深さ30cmちかい部分があるが、ある程度の径を持つものではなく緩やかに底まで傾斜するものであり、柱穴とは考えにくい。また、3は深さ20cmに満たないものであるが、2に接する位置であるところから、2の作り替えであることも考えられる。

(炉) 本住居址では炉は確認されなかった。また、とくに焼土、カーボンの集中する部分もみられないため、炉は最初から存在しなかったと思われる。

(その他) 4のピット(斜線部)は長径90cm、短径80cm、深さ13cmを計るが、これは花崗岩を削って造ったものである。浅い皿状を呈しており、用途は不明であるが、大きさからは住居内貯蔵穴を意図したものであるかもしれない。深いピットを掘るつもりで掘ったが、花崗岩に当たったため一部を削って掘り止め、この深さで中止したと考えられる。

#### (土器)

1. 覆土出土。浅鉢。推定口径53cm、残存高23cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、内外面の磨きも丁寧である。 2. 床面直上出土。深鉢口縁部破片。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、内外面の磨きは丁寧である。 3. 覆土出土。深鉢口縁部破片。褐色を呈し、焼成は良好。



第38図 13号住居址出土土器

### 15号住居址

(位置) B14・15、C14・15グリッド。

(方向) 西南西か？

(形状) 楕円形を呈する。

(規模) 長軸470cm、短軸450cmを計る。南西から北東に傾斜するため、壁は南西側では30cm程を計るが、北東側ではほとんど存在しない。後述する周溝によりいわゆる半円形の住居址でなく、楕円形を呈することは明らかであるが、壁は北東側では確認されなかった。

(覆土) 本住居址も覆土中に巨大な花崗岩礫を含んでいる。暗褐色粘質土の単一層で、黄褐色土を含んでおり、南西の壁際には黄褐色土をブロック状に含んでいる。

(床面) 礫などの流れ込みにより一部は傷んでいるが、全体によく踏み固められており、とくに炉のちかくは硬い。床は平坦ではあるが水平でなく、傾斜に沿うように南西から北東に、僅かではあるが傾いている。

(柱穴) 本住居址内には土城を除いて、8基のピットが確認されたが、周溝上にこのうちの4基が存在する。



この4基は2が40cmを計り、1・3・4は30cmの深さではほぼ同一である。いずれも柱穴として良いであろう。ただ、間隔からは2と3が作り替えによるものであるかもしれない。また、5（深さ60cm）と6（深さ40cm）も位置、規模などから柱穴の可能性が高い。この2基も接しており、作り替えによるものと考えられる。したがって、本住居址は4本柱穴としておきたい。

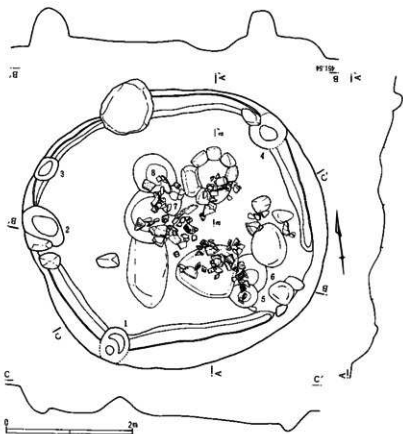
（炉） 石囲い炉である。掘り形は直径90cmの円形を呈し、深さ約25cmを計る。この石囲い炉は特殊で、掘り形の周縁部に石を置くのではなく、掘り形周縁部に土を盛り、その上に石を置いている。そのため、床面からやや浮いた状態で炉石が確認されている。さて、炉石は20～30cm大の礫8個を円形に配したものであるが、掘り形内部にも花崗岩礫が露出しているため、さらに多くの礫を用いて作られたようにみられる。内部は暗褐色粘質土を主体としており、大きく三層に分けられるが、最上層に僅かに焼土・カーボンが含まれているにすぎない。また、炉石自体に剥離がみられないことから、この炉の使用期間は短かったと考えられる。

（周溝） 本住居址では、南東の一部を除き、周溝がほぼ全周する。前述したように、本住居址は野呂原遺跡の中でも比較的傾斜のきつい斜面に位置するため、この周溝が確認されなければ半円形住居址と考えられたかもしれない。さて、周溝の幅は最も狭い部分で20cm、広い部分で40cm、深さ5～15cmを計る。南東壁付近で一部切れているが、本住居址でも柱穴が周溝上に存在するため、上屋を想定した場合周溝は少なくとも四か所で見切れることが予想される。

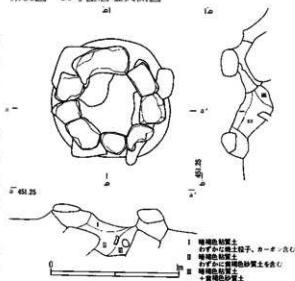
（その他） 住居址内には柱穴以外に7、8の二つのピットが存在するが、いずれも炉にちかく、用途は不明である。なお、深さは7が50cmと深く、8が20cmを計る。また、本住居址も13号住居址と同様、花崗岩の巨大な礫が床面下や覆土中に多くみられ、流れ込みが激しかったことを物語っている。あまり居住に適した場所とは思われない。

（土器）

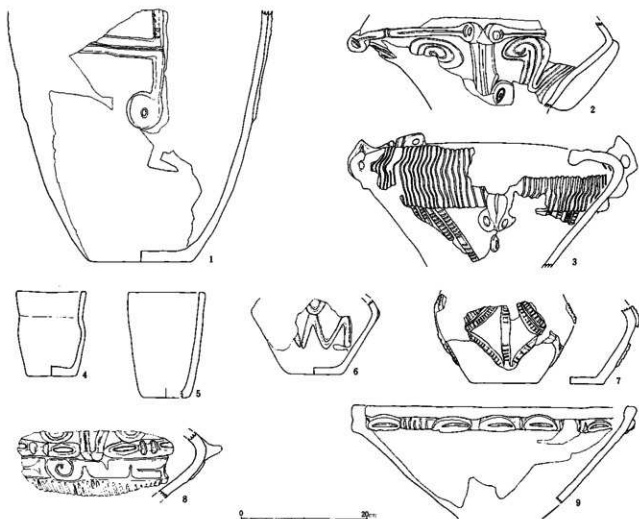
1. 覆土出土。深鉢。推定底径16cm、現存高39.5cmを計る。黄褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、外面は荒れている。 2. 覆土出土。深鉢。算盤玉状の底部を有する深鉢の口縁屈曲部である。把手を有すると思われるが、現存しない。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、つくりも丁寧である。この種の土器にしては薄手である。 3. 覆土出土であるが、破片の一部は炉石にかぶさるように出土している。深鉢。口



第39図 15号住居址実測図



第40図 同炉実測図



第41図 15号住居址出土土器

径26cm、現存高21cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く含まれるが、磨きは丁寧である。4. 覆土出土。深鉢。口径11cm、器高13cm、底径7cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨きも丁寧である。赤色顔料が塗布されている。5. 覆土出土。深鉢。口径12cm、器高16.5cm、底径7cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、表面は荒れている。6. 覆土出土。深鉢底部。底径9cm、現存高12cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨きも丁寧である。7. 覆土出土。深鉢底部。底径10cm、現存高13cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多い。8. 覆土出土。深鉢。灰褐色を呈するが、焼成はやや不十分と思われ、脆い。砂粒を多く含む。9. 覆土出土。浅鉢。推定口径44cm、現存高16cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒はやや多いが磨きは丁寧である。

#### 16号住居址

(位置) D5・6、E5・6グリッド。

(方向) 南南東。

(形状) 調査区域の制約から、半分だけの調査であるが、楕円形を呈すると思われる。

(規模) 推定で長軸400cm、短軸380~390cm程度と思われる。本住居址は6号住居調査中に周溝によりその存在を確認したもので、壁は全く検出できなかった。しかし、調査区境界が、炉の上を通り、しかも短軸にはほぼ一致する状況であったため、その部分で断面並びに壁高を確認することができた。それによれば、壁高は50cm程度である。北東壁は立ち上がりがきつく、南西壁ははっきりしていないが、緩やかに立ち上がると推定される。

(覆土) 覆土は大きく二層に分けられる。上層は暗褐色粘質土で、黄褐色土の小ブロックを含んでいる。下層は黒色粘質土で、上層に比べ黄褐色土ブロックの混入が少ない。ともに焼土、カーボンを含んでいる。また周溝内は暗褐色粘質土である。

(床面) 床は平坦であるが、入口部から奥に向かって緩やかに傾斜している。炉のちかくは踏み固められているが、他部は軟弱である。

(柱穴) 住居址内にはピットが3基確認されているが、柱穴は入口部の2基である。埋甕の両側にみられるピットがそれで、ともに深さ約50cmを計る。住居址の調査は半分だけであるが、この柱穴配置から、炉のやや奥に2本、さらに奥壁の中心にも存在する可能性がある。したがって、住居全体として、4本ないし5本柱としておきたい。

(炉) 石囲い炉である。炉についても半分だけの調査であるが、掘り形は大きく、150cmの幅で深さ約50cmを計る。確認された石は調査部分では6個で、最も大きいもので約30cmである。入口部方向には30cm大のものと10cm大のものを組み合わせており、該期に一般的な堅固な炉と違っている。炉内部は暗褐色土を主体とし、焼土、カーボンを僅かに含んでいる。

(周溝) 住居址調査部分では周溝が確認されているが、西壁付近では攪乱のため、周溝がどこまで続くか不明である。ただ、セクションでも明らかのように、西壁に周溝はみられず、全周することはないと思われる。幅は20cm程度、深さ10cmを計る。

(埋甕) 本住居址には埋甕が存在する。掘り形は楕円形を呈し、長径60cm、深さ40cmを計る。埋甕には口縁部を欠損した深鉢を用いている。掘り形内は暗褐色土で充たされている。

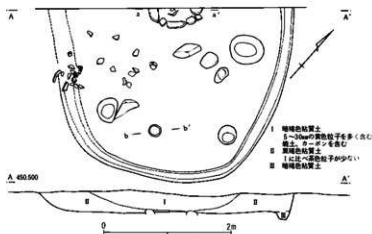
(その他) 炉のちかくにピット1基が確認された。直径50cm、深さ25cmを計るが、出土遺物もなくその用途は不明である。

(土器)

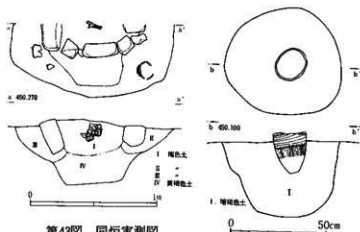
1. 埋甕に用いられた土器である。口縁部を欠損しているが、底部径7.5cm、現存高21.5cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に砂粒を多く含む。 2. 覆土出土。深鉢口縁突起。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含んでいる。

### 17号住居址

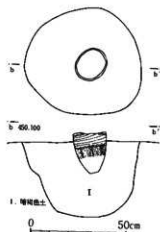
(位置) E10グリッド。



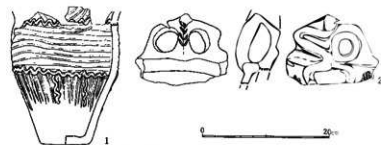
第42図 16号住居址実測図



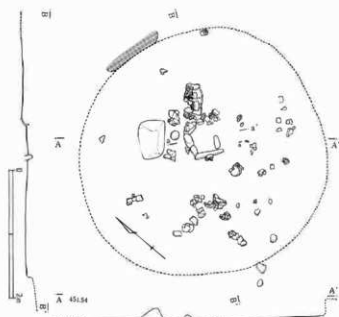
第43図 同炉実測図



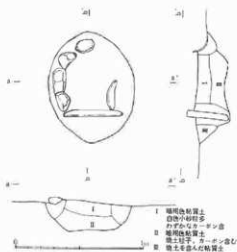
第44図 同埋甕実測図



第45図 16号住居址出土土器



第46図 17号住居址実測図



第47図 同炉実測図

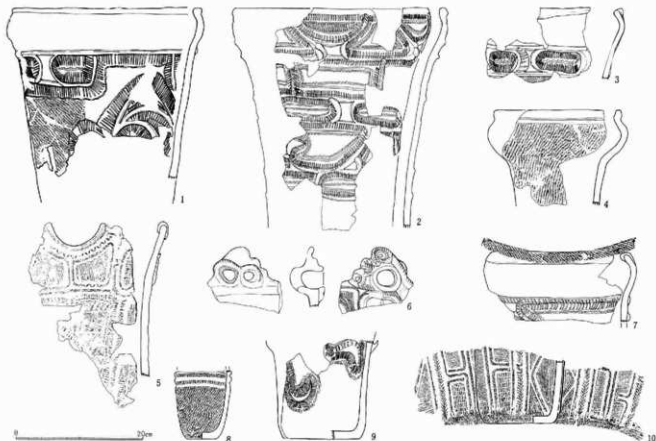
(方向) 南南西か?

(形状) 不整形円形を呈すると思われる。

(規模) 壁、周溝などが未確認のため確実とは言えないが、床面の範囲から直径 380cm 程度と推定される。

(覆土) 本住居址は床だけの確認であり、覆土については不明である。

(床面) 床は平坦で、ほぼ水平である。炉のちかくはもちろん、全体に踏み固められた部分が多い。



第48図 17号住居址出土土器

(柱穴) 本住居址内には柱穴、ピットは全く確認されなかった。

(炉) 石囲い炉である。掘り形は楕円形を呈し、住居の主軸方向に長軸を持ち、85cmを計る。また、短軸は65cm、深さ25cmを計る。炉石は入口部方向に板状の石(長さ45cm、幅35cm)を配し、両側には20cm以下程度の小礫を計4個(右1個、左3個)配している。本来は、左右同数の礫を配したのであろうが現存していない。奥側には土器底部がみられるが、炉石の掘り込みが確認されており、当初は奥側にも炉石が存在したのであろう。このような石の配しかたは類例が少なく、特殊な例といえるものである。

炉内部は大きく二層に分かれ、ともに暗褐色粘質土を主体とするが、下層により多くの焼土、カーボンが含まれている。また、炉石の掘り込み部分にも焼土粒子が含まれている。

(その他) 本住居址も床面に巨大な花崗岩礫が顔を出している。とくに炉のすぐ脇には長さ60cm、幅40cm、高さ20cmの大きな礫が見られ、毎日の生活には極めて邪魔な存在であったと思われる。しかし、この石は現実存在している訳で、加工は全くみられないものの、何らかのかたちで利用していたことを考えるべきであるかもしれない。

住居北側の壁推定ラインにはやはり花崗岩が顔を出しているが、この部分、住居ラインに沿って花崗岩を削り込んでいる。遺跡調査時でも花崗岩には風化の進んだものとそうでないものの二種類がみられ、風化の進んだものは容易に削ることができた。当時から、削ることが可能なものについては削り、不可能なもの(本住居址の炉の脇の石など)についてはそのままにして、利用できるものは利用したのであろう。

#### (土器)

1. 床面直上出土。深鉢。口径29cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され磨きも丁寧である。外面はところどころ剝離している。 2. 床面直上出土。深鉢。推定口径33cm、現存高35cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨きも良好である。 3. 覆土出土。深鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。 4. 覆土出土。深鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。 5. 床面直上出土。深鉢。波状口縁を呈する。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土も丁寧である。 6. 覆土出土。深鉢口縁部。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く含まれる。 7. 床面直上出土。深鉢。口唇に縄文を有する。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多い。磨きも良好である。 8. 覆土出土。深鉢。底径4.5cm、現存高10.5cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、雲母が目立つ。両面の磨きは丁寧に行なわれている。 9. 覆土出土。深鉢。推定底径11cm、現存高16cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、表面が荒れている。 10. 覆土出土。深鉢底部。底径10cm、現存高12.5cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、磨き、施文も丁寧である。

### 18号住居址

(位置) C7グリッド。

(方向) 南西か。

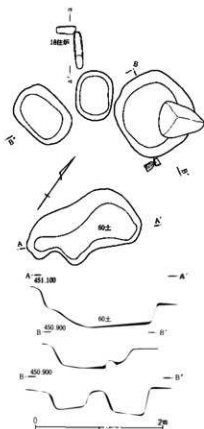
(形状) 不明。

(規模) 本住居址は炉だけの確認であり、規模、形状などほとんど不明であるが、炉の南西2.5mの位置に埋嚢(6号埋嚢として報告する)が存在する。これが炉と伴うものであれば、本住居址は全体図に波線で示したような、南西向きの長軸500cm程の楕円形住居址ということが考えられる。しかし、埋嚢(中期末)と炉の形態とはやや時期が異なると思われたため、別に報告することとし、本住居址についての規模・形状・方向などは前述したように不明としておきたい。

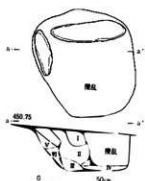
(覆土) 不明。

(床) 炉の付近でも踏み固められた部分は確認されなかった。

(柱穴) 炉のちかくに3基のピットが確認されているが、炉との距離がいずれも近く、柱穴とは考えにくい。この他にはピットが確認されておらず、柱穴は不明としておきたい。



第49図 18号住居址実測図



第50図 同炉実測図

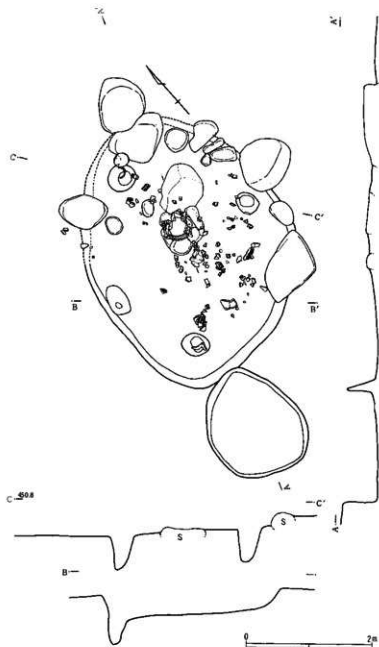
(炉) 石囲い炉である。中央に攪乱が入っており、確認された炉石も2個だけである。掘り形は径80cmの不整形円形を呈し、深さ30cmを計る。炉石はそれぞれ55cm、30cmを計るが、厚みのあるものでなく、堅固であるとは言い難い。埋裏に使用された土器の時期は中期でも最も炉が堅固、かつ大きく作られるのが一般的であるが、本住居址で確認された炉は、それほどではないことから、埋裏と結び付けず考えることとした。さて、炉内部は暗褐色土を主体とし、大きく三層に分かれるが、焼土層は形成されておらず、焼土粒子、カーボンを含み程度であった。

(その他) 炉のちかくの3基のピットは大きさは違うが、深さは30~40cm程度で、住居内貯蔵穴の可能性もあながち否定はできないが、出土遺物は全くなく、また炉との関連性も不明であり、その性格については述べることはできない。

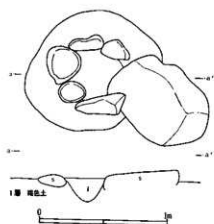
(土器) 本住居址では小破片が出土しただけで、復原実測できる資料は出土していない。破片も僅かなうえに礫らに出土しているため、時期を確定する資料とは言えない。

### 19号住居址

- (位置) I 13・14、J 13・14グリッド。
- (方向) 南か。
- (形状) 不整形円形を呈する。
- (規模) 主軸がはっきりしないため、長・短軸を確定できないが、確認された最長部で430cm、それに直交する短部が330cmを計る。壁は北西側では不明であり、南及び東壁は20~40cmの高さである。他の住居址と同様、傾斜に沿って南側の壁が高くなっている。
- (覆土) 覆土は暗褐色粘質土の単一層で、黄褐色土ブロックを多く、焼土、カーボンを含んでいる。とくに壁際に流れ込み(黄褐色土の大きいブロック)が多くみられる。
- また、本住居址も斜面上部からの流れ込みが激しかったと思われ、住居内に巨大な花崗岩礫が多くみられる。これによって、壁や床が所々壊されている。
- (床面) 炉のちかくは踏み固められた部分が多いが、他部は軟弱である。また、平坦に作ることを意図したと思われるが、花崗岩が露出しているため床面には凹凸が多い。なお、床は水平ではなく、僅かながらも北側に向かって傾斜している。
- (柱穴) 住居内には4基のピットが確認されているが、これらはいずれも柱穴と考えられる。径50cm程度で、平面形は円ないし楕円形を呈し、深さ45~50cmを計る。その配置は4本柱では普通正方形か長方形を呈するが、本住居址の場合台形にちかい形に配されていることから、あるいはさらにもう1本柱穴が存在し、5本柱であったかもしれない。
- (炉) 石囲い炉であるが、作り方が極めて特殊である。というのも、本住居址では住居内のやや奥側に巨大な花崗岩礫が床から顔を出している。堅穴を掘り終えて床を平坦にした段階で床に露出した花崗岩の存在は判って



第51図 19号住居址実測図



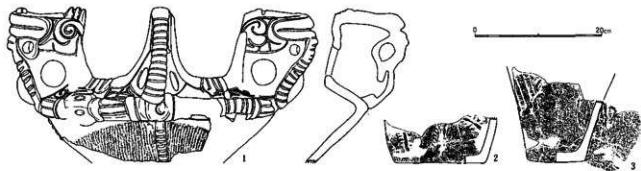
第52図 同炉実測図

いた訳であるが、炉の位置を取ってその場所に設定しているのである。花崗岩の一部を炉石の一つとして6個の石で石囲い炉を構成している。花崗岩を利用するためにこの場所に炉を作ることにしたか、それとも炉の位置を最初からきめておいたが、花崗岩が出てきてしまったためそれを利用することにしたのかは定かではないが、他の遺構の例でも花崗岩を削ったり、縦り抜いたりしていることから、一度場所を決めた場合、最後までそこに執着する強烈な意志が感じられる。したがって、本住居址の場合も後者の可能性が強いと思われる。

さて、炉石は25~40cm程の礫を円形に配しているが、うち一つは花崗岩に乗るかたちとなっている。掘り形は直径100cm程の円形を呈し、深さ20cmを計る。内部は褐色土を主体とし、焼土粒子、カーボンは全く含まれていない。

(土器)

1. 炉石に乗るかたちで出土している。4単位の把手を有する深鉢口縁部。把手間外径46cm、現存高25cmを



第53図 19号住居址出土土器

計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、磨きは丁寧である。 2. 覆土出土。深鉢底部。底径14cm、現存高7cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、雲母が目立つ。 3. 覆土出土。深鉢。底径9cm、現存高15cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、内外面とも荒れている。

## 20号住居址

(位置) D8・9、E8・9グリッド。

(方向) 不明。

(規模) 直径600～700cmほどの大型の住居址と思われる。

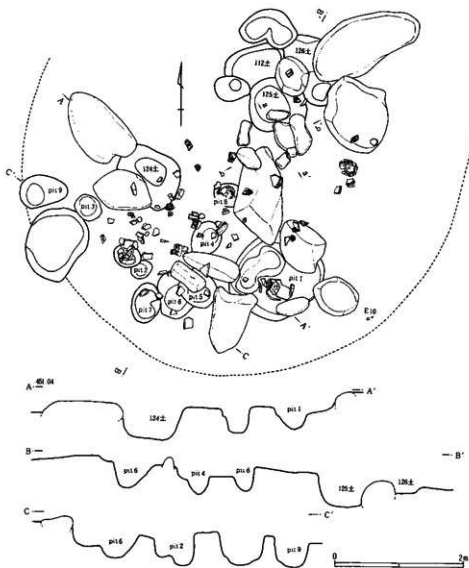
(形状) 壁、周溝などが確認されていないため確実とは言えないが、床および遺物出土状態から円形を呈すると思われる。

(覆土) 本住居址も遺構確認面で確認ができず、掘り込みの浅い炉を確認したのち、周辺に広げたものでセクション図を作成するほどの覆土が残っていないかった。ただ、上部からの流れ込みは激しく、住居址内には巨大な花崗岩礫が多くみられた。

(床面) 中央の炉の付近以外は床は軟弱である。流れ込んだ礫によって所々床は傷められており、また、花崗岩礫が床から顔を出す状況であるため、平坦にはなっていない。さらに斜面に沿うかたちで北側に向かってかなり傾斜している。

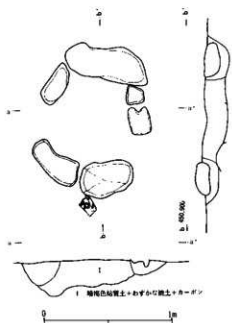
(柱穴) 住居址内で確認されたピットは全部で9基で、図中のピット番号1～9である。このうち、1・8を除いた7基のピットは柱穴の可能性が高い。形状はすべて円形を呈し、深さは3・9が40cm、2・4・5・6・7が30cmと一定している。もちろん、この内の幾つかは作り替えによるものであろう。また、入口部と思われる部分のみ柱穴が集中して確認されているが、他部では未確認なため住居全体で何本柱になるかは不明である。なお4・6の柱穴は花崗岩を削り込んで作ったものである。

(炉) 石囲い炉である。本住居址の炉も19号住居址と同様に露出した花崗岩の巨礫の端を炉石の一つとして利用したものである。最も大きい石で70cm、小さい石で30cmを計る。掘り形は楕円形を呈し、130cm×110cmで、深さ20cmを



第54図 20号住居址実測図



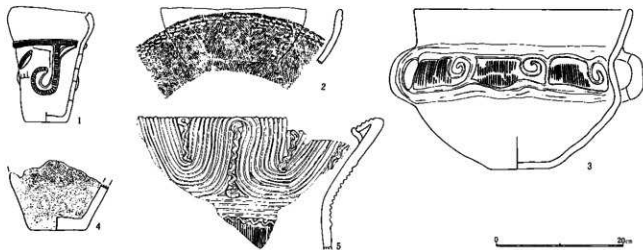


第55図 同炉実測図

計る。浅い掘り形であるのも、底面に別の花崗岩が出てきたためである。炉石は円形に配されているが、一部は抜き取られたのか、現存しない。内部は暗褐色土の単一層で、焼土、カーボンは僅かに含むだけである。

(土器)

1. 炉内出土。深鉢。口径12cm、底径6.5cm、器高18cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒を多く含む。本資料は整形がやや雑で、輪積み痕が明瞭に残る。内外面の磨きも行われていない。
2. 覆土出土。深鉢口縁部。口径23cm、現存高8.5cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む、内面の磨きも雑である。
3. ピット1内出土。両耳鉢。口径34cm、底径10cm、器高25cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、磨きは丁寧である。
4. 覆土出土。深鉢底部。底部9cm、現存高11cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が非常に多く、大粒のものも含む。内外面とも荒れが激しい。
5. 覆土出土。深鉢。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。



第56図 20号住居址出土土器

### 21号住居址

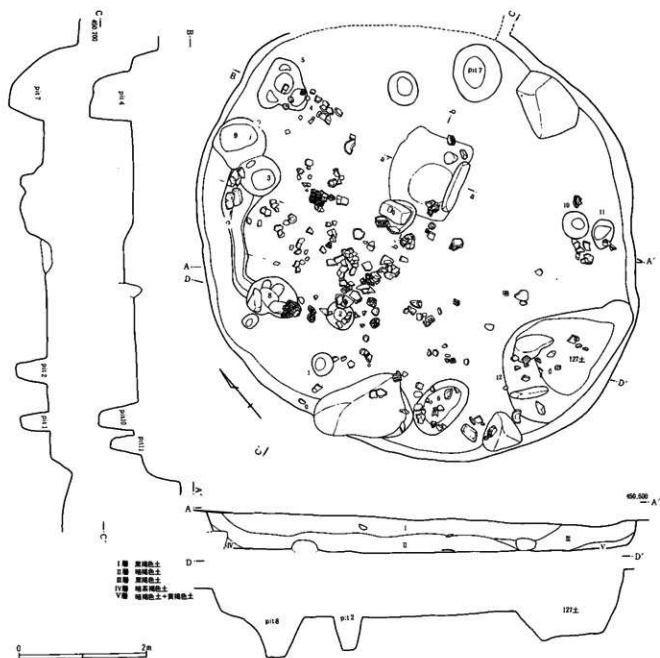
(位置) E13・14、F13・14グリッド。

(方向) 埋壁が存在せず、炉石も残存するものが1個だけであるため主軸方向は確定しにくい、残された炉石の方向あるいは後述する柱穴の並びから西南西に入口部を有する住居址と思われる。

(形状) 一部を14号住居址に切られるが、不整形形を呈する。ただし、南側の壁については土城の掘り込みがあって確定できず、やや内側に入るかもしれない。

(規模) 本遺跡で調査された住居址のうち最大で、主軸方向670cm、それに直交する軸700cm、壁高40～60cmを計る。

(覆土) 本住居址も上部からの流れ込みが激しかったと思われる、床、覆土に花崗岩の巨礫がみられる。覆土は大きく二層に分けられる。ともに黒色粘質土を主体とするが、上層はより多く黄褐色土ブロックを含んでいる。壁際には黄褐色土を含んだ暗褐色土が三角形に堆積しており、これが壁際全体にみられることから、斜面の上部、下部を問わず流れ込みがあったことが窺われる。

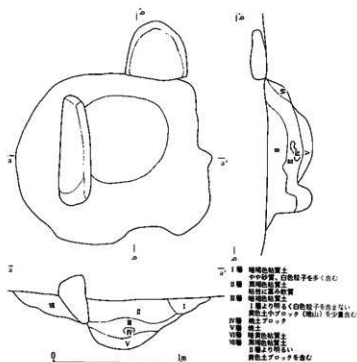


第57図 21号住居址実測図

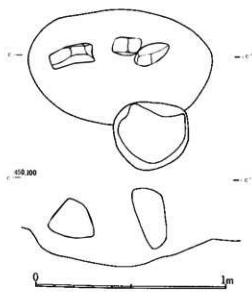
(床面) 土壌による攪乱はあるが、床面は踏み固められた部分が所々存在する。壁際は軟弱な部分が多い。床は平坦で水平に作られている。

(柱穴) 本住居址内にはピットが12基確認されている。それぞれの深さは、1・50cm、2・50cm、3・80cm、4・60cm、5・60cm、6・20cm、7・60cm、8・60cm、9・30cm、10・60cm、11・50cm、12・50cmを計る。6はやや浅いが、柱穴には浅いものもあるため、すべてのピットに柱穴の可能性が考えられる。なお、図中の番号のないピットは14号住居址の柱穴の可能性がある。

さて、住居址の入口部を西南西(花崗岩の巨礫が流れ込んだ部分)とした場合、ピット1と6が対応し、8と12が対応する。また、3・9・4・5のいずれかと10・11のどちらかが対応する。7は奥壁添いの柱穴となることが考えられる。したがって、本住居は、作り替えは考えられるが、一応7本柱穴としておきたい。ただし、7本柱穴の住居址は一般的であるとは思わず、1と6は柱穴ではなく入口部の補助柱穴で、主柱穴は5本という可能性も強い。また、2は8と12のライン上に位置しているが、8とは距離があって8の作り替えとは考えにく



第58図 同炉実測図



第59図 同立石実測図

く、その性格は不明としておきたい。

その他、8は本住居址の柱穴中唯一支えの石を内部にもつもので、30~40cm大の石4個が確認されている。また、8の直ぐ脇には20cmほどの小ピットが存在する。深さ30cm程を計るが、径が小さく柱穴とは考えにくい。規模からは8の柱穴の支柱であることも考えられなくはない。しかし、主柱穴の支柱である場合は複数存在するのが一般的であるが、本例では周辺には他に確認されていないうえ、他の遺構でも支柱は未確認であることからその性格は不明としておく。

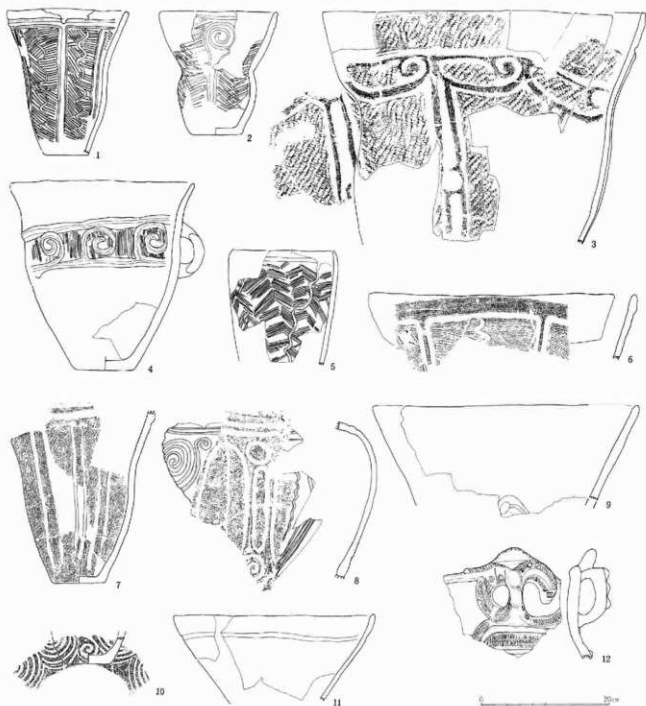
(炉) 石囲い炉である。炉石は抜き取られたのか80cm大の石1個が残っているだけである。石は1個だけであるが、存在している石と直角に幅20cm、長さ80cm程の炉石掘り形が残されている。これから、炉は内径80cm程で、大形で堅固な作りであることが窺われる。炉全体の掘り形は130cm×120cmの長方形を呈し、深さ約40cmを計る。内部は暗褐色粘質土を主体としているが、焼土ブロックが中間層に僅かにみられるだけで、上層、下層には焼土粒子、カーボンは全くみられない。

(周構) 確認された周構はごく一部である。ピット8と3を結ぶように確認されたもので、幅20cm、深さ10cmを計る。これ以下には全く確認されていない。

(その他) 本住居址には立石が存在する。立石はピット3の直ぐ脇に確認されたもので、3個の石が立てられている。20~35cmの長さである。掘り形は90cm×60cmの楕円形を呈し、深さ15cmと浅く、土中に埋められる部分も0~5cm程度である。一般に立石は住居内の奥または入口部に立てられるものが多く、本例のように左側に設けられる例は希であろう。

#### (土器)

1. 覆土出土。深鉢。底部欠損。口径19cm、推定底径7cm、器高23cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を含むが磨きは丁寧である。 2. 床面直上出土。深鉢。推定口径18cm、底径7.5cm、器高19cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む、内面は荒れている。 3. 覆土出土。深鉢。大型の深鉢口縁部~胴部であるが、やや崩れたキャリパー形を呈する。地文は縄文であるが、目が荒く撚りも強くない。褐色を呈し、焼成はやや甘い。砂粒が多く含まれ、磨きも雑である。 4. 覆土出土。両耳鉢。推定口径27cm、底径9cm、器高29.5cmを計る。淡褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、内外面とも磨きは丁寧である。 5. 覆土



第60図 21号住居址出土土器

出土。深鉢。推定口径16cm、現存高18cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。 6. 覆土出土。深鉢口縁部。赤褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を含むが、磨きは丁寧である。 7. 覆土出土。深鉢。底径8cm、残存高29cmを計る。明褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を含むが、磨きは丁寧である。 8. 床面直上出土。鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は比較的精選されており、磨きも丁寧である。 9. 覆土出土。深鉢口縁部。推定口径41cm、現存高17cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多いが、磨きは丁寧である。 10. 覆土出土。深鉢底部。底径7cm。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を含むが、磨きは良好で、丁寧なつくりの土器である。 11. 覆土出土。浅鉢。推定口径31cm、現存高13cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨きも丁寧である。 12. 覆土出土。深鉢把手。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、雲母がとくに目立つ。

## 22号住居址

(位置) D13・14、E13・14グリッド。

(方向) 不明。

(形状) 13号、21号住居址に切られて、ごく一部残存するにすぎないが、円ないし楕円形を呈すると思われる。

(規模) 確認された床の範囲から径500～540cm程度と推定される。

(覆土) 13号住居址の範囲確認作業中に遺物・床が認められ、住居址が明らかとなったもので、断面確認が行なえる状態ではなく不明である。

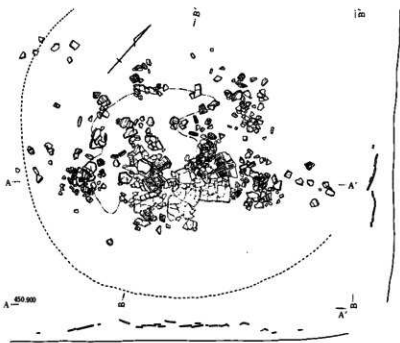
(床面) 図中、遺物が集中する部分は踏み固められている(一点破線部分)が、周縁部は軟弱である。また、平坦ではあるが、北西方向にやや傾斜している。

(柱穴) 床の確認された部分にはピットが一基も存在しなかった。

(炉) 炉も確認されていない。遺物の集中する部分にも焼土、カーボンの粒子は存在するものの、まともにはみられなかった。

(土器)

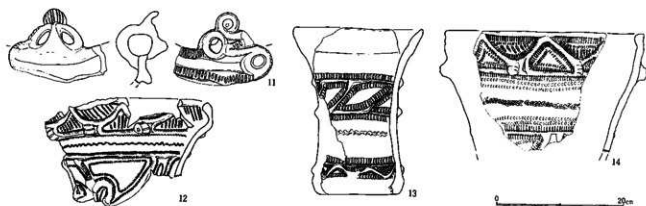
1. 覆土出土。深鉢。超大型の深鉢である。一部を除いてほぼ完存している。口径57cm、底径17cm、器高81cmを計る。褐色を呈するが、外面下半は火熱によるものか明褐色を呈する。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。焼成、内面の磨きとも丁寧である。
2. 覆土出土。浅鉢。推定口径19cm、現存高10cmを計る。明褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、表面は荒れている。
3. 覆土出土。深鉢。これも大型である。口縁部はごく一部が残るだけであるが、推定口径45cm、底径18cm、器高65cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。磨きも丁寧である。
4. 覆土出土。深鉢。推定口径21cm、現存高23.5cmを計る。淡褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、雲母が目立つ。表面がやや荒れている。
5. 覆土出土。深鉢。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。
6. 覆土出土。深鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。
7. 覆土出土。深鉢。口径13cm、底径7cm、器高14.5cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含んでおり、表面が荒れている。
8. 覆土出土。深鉢。4単位の把手を有するがすべて欠損している。口径23cm、現存高25cmを計る。暗褐色を呈するが、外面胴部下半は赤褐色を呈する。胎土は精選されている。地文に撚りの細かい縄文を施し、粘土紐で渦巻き文を表現したもので、当地方の該期の土器とは施文が明らかに違うものであり、他地域からの搬入品と考えられる。
9. 覆土出土。浅鉢。明褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、内外面の磨きも丁寧である。
10. 覆土出土。口縁が直立もしくは反外する鉢と思われる。胴部最大径33cm、現存高21cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、表面がやや荒れている。
11. 覆土出土。深鉢把手。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、磨き・施文とも丁寧なつくりである。
12. 覆土出土。浅鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨きも丁寧で外面には光沢がある。
13. 覆土出土。深鉢。推定口径20cm、推定底径13cm、器高26cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが磨きは丁寧である。
14. 覆土出土。深鉢。推定口径30cm。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、雲母が目立つ。内面はやや荒れている。



第61図 22号住居址実測図



第62図 22号住居址出土土器その1



第63図 22号住居址出土土器その2

### 23号住居址

(位置) D・7、E6・7グリッド

F。

(方向) 不明。

(形状) 周溝から円ないし楕円形を呈すると思われる。

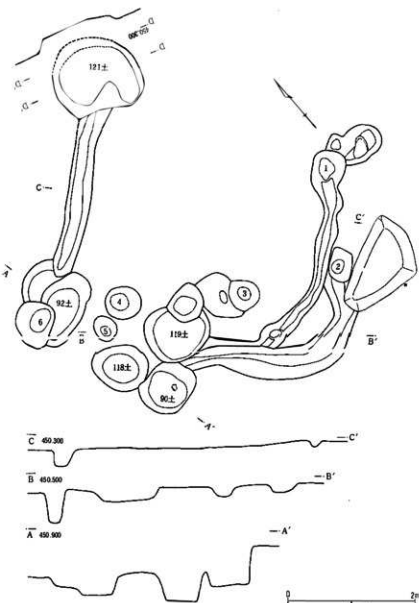
(規模) 不明。

(床面) 一部に踏み固められた床が存在した。

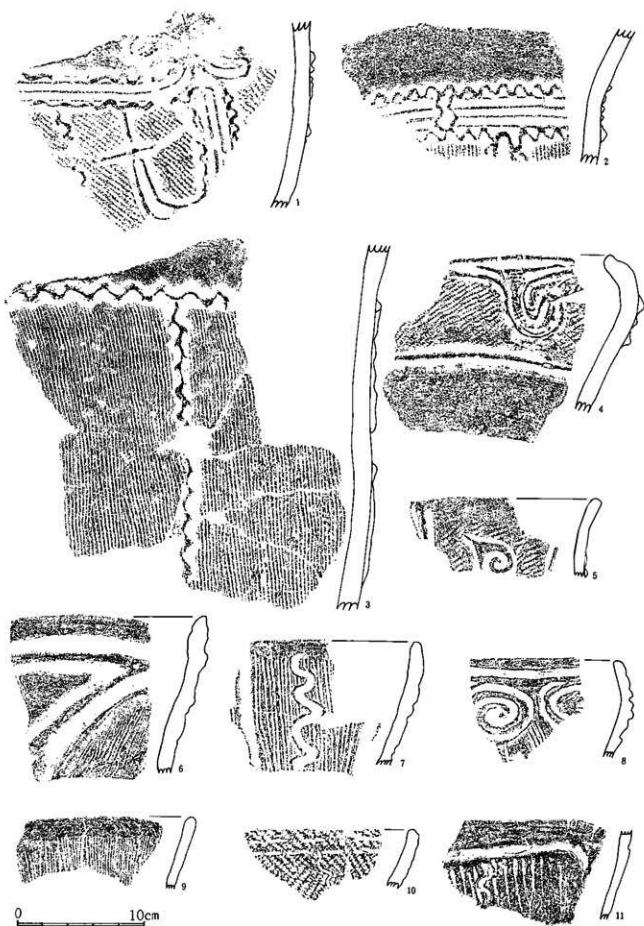
(柱穴) 溝付近に多くのピットが確認されているが、柱穴と考えられる深さのあるものは図中の1～6で、40～60cmを計る。本遺跡では周溝上に柱穴を有するものが多いが、それからすると1は間違いのないものであろう。この中には作り替えによるものも含まれようが、その組み合わせは不明である。

(周溝) 周溝と思われる溝が3本確認された。幅20～40cm、深さ10～20cmを計る。北に一本、南に二本とに分かれるが、南側は作り替えによるものと思われる。南北の内側の周溝間は約400cmを測り、直径420～450cm程度の住居址と推定される。

(その他) 本住居址は周溝とごく一部の床を確認したに過ぎず、土壌に切られていることもあって規模、形状などほとんど不明である。また、炉も確認されず、出土土器も全くないため、時期も不明である。

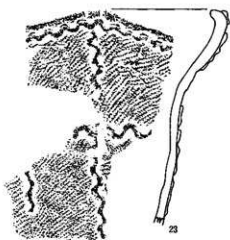
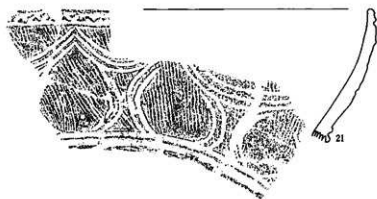
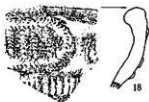
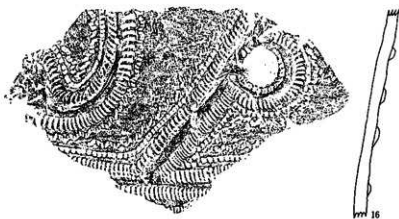


第64図 23号住居址実測図



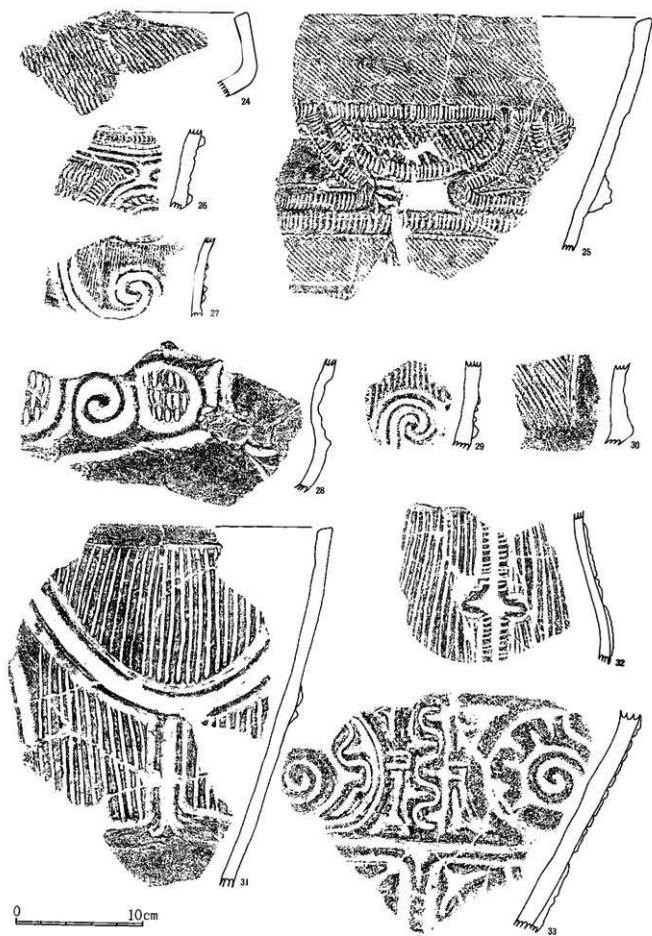
第65図 住居址出土土器拓本その1



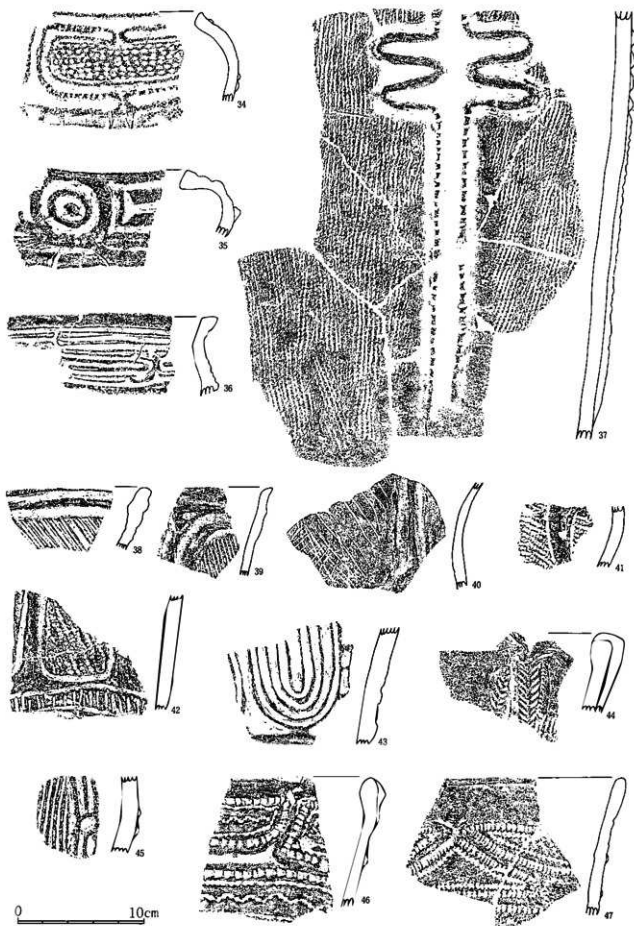


0 10cm

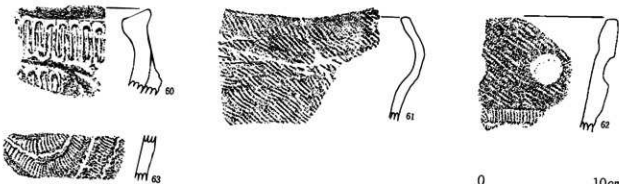
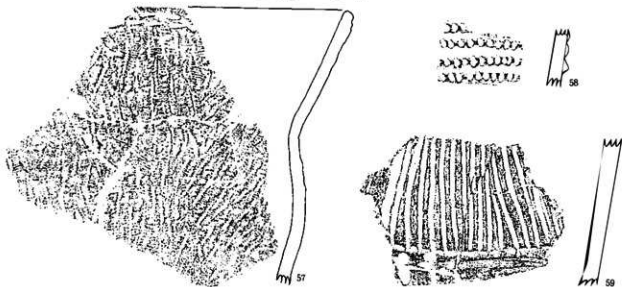
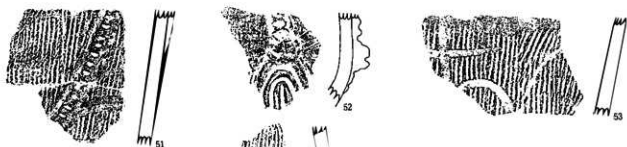
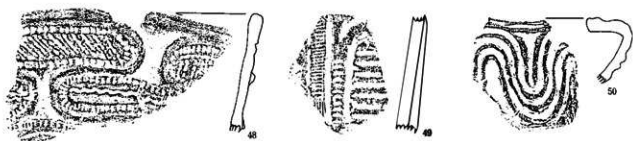
第66図 住居址出土土器拓本その2



第67図 住居址出土土器拓本その3

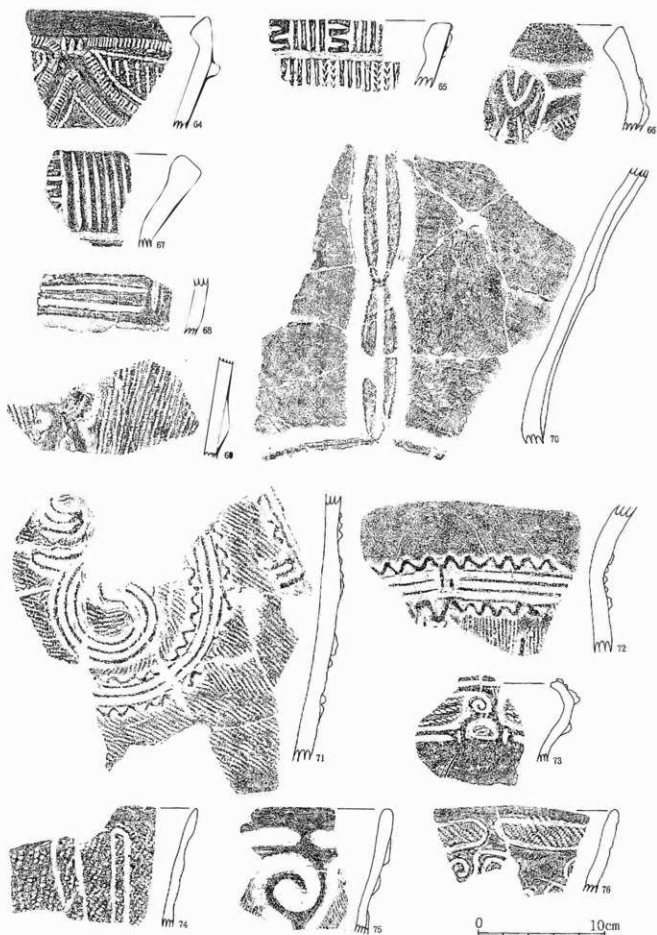


第68図 住居址出土土器拓本その4

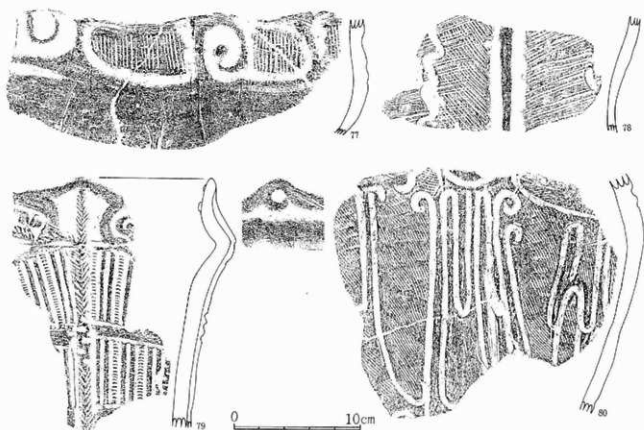


0 10cm

第69図 住居址出土土器拓本その5



第70図 住居址出土土器拓本その6



第71図 住居址出土土器拓本その7

住居址出土土器（拓本・第65図～第71図）

各住居址の概要と出土土器の説明を行なったが、住居内からは復原実測の不可能な土器小片が非常に多く出土している。その内、床面直上もしくは床にちかい部分から出土したものを第65図～第71図に拓本で示した。個々の資料についての説明は第1表に示すこととする。

第1表 住居址出土土器観察表

番号	出土土器	色調	胎土	焼成	番号	出土土器	色調	胎土	焼成
1	2住P-62・61・71	褐色	砂粒、金雲母を含む	良	12	4住P-37	褐色	砂粒含む	良
2	2住P-20	褐色	砂粒、金雲母を含む	〃	13	4住P-35	褐色	砂粒含む	〃
3	2住P-1・73	茶褐色	砂粒含む	〃	14	4住	褐色	砂粒含む	〃
4	2住P-4	褐色	砂粒、金雲母含む	〃	15	4住P-23	褐色	砂粒、金雲母含む	〃
5	2住	暗褐色	砂粒金雲母含む	〃	16	4住 炉内	褐色	砂粒金雲母含む	〃
6	3住P-3	茶褐色	小石多く含む	〃	17	5住	黄褐色	砂粒含む	〃
7	3住	褐色	砂粒含む	〃	18	5住P-31	褐色	雲母多く含む、砂粒含む	〃
8	3住	暗褐色	砂粒含む、金雲母	〃	19	5住P-7	暗褐色	砂粒、雲母少々含む	〃
9	3住	暗褐色	砂粒含む	〃	20	5住	暗褐色	砂粒含む	〃
10	3住	褐色	小石多く含む	〃	21	6住P-55	褐色	砂粒含む	〃
11	3住	灰褐色	砂粒少々含む	〃	22	6住P-81	褐色	砂粒、小石、金雲母含む	〃

番号	出土土器	色調	胎土	焼成	番号	出土土器	色調	胎土	焼成
23	6住	褐色	砂粒、小石、金雲母含む	良	52	15住P-77	褐色	砂粒を含む	良
24	7住 14	褐色	砂粒多く含む	"	53	15住	暗褐色	砂粒、金雲母含む	"
25	7住	褐色	砂粒、雲母多く含む	"	54	15住	褐色	砂粒、金雲母含む	"
26	7住P-2・170	茶褐色	砂粒含む	"	55	15住	茶褐色	砂粒、金雲母含む	"
27	7住 132	暗褐色	砂粒、雲母多く含む	"	56	16住P-39	褐色	砂粒、金雲母含む	"
28	8住P-1	黄褐色	砂粒含む	"	57	16住P-32・P-53・54	褐色	砂粒、小石、金雲母含む	"
29	8住	黄褐色	砂粒含む	"	58	16住P-26	褐色	金雲母を含む	"
30	8住	褐色	砂粒含む	やや不良	59	16住P-40	赤褐色	金雲母多	"
31	10住P-31	褐色	砂粒、金雲母含む	良	60	17住P-8	暗褐色	砂粒、金雲母含む	"
32	10住P-62	暗褐色	砂粒金雲母含む	"	61	17住P-29	褐色	砂粒、金雲母、小粒子含む	"
33	10住P-25	赤褐色	砂粒、金雲母含む	"	62	17住P-35	淡褐色	砂粒、金雲母含む	"
34	10住	褐色	砂粒、小石、金雲母含む	"	63	17住P-37	褐色	砂粒、金雲母含む	"
35	10住	黄褐色	砂粒、金雲母含む	"	64	17住	褐色	砂粒、金雲母含む	"
36	10住P-107	暗褐色	金雲母含む	"	65	19住 13	褐色	砂粒含む	"
37	10住P-29P-119P-III	褐色	砂粒、金雲母含む	"	66	19住 84	黄褐色	砂粒含む	"
38	11住	赤褐色	砂粒、雲母含む	"	67	19住	暗褐色	砂粒含む	"
39	11住	暗褐色	砂粒含む	"	68	19住 19	暗褐色	砂粒含む	やや不良
40	11住P-11	暗褐色	砂粒含む、雲母多く含む	"	69	19住 57	茶褐色	砂粒含む	良
41	11住	褐色	砂粒含む	"	70	19住29・30	暗褐色	砂粒、小粒子、含む	"
42	11住	暗褐色	砂粒含む	"	71	20住	茶褐色	砂粒多く含む	"
43	12住P-12	茶褐色	砂粒、雲母含む	やや不良	72	20住P-13	灰褐色	砂粒多く含む	"
44	12住	褐色	砂粒多く含む	良	73	20住	茶褐色	砂粒、雲母を含む	"
45	12住	褐色	砂粒、雲母含む	"	74	21住P-116	褐色	砂粒、金雲母含む	"
46	13住P-43	褐色	砂粒多く含む、雲母含む	"	75	21住P-11	暗褐色	砂粒、金雲母含む	"
47	13住P34	黄褐色	砂粒多く含む、雲母含む	"	76	21住P-48	灰褐色	砂粒、金雲母含む	"
48	13住P-3	黄褐色	砂粒多く含む、雲母少々あり	"	77	21住P-90	黄褐色	砂粒、小粒子、金雲母含む	"
49	13住P-56	褐色	砂粒多く含む	"	78	21住	褐色	砂粒、金雲母含む	"
50	15住P-84	褐色	砂粒多、金雲母含む	"	79	22住P-27	褐色	砂粒、金雲母含む	"
51	15住P20・21・52	褐色	砂粒を含む	やや不良	80	22住	暗褐色	砂粒、金雲母含む	"

## 2 土坑と出土土器

ここでは復原実測可能な土器を出土した土坑および特殊な掘り込みの土坑についての概要と、出土土器についての説明を記すこととし、出土土器が少ない（あるいはない）ものについてはまとめて表に記す。

### 4号土坑（第72図、第103図-1）

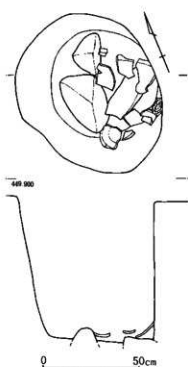
（位置） E 2グリッド。

（形状） 楕円形を呈し、円筒状の掘り込みである。東壁はほぼ垂直に立ち上がる。

（規模） 長径85cm、短径70cm、深さ75cmを計る。

（その他） 土坑底面には花崗岩が顔を出しているが、これは風化していないため、掘り込みをこの深さで断念した可能性がある。遺物は土器だけであり、土坑底面に接するように出土している。また、土器片の間から長さ30cm程の平石が出土している。

（土器） 第103図-1 ほぼ穹形である。口縁には4単位の小突起を有する。口径25cm、底径8cm、器高26cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に砂粒を含むが、磨きは丁寧である。また、成形、施文なども丁寧に行なわれている。



第72図 4号土坑実測図

### 31～33、44、45号土坑（第73図、第103図-2～4）

（位置） J16、K16グリッド。

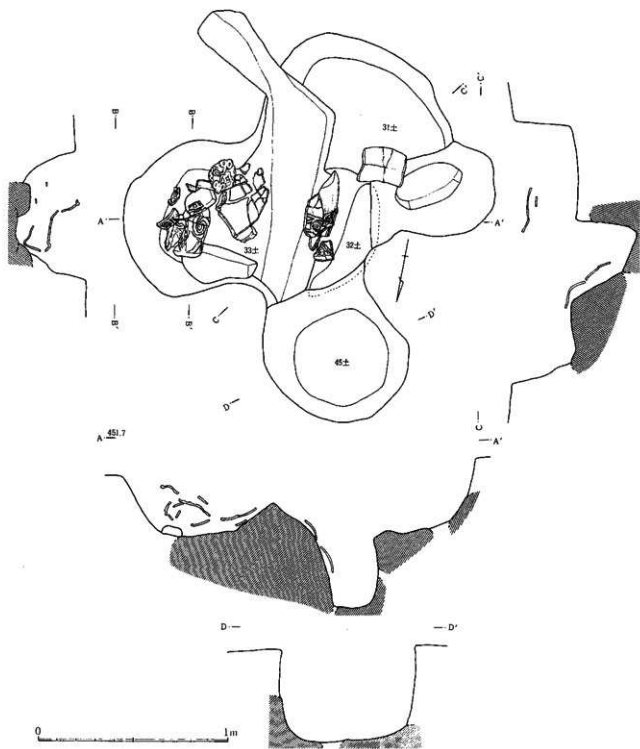
（形状） いずれも平面形は円ないし楕円形を呈するが、32号土坑は巨大な花崗岩礫に制限され半円形を呈する。底面は花崗岩のない部分では緩やかなカーブを描く。壁は31、45号土坑がほぼ垂直にちかい立ち上がりで、他は立ち上がりも緩やかである。

（規模） 31号土坑：長径100cm、短径70～80cm、深さ30cmを計る。32号土坑：長径80cm程度、短径40～50cm程度と推定される。深さは70～80cmを計る。33号土坑：ほぼ円形を呈すると思われ、直径80cm程度、深さ35cmを計る。44号土坑：長径70cm程度、短径50cm程度、深さ40cmと推定される。45号土坑：ほぼ円形を呈すると思われ、直径80cm、深さ50cmを計る。

（その他） 31号土坑を除いたすべての土坑が花崗岩を削っている。31号土坑からは大きな土器片が浮いて出土しているに過ぎない。まず、32号土坑は、断面によれば、3個の花崗岩が存在するが、このうち2個を削って土坑の掘り込みとしている。うち1個は風化が激しく削ることが容易であったと思われる、V字形に挟られている（図中C-C'）。削ることのできなかった花崗岩は図の中央にみられる南北方向に長い巨礫で、調査段階でも全く風化していなかった。土器はこの面に貼り付くような状態で出土している。この岩は断面が三角形を呈する（A-A'）が、頂部から裏面にかけては同一個体であるにもかかわらず風化しており、33号土坑により削られている。31号土坑がこの礫を削っていないのも32号土坑と同じく風化していない面に当たっていたためと思われる。33号土坑は前述したように花崗岩を削っている。遺物は土器1個体のほか、後述する顔面把手が1点と、土器片に挟まれるように自然石3個が出土している。なお、土器と顔面把手は同一個体ではない。44号土坑は2個の花崗岩を削っているが、うち1個は32号土坑にも削られている。45号土坑は底面に2個の花崗岩が顔を出す状況であるが、2個とも削って底面を整え、フラスコ状土坑に仕上げている。

（土器） 31号土坑：第103図-2 深鉢破片。推定口径33cm、現存高23cmを計る。縄文を地文とし、沈線で連弧文・懸垂文を描いている。暗褐色を呈し焼成は良好。砂粒を含み、表面はやや荒れている。 32号土坑：第103図-3 深鉢。推定口径3cm、推定底径18cm、器高41cmを計る。文様帯を二段に分け、上部を隆帯・沈線による



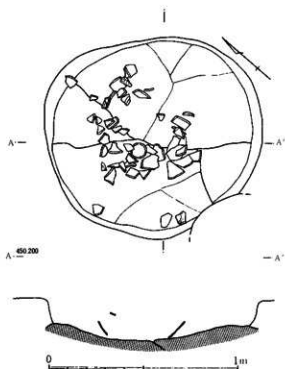


第73図 31～33・34号土坑実測図

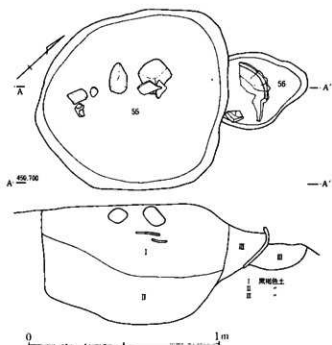
区画帯、下部を縄文帯としている。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、磨滅もあって表面が荒れている。33号土坑：第103図-4 深鉢。口縁部をすべて欠損しているが、欠損部を磨いて平坦に整えている。施文は隆帯による区画、渦巻文である。明褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を僅かに含んでいるが、内外面とも磨きは丁寧である。

47号土坑（第74図）

（位置） E11グリッド。



第74図 47号土坑実測図



第75図 55・56号土坑実測図

(形状) 不整形円形を呈する。

(規模) 最長部径115cm、それに直交する短径105cm、深さ20cmを計る。

(その他) 本土坑は掘りはじめから20cm程で、底面部分全面に花崗岩の巨礫が顔を出す。これを皿状に削り込んで土坑としている。浅い土坑ではあるが、奇麗に削って作られている。遺物は花崗岩に乗るかたちで土器が出土しているが、同一個体でないため図示できない。

#### 55・56号土坑(第75図、第103図-5)

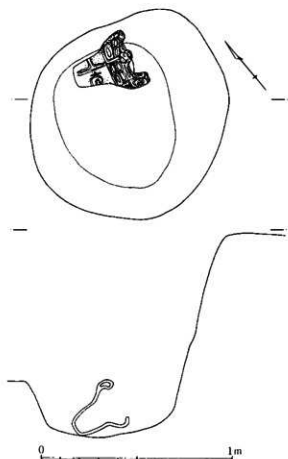
(位置) D7グリッド。

(形状) 55号土坑は不整形円形を呈する。56号土坑は55号土坑に切られ一部の調査に過ぎないが、長楕円形を呈すると思われる。

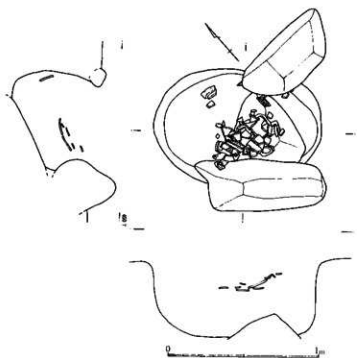
(規模) 55号土坑：長径105cm、短径95cm、深さ60cmを計る。56号土坑：推定で長径60cm、短径40cm、深さ30~40cmを計る。

(覆土) ともに黒褐色粘質土を主体とするが、55号土坑は大きく二層に分けられ、下層には黄褐色土の混入が見られる。また、上・下層とも焼土粒子、カーボンを含むが、下層ではその量が少なくなっている。56号土坑は55号土坑上層に比べ、含まれる白色粒子が少ない。カーボンは含んでいる。

(その他) 55号土坑では遺物は上層から出土しており、土器片数点のほかに凹石、20cm大の自然石が出土して



第76図 74号土坑実測図



第77図 99号土坑実測図

(規模) 掘り込み面での直径は、推定で120～130cm程度と思われる。底部径で65cm、深さ105cmを計る。掘り込みの深い土坑である。

(その他) 本土坑からは底面に転んだ状態で完形土器1点が出土している。把手を一部欠損しただけでほとんど完形であった。出土状況からは、埋納時には土器は立てられていたと想像される。

(土器) 第103図-6 深鉢。口径14cm、底径9cm、器高34cm、把手間最大径26cmを計る。キャリバー形を呈し、口縁部に中空の箱状把手1単位と中空の小突起3単位を有する。把手・突起を含んだ頸部から上の部分は粘土紐によって連結されている。粘土紐は把手・突起には渦巻き状に貼付し、頸部には楕円形に貼付されている。さらに各把手、突起部では胴部に縦方向に貼付され、胴部を4分割している。胴部下半には地文として摺糸文が施文されている。このような箱状把手を有する土器は当地方の該期にはみられず、北関東地方の大木8a式土器として良いであろう。搬入品として当地方にもたらされたものが最終的に本土坑に収められたと考えられる。なお、上半部は暗褐色を、下半部は使用により赤褐色を呈する。焼成は良好で、胎土に小砂粒を含むが、施文・内面の磨きとも丁寧に行なわれている。

#### 99号土坑 (第77図、第103図-7)

(位置) G8グリッド。

(形状) 楕円形を呈する。

(規模) 長径110cm、短径75cm、深さ50cmを計る。

(その他) 壁は緩く立ち上がり、底面は皿状を成す。本土坑でも底面に花崗岩が顔を出しているが、風化していないため削られていない。また、土坑の高脇にも花崗岩の巨礫がみられるが、これらはさらに土中に埋まっており、土坑を掘り込む段階から存在していたことは明らかで、いずれも風化していなかったために削ることができなかったと考えられる。遺物は土器だけで、一個体が小破片となって出土しているが、土坑底面からは約30cm浮いている。

(土器) 第103図-7 深鉢。口径20cm、推定底径15cm、器高38cmを計る。口縁部に4単位の小突起を有する。上半は暗褐色、下半は赤褐色を呈し、焼成は良好。小砂粒を多く含むが、磨きは良好である。成形、施文も丁寧

いる。56号土坑は土器だけで、底面に接するように出土している。

(土器) 56号土坑：浅鉢。黄褐色を呈し、浅鉢にしては珍しく胎土に砂粒を多く含んでいる。内面は磨きが行なわれているが、外面はほとんど磨かれていなかったようで、荒れが激しい。

#### 74号土坑 (第76図、第103図-6)

(位置) G3グリッド。

(形状) 10号住居址と切り合っており、平面形は確定できないが、円形を呈すると思われる。



第78図 100号土坑実測図

に行なわれている。

100号土坑（第78図、第103図—8、第104図—9）

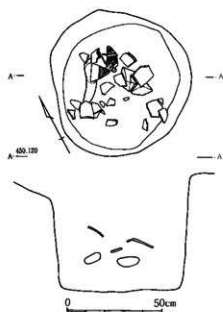
（位置） A 5・6グリッド。

（形状） 不整形円形を呈する。

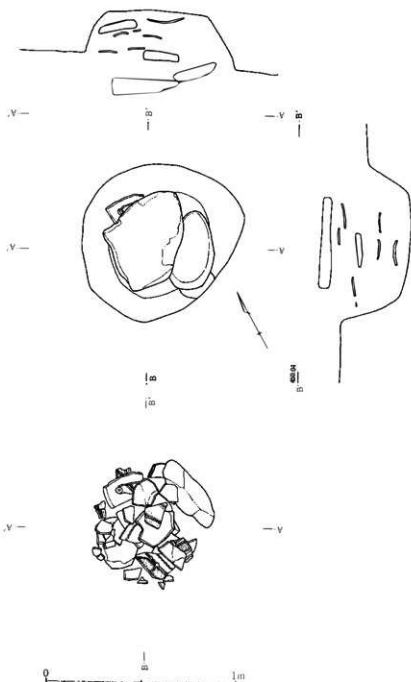
（規模） 最長部径170cm、それに直交する短径150cm、深さ80～90cmと推定される。

（その他） 土坑底面は皿状を成し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土器二個体が細片となって出土している他、土器片の下部からは50cm大、20cm大の石各1個が出土している。なお、これらの遺物は土坑底面から20～50cm浮いて出土している。

（土器） 第103図—8 大型の深鉢。口縁部はごく一部残っているだけである。推定口径44cm、底径18cm、器高78cm、最大径49cmを計る。口縁部には把手もしくは突起を有するが、欠損しており、その単位数も不明である。把手の基部は頸部にも残っており、頸部からブリッジ状に口縁部につながる中空把手であったと思われる。施文は中胴部だけで、口縁部、胴部下半は無文帯となっている。黄褐色を呈し、焼成



第79図 110号土坑実測図



第80図 111号土坑実測図

#### 111号土坑（第80図、第104図-10）

（位置） H7グリッド。

（形状） 平面形は円ないし楕円形を呈すると思われる。底面は皿状を成し、壁は緩く立ち上がっている。

（規模） 確認部分で長軸85cm、短軸75cm、深さ40cmを計る。しかし、これは遺構確認に手間取り、周辺部分を下げた段階で平石の露出により遺構を確認したものであるため、実際の掘り込みはさらに深いものであったと考えられる。

（その他） 本土坑は掘り込みが小さい割には遺物が多い。土器は1個体だけであるが、細片となって出土している。土器片の間に10~30cm大の礫が2個、その上部にはほぼ完形の石皿が1点、さらにその上部を50cm大の平石で覆ったものである。

（土器） 第104図-10 深鉢。口縁部に4単位の小突起を有する。口径41cm、底径15cm、器高43cmを計る。本遺

は良好である。外面下半は火熱により赤変している。胎土には砂粒が多く含まれているが、口縁部および内面は磨きが丁寧である。外面下半は磨きも雑で、表面が荒れている。

第104図-9 算盤玉状の底部を有する深鉢の上半部。口径24cm、最大径35cm、現存高29cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好である。本資料は隆帯の貼付が丁寧に行なわれている反面、沈線施文は浅く雑なものとなっている。胎土に小砂粒が多く含まれ、雲母が目立つ。内面の磨きは丁寧であるが、外面は磨減によるものか荒れている。

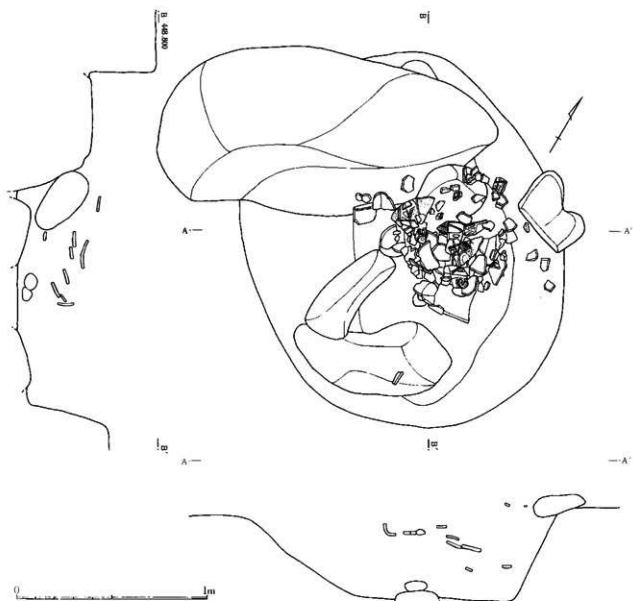
#### 110土坑（第79図）

（位置） D5グリッド。

（形状） 不整形を呈し、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は典型的なフラスコ形を呈している。本遺跡ではこのような形態の土坑は多くない。

（規模） 直径75cm、深さ60cmを計る。

（その他） 遺物は土器片と挙大の礫が出土しているが、土坑底面から10~35cm浮いている。なお、土器片の点数は多いものの複数が混ざっており、復原実測できる資料はなかった。



第81図 122号土坑実測図

跡で出土した唯一の新道式土器である。暗褐色を呈するが、外面下半は火熱により赤変している。また、内面下半には約10cmの幅でススが附着している。成形、施文、磨き、胎土とも良好である。

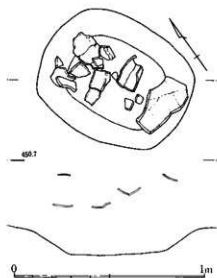
122号土坑（第81図、第104図—11、12、13）

（位置） I 9、J 9グリッド。

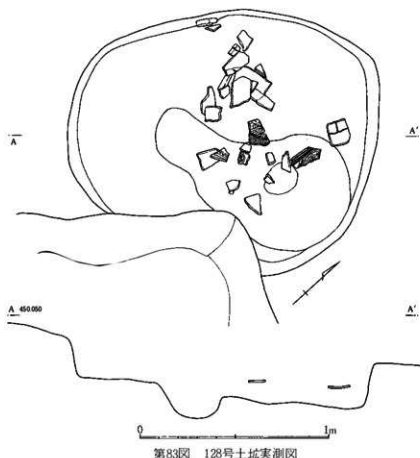
（形状） 花崗岩の巨礫が露出し、一部が不明となっているが、楕円形を呈すると思われる。底面は皿状を成し、壁は北側では垂直にちかい立ち上がりで、南側では緩く立ち上がる。

（規模） 長径200cm、それに直交する短径160cm、確認面からの深さ45cmを計る。

（その他） 本土坑も花崗岩が底面にみられるほか、図にみられるように2mちかい巨礫が土坑を掘り込む段階ですでに出現していた



第82図 123号土坑実測図

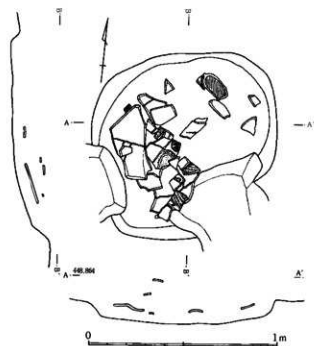


第83図 128号土坑実測図

ことになる。これらはいずれも風化していなかったため、土坑底面および壁に残ることとなった。遺物は少なくとも土器3個体以上が細片となって出土しており、これらに混ざって30cm大、50cm大の石各1個が確認された。なお、遺物は土坑底面より15~50cm浮いて出土している。

(土器) 第104図-11 深鉢口縁破片。推定口径31cm、現存高22cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。施文は丁寧であるが、胎土に砂粒を多く含み、内面の磨きはやや雑であり、荒れている。第104図-12 深鉢。底面を欠損している。口径30cm、底径15cm、器高42cmを計る。褐色を呈するが、使用の痕跡が明瞭で、外面下半にはススが付着し、また、内面下半は黒変している。胎土は精選され

ており、雲母が目立つ。内面の磨き、施文など、非常に丁寧なつくりの土器である。焼成も良好である。第104図-13 深鉢口縁部破片。内面カーブから、かなり大型の土器であったと思われるが、薄い作りである。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、雲母が目立つ。磨きも丁寧に行なわれている。



第84図 129号土坑実測図

#### 123号土坑 (第82図)

(位置) D14グリッド。

(形状) 楕円形を呈し、浅い皿状の土坑である。底面は平坦で壁は緩く立ち上がる。

(規模) 確認面での長径80cm、短径65cm、深さ15cmを計る。遺物は土坑底面よりも30cm浮いて出土している。これが本土坑に伴うものであるとすれば、深さも径もさらに大きなものとなり、皿状の土坑とはなり得ない。ただ、この周辺からも遺物は多く出土しており、たまたま、浅い掘り込みの上に遺物の集中がみられたという可能性もある。

#### 128号土坑 (第83図、第104図-14)

(位置) B10グリッド。

(形状) 楕円形を呈する。壁は強く立ち立っている。

(規模) 本土壇も花崗岩に制限されて、壁は一部存在しない。長径 160cm、短径 130~140cm、確認面からの深さ 30cm を計る。

(その他) 底面は付近の地形の傾斜に沿って北東方向にかなり傾斜している。また、底面は平坦であるが、中央に直径 30cm、深さ 15cm ほどの小ピット 1 基が掘られている。遺物は土器だけで、底面より 10~20cm 浮いて出土している。

(土器) 第 104 図-14 鉢。推定口径 41cm、底径 12cm、器高 27cm を計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒を多く含み、表面が荒れている。

#### 129号土壇 (第84図、第104図-15、16)

(位置) F 6 グリッド。

(形状) 不整形円形を呈する。壁は緩く立ち上がり、底面は皿状を呈する。

(規模) 長径 100cm、短径 90cm、確認面からの深さ 10cm を計る。

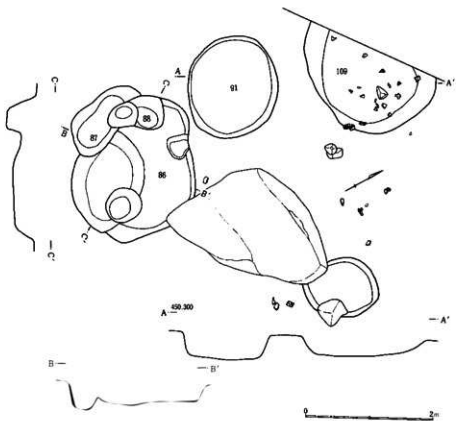
(その他) 本土壇も花崗岩の巨礫 2 個によって掘り込みを制限されている。また、確認面からは 10cm の深さしかなく、皿状土壇となっているが、さらに掘り込みの深いものであったと考えられる。遺物は土器二個体が出土しているが、底面から数 cm 浮いている。

(土器) 第 104 図-15 深鉢。推定口径 30cm、現存高 39cm を計る。中胴部に隆帯による楕円区画があり、内部に縄文が施される。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、白色小砂粒、雲母が目立つ。内面の磨き、施文とも丁寧に行なわれている。第 104 図-16 深鉢口縁部破片。口縁部の小突起は 4 単位と思われる。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、表面が荒れている。

#### その他の土壇 (第85図~102図、第105図、第106図~108図)

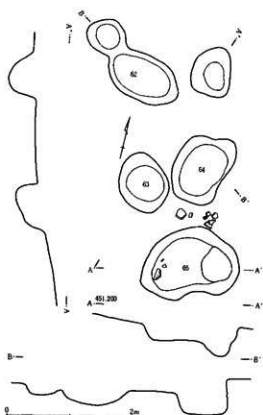
上記以外の土壇については、位置、形状、規模をまとめて第 2 表に示すが、このうち、土器の大破片を出土したものが何基か存在する。それらの土器を第 105 図に示したので、以下に概要を記すこととする。また、各土壇からは復原不可能な土器片が大量に出土しているが、その一部を第 106~108 図に示した。これについては第 3 表にまとめておく。

第 105 図-17 24号土壇出土。深鉢口縁部。推定口径 31.5cm、現存高 14cm を計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、磨きは丁寧である。—18 34号土壇出土。深鉢口縁部破片。図示した破片の一部は土器捨て場からの出土である。土器捨て場内の接合例は後述するが、土器捨て場と他

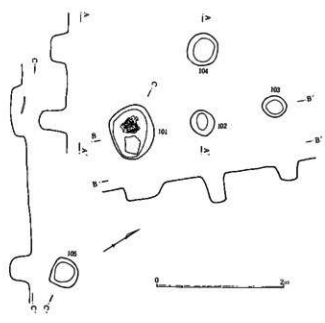


第85図 土壇群その1

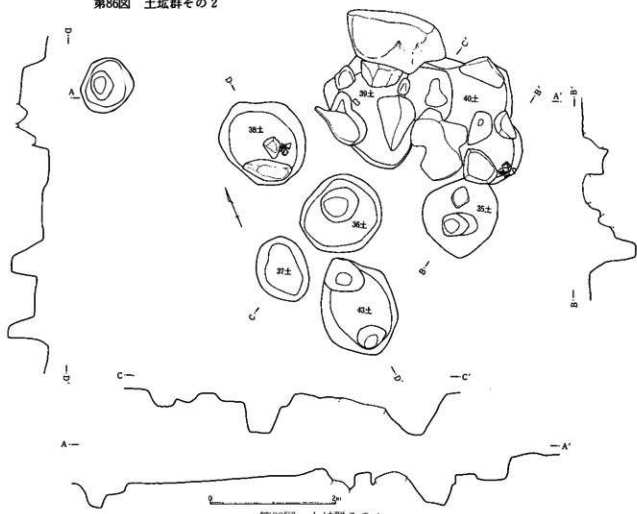




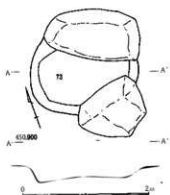
第86図 土城群その2



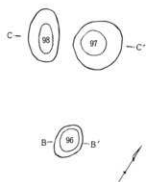
第87図 土城群その3



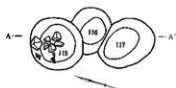
第88図 土城群その4



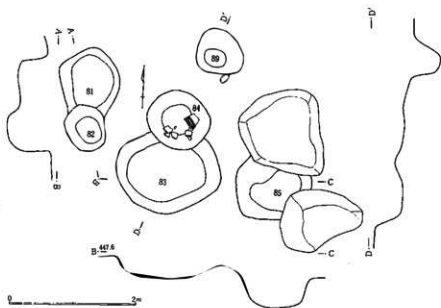
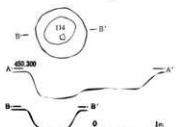
第89図 土壇群その5



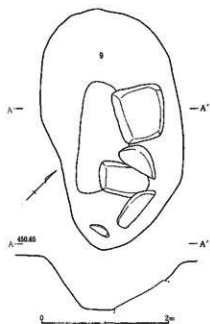
第90図 土壇群その6



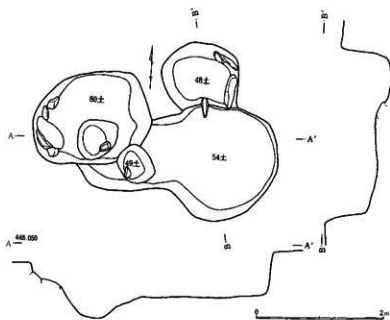
第91図 土壇群その7



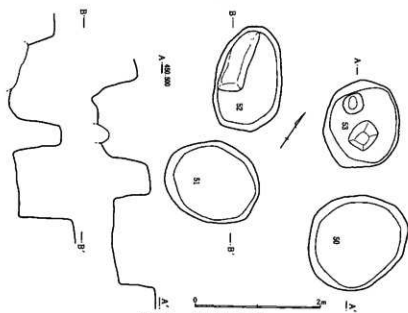
第92図 土壇群その8



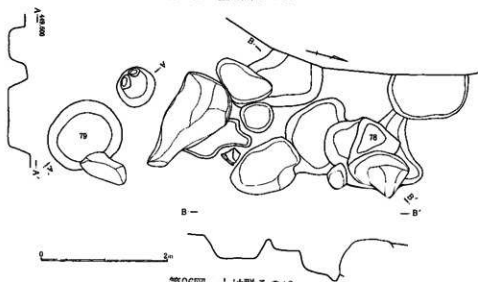
第93図 土壇群その9



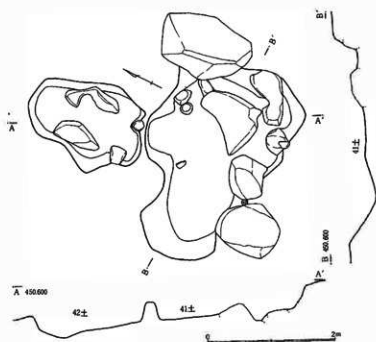
第94図 土埧群その10



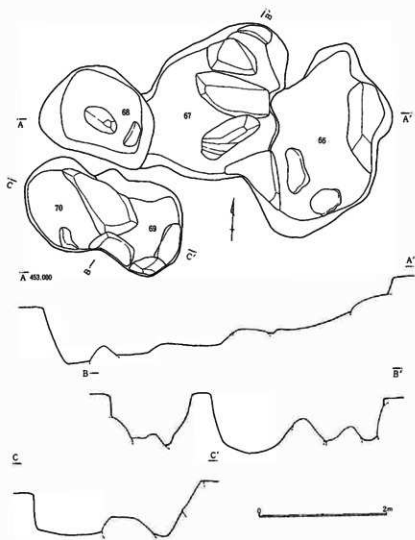
第95図 土埧群その11



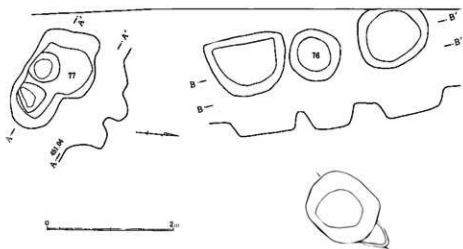
第96図 土埧群その12



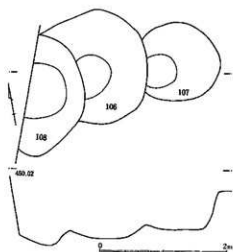
第97図 土城群その13



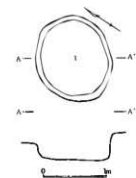
第98図 土城群その14



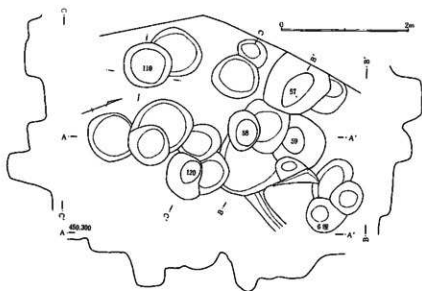
第99図 土壇群その15



第100図 土壇群その16



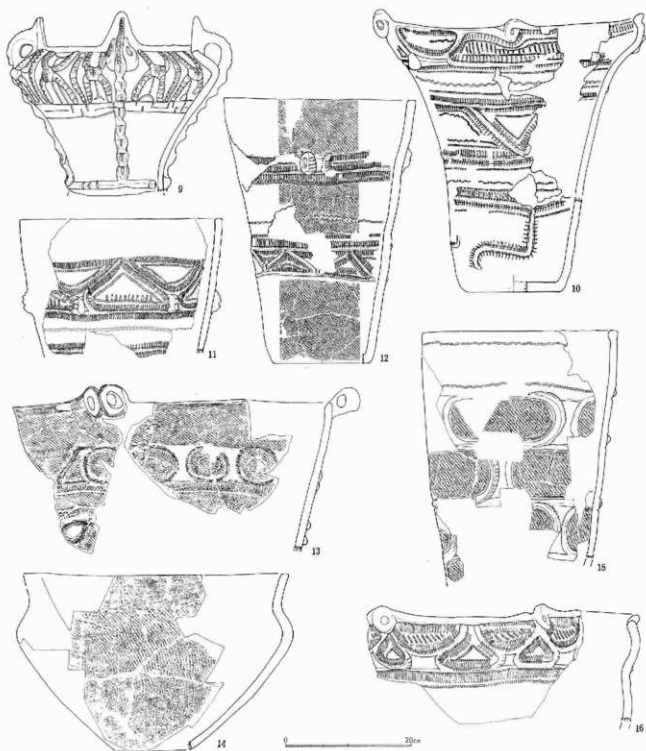
第101図 土壇群その17



第102図 土壇群その18

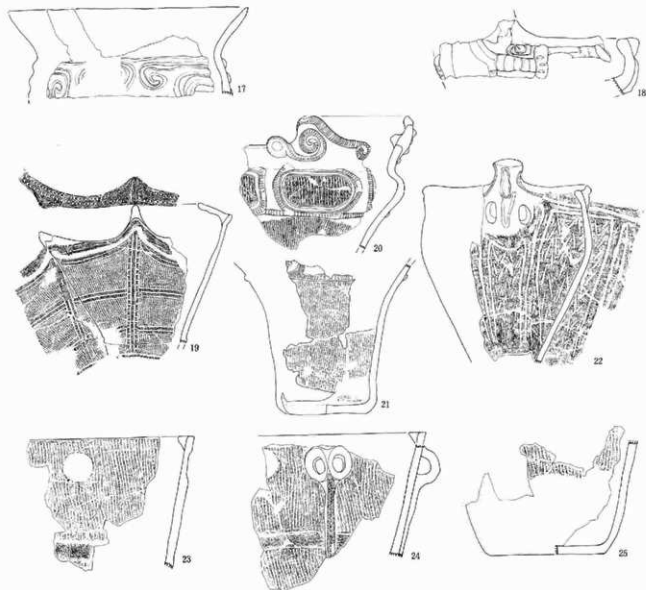


第103図 土城群出土土器その1



第104図 土城群出土土器その2

の遺構との接合例である。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒を多く含む。—19 24号土城出土。深鉢。非常に特異な土器である。まず、器形は欠損した胴部下半が垂直方向か、もしくはやや外傾する傾向がある。次に、口縁部では隆帯を一条内側に貼り付けることによって口唇が内側に飛び出したかたちとなり、さらに口唇の幅も広いものとなっている。その部分には竹管による刺突が施される。口縁は波状を成し、大突起2単位・小突起4単位が付くと思われる。胴部は摺糸文を地文とし、沈線によって縦横の区画を作り出している。また、非常に薄い作りである。刺突などから中期初頭～中期中葉初期に位置付けられるものであろう。推定口径30cm、現存高24cmを計る。胎土に小砂粒を含み、雲母が目立つ。内面の磨き、施文とも非常に丁寧に行なわれている。なお、破



第105図 土城群出土土器その3

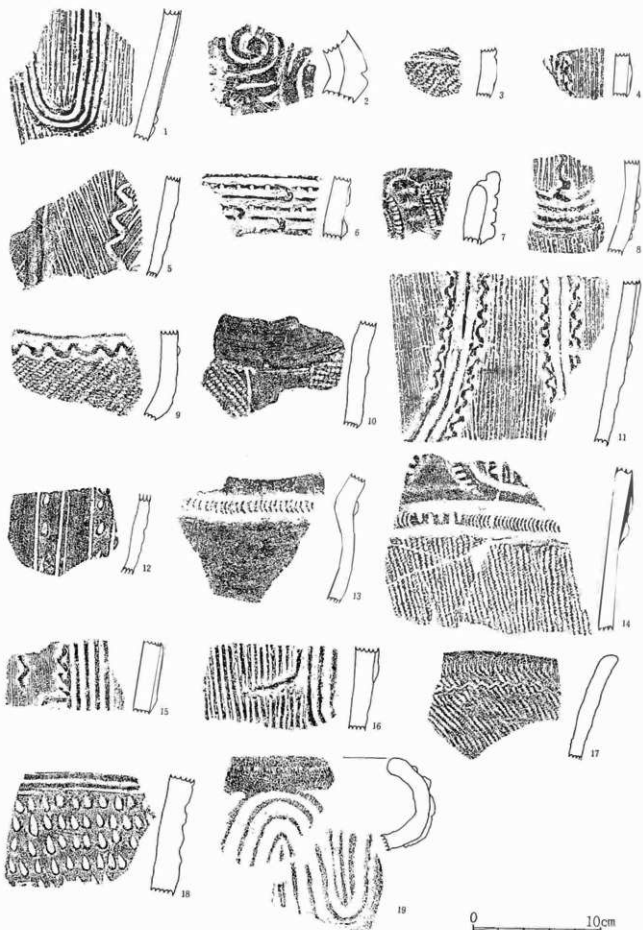
片の一部は88号土城から出土し、接合したものである。—20・21 72号土城出土。同一個体である。深鉢。底径13cm、器高37cm程度と推定される。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒を多く含み、磨きが雑であったのか表面が荒れている。—22 101号土城出土。深鉢。推定口径25cm、現存高32cmを計る。口縁部には突起が付くが、おそらく2単位と思われる。胴部施文は沈線で、区画とハの字で満たしている。淡褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、内面の磨きも丁寧である。—23・24・25 113号土城出土。すべて同一個体である。大型の深鉢。口縁部には内側に一条粘土紐が貼付される。褐色を呈し、焼成は良好。胎土には砂粒が多く、白色小砂粒、雲母などが目立つ。内外面ともやや荒れている。

第2表 土城一覽表

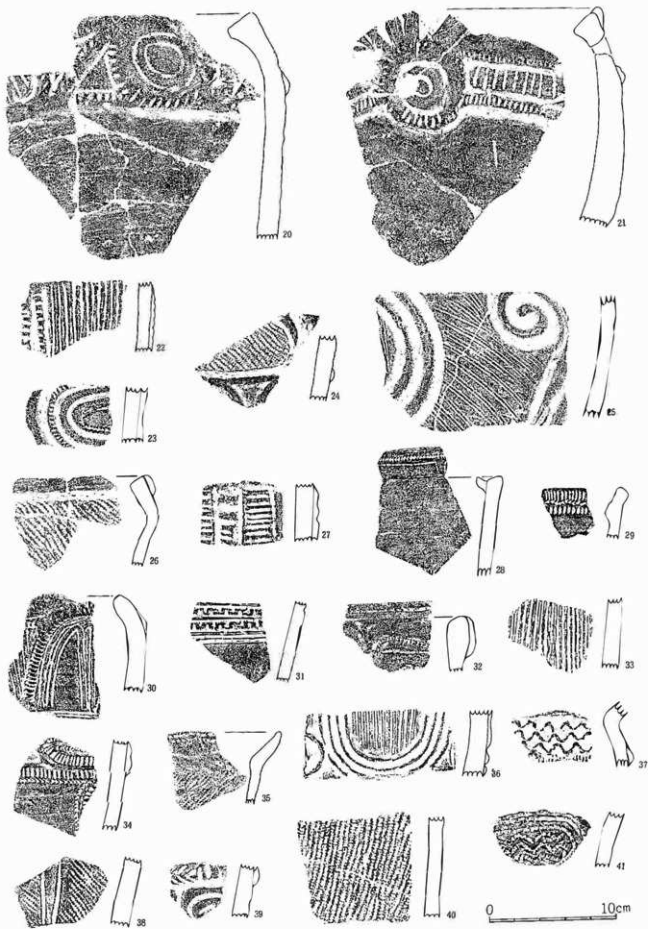
番号	位置	形状	長径cm	短径cm	深さcm	その他	番号	位置	形状	長径cm	短径cm	深さcm	その他
1	F 2	円形	120		22		4	F 2	楕円形	100	55	24	
2	E 2	円形	55		32		5	E 2・F 2				46	
3	F 2	楕円形	150	112	61		6	E 2・F 2	円形	80		65	



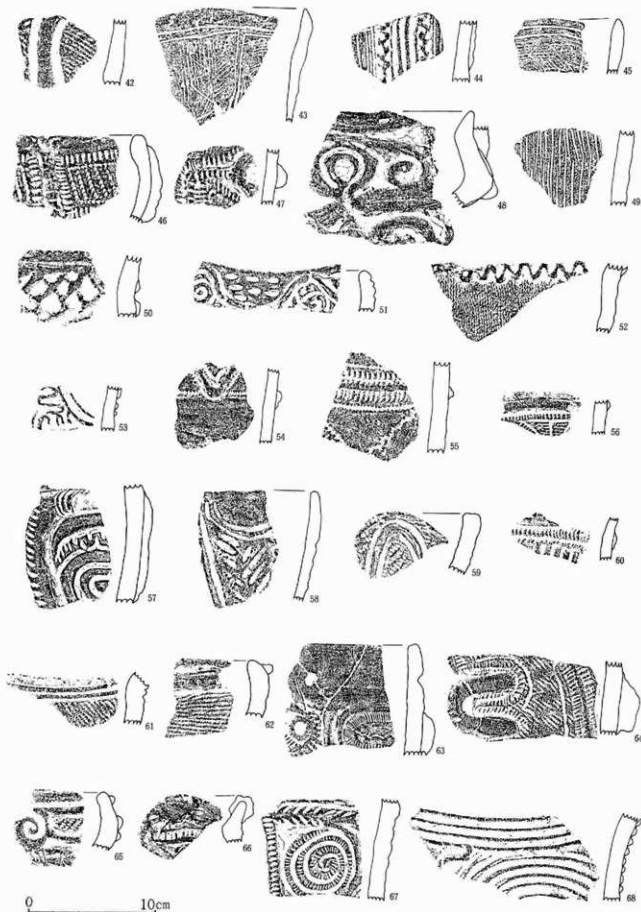
番号	位置	形状	長さcm	短径cm	深さcm	その他	番号	位置	形状	長さcm	短径cm	深さcm	その他
5	E 2・F 2				46		68	G14	楕円形	180	140	96	
6	E 2・F 2	円形	80		65		69	G15	(円形)	130		86	底部に残りビットあり
7	E 2				40		70	G14・G15	(円形)	130		81	
8	E 6	楕円形		113	36		71						
9	G 8・H 8	楕円形	375	220	90		72	B14	不整形	70			
10	E 2	楕円形		55	25		73	D 8・E 8	(円形)	170		24	
11	E 6	(円形)	(44)		12		74	G 4	円形	100		75	
12	E 2				34		75	I 14	楕円形	180	150	58	
13	E 2	楕円形	110	73	45		76	C 6	円形	82		32	
14	E 2	円形	58		79		77	C 7・B 7	楕円形	104	165	49	底部にビット2個あり
15	E 2	楕円形	50	32	53		78	B 8	不整形	60		63	
16	E 2	楕円形		70	12		79	B 9	円形	11		35	
17	E 2				39		80	H11	楕円形	182	150	131	底部にビット、石あり
18	E 1・F 1	(楕円形)		57	53		81	C 9	楕円形		100	27	
19	E 2	円形	60		53		82	C 9	円形	70		68	
20	E 2				66		83	C 9・C10	楕円形	170	130	35	
21	F 2				44		84	C 9	円形	100		31	
22	F 2	円形	53		56		85	C10	(円形)	120		61	
23	F 3						86	E 6	(楕円形)			22	
24	F 2	円形	78		51		87	E 6	楕円形	130	60	49	
25	F 1 F 2				25		88	E 6	(円形)	(52)		20	
26	E 2	円形	42		17		89	C 7	円形	70		46	
27	E 2	楕円形	82	63	60		90	G 7	不整形	75		62	
28	E 2				20		91	ES-6, ES-6	円形	150			
29							92	G 6	楕円形	116	72	32	
30	E 2	円形	66		79		93	E 4	円形	(148)			底部にビットあり
31	K16				35		94	D 4	楕円形	(88)	(66)	32	
32	K16				80		95	D 4	不整形	(76)		27	
33	J16				30		96	D 4	楕円形	55	42	30	
34							97	D 4・D 3	円形	77		48	
35	B13	不生円形	116		35	底部にビットあり	98	D 3・D 4	楕円形	81	49	56	
36	B 2	円形	116		13	底部にビットあり	99	G 8	楕円形	110	75	58	
37	B12	楕円形	104	82	25		100	A 5・A 6	円形	150		69	
38	B12	不整形	130		40	底部にビットあり	101	C 4	楕円形	85	75	19	
39	B12・C12	楕円形	174	137	26	石、黄土あり	102	C 4	円形	35		44	
40	C12・C13	楕円形	219	174	35	石あり	103	C 4	円形	34		27	
41	C12	楕円形	316	220	46	石あり	104	C 4	円形	52		27	
42	C11	楕円形	178	120	58	石、底部にビットあり	105	C 5	円形	42		36	
43	B13	楕円形	160	120	66	底部にビット2個あり	106	D 3	(不整形)		(170)	80	
44	K16	楕円形	125	44	40		107	D 3	( )		(110)	67	
45	K17	円形	70				108	C 3	( )		(150)	97	
46	B11	円形	86		43	底部にビットあり	109	F 5	(円形)	220		(40)	
47	E11	円形	110		20		110	D 5・D 6	円形	75		69	
48	H11・12	不整形	121		106	石あり	111	H 7	円形	80		25	
49	H12	円形	60		59	石あり	112	E 8	楕円形	100		16	
50	I 13	円形	148		68		113	D 9	円形	35		48	
51	H13・I 13	円形	127		83		114	B 5	円形	80		35	
52	I 12・I 13	楕円形	162	104	87	石あり	115	B 5	円形	87		40	
53	I 13	円形	126		89	底部にビットあり	116	B 5	(円形)	71		29	
54	H12	不整形	180		96		117	B 5	楕円形	90	70	41	
55	D 7	円形	100		68		118	G 7・G 6	楕円形	91	74	43	
56	D 7	(楕円形)	(100)	80	30	現存部高	119	E 7	円形	102		17	
57	D 5	(楕円形)		90	53		120	D 6				68	
58	D 6	円形	55		59		121	F 6	円形	(137)		22	
59	D 5	(円形)	80		37		122	I 9・J 9	楕円形	193	167	42	底部に石あり
60	C 8・D 8	楕円形	171	95	58	石あり	123	D14	円形	70		16	
61	D 7	円形	136		36		124	D 8・D 9	楕円形	100	41		
62	D 8	楕円形	120	60	23		125	E 9	円形	90		41	
63	C8-9, D6-9	円形	75		46		126	E 9				47	
64	D 9・D 8	楕円形	110	80	30		127	E14	楕円形	240	140	39	
65	C 9・D 9	楕円形	150	100	28	底部にビットあり	128	B10	楕円形	160	140	43	底部にビットあり
66	H15	不整形	150		83		129	F 6	円形	97		12	
67	G14, H14	不整形	250		88								



第106図 土坑出土土器拓本その1



第107図 土城出土土器拓本その2



第106図 土城出土土器拓本その3

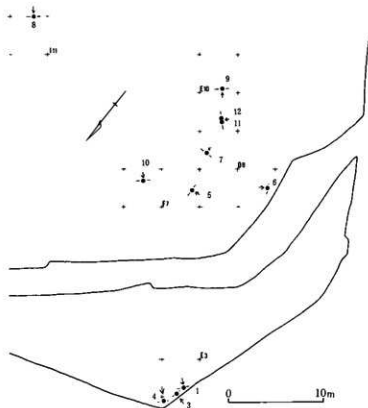
第3表 土坑出土土器観察表

番号	出土位置	色調	胎土	焼成	番号	出土位置	色調	胎土	焼成
1	3土	短褐色	砂粒、雲母を含む	良	35	65土P-1	茶褐色	砂粒、雲母含む	良
2	3土	赤褐色	砂粒多く含む、雲母含む	"	36	65土P-2	黄褐色	砂粒、雲母含む	"
3	5土	暗褐色	砂粒、雲母含む	"	37	66~70土	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
4	5土	茶褐色	砂粒、雲母あり	"	38	70土	灰褐色	砂粒、雲母含む	"
5	6土	暗褐色	砂粒を多く含む、雲母少々あり	"	39	75土	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
6	7土	褐色	砂粒、雲母含む	"	40	76土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
7	7土	褐色	砂粒、雲母含む	"	41	78土	褐色	砂粒、雲母含む	"
8	8土	黒褐色	砂粒、雲母含む	"	42	82土	淡褐色	砂粒、雲母含む	"
9	9土	褐色	砂粒、雲母も含む	"	43	83土	茶褐色	砂粒多く含む、雲母あり	"
10	9・10土	褐色	砂粒、雲母含む	"	44	84土P-1	褐色	砂粒含む	"
11	21土	茶褐色	砂粒、雲母多く含む	"	45	84土P-1	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
12	21土	灰褐色	砂粒、雲母含む	"	46	85土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
13	27土	褐色	砂粒、雲母含む	"	47	85土	褐色	砂粒、雲母含む	"
14	27土	褐色	砂粒多く含む、雲母少々あり	"	48	86土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
15	28土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	49	86土	褐色	砂粒、雲母含む	"
16	28土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	50	87土	褐色	砂粒、雲母含む	"
17	38土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	51	87土	赤褐色	砂粒、雲母含む	"
18	39土P-1	暗褐色	砂粒、雲母含む	"	52	88土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
19	40土P-1	褐色	砂粒、雲母多く含む	"	53	92土	褐色	砂粒含む	"
20	41土	褐色	砂粒、雲母多く含む	"	54	107土	褐色	砂粒、雲母含む	"
21	41土	褐色	砂粒多く含む、雲母あり	"	55	107土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
22	42土	暗褐色	砂粒、雲母含む	"	56	108土	褐色	砂粒、雲母含む	"
23	43土	褐色	砂粒多く含む、雲母あり	"	57	108土	褐色	砂粒、雲母含む	"
24	47土	褐色	砂粒、雲母含む	"	58	109土	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
25	47土P-41	茶褐色	砂粒多く含む	"	59	109土	褐色	砂粒、雲母含む	"
26	48土	褐色	砂粒、雲母含む	"	60	112土	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
27	48土	茶褐色	砂粒含む	"	61	115土	褐色	砂粒、雲母含む	"
28	51土	褐色	砂粒、雲母含む	"	62	115土	褐色	砂粒、雲母含む	"
29	51土	褐色	砂粒、雲母含む	"	63	122土P-19	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
30	53土	茶褐色	砂粒、雲母多く含む	"	64	122土P-10	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
31	53土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	65	124土	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
32	57土	褐色	砂粒、雲母含む	"	66	124土	黒褐色	砂粒、雲母含む	"
33	57土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	67	125土・126土	褐色	砂粒、雲母含む	"
34	61土	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	68	128土	茶褐色	砂粒含む	"

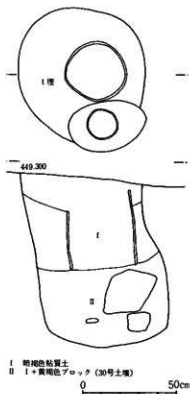
### 3. 単独埋葬

本遺跡では11基（1～12号までの番号の付いているが2号は欠番）の単独埋葬が確認・調査された。以下に各単独埋葬の概要と土器について記すことにする。

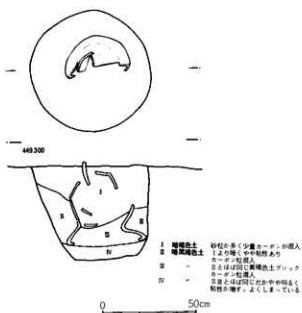
これらは、第109図に示したように、一基を除いて調査区域内の最も遺構が集中する部分で確認されている。この埋葬のまとまりは大きく三ブロックに分けられる。大型の単独埋葬は井戸尻式～曾利Ⅰ・Ⅱ式期にのみみられるもので、埋葬施設ではあろうが、あくまでも個々の家族内で営む住居内埋葬と違い、複数の住居がかかわる、あるいはさらに規模を大きく考えるならば集落単位でかかわりを持つ、という性格もあると考えられる。とすれ



第109図 単独埋葬位置図

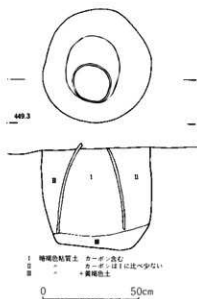


I 暗褐色粘質土  
II I + 黄褐色ブロック (30号土塊)  
第110図 1号埋葬実測図

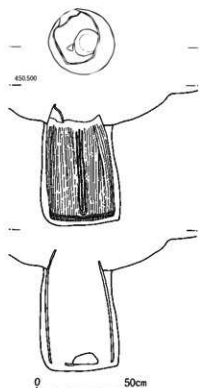


第111図 3号埋葬実測図

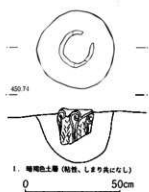
I 暗褐色土 砂粒が多く少量のカーボンが混入  
II 暗褐色土 Iより細くやがね状あり  
III - カーボン粒混入  
IV - 黄色土塊に黄褐色土ブロック  
カーボン粒混入  
断面とはほぼ同じだがやや中層近く  
砂粒が細ずり、まじり合っている



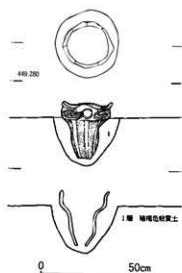
I 暗褐色粘質土 カーボン含む  
II - カーボンほじり比べ少ない  
III - +黄褐色土  
第112図 4号埋葬実測図



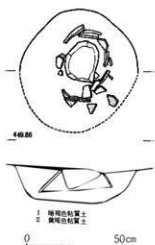
第113図 5号埋葬実測図



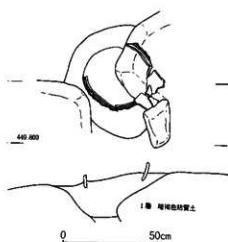
第114図 6号埋葬実測図



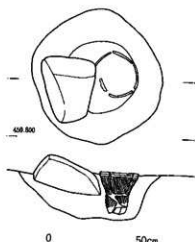
第115図 7号埋葬実測図



第116図 8号埋葬実測図



第117図 9号埋葬実測図



第118図 10号埋葬実測図

ば、このような三つのグルーピングは、各時期での単独埋葬の位置が決められていたことを示すもの、とすることができないだろうか。なお、図中の矢印はセクション図作成の方向を示したものである。

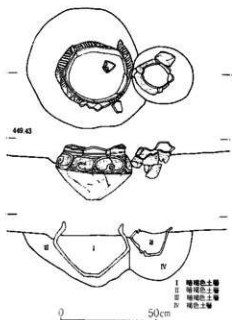
### 1号埋葬（第110図、第120図-1）

（位置） E2グリッド。

（形状） 逆位。

（掘り形） 直径65cm、深さ50cmを計る。この掘り形内には3号住居址埋葬が掘り込まれている。また、掘り込みの下部には30号土壇の掘り込みがみられ、30号土壇埋没後、本埋葬が設けられたことが窺われる。掘り込み内部は暗褐色粘質土の単一層で、僅かにカーボンを含んでいた。

（土器） 第120図-1 大型の深鉢で、口縁部・胴部下半を欠損している。現存部の最大径39cm、現存高40cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、雲母が目立つ。



第119図 11号・12号埋葬実測図

### 3号埋葬（第111図、第120図-2）

（位置） E 2 グリッド。

（形状） 逆位。

（掘り形） 直径60cmの円形を呈し、深さ50cmを計る。内部は暗褐色粘質土を主体とし、カーボンを含んでいる。

（土器） 第120図-2 大型のキャリバー形深鉢で、2単位の大把手を有するが現存しない。口径38cm、現存部での最大径43cm、底径13cm、現存高41cmを計る。底部に孔が穿たれており、周縁部を丁寧に磨いている。明褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒を含むが、丁寧に磨かれている。

### 4号埋葬（第112図、第120図-3）

（位置） F 1 グリッド。

（形状） 逆位。

（掘り形） 直径55cmの円形を呈し、深さ50cmを計る。内部は暗褐色粘質土を主体とし、土器内部にはカーボンが多く含まれる。

（土器） 第120図-3 大型の深鉢で、胴部上半と底面の一部を欠損している。推定底径19cm、現存高47cmを計る。残存した底面の一部に穿孔の痕跡がみられ、よく穿孔部を磨いている。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、内外面ともやや荒れている。

### 5号埋葬（第113図、第120図-4）

（位置） E 7 グリッド。

（形状） 逆位であるが、底面に石蓋をしていた可能性がある。土器内部に30cm大の石が確認され、その下から土器底面が出土している。これは同一個体と思われるが、底面の破片は直接土器と接合しなかった。接合部の破片が存在しなかったためである。おそらく土圧で崩れ落ちるときに屈曲部の破片が内部に落ちずに周縁部に残り、その後失われたものと思われるが、土器埋設時点で割れた底面を入れ、石を乗せてさらに土器をかぶせた可能性も否定できない。

（掘り形） 直径40cmの円形を呈し、深さ70cmを計る。内部は暗褐色粘質土を主体とする。本資料は埋葬に対して掘り形が小さいことに特徴がある。

（土器） 第120図-4 口縁部、底部を欠損した大型の深鉢である。現存部最大径40cm、現存高61cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、雲母が目立つ。

### 6号埋葬（第114図、第120図-5）

（位置） C 7 グリッド。

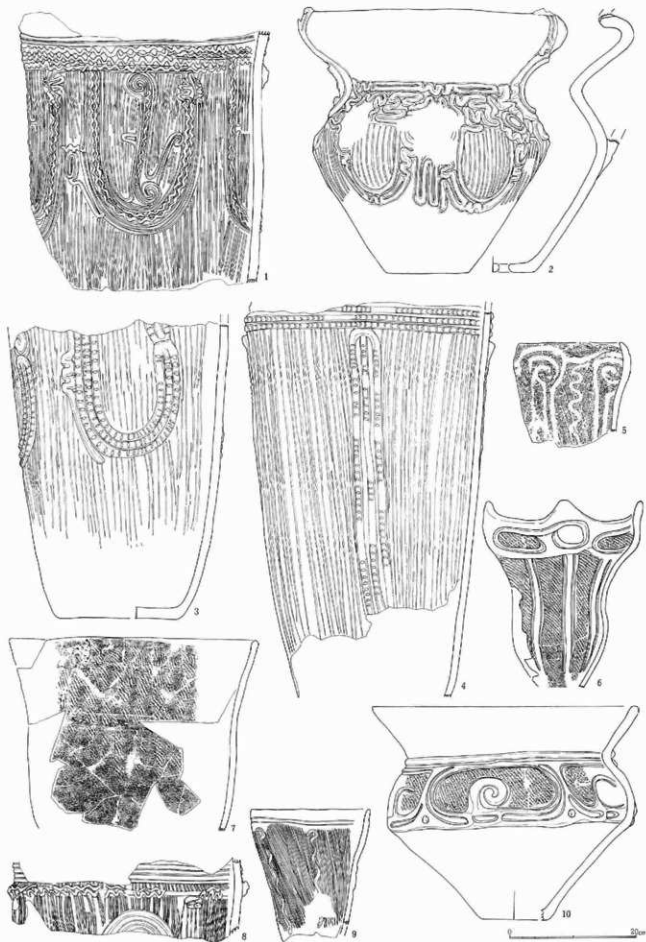
（形状） 正位。

（掘り形） 直径40cmの円形を呈し、深さ30cmを計る。内部は暗褐色土の単一層である。カーボンは含んでいない。

（土器） 第120図-5 胴部下半欠損の深鉢。現存高17cmを計る。黄褐色を呈し、焼成はやや不良。砂粒を多く含み、磨きも雑で表面が荒れている。

### 7号埋葬（第115図、第120図-6）





第120図 単独埋壺土器その1

(位置) D 8 グリッド。

(形状) 正位。

(掘り形) 直径35cmの円形を呈し、深さ25cmを計る。内部は暗褐色粘質土の単一層で、焼土、カーボンが含まない。

(土器) 第120図-6 底部を欠損する深鉢。口径24cm、現存高29cmを計る。黄褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、雲母が目立つ。内面の磨きは丁寧に行なわれているが、火熱によるものか内面の所々が剥離している。



第121図 単独埋壺  
土器その2

#### 8号埋壺(第116図、第120図-7)

(位置) I 11・12グリッド。

(形状) 逆位であり、掘り形中央部に20cm大の石が出土していることから、石蓋様に石を乗せたものと考えられる。

(掘り形) 直径60cmの円形を呈し、深さ20cmを計る。内部は黄褐色粘質土が主体で、土器内は暗褐色粘質土である。

(土器) 第120図-7 深鉢上半部。推定口径39cm、現存高30cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多いが、磨きは良好である。

#### 9号埋壺(第117図、第120図-8)

(位置) D 10グリッド。

(形状) 正位。

(掘り形) 直径60cmの円形を呈し、深さ20cmを計るが、花崗岩碑2個によって掘り形は制限されている。埋設土器は花崗岩に乗るかたちとなっている。なお、掘り形内部は暗褐色粘質土となっている。

(土器) 深鉢胴部。現存部最大径37cm、現存高12cmを計るが、現存する胴部破片は全周しない。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、雲母が目立つ。

#### 10号埋壺(第118図、第120図-9)

(位置) F 7グリッド。

(形状) 正位であるが、掘り形の直ぐ脇に40cm大の石1個が確認されている。あるいは石蓋埋壺であって、蓋石がズレたものであるかもしれない。

(掘り形) 直径70cmの円形を呈し、深さ20cmを計る。埋設土器は掘り形中心よりズレている。内部は黒褐色土の単一層である。

(土器) 底部欠損の深鉢。口径19cm、現存高20cmを計る。上半部は暗褐色、下半は黄褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み雲母が目立つが、磨きは丁寧である。また、内面下半は荒れている。

#### 11・12号埋壺(第119図、第120図-10、第121図-11)

(位置) D 9グリッド。

(形状) ともに正位と思われるが、12号埋壺は細片となっており、不明である。

(掘り形) 11号は直径60cmの円形を呈し、深さ30cmを計る。12号は直径30cmの円形で、深さ25cmを計る。断面から見るかぎり、12号が11号を切っていることは明らかであるが、12号は11号の土器を破損しないように、掘り込みを横に広げずに途中で止めたと思われる。内部はともに暗褐色粘質土を主体とし、11号の土器内にはカーボンが含まれ、12号には含まれていない。

(土器) 第120図-10 11号埋壺 底部欠損の深鉢。口径41cm、推定底径10cm、器高33cmを計る。赤褐色を呈し、

焼成は良好。砂粒を含むが、磨きは丁寧である。第121図-11 12号埋裏 深鉢胴部。口縁および底部を欠損している。現存部最大径17cm、現存高15cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、内外面とも荒れている。

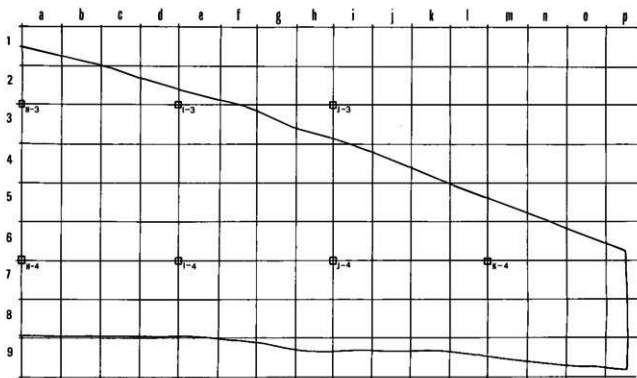
#### 4. 土器捨て場と出土土器

本遺跡では出土遺物の総量がプラスチック箱に約500箱という膨大な量となった。確認された遺構の割りに遺物、とくに土器が多かったのも土器捨て場から多量に出土したためである。遺跡内に設定したグリッドでは、H 2～6、I 2～6、J 3～6、K 3～6グリッドがこれに当たる。このうち、調査区域内の溝より下の各グリッド内には1m×1mの小グリッド(第122図)を設定し、調査を行なった。溝より上の部分については、当初土器捨て場の広がりが予想できなかつたため小グリッドは設定していない。

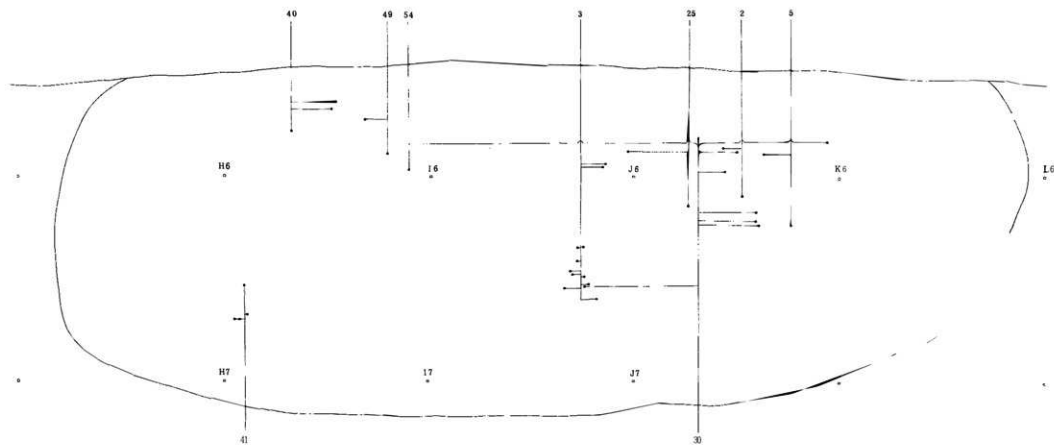
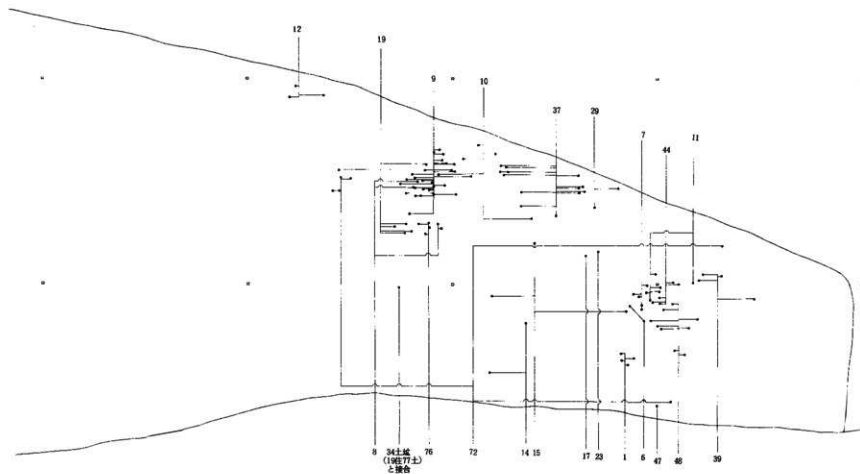
全体図をはじめ、微細図などに土器捨て場の境界ラインが引かれているが、これは特に遺物の集中の度合いが高い部分を示したものであって、言うまでもなく調査区全域から「グリッド出土遺物」として土器片などは多く出土している。

土器捨て場境界ライン内からは満遍なく土器片が出土しているが、土器片が複数接合し、ほぼ完形になったものも何点か存在する(第123図、124図)。接合資料は層位的にはほぼ同レベルで、かつ大破片を中心にその付近に飛び散っているものが多いが、なかには8m以上離れた破片と接合した例もみられる。また、調査区域内の溝によって上下に分けられているが、溝の上と下での接合例も、小破片ではあるが認められる。もちろん同一の土器捨て場内の破片であることから、当然接合はあってもおかしくないのであり、完形になった資料よりもはるかに距離を置いて接合した例がある。ただ、本遺跡は土器捨て場の方向や住居と土器捨て場の位置関係などから、三口神平遺跡の東側の集落に続くことが予想されているが、三口神平遺跡の土器捨て場との接合関係までは調べることができなかった。

さて、接合関係では2点の接合から、最も多いものでは26点の接合がみられる。多くの接合資料は直径1m以内に破片が飛び散った状態である。これは破損した土器を捨てる際、遠距離から放り投げるといふより、その場

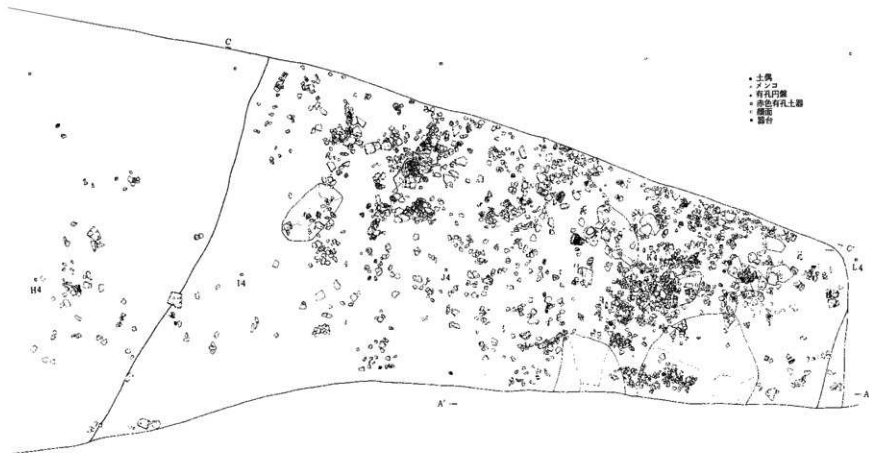


第122図 土器捨て場小グリッド設定図

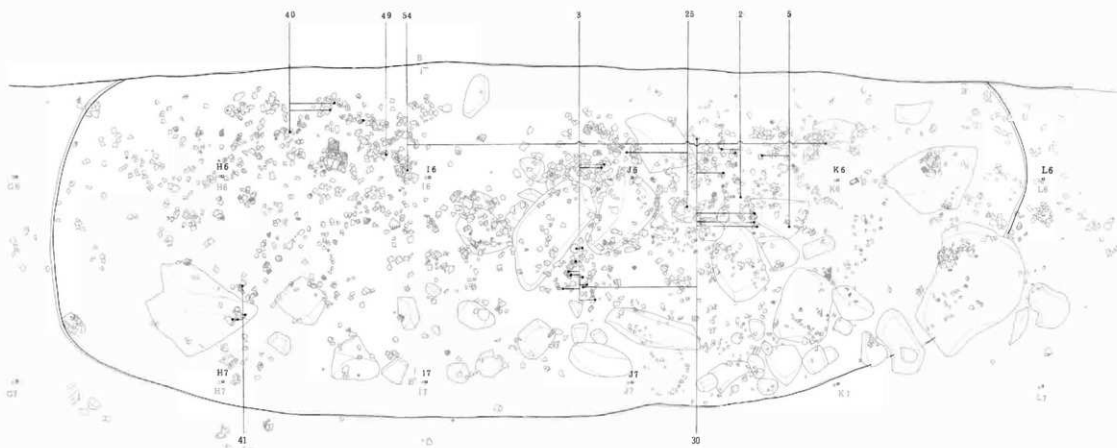
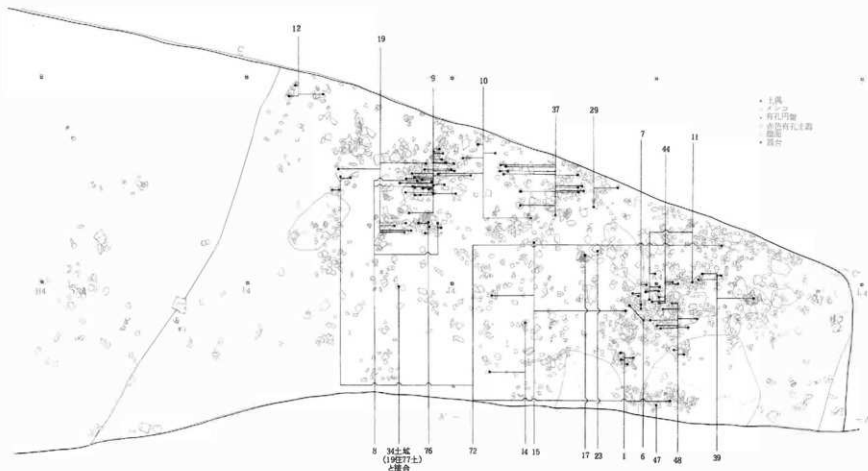


第123図 土器捨て場遺物接合図

- 土塊
- 土片
- 有孔円筒
- 無孔有孔土器
- 器片

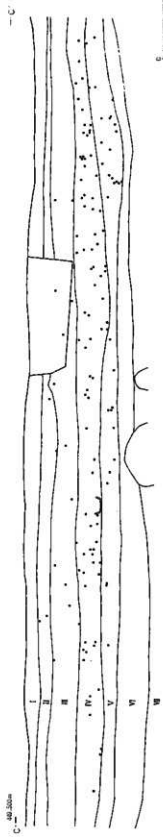
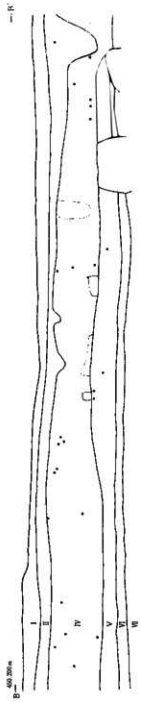
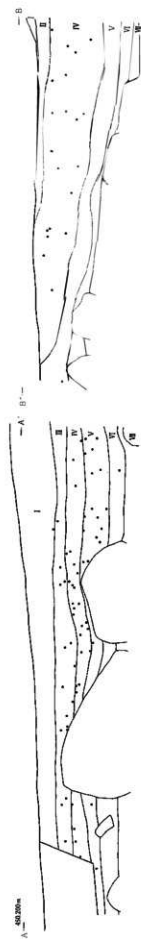


第124図 土器捨て場遺物出土状況



第123図 土器捨て場遺物検合図

第124図 土器捨て場遺物出土状況



I 黄土  
 II 砂質粘土  
 III 粘質砂土  
 IV 粘質砂土  
 V 粘質砂土  
 VI 粘質砂土

第125図 土器捨て場セクション図

所まで行き、そこで捨てた状態を示すものと言えよう。なお、第123図の接合関係に示された番号は、第126図～129図の実測図番号に対応するものである。また、少数ではあるが、他の遺構との接合例も確認されている。

遺物は、そのほとんどが土器の小破片であるが、後述するように土偶・土製円盤などの土製品、有孔罅付土器などの特殊土器の出土も他の遺構、グリッドより多いという事実がある。打製石斧・磨製石斧などの石器については、とくに土器捨て場から多く出土するという傾向はみられないようである。

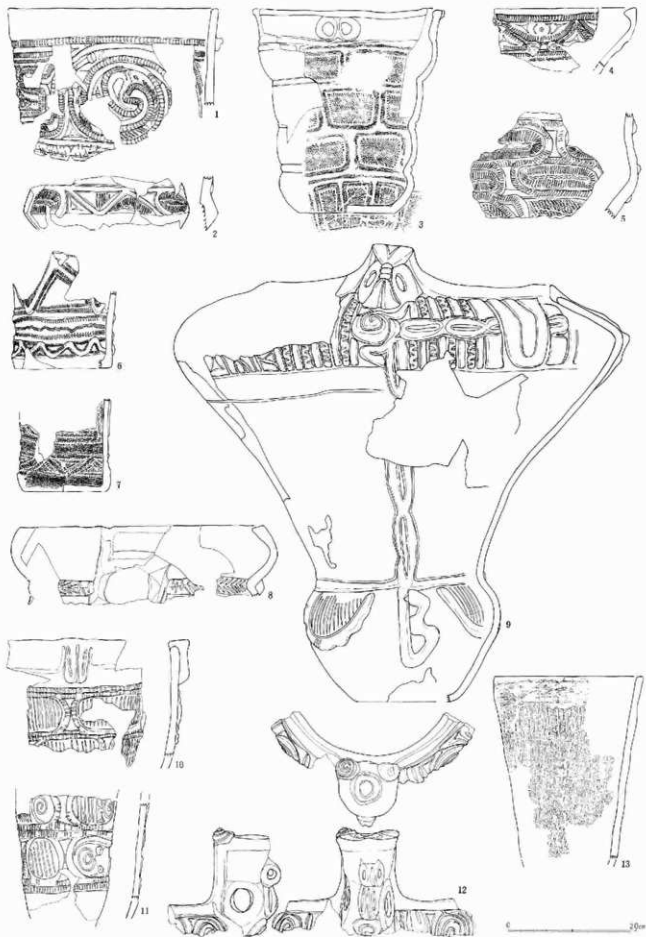
土器捨て場の遺物包含層については第125図に示した。土器捨て場内の土層は大きく7層に分けられる。上層から、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：暗褐色土、Ⅳ層：暗褐色土、Ⅴ層：暗褐色土、Ⅵ層：暗黒褐色土、Ⅶ層：暗黄褐色土となっている。このうち、遺物が集中するⅢ層～Ⅴ層が土器捨て場の遺物包含層ということになる。土器捨て場では四ヶ所で断面図を作成した。すべての場所で土層が7層に分かれる訳ではないが、Ⅲ層～Ⅴ層に遺物が集中することは間違いないものと思われる。Ⅲ層～Ⅴ層の厚さは薄いところでも60cm、厚いところで110cmを計る。とくにⅣ層中から遺物が多く出土しているようである。また、Ⅳ層中には井戸尻～曾利Ⅰ・Ⅱ期の土器が多く、Ⅴ層ではそれらに加え藤内、新道期の土器がみられるようである。なお、Ⅲ層～Ⅴ層内の所々に焼土の集中する部分を確認されている。

#### 土器捨て場出土土器（第126図～第139図）

土器捨て場から出土した土器は膨大な量であるため、すべての資料を載せることは不可能である。ここでは接合によって完成にちかくなったものや大破片など復原実測可能なものを第126図～第129図に示し、概要を説明することとする。また、多くの小破片のうち、表面の荒れの少ない有文の土器片を選択し、第130図～第139図に拓本で示した。なお、以下の文中および第4表中の出土位置の表示は、小グリッドで取り上げてあるものについては小文字アルファベットを用いることにする。それ以外は通常のクリッド表示とする。また、第5表以降についても同様の表示を行っている。

第126図-1 深鉢。4点が接合した。推定口径33cm、現存高24cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨き・施文とも丁寧に行なわれている。 — 2 深鉢底部屈折部。2点接合。屈折部径30.5cm。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、内面が荒れている。 — 3 深鉢。ほぼ完形にちかく、11点が接合した。口縁から底部まで5段のつくりとなっている。推定口径30cm、底径15cm、器高31.5cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、雲母が目立つ。内外面の磨き、施文とも非常に丁寧に行なわれている。 — 4 深鉢口縁部。m7出土。玉抱き三叉文がみられる。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨きも丁寧である。 — 5 深鉢胴部屈曲部。2点接合。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む。 — 6 深鉢胴部下半。5点接合。推定底径15cm、現存高18.5cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、内面の磨き、施文とも丁寧に行なわれている。 — 7 深鉢胴下半。2点接合。底径13cm、現存高14cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、長石・石英が目立つ。 — 8 深鉢口縁部。4点接合。推定口径38cm、最大径42cmを計る。口縁に把手もしくは突起が付いたと思われるが現存しない。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、雲母が目立つ。 — 9 超大型のキャバー形深鉢。大小の破片26点が接合した。口径45cm、底径15cm、器高71cm、最大径72cmを計る。キャバー形を呈する深鉢でこれほどの大きさのものは希である。最大径に対して底径が非常に小さく、不安定な感じを受ける。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が含まれ、とくに雲母が目立つ。磨き・施文は丁寧に行なわれている。 — 10・11 同一個体であり、10は4点、11は6点の接合である。器高は40cm以上と推定される。赤褐色を呈し、一部にススが付着している。胎土に砂粒が多く、内外面とも荒れている。 — 12 深鉢口縁把手部。3点接合。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含み、雲母が目立つ。磨き、施文は良好である。 — 13 K4グリッド内出土。深鉢。摺糸文を地文とする。推定口径23cm、現存高28cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を含み、雲母が目立つ。磨きは丁寧である。第127図-14 深鉢。底部を欠損している。2点接合。口径15cm、現存高29cmを計る。黄褐色を呈するが、一部にススが付着している。胎土は精選され、焼成は良好である。磨き・施文ともに丁寧に行なわれている。 — 15 キャバー形深鉢の上半部。突

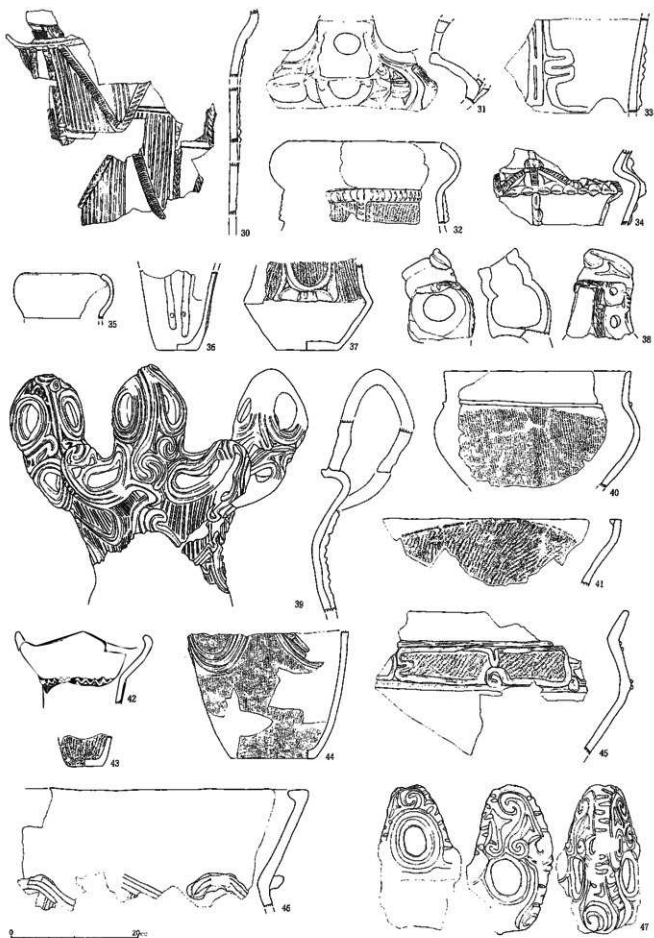




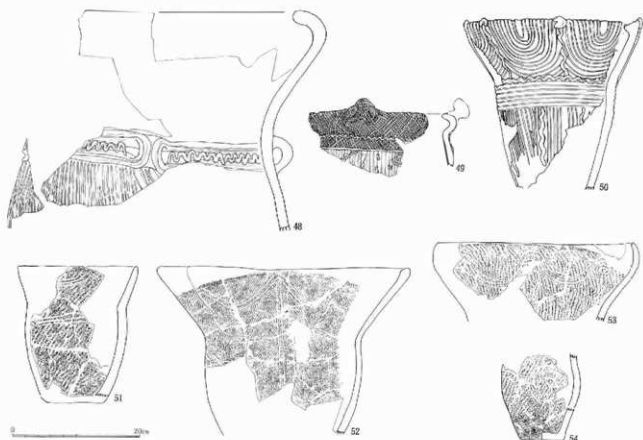
第126図 土器捨て場出土土器その1



第127図 土器捨て場出土土器その2



第128図 土器捨て場出土土器その3



第129図 土器捨て場出土土器その4

起が1単位残存している。3点接合。推定口径19cm、最大径33cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、雲母が目立つ。—16 ㊦ 8 出土。深鉢口縁屈曲部。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、雲母が目立つ。内外面ともやや荒れている。—17 k 6 出土。深鉢。底面が剝離しているがほぼ完形である。口径20cm、推定底径9cm、現存高23.5cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨き・施文とも丁寧に行なわれている。—18 H5グリッド内出土。底部を欠損した深鉢。口縁に三本指のモチーフがみられる。口径30cm、現存高38cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に小砂粒を多く含むが、磨きは丁寧である。施文も丁寧に行なわれている。—19 深鉢胴部破片。6点接合。明褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨き・施文とも丁寧である。10号住居址破片が含まれる。—20 ㊦ 8 出土。深鉢口縁部破片。これも大型で、口径46cm、最大径59cm程度と推定される。明褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含むが、磨き・施文は丁寧である。—21 o 9 出土。深鉢口縁部。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒を多く含む、長石・石英が目立つ。磨きは丁寧である。—22 n 7 出土。深鉢口縁部。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多いが、磨きは丁寧である。—23 k 6 出土。キャリパー形深鉢の胴部以下。底径12cm、現存高28cmを計る。褐色を呈するが、内面は黒変している。これも砂粒を多く含むが、磨きは丁寧である。—24 ㊦ 5 出土。深鉢口縁部。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土も精選され、磨きも丁寧である。—25 深鉢底部。2点接合。外面赤褐色、内面黒色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨きも丁寧である。—26 J6グリッド内出土。深鉢口縁部破片。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選され、磨きも丁寧である。—27 k 8 出土。深鉢。推定口径13.5cm、底径6cm、器高23cmを計る。褐色を呈し、内面下半は黒変している。焼成は良好で、胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。磨きは丁寧である。—28 a 1 出土。深鉢胴部屈曲部。赤褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多く、内面はやや荒れている。—29 深鉢胴部下半。2点接合。底径8cm、現存高13cmを計る。黄褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。—30 深鉢胴部。5点が接合した。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒

が多く、長石・石英が目立つ。—31 i4出土。深鉢口縁部。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。磨きも丁寧である。—32 n8出土。深鉢口縁部破片。推定口径24cm、現存高12cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。内面の磨きは丁寧である。—33 l6出土。深鉢胴部。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、長石・石英が目立つ。内外面の磨きは丁寧である。—34 i4出土。深鉢胴部破片。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。磨き・施文は丁寧である。—35 j7出土。深鉢口縁部。口径12cm、現存高7cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。—36 I6グリッド内出土。深鉢底部。底径6cm、現存高12cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、磨きは丁寧である。—37 深鉢胴部下半。13点が接合した。底径9.5cm、現存高13cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。—38 g8出土。深鉢口縁把手。明褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、磨きは丁寧である。—39 大把手付深鉢。4点接合。口径23cm、最大径46cm、現存高38cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。磨き・施文とも丁寧である。—40 3点接合。鉢口縁部破片。推定口径29cm、現存高18cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。—41 4点接合。深鉢口縁部破片。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、内面は荒れている。—42 p7出土。深鉢口縁部破片で波状口縁を成す。推定口径20cm、現存高10cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。磨きは丁寧である。—43 m5出土。深鉢底部。底径5cm、現存高5cmを計る。淡褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多くやや荒れている。—44 5点接合。深鉢底部。底径13cm、現存高20cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、磨きは丁寧である。—45 I6グリッド内出土。深鉢口縁部破片。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、磨きは丁寧である。—46 I6グリッド内出土。深鉢口縁部破片。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、表面が荒れている。—47 m9出土。深鉢口縁部把手。現存高23cm。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、磨き・施文とも丁寧である。—48 9点が接合した。大型の深鉢。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。—49 2点接合。深鉢口縁部。黄褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、磨きは丁寧である。—50 I7グリッド内出土。深鉢。推定口径28cm、現存高27cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、表面がやや荒れている。—51 I5グリッド内出土。深鉢。推定口径18cm、現存高20cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、表面が荒れている。—52 I6グリッド出土。深鉢口縁部破片。推定口径40cm、現存高26cmを計る。黒褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、表面は荒れている。—53 H5グリッド内出土。深鉢口縁部。推定口径30cm、現存高12cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、内面の磨きは雑である。—54 2点接合。深鉢底部。底径6.5cm、現存高13cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、磨きは丁寧である。

第130図～第139図については第4表にまとめて記すが、破片が接合したものがあり、それについて以下に述べることとする。

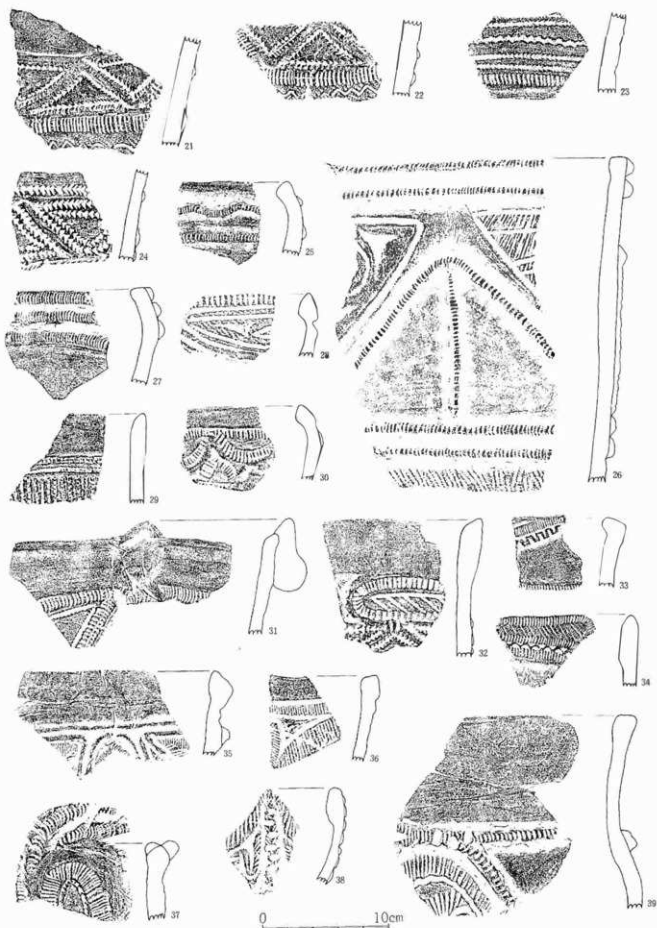
第133図～72 5点接合。深鉢胴部破片。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。磨き・施文とも丁寧である。第134図～76 4点接合。深鉢胴部破片。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。磨き・施文とも丁寧である。

上記以外にも、小破片2点が接合した例があるが、点数が多いため個々の説明は省略する。なお、g7小グリッド内出土の深鉢口縁部破片と34号土城内出土破片とが接合していることを記しておく。他の遺構との接合例は、この他に、10号住居址との接合のみみられるだけである。

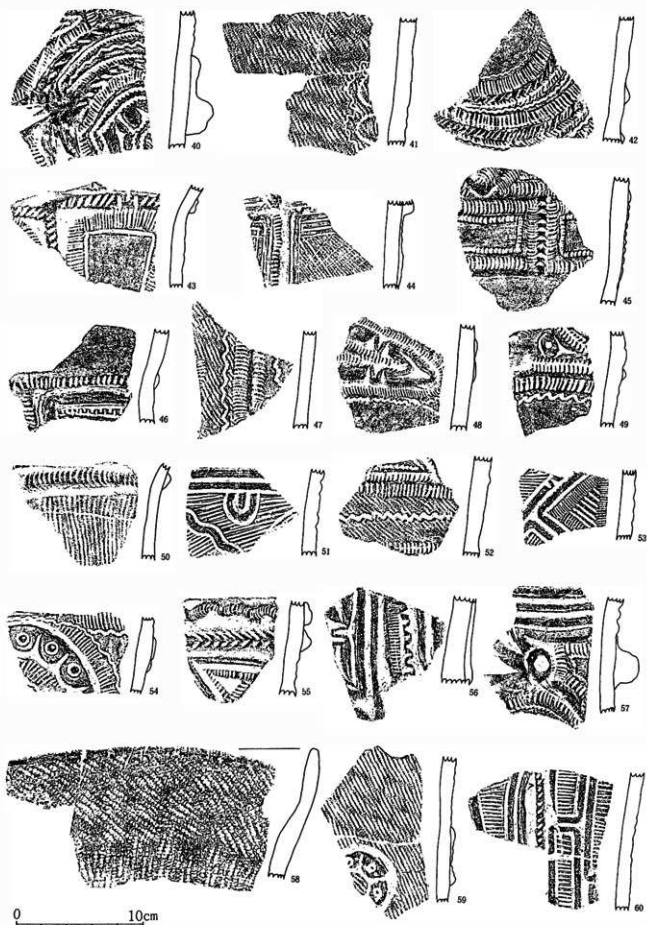
また、土器捨て場から藤内、井戸尻、曾利Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器が多く出土しているが、それ以外に早期末～前期初頭の繊維土器、中期初頭・終末などが僅かながらも出土している。繊維土器については、他の遺構、グリッド出土のものとおわせ、まとめて後述することとし、それ以外は拓本に示してある。



第130図 土器捨て場出土土器拓本その1



第131図 土器捨て場出土土器拓本その2

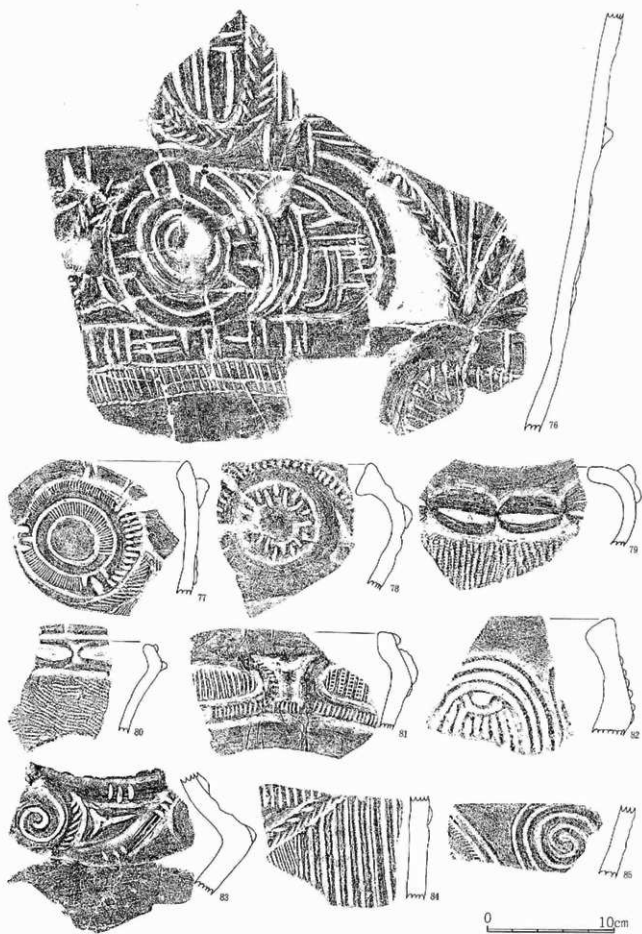


第132図 土器捨て場出土土器拓本その3

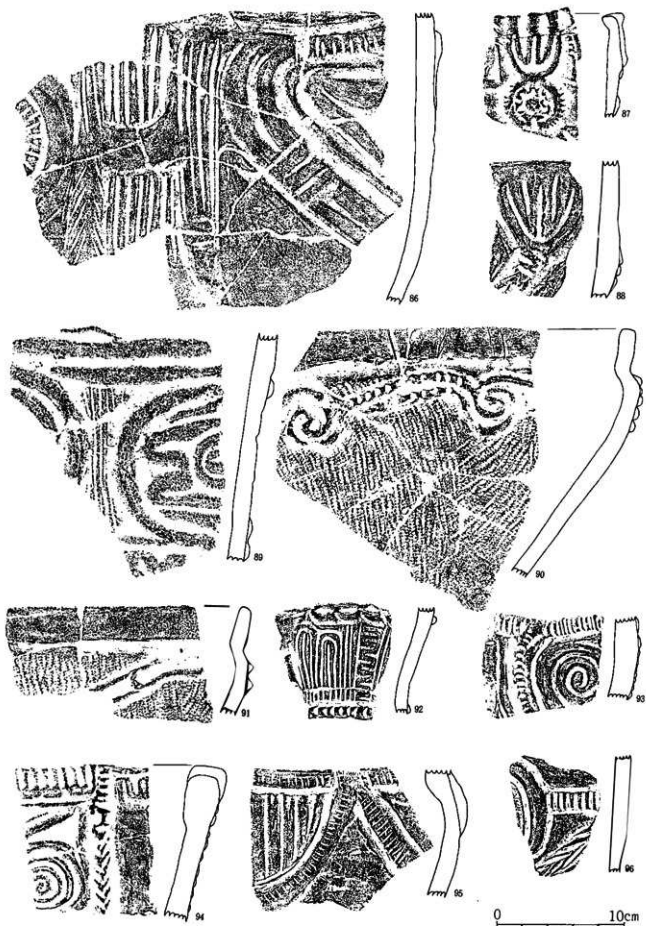




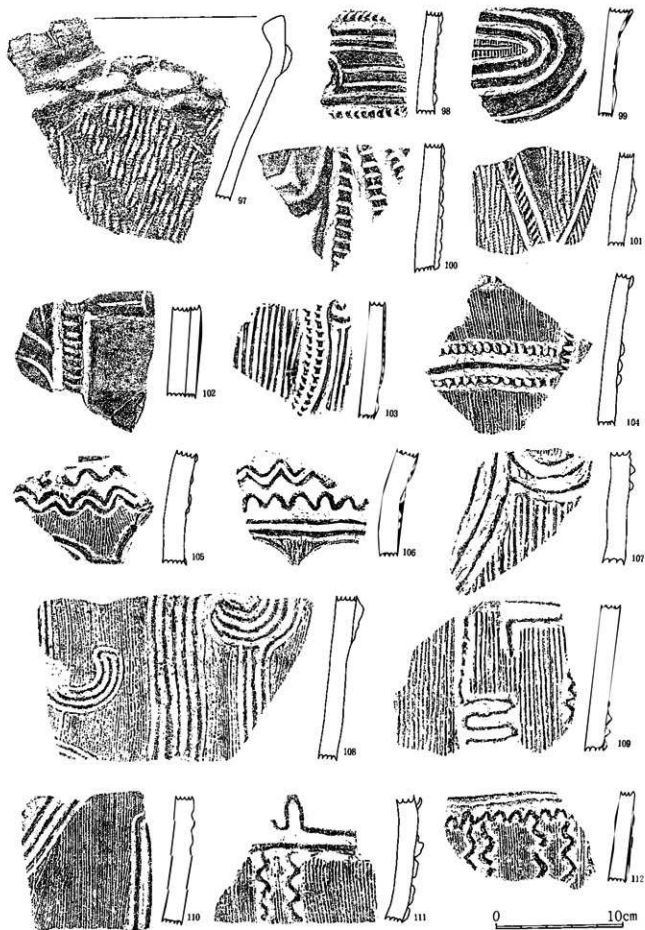
第133図 土器捨て場出土土器拓本その4



第134図 土器捨て場出土土器拓本その5



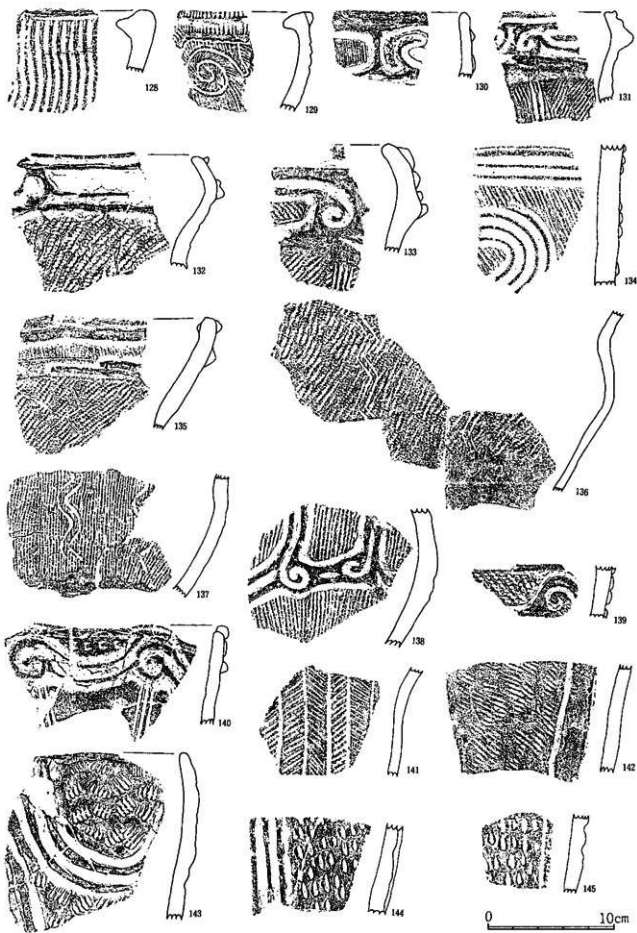
第135図 土器捨て場出土土器拓本その6



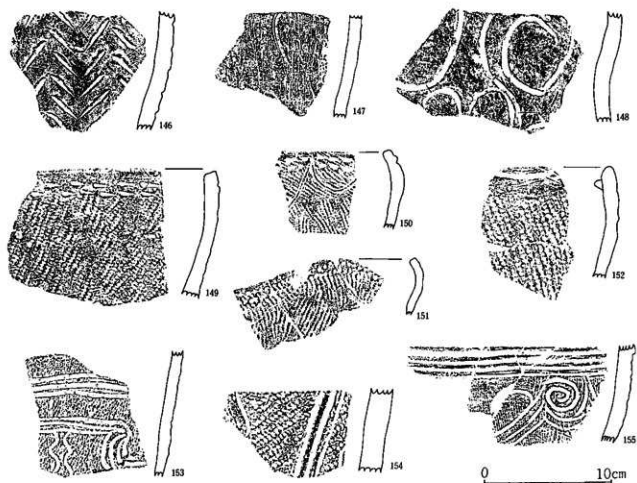
第136図 土器捨て場出土土器拓本その7



第137図 土器捨て場出土土器拓本その8



第138図 土器捨て場出土土器拓本その9



第139図 土器捨て場出土土器拓本その10

第4表 土器捨て場出土土器観察表

番号	出土位置	色調	胎土	焼成	番号	出土位置	色調	胎土	焼成
1	I-5	茶褐色	砂粒含む	良	15	ℓ-7	黄褐色	砂粒含む	〃
2	K-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	〃	16	L-6	褐色	砂粒含む	〃
3	G-6	褐色	砂粒、雲母含む	〃	17	j-6	黄褐色	砂粒多く含む	〃
4	i-6	褐色	砂粒、雲母含む	〃	18	J-6	褐色	砂粒、雲母含む	〃
5	H-5	暗褐色	雲母含む	〃	19	m-5	茶褐色	砂粒、雲母含む	〃
6	J-6	暗褐色	砂粒、雲母含む	〃	20	m-8	茶褐色	砂粒、雲母含む	〃
7	J-5	褐色	砂粒、雲母含む	〃	21	m-5	褐色	砂粒、金雲母含む	〃
8	J-6	褐色	砂粒、雲母含む	〃	22	L-5	茶褐色	砂粒、金雲母含む	〃
9		茶褐色	砂粒、雲母含む	〃	23	k-6	茶褐色	砂粒、金雲母含む	〃
10	G-5	茶褐色	砂粒、雲母含む	〃	24	I-6	暗褐色	砂粒含む	〃
11	H-5	茶褐色	砂粒含む	〃	25	G-6	褐色	砂粒含む	〃
12	I-5	褐色	砂粒、雲母含む	〃	26	J-6	褐色	砂粒含む	〃
13	J-6	褐色	砂粒多く含む	〃	27	g-4	褐色	砂粒含む	良
14	H-5	黄褐色	砂粒含む	〃	28	ℓ-8	暗褐色	砂粒、雲母多く含む	〃

番号	出土位置	色調	胎 土	焼成	番号	出土位置	色調	胎 土	焼成
29	n-7	茶褐色	小石、砂粒多く含む	"	71		茶褐色	砂粒、雲母含む	"
30	H-6	褐色	砂粒含む	"	72	e-4	褐色	砂粒含む	"
31	k-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	73	K-5	褐色	砂粒、雲母含む	"
32	H-5	茶褐色	砂粒含む	"	74	J-5	黄褐色	砂粒、雲母多く含む	"
33	H-6	褐色	砂粒少々含む	"	75	J-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
34	G-6	黄褐色	砂粒含む	"	76	h-5	暗褐色	砂粒多く含む、雲母あり	"
35	H-7	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	77	K-6	褐色	砂粒、雲母含む	"
36	J-5	茶褐色	砂粒含む、雲母あり	"	78	g-5	黄褐色	砂粒含む、雲母多く含む	"
37	I-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	79	K-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
38	G-6	黒褐色	砂粒、雲母含む	"	80	l-6	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
39	J-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	81	I-6	褐色	砂粒、雲母含む	"
40	l-5	褐色	砂粒、金雲母含む	"	82	I-5	赤褐色	砂粒多く含む	"
41	l-7・m-5	褐色	砂粒、雲母含む	"	83	m-7	褐色	砂粒、雲母含む	"
42	H-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	84	I-5	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
43	l-6	褐色	砂粒含む	"	85	J-5	暗褐色	砂粒、雲母多く含む	"
44	H-6	褐色	砂粒含む、雲母少々あり	"	86	f-4	褐色	砂粒、雲母多く含む	"
45	K-7	褐色	砂粒、雲母含む	"	87	K-8	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
46	k-6	淡褐色	砂粒、雲母含む	"	88	j-7	赤褐色	砂粒含む	"
47	O-9	褐色	砂粒、雲母含む	"	89	h-5	赤褐色	砂粒、金雲母含む	"
48	J-6	茶褐色	砂粒含む	"	90	m-8	茶褐色	砂粒多く含む	"
49	n-6	茶褐色	砂粒含む	"	91	l-7	暗褐色	砂粒含む	"
50	m-7	褐色	砂粒、雲母含む	"	92	J-3・J-6	褐色	砂粒、雲母含む	"
51	J-6	褐色	砂粒含む	"	93	J-7	褐色	砂粒含む	"
53	l-8	茶褐色	砂粒含む	"	94	J-6	赤褐色	雲母多く含む	"
54	K-6	褐色	砂粒含む、雲母あり	"	95	J-7	褐色	砂粒、金雲母含む	"
55	J-5	暗褐色	砂粒含む	"	96	j-7	褐色	砂粒、雲母含む	"
56	J-5	茶褐色	砂粒含む	"	97	J-5	褐色	砂粒含む	"
57	I-6	褐色	砂粒含む、金雲母少々あり	"	98	j-5	灰褐色	砂粒含む	"
58	I-5	褐色	砂粒多く含む	"	99	J-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
59	J-6	褐色	砂粒、雲母含む	"	100	n-8	褐色	砂粒、雲母含む	"
60	I-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	101	H-5	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
62		褐色	砂粒多く含む	"	102	i-6	赤褐色	砂粒含む	"
63	J-5	褐色	砂粒、雲母含む	"	103	n-6	褐色	砂粒、雲母含む	"
64		灰褐色	砂粒含む	"	104	l-8	茶褐色	砂粒、金雲母多く含む	"
65	I-6	茶褐色	砂粒含む、金雲母少々含む	"	105	l-7	褐色	砂粒、雲母含む	"
66	J-6	暗褐色	砂粒含む、金雲母多く含む	"	106	f-5	褐色	砂粒、金雲母含む	"
67	l-8	褐色	砂粒含む	"	107	j-8	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
68	H-6	褐色	砂粒含む	"	108	P-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"
69	I-5	褐色	砂粒含む	"	109	G-6	茶褐色	砂粒多く含む、雲母あり	"
70	m-6	暗褐色	砂粒、雲母含む	"	110	I-5	淡褐色	砂粒多く含む	"



番号	出土位置	色調	胎 土	焼成	番号	出土位置	色調	胎 土	焼成
111	I-7	褐色	砂粒含む	"	134	I-5	淡褐色	砂粒多く含む	"
112	H-6	暗褐色	砂粒多く含む	"	135	G-6	茶褐色	砂粒含む	"
113	G-6	茶褐色	砂粒多く含む	"	136	H-6	褐色	砂粒多く含む	"
114	m-7	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	137	G-6	褐色	砂粒含む、雲母あり	"
115	j-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	138	I-6	暗褐色	砂粒多く含む	"
116	H-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	139	G-5	褐色	砂粒含む	"
117	H-6	褐色	砂粒含む、一部赤色あり	"	140	I-5	赤褐色	砂粒含む	"
118	k-6	褐色	砂粒、雲母多く含む	"	141	K-6	茶褐色	砂粒含む	"
119	l-8	茶褐色	砂粒多く含む、雲母あり	"	142	I-6	灰褐色	砂粒含む	"
120	H-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	143	I-5	褐色	砂粒含む	"
121	m-7	茶褐色	砂粒多く含む	"	144	H-5	暗褐色	砂粒含む	"
122	H-6	茶褐色	砂粒含む	"	145	H-5	灰褐色	砂粒含む	"
123	I-5	褐色	砂粒、金雲母あり	"	146	K-5	暗褐色	砂粒、雲母多く含む	"
124	I-7	黄褐色	砂粒含む	"	147	G-5	淡褐色	砂粒含む	"
125	H-5	褐色	砂粒含む	"	148	I-4	淡褐色	砂粒含む	"
126	J-6	赤褐色	砂粒含む	"	149	H-6	茶褐色	砂粒多く含む	"
127	G-6	灰褐色	砂粒含む、雲母あり	"	150	I-6	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
128	l-6	赤褐色	砂粒多く含む、雲母少々あり	"	151	K-3	茶褐色	砂粒ふくむ	"
129	l-8	褐色	砂粒、雲母含む	"	152	i-4	茶褐色	砂粒含む	"
130	I-7	褐色	砂粒含む	"	153	n-8	暗褐色	砂粒含む	"
131	I-6	褐色	砂粒含む	"	154	H-6	褐色	砂粒含む	"
132	H-5	茶褐色	砂粒含む	"	155		灰褐色	砂粒、雲母含む	"
133	I-5	暗褐色	砂粒含む、雲母多く含む	"					"

## 5 土製品と特殊土器

本遺跡では、100点を越える土偶をはじめ、土製円盤などの土製品、有孔罅付土器・器台などの特殊土器が多く出土している。

- 以下に
- 土偶（第140図～第151図）
  - 顔面把手（第152図～第154図）
  - 獣面把手（第155図）
  - 土製円盤（第156図～第160図）
  - 有孔罅付土器（第161図～第163図）
  - 器台（第164図）
  - ミニチュア土器（第165図）
  - その他の土製品（第166図～第167図）の順序で概要を述べることにする。

### a 土偶

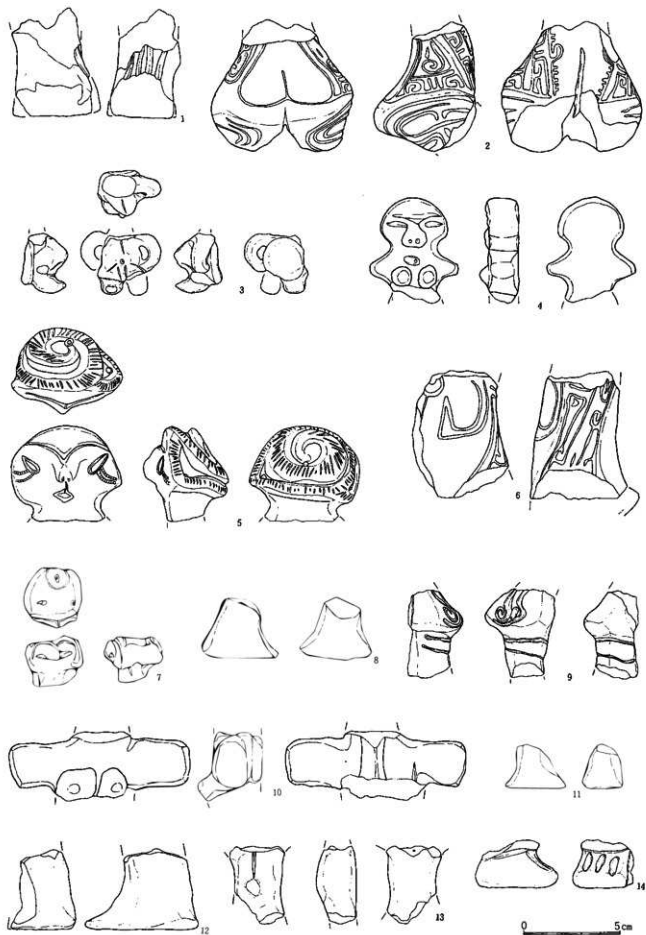
土偶は122点が出土している。この数値は確実に土偶と思われるものだけを上げたものであり、小破片となったものや、手・足の一部分については土偶と判断することができないものもあるため、実数はさらにこれを上まわると考えられる。



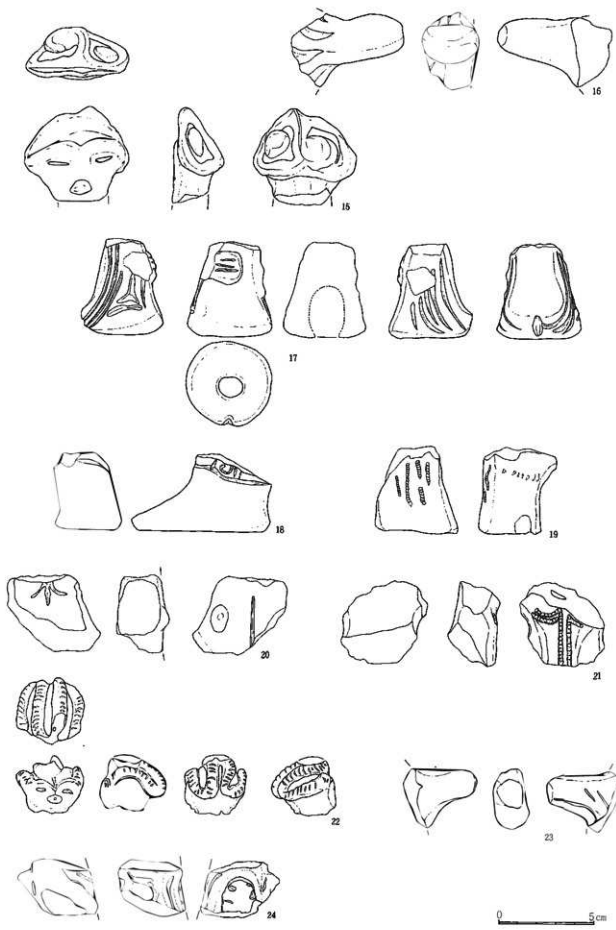
第140 土偶・顔面・獣面把手分布図

第140図には本遺跡での土偶・顔面・獣面把手の出土位置を示した。なお、この図には住居址、土坑など遺構から出土したものは含まれていない（以下156、161、183図も同じ）。図から明らかなように、これらの特殊遺物は土器捨て場及び周辺からの出土が圧倒的に多い。後述する土製円盤や有孔銅付土器などの出土も考え合わせれば、「土器捨て場」という名称もあわせ、単なる捨て場といってもよいものか、という疑問が生じてくる。

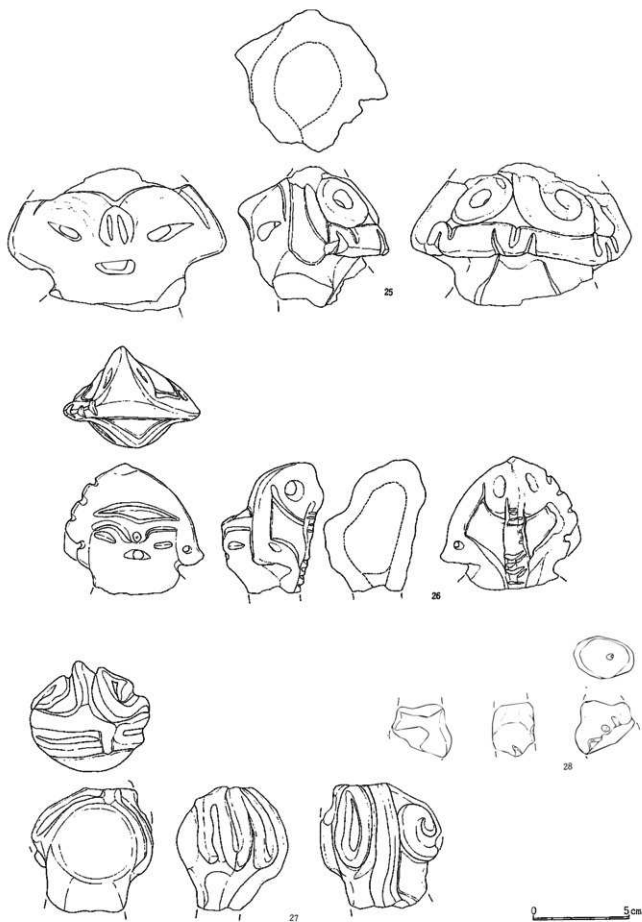
さて、122点の土偶に完形品はないが、接合資料が2例確認された。32は右足であるが、三口神平遺跡の二ヶ所の土器捨て場のうち、西側の土器捨て場から出土した左足と接合している。これは別々の集落の、それぞれの土器捨て場から出土した資料の接合を意味するものであり、極めて重要な例であろう。59はC8グリッドの右半身とし6グリッドの左半身が接合したものである。土偶の破損部位についてみると、製作段階での分割塊の接合面で割れている例が多いが、本資料の接合面は分割塊の割れ口ではなく、明らかに一つの粘土塊が割れたものである。すなわち、割れにくい部分が割れ、30m以上離れた場所から出土していることから、意図的な破壊行為お



第141図 土偶その1



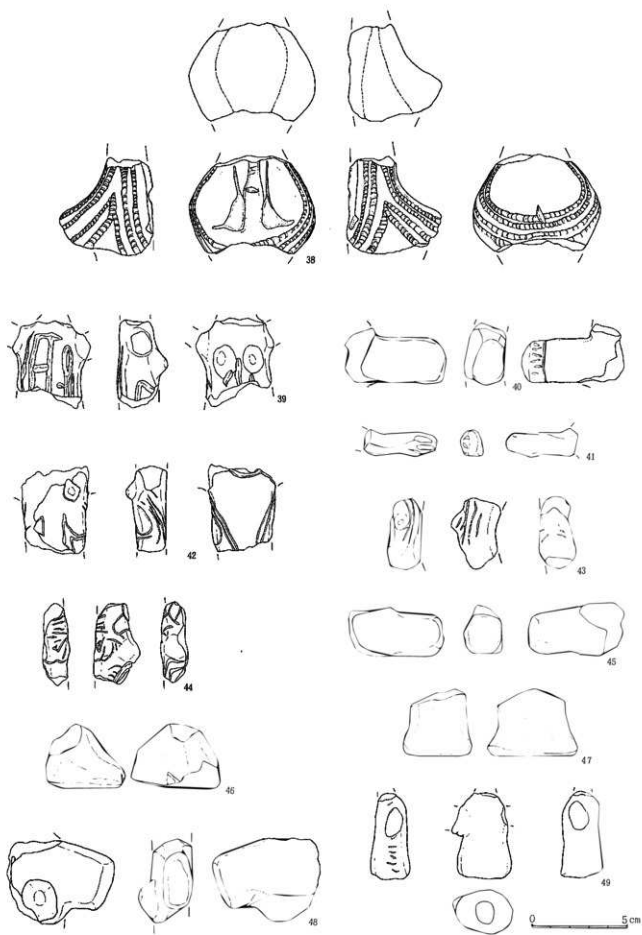
第142図 土偶その2



第143図 土偶その3



第144図 土偶その4

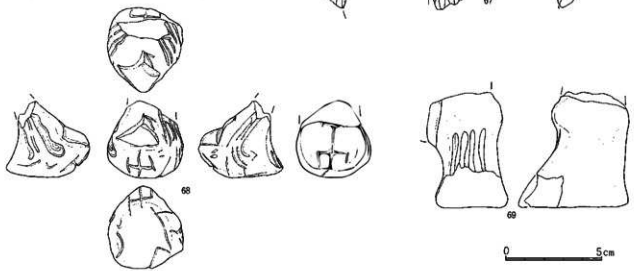
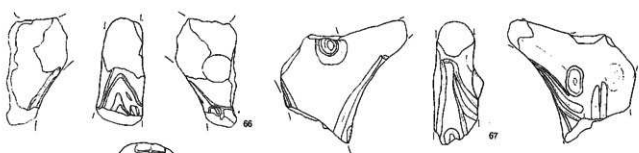
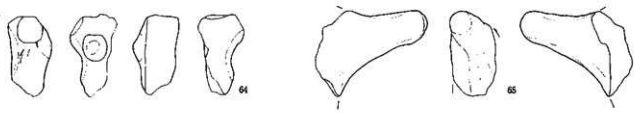
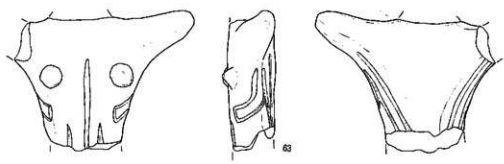
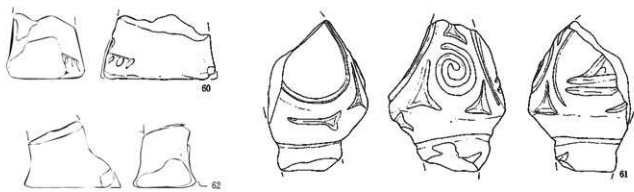


第145図 土偶その5



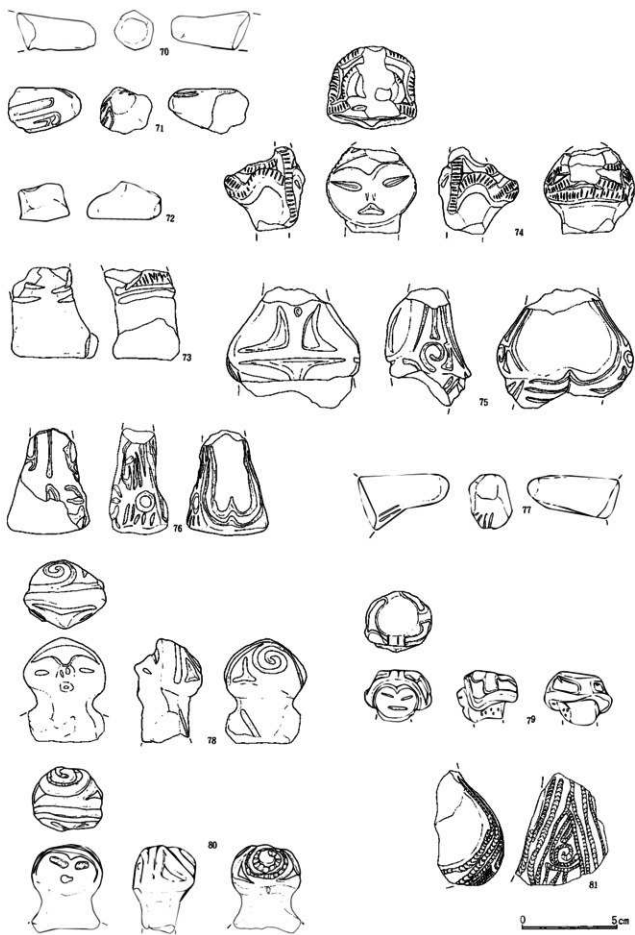
第146図 土偶その6



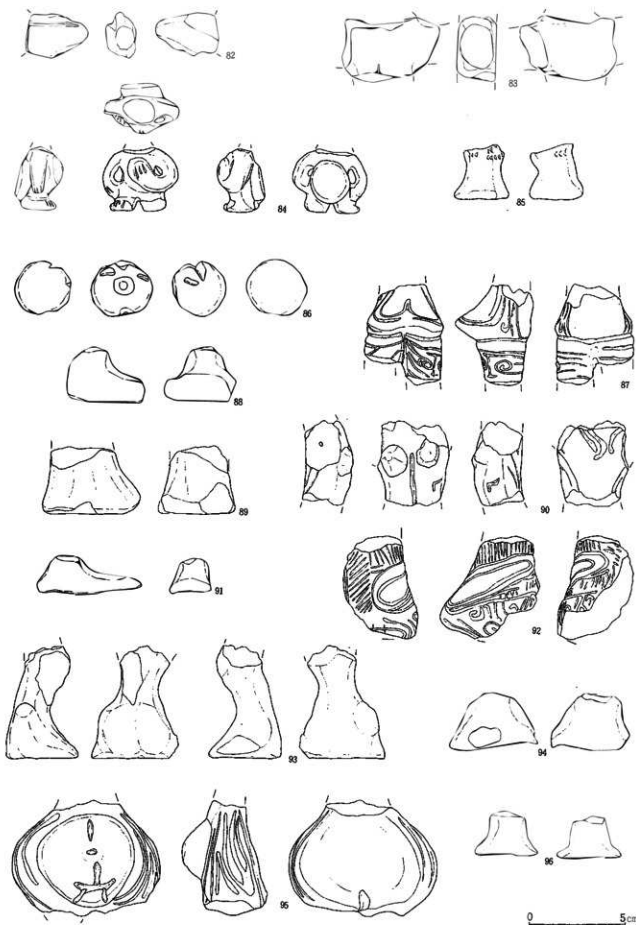


0 5cm

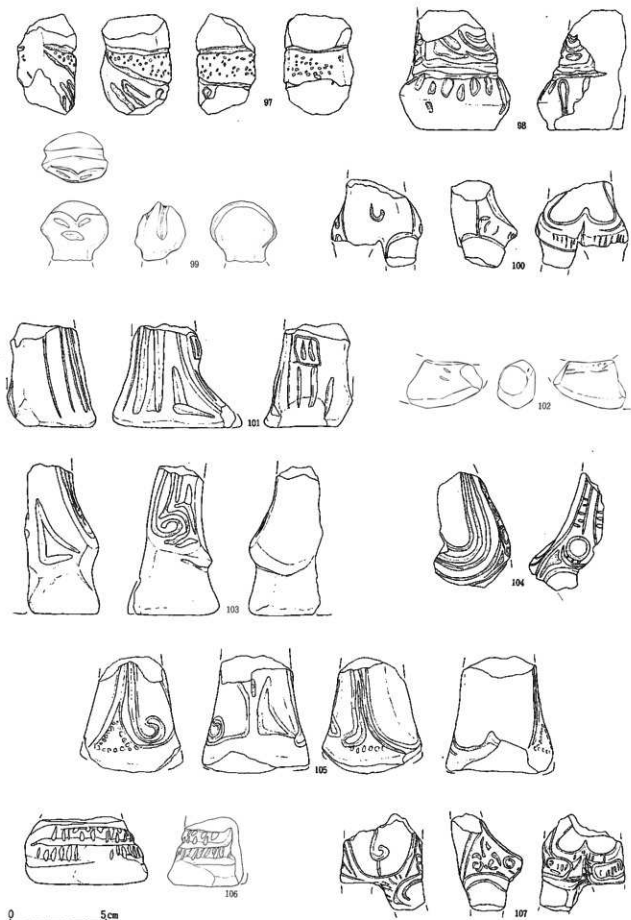
第147図 土偶その7



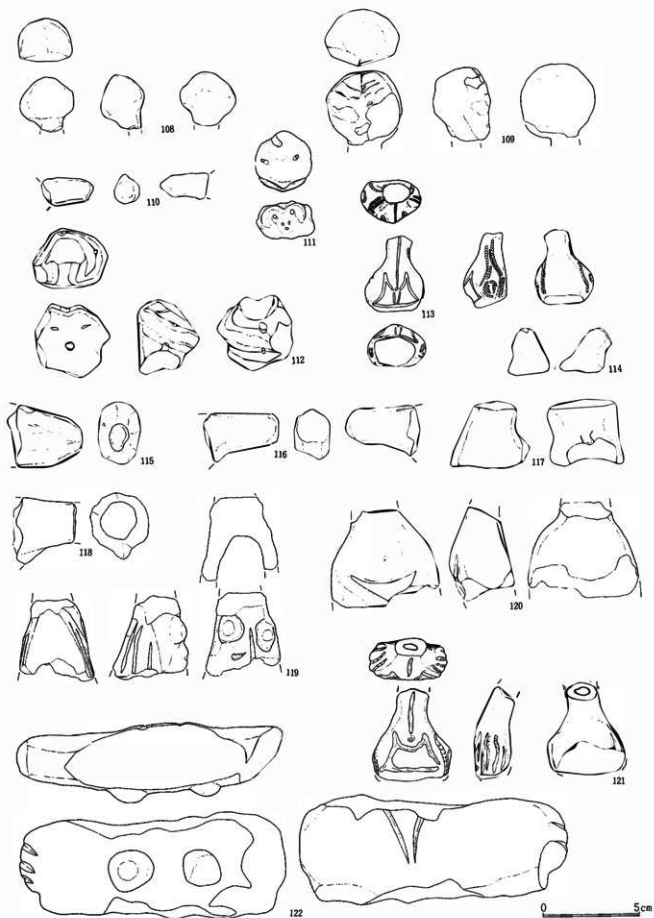
第148図 土偶その8



第149図 土偶その9



第150図 土偶その10



第151図 土偶その11

よび廃棄行為が予想されるのである。接合例は以上の二例だけであるが、三口神平遺跡との接合関係の調査は不十分であり、さらに調査する必要がある。

本遺跡から出土した土偶破片の部位のうちで、最も多いのは足部で36点で、以下、胴部24点、頭部20点、手部16点、胴部の左右半身15点、頭部のみ欠損した体部8点、胸部2点、頭から胸部にかけての上半身1点となっている。頭部のみ欠損した体部という資料はすべて小型であり、手・足が最初から表現されていないものも何点か存在する。

これらを含めたもののうち、17、49、68、76、105、113、119、121などが円錐形土偶と呼ばれるもので、17、49、119は中空となっている。土偶の製作方法では粘土塊で中心部を作り、それらを組み合わせて1個の土偶に造り上げるといふ、分割塊製作法が明らかにされているが、本遺跡出土品中にも割れ面に粘土塊がみえているものが多く確認されている。また、95は、図示していないが、左足の付け根部分にえぐれたように深さ1cm程の穴があいている。右足にはこのような穴はみられないが、これは組み合わせ式の土偶であると考えられる。59も同様な資料である。手部はほとんどが破片で出土しており、肩とはほぼ水平に、真っ直ぐ伸ばした形のものが多い。円錐形土偶の49が両腕を下げ、また、小型でリアルな作りの3が両腕を腰に、84が右手を腰に、左手を胸に当ててい

第5表 土 偶 観 察 表

番号	出土位置	部位	内部	木心痕	色調	胎 土	焼成	その他	幅 (cm)	高 (cm)	厚 (cm)
1	3住F-2	右 足	中 実	無	褐 色	精選されている	良好		3.6	5.7	4.1
2	3 住	胴	中 実	無	暗 褐 色	精選されている	〃	白色粒子多く含む	7.3	6.8	5.3
3	4住E-3	胴	中 実	無	褐 色	精選されている	〃	頭、右手、左足欠損	3.3	3.1	2.4
4	4 住	上半身	中 実	無	褐 色	精選されている	〃		4.6	5.5	2.0
5	4 住	顔	中 実	無	褐 色	精選されている	〃		5.8	4.9	4.5
6	6 住	胴	中 実	無	褐 色	精選されている	〃		5.0	6.7	5.0
7	9 住	顔	中 実	有	褐 色	砂粒、雲母含む	〃		2.9	2.6	3.0
8	9 住	右 足	中 実	有	淡 褐 色	砂粒含む	〃		3.8	3.3	4.0
9	11 住	胴	中 実	無	暗 褐 色	精選されている	〃		2.8	4.6	3.6
10	10 住	腕、胸部	中 実	無	褐 色	精選されている	〃		9.4	3.6	3.4
11	10 住	右 足	中 実	無	暗 褐 色	砂粒、雲母含む	〃		2.1	2.3	3.1
12	10 住	左 足	中 実	無	褐 色	精選されている	〃		3.4	4.	5.9
13	10 住	胴	中 実	有	褐 色	精選されている	〃		2.9	4.1	2.1
14	10 住	右 足	中 実	無	褐 色	精選されている	〃		3.1	2.5	4.2
15	10 住	顔	中 実	無	暗 褐 色	精選されている	〃	長石多く含む	5.4	5.0	2.6
16	10 住	右 手	中 実	無	淡 褐 色	砂粒、雲母含む	〃		2.9	4.0	5.9
17	13 住	胴	中 空	無	褐 色	精選されている	〃		4.4	4.9	4.3
18	17住、E-10	左 足	中 実	無	暗 褐 色	精選されている	〃		3.6	4.0	7.3
19	17 住	右 足	中 実	無	褐 一部淡褐色	砂粒含む	〃		4.0	4.6	4.3
20	9・10土坑	胸 部	中 実	無	暗 褐 色	精選されている	〃		4.9	4.1	2.7
21	h-4	胴	中 実	有	褐 色	精選されている	〃		4.4	4.4	2.6
22	ドキステバ	顔	中 実	有	褐 色	砂粒含む	〃		3.5	3.1	3.4
23	i-4	左 手	中 実	無	暗 褐 色	砂粒、雲母含む	〃		1.9	3.2	3.9
24	ドキステバ	胴	中 実	有	褐 色	精選されている	〃		4.2	3.0	3.5
25	J-6	顔	中 空	無	褐 色	精選されている	〃		11.4	7.4	7.9

番号	出土位置	部位	内部	木心痕	色調	胎 土	焼成	その他	幅 (cm)	高 (cm)	厚 (cm)
26	E-2	顔	中空	無	暗 褐色	精選されている	良好		7.2	6.9	5.3
27	ドキステバ	頭 部	中空	無	暗 褐色	精選されている	〃	粒子粗い	6.2	6.6	5.8
28	ドキステバe-3	腹 部	中空	有	褐 色	精選されている	〃		3.1	2.8	2.2
29	ドキステバj-9	頭 部	中空	有	暗 褐色	精選されている	〃	白色粒子(大)多く含む	9.6	5.7	6.4
30	ドキステバj-5	胸	中空	無	褐 色	精選されている	〃		5.3	5.2	3.6
31	ドキステバe-4	尻	中空	無	褐 色	精選されている	〃		4.5	5.3	5.1
32	ドキステバk-6	右 足	中空	無			〃	左足と接合	3.6	5.3	5.5
33	ドキステバj-5	胸	中空	有	褐 色	精選されている	〃		3.6	8.2	3.6
34	J-5・6	左下半身	中空	無	褐 色	精選されている	〃		3.3	5.6	4.3
35	H-5	左 足	中空	無	褐 色	精選されている	〃		3.6	6.2	5.3
36	H-5	右 足	中空	無	暗 褐色 一部褐色	砂粒、雲母含む	〃		2.7	3.4	1.8
37	H-6	右 足	中空	無	褐 色	精選されている	〃		7.8	10.8	5.7
38	H-5	尻	中空	有	暗 褐色	精選されている	〃		6.5	5.1	4.8
39	I-3	胸 部	中空	有	褐 色	精選されている	〃		4.0	4.6	2.6
40	I-3	右 手	中空	無	淡 褐色	砂粒、雲母含む	〃		2.2	3.3	5.3
41	I-4	左 手	中空	無	褐 色	砂粒、雲母含む	〃		1.2	1.3	3.8
42	I-4	胸	中空	無	褐 色	精選されている	〃		3.5	4.6	2.2
43	I-4	胸	中空	無	褐色一部 暗褐色	砂粒、雲母含む	〃		1.8	4.2	2.6
44	I-5	左下半身	中空	無	褐 色	精選されている	〃		1.4	4.2	2.4
45	I-5	右 手	中空	有	暗 褐色	砂粒、雲母含む	〃		1.9	2.5	5.0
46	I-5	右 足	中空	無	褐 色	精選されている	〃		4.6	3.4	4.1
47	I-6	左 足	中空	無	褐 色	精選されている	〃	長石多く含む	3.5	3.5	4.6
48	I-6	胸	中空	有	褐 色	精選されている	〃		5.6	4.4	2.2
49	J-4	胸	中空	無	褐 色	砂粒、雲母含む	〃		3.1	4.5	2.2
50	J-6	胸	中空	無	暗 褐色	精選されている	〃		7.8	8.8	6.5
51	J-6	胸	中空	無	暗 褐色	精選されている	〃		4.7	5.5	4.4
52	J-6	右 足	中空	有	褐 色	精選されている	〃		4.3	5.3	5.
53	J-6	顔	中空	無	褐 色	精選されている	〃		4.6	4.9	3.4
54	K-4	左 足	中空	無	暗 褐色	砂粒、雲母含む	〃		1.8	2.4	1.9
55	K-5	胸	中空	無	褐 色	精選されている	〃		3.5	3.9	3.3
56	B-8	顔	中空	無	褐 色	精選されている	〃		6.0	5.4	3.1
57	B-12	右 足	中空	無	褐 色	精選されている	〃		3.7	3.6	7.6
58	B-13	胸	中空	無	暗 褐色	精選されている	〃		4.9	5.7	4.9
59	L-6 C-8) 接合	尻	中空	有	赤 褐色	精選されている	〃		5.0	3.9	2.6
60	C-7	左 足	中空	無	褐 色	精選されている	〃	白色粒子多く含む	4.1	3.4	5.8
61	C-8	胸部下半	中空	無	暗 褐色	精選されている	〃		5.3	7.9	6.0
62	D-7	右 足	中空	無	褐 色	精選されている	〃		3.3	3.3	4.6
63	D-8	胸	中空	有	暗 褐色	精選されている	〃		9.4	7.3	2.3
64	D-12	胸	中空	無	褐色一部 暗褐色	砂粒、雲母含む	〃	長石、赤色粒子多く含む	2.4	4.3	2.2
65	E-2	右 腕	中空	無	褐 色	精選されている	〃	入墨の部分に赤0色顔料	5.8	4.4	2.3
66	E-2	胸 部	中空	無	褐 色	精選されている	〃		3.2	5.6	2.4
67	E-3	胸	中空	無	褐 色	精選されている	〃	長石を含む	6.6	6.4	2.6
68	E-5	下半身	中空	無	褐 色	精選されている	〃		3.9	4.0	4.4

番号	出土位置	部位	内部	木心痕	色調	胎土	焼成	その他	幅 (cm)	高 (cm)	厚 (cm)
69	E-5	右足	中実	無	褐色	精選されている	良好		4.2	6.0	5.4
70	E-6	右手	中実	無	灰褐色	砂粒含む	"		4.1	2.1	2.0
71	E-8	右手	中実	無	褐色一部 暗褐色	砂粒含む	"		4.2	2.4	2.1
72	E-8	右足	中実	無	褐色一部 暗褐色	砂粒、雲母含む	"		2.6	2.0	3.3
73	E-9	右足	中実	無	暗褐色	精選されている	"		3.4	4.7	4.1
74	E-8	頭	中実	無	暗褐色	精選されている	"		4.8	4.4	4.2
75	E-15	尻	中実	無	暗褐色	精選されている	"		7.0	6.3	4.4
76	E-16	尻	中実	無	薄茶褐色	精選されている	"		4.3	5.5	3.0
77	F-3	左手	中実	無	褐色一部 暗褐色	砂粒、雲母含む	"		4.7	2.8	2.2
78	F-7	顔	中実	無	褐色	精選されている	"		4.2	5.4	3.5
79	F-9	顔	中実	無	褐色	精選されている	"		3.5	2.6	3.2
80	F-10	頭	中実	無	暗褐色	精選されている	"		3.7	4.6	3.3
81	F-15	尻	中実	無	褐色	精選されている	"		4.8	5.9	3.7
82	F-15	右手	中実	無	褐色一部 暗褐色	砂粒含む	"		3.3	2.4	1.6
83	F-15	胸部	中実	無	暗褐色	精選されている	"	長石含む	5.1	3.4	2.0
84	G-2	胴	中実	無	褐色	精選されている	"	頭部欠損	3.9	3.3	2.4
85	G-2	左足	中実	有	褐色	砂粒、雲母含む	"		2.8	2.9	2.8
86	G-2	顔	中実	有	赤褐色一部 暗褐色	砂粒、雲母含む	"		3.2	2.9	2.8
87	G-3	胴	中実	無	薄茶褐色	精選されている	"		4.1	5.3	4.0
88	G-4	右足	中実	無	褐色	砂粒含む	"		3.7	2.8	4.0
89	G-5	右足	中実	無	褐色	精選されている	"		3.9	3.5	5.1
90	G-6	胸部	中実	有	薄茶褐色	精選されている	"		3.7	4.4	2.7
91	G-6	右足	中実	無	褐色一部 暗褐色	砂粒、雲母含む	"		2.2	1.8	5.5
92	G-6	胴	中実	有	褐色	精選されている	"	白色粒子(大)多く含む	3.8	5.4	5.1
93	G-7	右足	中実	無	暗褐色	精選されている	"		4.5	5.9	3.8
94	G-8	右足	中実	有	褐色	砂粒、雲母含む	"		4.0	3.0	4.5
95	G-8	胴	中実	無	褐色	精選されている	"		7.7	6.1	4.4
96	G-8	右足	中実	無	褐色	砂粒、雲母含む	"		3.3	2.3	3.3
97	G-8	足	中実	無	褐色	精選されている	"		3.6	5.2	3.1
98	G-10	右足	中実	無	褐色	精選されている	"		4.6	6.2	5.8
99	H-9	顔	中実	有	褐色	精選されている	"		3.5	3.1	2.6
100	H-9	尻	中実	無	暗褐色	精選されている	"		4.8	4.5	3.5
101	H-12	右足	中実	無	褐色	精選されている	"		6.4	5.4	4.7
102	I-7	右手	中実	無	褐色	砂粒含む	"		3.8	2.4	2.0
103	I-7	左足	中実	有	褐色	精選されている	"		4.4	7.7	3.9
104	I-9	胴	中実	無	暗褐色	精選されている	"		2.7	6.2	7.8
105	I-9	胴	中実	有	褐色	精選されている	"		5.6	6.1	5.0
106	K-6	右足	中実	無	赤褐色	精選されている	"		3.9	3.6	6.4
107	L-5	胴	中実	無	褐色	精選されている	"		4.4	5.1	3.8
108	L-5	顔	中実	有	褐色	精選されている	"		2.8	2.8	2.2
109	L-5	顔	中実	無	褐色一部 暗褐色	砂粒、雲母含む	"		3.9	3.9	3.0
110	L-6	左手	中実	無	褐色	砂粒、雲母あり	"		2.7	1.5	1.3
111	L-5	顔面	中実	無	褐色	ざらついている	"		3.0	1.9	3.0



番号	出土位置	部位	内部	木心痕	色調	胎土	焼成	その他	幅 (cm)	高 (cm)	厚 (cm)
112	M-5	顔面	中実	無	褐色	精選されている	良好		3.9	3.9	3.1
113	M-5	胸	中実	無	褐色	精選されている	〃		3.1	4.0	2.2
114	表採	左足	中実	無	褐色	砂粒含む	〃		2.2	2.4	2.7
115	表採	左手	中実	無	褐色	精選されている	〃		4.0	3.3	2.2
116	G-9	右手	中実	無	暗褐色	砂粒含む	〃		3.9	2.6	1.9
117	I-4	右足	中実	有	黄褐色	砂粒含む	〃		4.0	3.5	4.2
118	表採 A-13	左手	中実	無	褐色	精選されている	〃		3.4	3.4	3.0
119	表採	胸	中空	無	褐色	精選されている	〃		3.9	5.4	3.9
120	表採	胸	中実	無	褐色	精選されている	〃		5.6	5.0	3.4
121	表採	胸	中実	有	褐色	精選されている	〃	長石多く含む	4.1	4.8	2.1
122	表採	胸部	中実	無							

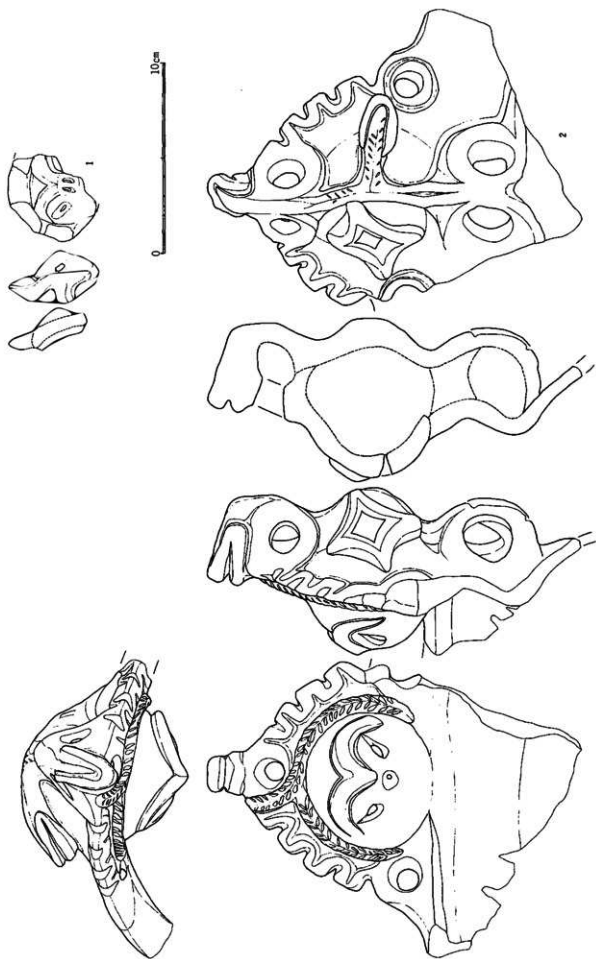
る例などがそれ以外として存在する。資料のすべてが、腹部・でん部が脹らんだ立体的なもので中期に位置付けられると考えられる。4も時期的には中期であろうが、板状のつくりである。なお、個々の資料については第5表に示しておく。

#### b 顔面把手

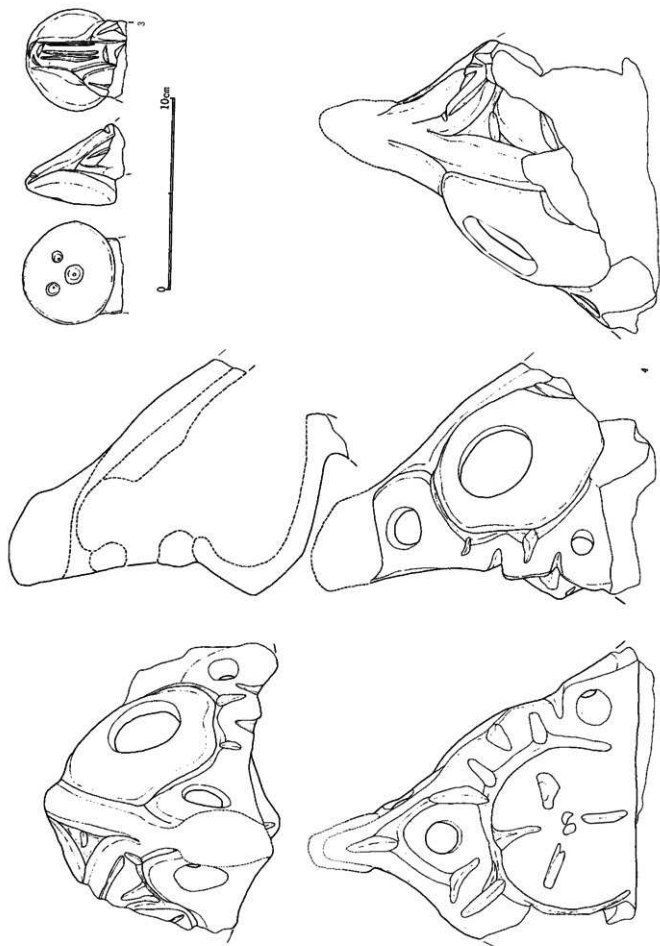
顔面把手は7点出土している。ただ、土偶として報告したもののうち、25、26は木心痕がなく、中空であることから顔面把手である可能性が高く、全部で9点出土としておきたい。これらはいずれも顔面把手部分だけの出土であり、同一個体である土器とともに出土した例は一例もない。後述する2が、土器と伴出しているが、別個体であった。これからすれば土器と顔面把手とを別々に廃棄するのが一般的であったと言えるのかもしれない。以下に個々の資料についての概要を記すことにする。

第152図-1 10号住居址出土。中空の顔面だけが出土した。現存高4.6cm、幅4.5cm、厚さ2.8cmを計る。目、口の孔は貫通している。眉部と鼻部はつながっており、目は吊り上がっている。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土も精選されており、丁寧な作りである。 — 2 33号土坑出土。本資料は花崗岩を削って掘り込まれた土坑に、第103図-4の土器とともに入れられていた。吊り上がった目、丸い口、半円形の眉と典型的な顔面把手の表情である。なお、目・口の孔は貫通しており、鼻孔は表現されていない。頭頂部および後頭部右側には、あきらかに蛇と考えられる装飾が施されている。現存高19.8cm、幅15.5cm、厚さ8.6cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも良好で丁寧な作りである。なお、復原した場合、顔面は土器内面を向いている。

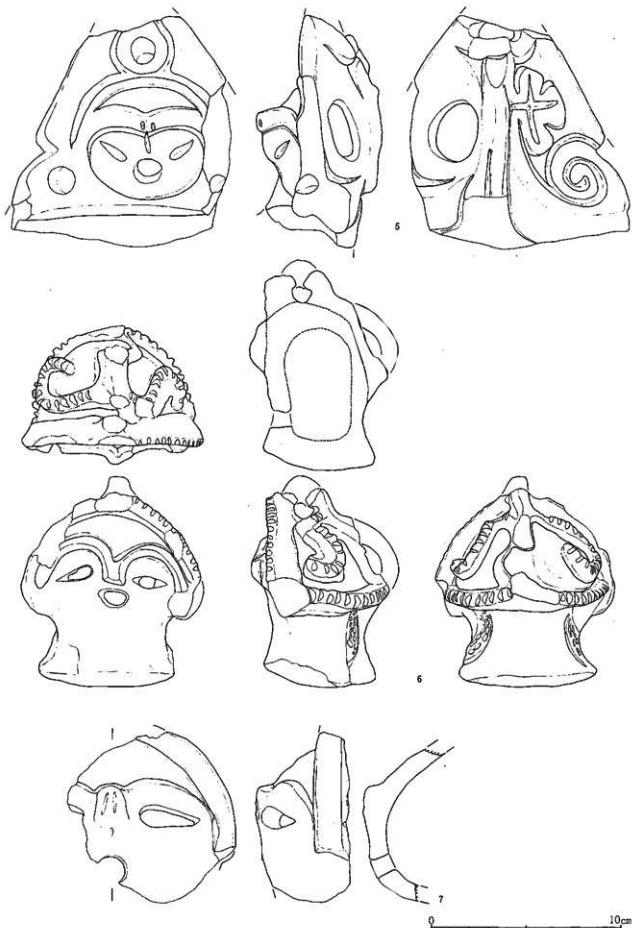
第153図-3 土器捨て場h4小グリッド出土。非常に単純な顔面表現である。円形の平面に目部の孔を2個、口部の孔を1個刺突しただけである。現存高5.2cm、幅5.2cm、厚さ4.3cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。なお、土器内面を向いている。 — 4 土器捨て場J5グリッド内出土。中空で大型の顔面把手である。頭頂部および左目部の一部を欠損している。本資料には眉は表現されておらず、鼻部は二つの孔で表現される。また、口は孔による表現ではなく、縦方向の沈線で表現されている。他の顔面把手でもこの沈線は表現されているが、その場合は鼻と唇を結ぶ部分を表現したものである。本資料のように、これを口部の表現とした例は希であろう。明褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、雲母が目立つ。磨きも良好で、丁寧な作りである。現存高17.9cm、幅15.4cm、厚さ12.5cmを計る。なお、土器内面を向いている。 第154図-5 土器捨て場J6グリッド内出土。中空で口部のみ貫通している。眉と鼻孔は表現されているが、鼻孔は目より上部に位置している。頂部は欠損しているが後部中心部から隆帯が延びており、蛇体装飾があったのかもしれない。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。現存高12cm、幅11.5cm、厚さ6.6cmを計る。なお、土器内面を向いている。 — 6 土器捨て場m8小グリッド出土。本資料



第152図 顔面把手その1



第153図 顔面把手その2



第154図 顔面把手その3



第155图 獸面把手

は一応顔面把手として報告するが、土器口縁部が残存していないだけでなく、土器口縁部との接合面と思われる部分の剥離の仕方があまりにきれいであり、あるいは頭部だけを表現した土偶であるかもしれない。多くの顔面把手、土偶が吊り上がった目をしているのに対し、本資料は目尻が下がった表現となっている。頭部は中空で目・口部は貫通している。頭頂部は欠損しているが、結い髪が表現されていたかもしれない。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、施文も丁寧であるが、表面はやや荒れている。現存高10.5cm、幅9.5cm、厚さ7.3cmを計る。一7 土器捨て場I5グリッド内出土。中空の顔面部左半分だけである。本資料も鼻孔が目より上部に位置している。6と同様に目尻が下っている。目・口部の孔は貫通している。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。現存高9.1cm、幅8.8cm、厚さ5cmを計る。

#### c 獣面把手

獣面把手は5点の出土である。

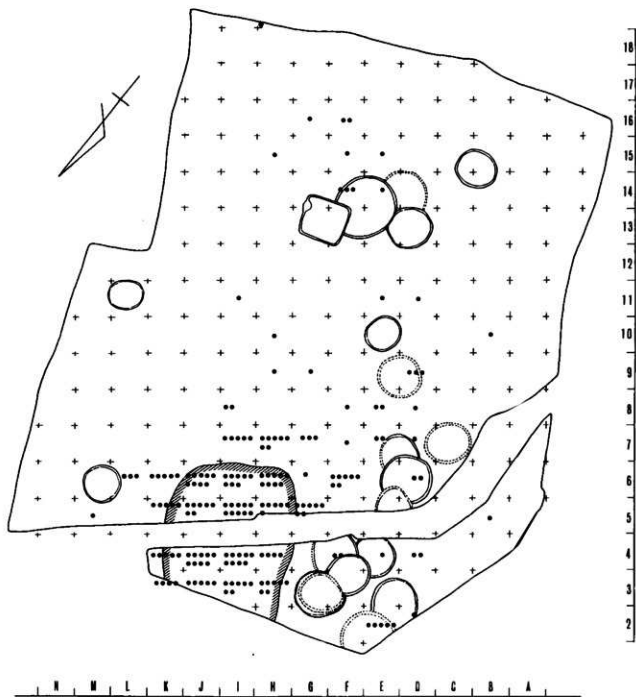
第155図-1 10号住居址覆土出土。土器内面を向くと思われるが、顔部は粘土塊を円錐形に盛り上げただけであり、何を表現したものであるか全く不明である。なお、頭頂部、側頭部とも一状の隆帯を貼付して頭部の膨らみを表現している。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。現存高8cm、幅7cm、厚さ5.3cmを計る。一2 13号住居址出土。本資料も土器内面を向くと思われ、顔部は隆帯を四角形に貼付し口部を表現したものと推定されるが、表現したものの種類は不明である。褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。現存高は6.5cm、幅7.5cm、厚さ5.3cmを計る。一3 52号土坑出土。非常に小型で、把手ではなく突起と思われるが、把手の一部が剥離した可能性もある。これは、明らかに獣を表現したものであると思われる。吊り上がった目、大きく広げた口が刺突によって表現され、頭頂部にはトサカ状の隆帯が付けられている。あるいはトカゲを表したものであるかもしれない。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。現存高2.4cm、幅3cm、厚4.5cmを計る。一4 土器捨て場m8小グリッド出土。三角形の頭部とやはり三角形の腕部が表現されている。頭部は渦巻き状に沈線を施し、口部は粘土を厚くし、飛び出した形となっている。本資料も何を表現したものであるか全く不明である。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。現存高8.9cm、幅7.5cm、厚さ5.21cmを計る。なお、土器内面を向いている。一5 土器捨て場h3小グリッド出土。肩より上の部分が表現されている。頭部は丸く、口は飛び出しており犬の口に類似する。また、5mm程の粘土塊を貼付し、目としている。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。現存高5.8cm、幅5.5cm、厚さ6cmを計る。なお、土器内面を向いている。

#### d 土製円盤

土製円盤は非常に多く出土している。土器捨て場およびグリッドから186点、住居内から27点、土坑内から6点、表面採取7点が出土しているが、これは確実なものであり、実数はさらに多いものと思われる。これらはすべて土器片を打ち欠いて丸く整形した後、周縁部を磨いて土製円盤としたものである。なお、最初から有孔円盤として製作されたものも何点か出土しているが、それについては後述する。周縁部の打ち欠き、磨きの程度の差は激しく、丁寧に磨きを掛け、打ち欠き痕を全く残さないものから、ほとんど打ち欠いただけのものまでバラエティーに富む。また、形状も正円、不整円、楕円と様々である。もちろん正円を意識して磨きを行なったのであろうが、なかには周縁部の磨きが非常に丁寧にこなされているにも係わらず、楕円形を呈しているものもあり、あるいは意識して楕円形に仕上げたものであるかもしれない。

さて、第156図に示したように本資料も土器捨て場内および周辺からの出土が圧倒的に多い。遺構からの出土は総量からみればごく僅かである。土製円盤の用途については竹と組み合わせて紡錘車として使用するという説があるが、説得力に欠け、現時点では不明としておきたい。しかし、本遺跡では、完形品が屋外から多く出土するという状況が明らかになっている訳であり、その用途を示唆していると言えよう。

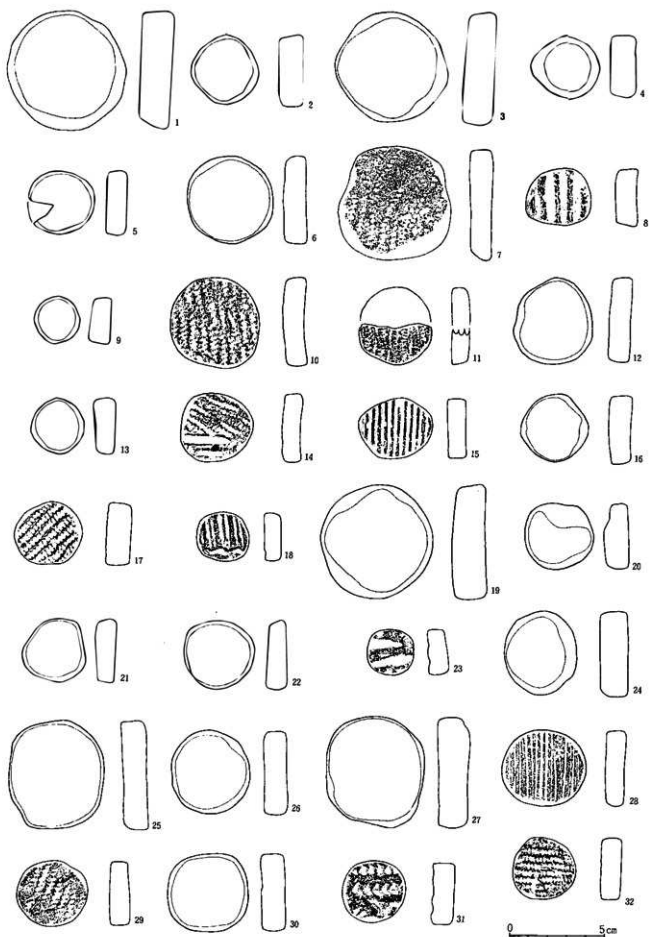
土製円盤は土器片を利用する場合、胴部のカーブが緩やかな部分を用いたものがほとんどであり、図示したも



第156図 土製円盤分布図

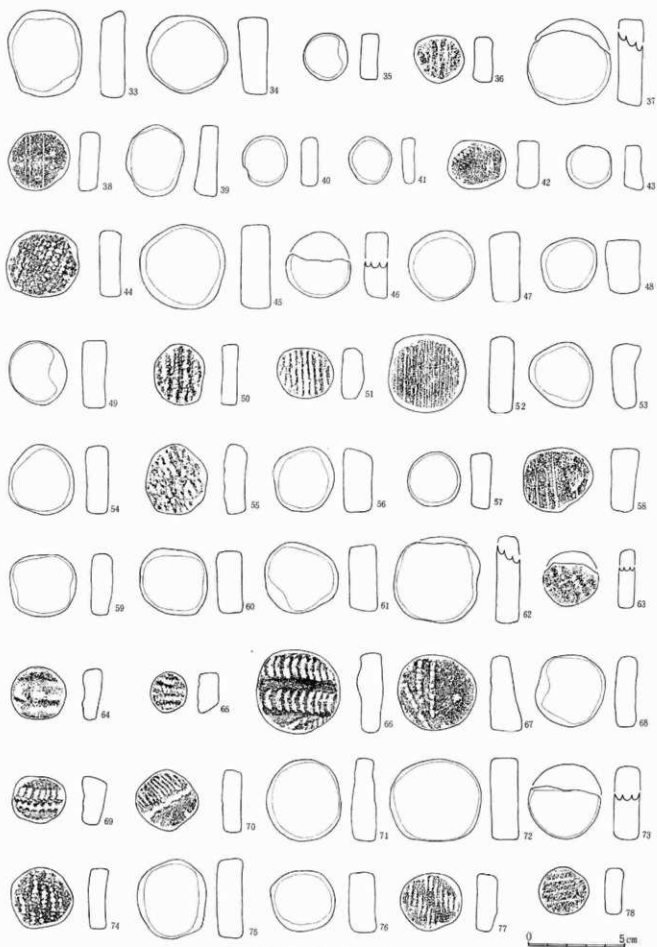
の多くは厚さがほぼ一様で、真っ直ぐか、ごく緩いカーブとなっている。その中で53、62、69、79、128などが違う部位を使用したものであろう。なお、有文のもののうち、古いものでは31、67、80、97、102などが中期中葉に位置付けられ、新しいものでは58、86などが中期末に位置付けられよう。このように時期的にも幅広いが、土製円盤の場合、必ずしも文様の時期と土製円盤としての製作・使用時期が一致しないことは言うまでもない。しかし、本遺跡での遺構からの出土土器からすれば、土製円盤の製作・使用時期は中期中葉～後葉初期に中心があることは間違いないものであろう。

個々の資料については、第6表に示すことにするが、直径は2.1～6.3cm、厚さ0.7～1.7cm、重量5.5～81.3gと幅広くなっている。そのなかでも直径3.5cm、厚さ1cm前後の大きさが一般的である。重量は10～20gのものが最も多く、これに20～30gのものを加えると、出土総量の7割以上がここに収まることになる。

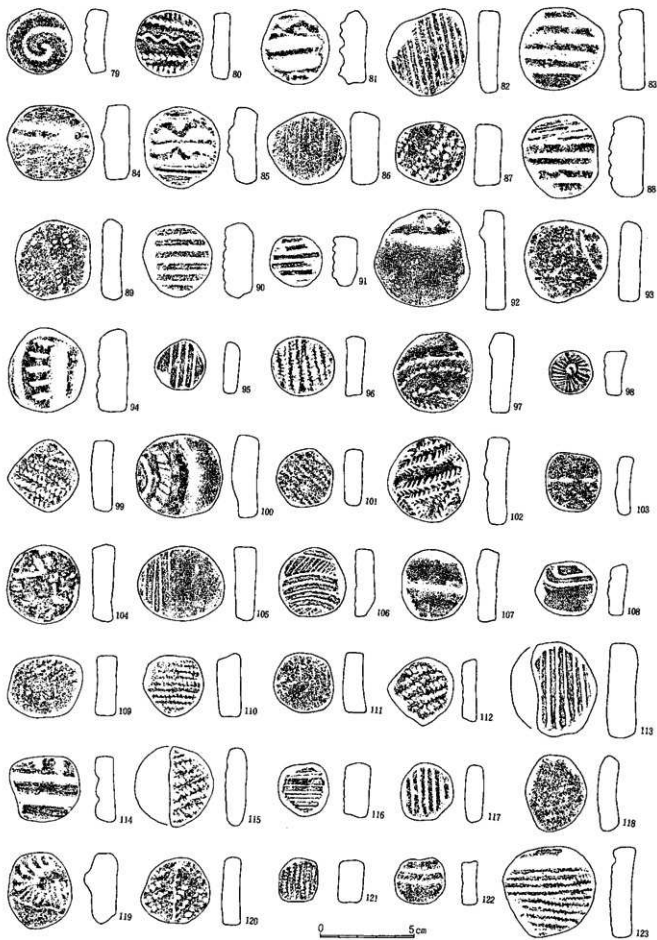


第157図 土製円盤その1

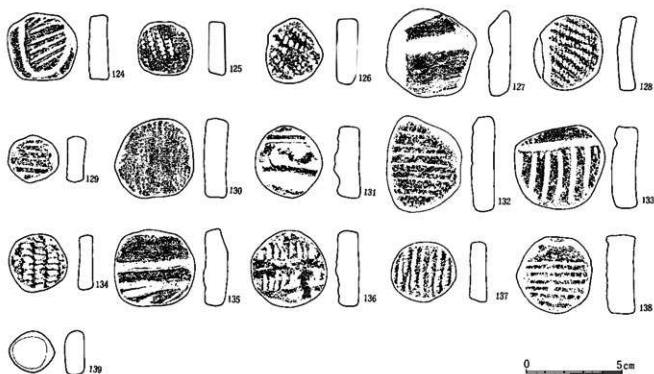




第158図 土製円盤その2



第159図 土製円盤その3



第160図 土製円盤その4

第6表 土製円盤観察表

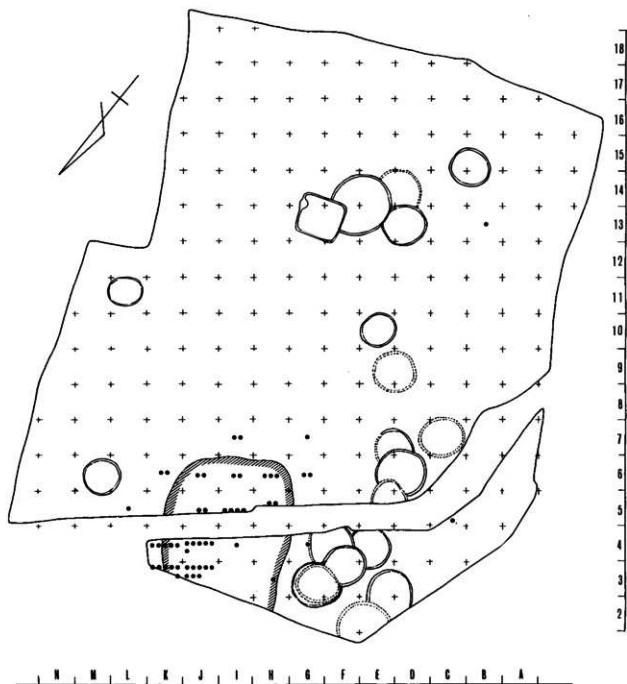
番号	出土位置	最大径	厚さ	重量	番号	出土位置	最大径	厚さ	重量
1	2 住	6.3	1.75	81.34	22	13 住	3.65	1.0	17.10
2	2住覆土	3.7	1.4	21.64	23	19 住	2.5	1.0	8.57
3	2住覆土	6.0	1.6	67.32	24	20 住	4.4	1.5	30.57
4	2住覆土	3.6	1.4	19.15	25	21 住	5.6	1.25	50.39
5	2住覆土	3.5	1.05	13.28	26	22 住	4.3	1.2	27.45
6	2住覆土	4.6	1.25	29.33	27	9・10土城	5.8	1.5	64.36
7	3住 E 2	5.9	1.15	48.24	28	11土城	4.4	1.0	25.13
8	3住 E 2	3.35	1.1	14.80	29	23土城	3.7	1.05	18.30
9	4 住	2.4	1.05	6.83	30	52土城	4.2	1.3	29.22
10	4住D・E 2	4.7	1.1	31.32	31	107土城	3.35	1.1	18.25
11	4住 E 3	3.7	0.95	10.63	32	107土城	3.2	1.1	17.05
12	5住	4.5	1.1	25.34	33	122土城	4.5	1.3	28.23
13	6住 炉内	2.2	1.3	9.38	34	ドキステナバク-6	4.3	1.45	28.50
14	6住覆土	3.8	0.95	18.56	35	" i-7	2.45	0.9	6.06
15	6住覆土	3.85	0.95	18.14	36	" h-5	2.6	0.95	7.62
16	6住覆土	3.5	1.2	16.76	37	" m-6	4.35	1.25	26.04
17	10 住	3.6	1.25	22.09	38	" h-4	3.25	1.05	13.45
18	10 住	2.75	0.85	8.92	39	" a-1	3.65	0.95	13.49
19	10 住	5.95	1.75	77.39	40	" b-4	2.65	0.85	4.71
20	10 住	3.6	1.3	18.45	41	" d-2	2.5	0.65	4.06
21	11 住	3.35	0.95	12.06	42	" l-7	3.05	1.1	11.32

番号	出土位置	最大径	厚さ	重量	番号	出土位置	最大径	厚さ	重量
43	ドキステバ b-4	2.3	0.8	6.26	86	グリッド D-9	4.2	1.5	20.09
44	" b-7	3.9	1.1	20.51	87	" E-2	3.7	1.35	24.83
45	" g-5	4.35	1.5	37.63	88	" E-2	4.25	1.8	39.75
46	" g-8	3.3	1.15	9.64	89	" E-2	4.05	0.95	21.39
47	" h-3	3.7	1.5	21.28	90	" E-7	3.8	1.45	26.52
48	" h-6	2.85	1.2	1709	91	" E-7	2.8	1.25	10.82
49	" h-7	3.3	1.25	15.26	92	" E-8	5.1	1.0	34.38
50	" h-8	3.2	0.8	8.88	93	" E-8	4.3	1.1	25.48
51	" i-5	3.05	1.1	12.00	94	" E-14	4.4	1.5	31.49
52	" i-7	4.1	1.25	28.06	95	" E-14	2.7	0.8	7.30
53	" j-4	3.4	1.1	16.83	96	" F-4	3.35	0.9	12.99
54	" j-6	3.6	1.15	17.92	97	" F-6	4.15	1.05	24.83
55	" l-7	3.7	1.1	15.30	98	" F-6	2.3	0.9	6.63
56	" m-6	3.4	1.45	18.93	99	" G-5	3.8	1.1	18.59
57	" m-7	2.85	1.0	9.83	100	" G-6	4.5	1.1	31.30
58	" m-7	3.3	1.3	22.07	101	" G-6	3.0	0.95	11.51
59	" m-7	3.55	1.05	17.43	102	" G-7	4.4	1.0	24.86
60	" n-6	3.5	1.25	21.90	103	" G-7	2.9	0.7	10.30
61	" O-6	3.85	1.4	23.15	104	" H-3	4.05	1.1	24.08
62	" R-9	4.2	1.2	26.33	105	" H-5	4.5	1.1	25.83
63	" J-3	2.35	0.85	8.91	106	" H-5	3.6	0.95	16.69
64	" J-4	2.9	0.8	9.15	107	" H-5	3.7	0.9	16.52
65	" J-5	2.1	1.1	5.47	108	" H-6	3.15	0.9	11.04
66	" J-6	4.4	1.25	32.14	109	" H-6	3.7	1.0	18.00
67	" J-5	4.1	1.2	25.00	110	" H-6	3.2	1.2	15.18
68	" I-5	3.7	1.05	16.66	111	" H-7	3.25	1.05	14.90
69	" I-6	2.5	1.15	11.28	112	" I-3	3.3	0.7	10.71
70	" J-6	3.25	1.0	11.32	113	" I-3	4.9	1.45	28.87
71	" I-5	4.35	1.15	22.76	114	" I-4	3.4	1.0	16.08
72	" I-6	4.75	1.4	38.38	115	" I-4	3.0	1.1	10.61
73	" H-5	3.8	1.35	14.52	116	" I-5	2.7	1.35	14.22
74	" H-6	3.3	0.9	13.72	117	" I-5	3.0	1.0	10.93
75	" H-6	4.2	1.3	22.39	118	" I-6	4.1	1.0	14.39
76	" K-6	3.25	1.35	17.59	119	" I-6	3.9	1.7	20.46
77	"	3.2	1.0	12.20	120	" I-6	3.55	0.9	14.89
78	グリッド D-5	2.5	0.9	7.62	121	" I-6	2.2	1.3	9.38
79	" D-2	3.45	0.9	15.27	122	" I-7	2.4	0.7	6.61
80	" D-4	3.5	0.9	14.09	123	" I-8	4.75	1.1	31.67
81	" D-6	3.8	1.2	20.17	124	" J-5	3.7	0.95	18.06
82	" D-7	4.3	1.0	24.66	125	" J-5	2.8	0.85	11.00
83	" D-8	4.5	1.35	31.95	126	" J-6	3.4	1.1	14.70
84	" D-9	4.4	1.3	31.40	127	" J-6	4.6	1.0	28.64
85	" D-9	4.25	1.2	22.95	128	" J-6	3.9	7.5	12.64

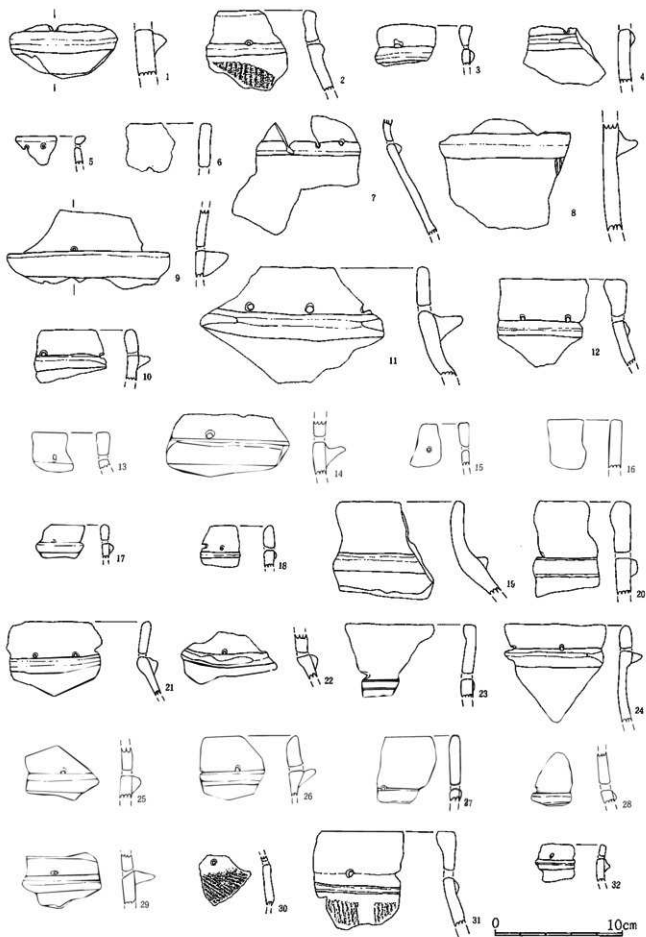
番号	出土位置	最大径	厚さ	重量	番号	出土位置	最大径	厚さ	重量
129	" J-6	2.6	0.85	7.37		H-19	3.5	0.95	14.35
130	" K-4	4.15	1.2	27.49		F.G-16	4.15	1.0	19.69
131	" K-4	3.6	0.95	16.69		I-11	4.7	0.8	23.53
132	" K-5	5.1	1.2	30.74		I-3	4.5	1.25	31.76
133	" K-6	4.7	1.25	30.36		D-6	3.3	1.05	14.21
134	" K-6	3.1	0.65	9.27		I-5	4.1	1.3	24.87
135	" L-6	4.2	1.15	26.77		E-15	3.8	1.6	25.94
136	" L-6	4.0	1.2	23.49		H-6	3.6	1.5	22.17
137	表採	3.4	0.8	12.65		F-16	2.9	1.4	13.66
138	表採	3.95	1.4	30.66		J-6	2.7	0.95	8.63
139	表採	2.4	1.05	5.98		J-5	4.8	1.7	41.40
	N-7	5.0	1.1	33.10		K-6	2.1	1.0	11.07
	G-8	4.85	1.0	26.70		H-7	2.9	1.2	12.05
	J-6	4.8	1.25	33.63		J-4	5.0	1.5	51.90
	E-4	4.15	1.1	22.29		H-6	2.5	1.35	8.60
	F-4	4.8	1.0	26.59		J-6	2.6	1.1	8.51
		3.6	0.9	12.64		I-4	2.8	1.0	9.56
	K-5	2.7	1.15	11.23		J-6	2.15	0.9	4.62
	I-8	3.05	0.95	13.34		I-4	3.75	1.0	15.88
	H-7	3.25	0.6	9.35		G-5	3.7	1.25	19.95
	J-4	3.6	1.2	17.52			3.6	0.65	8.77
	I-5	3.4	0.75	10.98		H-9	3.25	0.9	10.56
	K-5	4.7	1.2	30.98		G-5	4.4	1.4	32.44
	J-6	2.6	1.55	12.68		M-5	3.3	1.15	12.24
	H-4	3.1	0.85	7.18		F-14	3.5	1.2	17.24
	G-9	3.6	1.45	24.49		F-6	3.1	1.35	14.25
	H-7	3.3	1.35	16.37		D-4	3.5	0.95	13.36
	G-7	4.0	1.0	19.99		I-6	2.8	1.0	9.97
	H-7	3.2	1.15	14.14		D・E-2	4.7	1.5	39.92
	H-4	3.9	0.9	14.42		H-5	3.5	1.05	16.73
	K-5	2.55	0.9	7.84		F-15	2.05	1.3	15.06
	I-5	3.75	0.9	14.50		I-6	3.5	1.0	14.18
	I-7	4.4	1.1	23.65		H-7	4.3	1.05	23.96
	D-11	3.4	0.65	11.00		H-5	3.3	0.85	11.86
	H-4	3.4	0.95	12.71		F-6	3.8	1.3	20.32
	H-10	4.25	1.2	28.26		K-5	3.8	1.05	16.38
	F-14	3.85	1.0	19.32		L-6	4.4	1.1	28.66
	E-2	3.5	1.15	13.89		I-5	3.8	1.05	23.28
	G-5	3.7	1.1	16.79		H-3	2.95	1.0	10.52
	I-4	3.5	1.15	18.22		F-6	3.55	1.3	19.20
	K-6	4.15	1.15	20.38		G-5	4.4	1.0	↓
	I-5	4.05	1.1	22.00		I-7	3.05	0.75	破
	I-4	4.15	1.0	17.61		I-4	3.9	1.1	片

番号	出土位置	最大径	厚さ	重量	番号	出土位置	最大径	厚さ	重量
F-6		3.05	1.0			I-5	4.6	1.05	
J-5		3.7	1.15			I-6	(5.75)	1.15	
I-7		2.9	1.0			表採	2.7	0.9	
F-6		3.3	1.4	↓		表採	2.95	1.35	12.60
F・G-16		3.3	0.95	破		表採	4.0	0.75	15.78
H-5		4.4	0.9			表採	4.6	0.9	26.57
F-8		4.35	1.35	片		表採	7.4	1.2	80.20

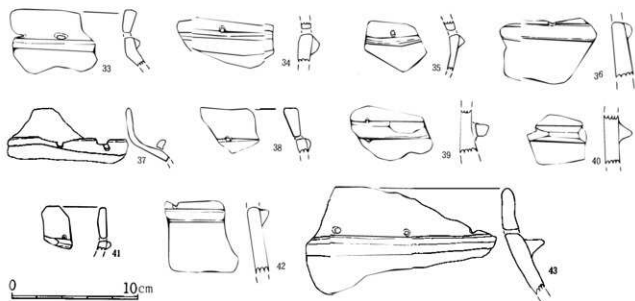
e 有孔罽付土器



第161図 有孔罽付土器分布図



第162図 有孔罎付土器その1



第163図 有孔罅付土器その2

有孔罅付土器の出土量は多くはなく、完形あるいはほぼ完形にちかいものは一点も出土していない。遺構からは4号住居址から小破片が、122号土城から破片が出土しているだけで、あとはすべて土器捨て場、グリッドからの出土である。

土器捨て場、グリッドからは、破片総数で51点が出土している。もちろん、この数値は孔部、罅部を集めたものであるため、本来あるべき胴部の破片を加えればさらに多くなると思われる。たとえば、有孔罅付土器の胴部には必ずと言って良いほど赤色顔料が塗布されているが、これは浅鉢などにもみられるものであり、有孔罅付土器片と断定することはできない。したがって、赤色顔料が塗布されていても胴部のみの破片は除いてある。

第161図に示したように、有孔罅付土器も圧倒的に土器捨て場内からの出土が多い。前述したように遺構からは二点が出土しているだけであり、他の土器とは明らかに違い、住居周辺に場所を選ばず捨てるといった行為はなされなかったようである。住居内の完形品の出土状況こそみられなかったものの、このような破片の出土状況は、あらためて有孔罅付土器の特殊性を物語っていると云えよう。

個々の資料については第7表に示すが、赤色顔料が塗布され、胎土は精選されており、磨きも丁寧に行なわれていることが共通点として挙げられる。

第7表 有孔罅付土器観察表

番号	出土位置	色調	胎土	焼成	番号	出土位置	色調	胎土	焼成
1	E-7	暗褐色	砂粒、金雲母を含む	良	13	B 14 III層	暗褐色	砂粒を含む	良
2	122土 P-6	茶褐色	砂粒、雲母含む	"	14	ドキステパn-5	暗褐色	砂粒、金雲母を含む	"
3	ドキステバj-8	暗褐色	砂粒を含む	"	15	ドキステバℓ-7	赤色顔料付着	金雲母を含む	"
4	ドキステバℓ-7	褐色	砂粒を含む	"	16	ドキステバℓ-5	赤褐色	砂粒、金雲母を含む	"
5	ドキステパn-6	暗褐色	砂粒を含む	"	17	H-5	褐色	砂粒、金雲母を含む	"
6	ドキステパm-6	赤褐色	砂粒、金雲母を含む	"	18	H-6	褐色	砂粒、金雲母を含む	"
7	I-5	茶褐色	砂粒、金雲母を含む	"	19	I-4	黄褐色	砂粒、金雲母を含む	"
8	B-13	褐色	砂粒、金雲母を含む	"	20	I-6	褐色	砂粒、金雲母を含む	"
9	ドキステバj-4	褐色	白色粒子、金雲母を含む	"	21	I-6	黒褐色	白色砂粒を含む	"
10	ドキステバJ-7	褐色	砂粒、金雲母を含む	"	22	I-6	黒褐色	砂粒を含む	"
11	H-6	褐色	砂粒、金雲母を含む	"	23	J-4	褐色	砂粒、金雲母を含む	"
12	J-5	褐色	砂粒、金雲母を含む	"	24	ドキステバj-4	赤褐色	砂粒、金雲母を含む	"

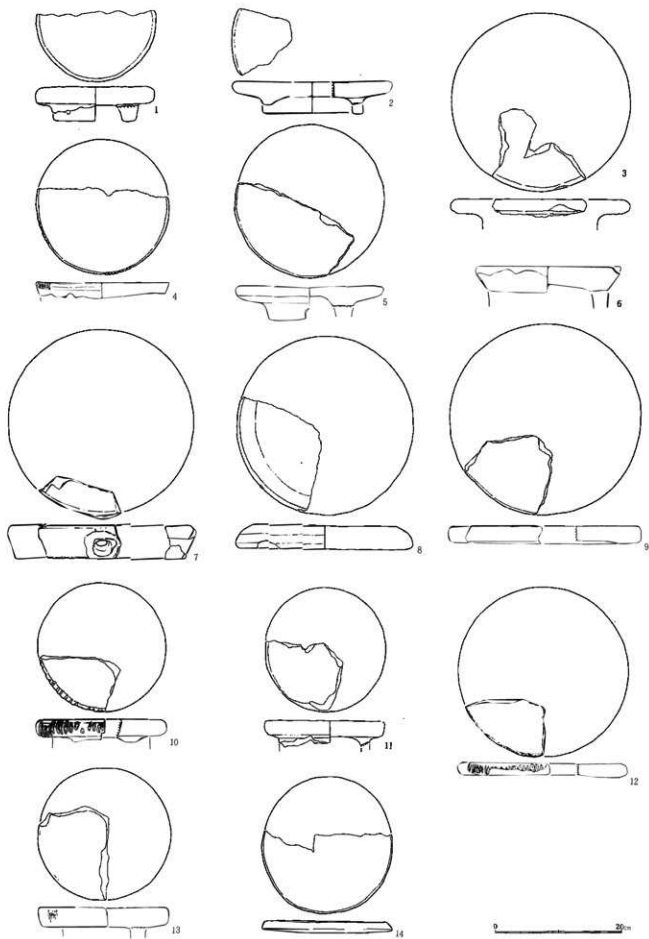


番号	出土位置	色調	胎土	焼成	番号	出土位置	色調	胎土	焼成
25	J-6 G	黄褐色	白色粒子を含む	良	35	ドキステバ	茶褐色	砂粒、金雲母を含む	良
26	K-4	赤褐色	砂粒、雲母含む	"	36	ドキステバn-6	茶褐色	砂粒を含む	"
27	K-4	黄褐色	砂粒、白色粒子を含む	"	37	C-5	黄褐色	砂粒、金雲母を含む	"
28	K-4	赤褐色	砂粒、金雲母を含む	"	38	G-4	赤褐色	砂粒、金雲母を含む	"
29	ドキステバK-5	赤褐色	砂粒、金雲母を含む	"	39	G-6	暗褐色	砂粒、雲母含む	"
30	ドキステバK-5	赤色顔料	金雲母を含む	"	40	G-7	茶褐色	砂粒、金雲母を含む	"
31	K-6	茶褐色	砂粒、金雲母を含む	"	41	i-7	茶褐色	砂粒、金雲母を含む	"
32	ドキステバ	赤褐色	砂粒を含む	"	42	ドキステバI-7	茶褐色	砂粒、金雲母を含む	"
33	ドキステバj-8	赤褐色	砂粒、金雲母を含む	"	43	L-5 43	褐色	砂粒、金雲母を含む	"
34	ドキステバd-9	褐色	砂粒、金雲母を含む	"					

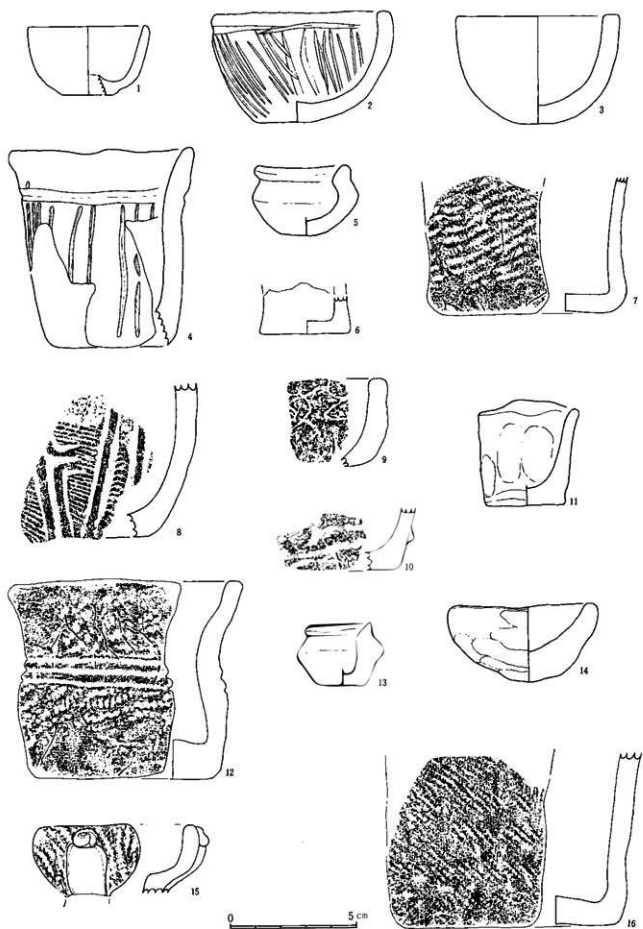
## f 器台

器台の出土量は少なく、14点である。完形品は全くなく、すべて破損している。これらは脚部を有するか否かで大きく二つに分けられる。1~7、10、11、13が脚を有するもので、他は円盤状を呈す。以下に各々について述べることにする。

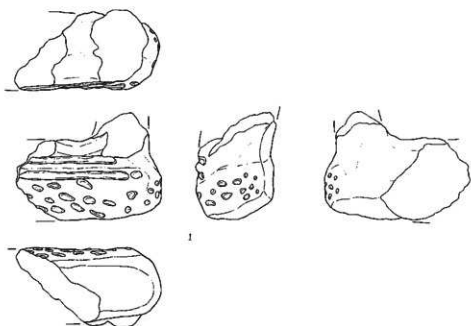
第164図-1 2号住居址出土。推定径19cmを計る。脚部は2cm以上の高さであったと推定される。また、直径5mm程の孔があけられている。黄褐色を呈し、焼成は良好。胎土には砂粒が多く、表面が荒れている。 — 2 2号住居址出土。推定径25cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。やはり胎土に砂粒が多く、表面が荒れている。 — 3 10号住居址出土。推定径28cmを計る。脚部は貼り付け部の盛り上がり部分が残っているだけである。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。 — 4 15号住居址出土。推定径21cmを計る。脚部の貼り付け部分に2孔1単位で穿孔されていたようである。また、周縁部には刻み目が施されている。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、やや表面が荒れている。 — 5 17号住居址出土。推定径24cmを計る。脚部の一部が残存しており、脚高は2.5cmを計る。脚部の残存部には挟りが二か所に入っており、5ないし6単位であったと想像される。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く含まれる。 — 6 19号住居址出土。推定径23cmを計る。脚部は貼り付けの痕跡だけである。また、上面は全面剝離している。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。 — 7 49号土坑出土。推定径29cmを計る。ごく一部が残存しているだけであるが、残存部には脚部に直径1cm程の孔があけられている。上部本体は2cm程の厚さである。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。 — 8 108号土坑出土。推定径28cmを計る。本体は厚さ3.5cmを計る。上下面ともやや荒れており、どちらが使用面か特定できない。 — 9 土器捨て場H5グリッド内出土。推定径30cmを計る。本体は厚さ約2cmを計るが、下面の中央部が5mm程凹んでおり、上面を特定できる。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。 — 10 土器捨て場L6小グリッド出土。推定径20cmを計る。脚部は貼り付けの痕跡だけである。また、本体の周縁部には刻み目が施されている。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。 — 11 土器捨て場G5グリッド内出土。推定径19cmを計る。脚部は貼り付け部分のみ残っている。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。 — 12 土器捨て場J6グリッド内出土。推定径27cmを計る。本資料も9と同様に、下面の中央が凹んでいる。また、周縁部には刻み目が施されている。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く含まれる。 — 13 土器捨て場内出土。推定径21cmを計る。脚部は貼り付けの痕跡だけである。本体の厚さは約3cmを計る。周縁部には浅い擦痕がみられる。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。 — 14 E8グリッド出土。推定径21cmを計る。本資料も上下面とも同様の状態であり、どちらが使用面か特定できない。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。



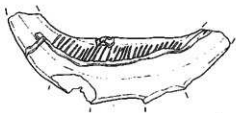
第164图 器台



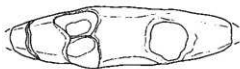
第165図 ミニチュア土器



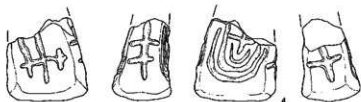
1



2

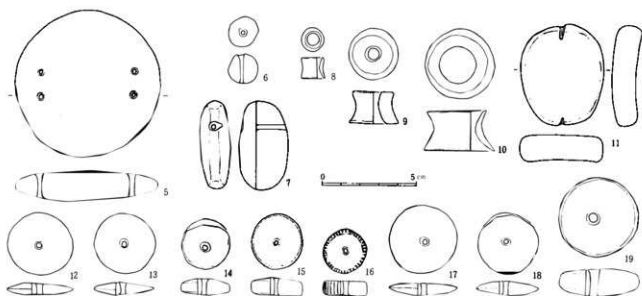


3



0 5cm

第166図 その他の土製品その1



第167図 その他の土製品その2

### g ミニチュア土器

本資料も出土総量は多くなく、16点を数えるに過ぎない。以下に個々の資料について述べることにする。

第165図—1 3号住居址出土。口径4.6cm、器高2.8cm、底径2cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。—2 10号住居址出土。口径7cm、器高4.4cm、底径2.2cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。—3 10号住居址出土。本資料は当初土鈴の半片と思われたが、底面が作られていることからミニチュア土器と判断した。口径6.3cm、器高4.3cm、底径1cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。—4 10号住居址出土。推定口径7cm、器高7.9cm、底径4.5cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。—5 12号住居址出土。口径3.5cm、器高2.7cm、底径1.7cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。—6 55号土城出土。底径3.2cm、現存高2cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、表面が荒れている。—7 125号土城出土。底径3.2cm、現存高5.5cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。—8 土器捨て場n 6小グリッド出土。現存高6cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、施文は丁寧である。—9 土器捨て場h 6小グリッド出土。現存高3.4cmを計る。赤色顔料が塗布されている。焼成は良好で、胎土に砂粒が多い。—10 土器捨て場J 6グリッド内出土。現存高2.5cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。—11 土器捨て場I 5グリッド内出土。口径4cm、器高4.1cm、底径3cmを計る。指頭による調整がなされている。焼成は良好。—12 D7グリッド出土。口径6.8cm、器高8cm、底径5cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。—13 D10グリッド出土。口径2.5cm、器高2.5cm、底径1.8cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。—14 D18グリッド出土。本資料も底面が作られており、土鈴ではなくミニチュア土器と考えられる。外面には指頭痕が残っている。口径5.5cm、器高3.1cm、底径1.9cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。—15 G9グリッド出土。台付きであったと思われるが、台部は欠損している。口径3.5cm、現存高2.8cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。—16 表面採取。底径4.8cm、現存高7cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。

### h その他の土製品

上記のいずれにも属さない土製品を一括して述べることにする。

第166図—1 83号土城出土。粘土塊を細長くし、一部をくの字状に曲げている。割れ面は二か所にみられる。

施文は沈線と列点文である。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されている。—2 C12グリッド出土。これも粘土塊を細長くし、下部の足状の付属物を付けたものと思われる。体部の両端は欠損しているが、頭と尾であろうか。なお、足状の貼り付けは前部が二本、後部が一本となっている。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、丁寧な作りである。—3 H6グリッド出土。土偶の足かとも思われたが、底面に孔が貫通しており、不明土製品とした。赤褐色を呈し、焼製は良好。胎土は精選されている。—4 土器捨て場 e 4 小グリッド出土。これも土偶脚部かと思われたが、前後に長く幅が狭いことから不明とした。あるいは土器の把手の一部であるかもしれない。褐色を呈し、焼成は良好。胎土には砂粒が多く、表面が荒れている。第167図—5 G5グリッド出土。蓋と思われる。3mm程の孔が2孔1単位で2単位存在する。紐掛け用の孔と考えられる。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。—6 土器捨て場 j 5小グリッド出土。土玉。中央に紐通し用の孔があげられている。暗褐色を呈し、焼成は良好。砂粒が多い。—7 E14グリッド出土。土玉。横方向に紐通し用の孔があげられており、ペンダントと考えられる。明褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、雲母が目立つ。磨きも非常に丁寧である。—8 4号住居址出土。耳栓。赤色顔料が残存している。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。—9 D10グリッド出土。耳栓。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、丁寧な作りである。—10 F7グリッド出土。耳栓。明褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、表面が荒れている。—11 2号住居址出土。土器片鏝。周縁部を丹念に磨いて楕円形に仕上げている。紐掛け用の溝はやはり擦って作り出している。重量40.6g。12~19 有孔円盤。この他に、もう一点出土しており、有孔円盤は計9点の出土である。これらは土製円盤とは違い、最初から有孔円盤として焼かれている。一点だけ施文されるが、文様は周縁部に施される。また、無文のものは断面がレンズ状の形態であるものが多い。それぞれの出土地点と重量は以下になっている。12: 6号住居址・6g 13: 22号住居址・5.6g 14: G2グリッド・4.5g 15: 土器捨て場 I3グリッド内・7.4g 16: 土器捨て場 J5グリッド内・5.1g 17: 土器捨て場 J5グリッド内・8g 18: 土器捨て場 J6グリッド内・6.2g 19: 土器捨て場 J6グリッド内・21.7g

## 6. 石製品

本遺跡では石器以外の石製品は、塊状耳飾り1点のみである。表面採取資料であり、遺構に伴うものではない。半分を欠損しているが、端部がきれいに磨かれており、確実に塊状耳飾りと言えるものである。推定で外径26mm、内径8mmを計る。メノウ製で丁寧な作りである。黄色を呈する。



第168図 塊状耳飾

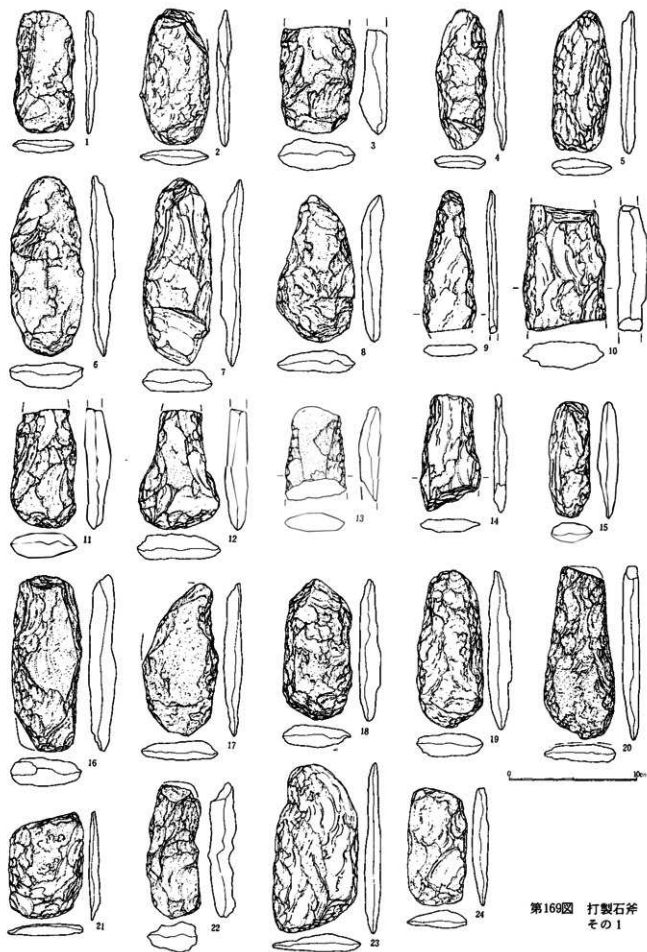
## 7. 石器

本遺跡で出土した石器は膨大な量にのぼる。とくに打製石斧は粘板岩を用いたものが多いため、その剥離片が多く総量を把握することはできない。

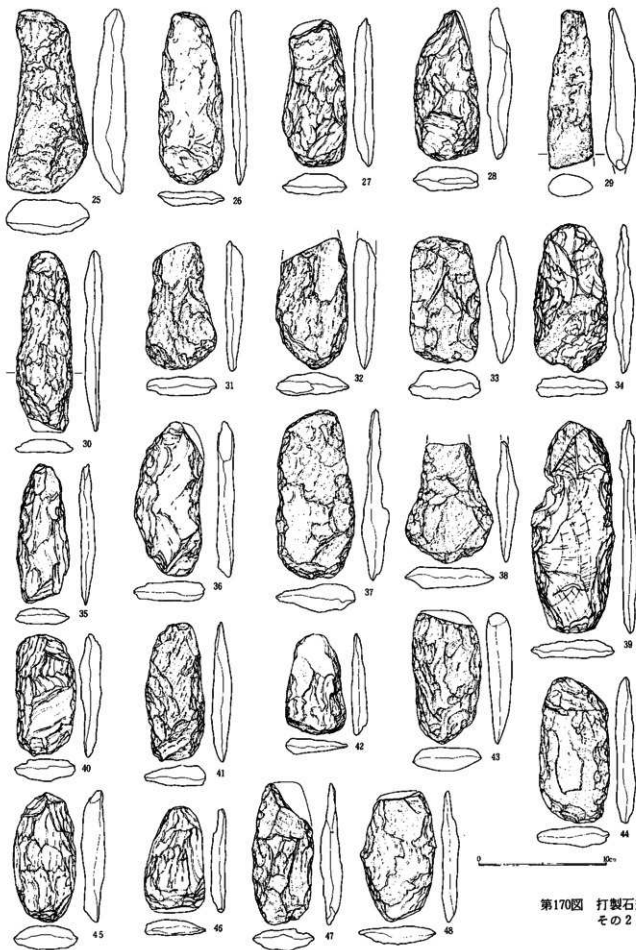
- 以下に
- a 打製石斧
  - b 磨製石斧
  - c 磨石・凹石
  - d 石皿
  - e 石匙
  - f 石鏝
  - g 石錐
  - h その他の石器の順で記すことにする。

### a 打製石斧

ここでは81点を図示するが、他に少なくとも167点の完形・半完形品が出土している。図示したものの内訳は、

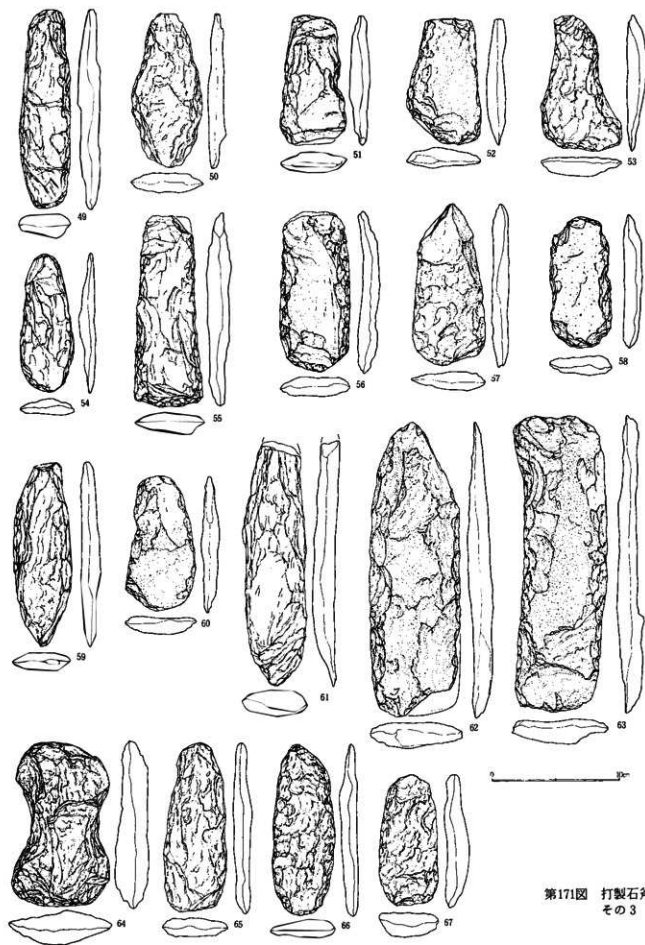


第169図 打製石斧  
その1

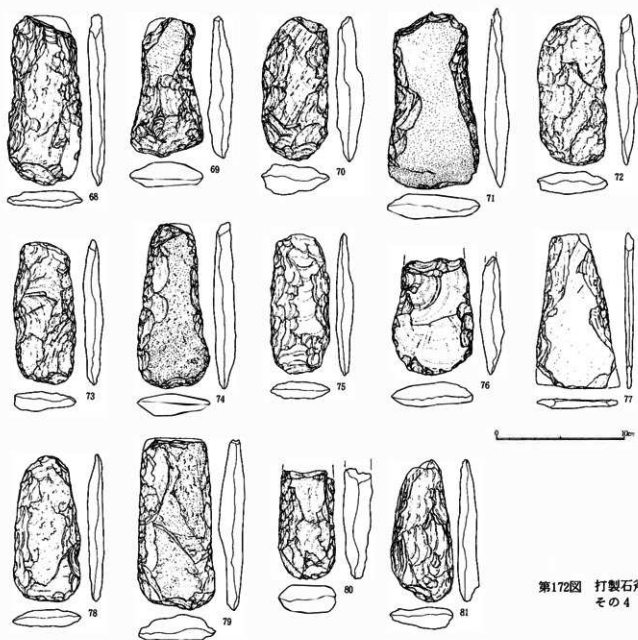


第170図 打製石斧  
その2





第171図 打製石斧  
 その3



第172図 打製石斧  
その4

短冊形45点、楔形24点、分銅形5点、不明7点となっている。図示しなかったものは、短冊形103点、楔形54点、分銅形8点、不明2点である。形態のはっきりしているもの全体での割合をみると、短冊形62%、楔形33%、分銅形5%で、分銅形はごく僅かであり、短冊形と楔形ではほぼ2対1の比率になっていることが窺われる。なお、分銅形としたもののうちの2点(31,69)は、楔形の中央がやや凹むもので本来の分銅形とは様相が異なるものである。

さて、図示したものの石材をみると、粘板岩が圧倒的に多い。その中でも、表面に粒のみられる点紋粘板岩を用いたものが多く、遺跡周辺で入手し易かったものであるかもしれない。粘板岩系の石材は真っ直ぐに剥離する性質があることから、この石材を用いたものは体部に反りが少ない。56・67などに僅かに反りが認められる程度である。一方、図示したものでは、29・53が体部に反りのあるものであるが、これらはともにホルンフェルス製である。ホルンフェルスは、このほかに4点(3・10~12)存在する。砂岩を用いたものも4点存在するが、粒子により二つに分けられ、細粒砂岩が2点(13・25)、中粒砂岩が2点(22・69)となっている。他では閃緑岩ポーフイーラーが1点(71)存在する。

自然面を残すものは1点だけ存在する。71で、これはかなり大きい母岩を打ち欠いて、周縁部に調整を加えて

整形したものである。したがって、裏面は剝離面となっている。確実に自然面を残すものはこの1点のみであるが、粘板岩については、その後の磨減や剝離などにより、製作段階での自然面の有無は不明である。なお、図示していないものの中にも明瞭な自然面を残すものは存在しない。

その他、打製石斧は住居址、土城などの遺構から出土するものより、グリッド、土器捨て場から出土したものが多く、なかでも、G15グリッドでは59~63の5本の打製石斧と第174図~24の磨製石斧が一ヶ所からまとまって出土していることを記しておく。これは遺構確認作業中に発見されたもので、6本の石斧は向きをそろえてまとめて置かれていた。意識してその場所に置いたものと思われる。

刃部形では円刃が最も多く、とくに短冊形を呈するものに多くみられる。図示したもので刃部形が明らかなのについてみると、円刃が43点、斜刃が15点、直刃が12点となっている。これに図示していないものを加えると、円刃が133点、斜刃が45点、直刃が32点となる。比率では、それぞれ63%、21%、15%となる。前述した形態との関係からすれば、短冊形を呈し、円刃であるものが最も多いということになる。個々の資料および図示できなかったものについては第8表に示すことにする。

第8表 打製石斧観察表

番号	出土位置	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	刃部形	重量 (g)	石 材	番号	出土位置	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	刃部形	重量 (g)	石 材			
1	2住	短冊	9.6	4.0	4.6	直刃	44.44	点紋粘板岩	32	ドクスタバ n-6			5.7	斜刃	111.36	点紋粘板岩		
2	5住M-5	"	10.65	3.6	4.7	円刃	75.71	"	33	ドクスタバ m-5	短冊	9.95	4.9	4.9	円刃	133.83	砂質粘板岩	
3	5住				5.3	直刃	141.82	ホルンフェルス	34	ドクスタバ	"	11.65	4.8	5.6	斜刃	107.98	粘板岩	
4	6住フク土	短冊	11.0	3.3	3.4	円刃	41.73	粘板岩	35	ドクスタバ g-6	楔形	11.05	2.9	4.2	"	53.68	点紋粘板岩	
5	6住フク土	"	11.15	3.75	4.1	"	84.66	点紋粘板岩	36	ドクスタバ m-7	"	12.3		5.2	"	115.87	"	
6	7住 25	"	14.15	3.8	4.8	"	139.66	点紋粘板岩	37	ドクスタバ m-7	短冊	13.4	5.1	5.9	円刃	136.56	"	
7	7住P-2堀	"	14.7	4.1	5.1	斜刃	131.00	点紋粘板岩	38	ドクスタバ m-7	分冊			6.9	"	103.71	"	
8	7住 22	楔形	11.6	2.7	6.05	斜刃	123.77	"	39	ドクスタバ S-8	短冊	16.7		4.0	"	145.51	"	
9	7住 20	"		2.1			44.36	"	40	ドクスタバ P-9	"	9.65	4.5	4.4	"	74.66	点紋粘板岩	
10	9住P-81					201.57	ホルンフェルス	41	ドクスタバ h-8	"	10.9	3.75	4.05	"	73.53	"		
11	9住S-2				5.2	円刃	121.45	"	42	ドクスタバ m-7	楔形	7.95	3.4	4.8	直刃	43.73	"	
12	9住S-6	分冊			6.35	円刃	116.26	"	43	ドクスタバ g-8	短冊	10.25	5.0	4.65	斜刃	116.62	"	
13	10住		4.0			74.05	"	44	ドクスタバ g-8	"	11.45	5.1	5.35	円刃	110.97	"		
14	10住	楔形	9.35	3.3		47.46	点紋粘板岩	45	ドクスタバ g-6	"	10.3	3.9	4.2	"	100.14	"		
15	13住	短冊	9.2	2.7	3.15	円刃	50.76	"	46	ドクスタバ i-4	楔形			3.2	4.6		46.66	"
16	13住	"	13.9	4.4		189.90	"	47	ドクスタバ g-4	短冊	11.2		4.55	円刃	83.53	"		
17	13住	"	12.0		5.9	斜刃	101.66	"	48	ドクスタバ	"	10.35	4.75	5.2	斜刃	87.71	"	
18	15住S-4	"	11.15	5.0	5.4	円刃	118.36	"	49	ドクスタバ j-6	"	15.6	3.0	3.35	円刃	129.84	粘板岩	
19	15住フク土	楔形	12.5	3.8	5.0	斜刃	139.54	"	50	ドクスタバ	短冊	12.1	3.5	5.1	斜刃	102.74	"	
20	15住S-1	"	13.65		5.6	円刃	136.19	"	51	ドクスタバ O-7	楔形	10.05	3.5	5.1	直刃	88.37	点紋粘板岩	
21	16住	短冊	8.6	5.8	5.7	"	49.43	粘板岩	52	ドクスタバ g-6	"	9.85	3.8	5.8	斜刃	86.45	粘板岩	
22	17住	"	10.7	3.55	3.8	"	100.96	中粒砂岩	53	ドクスタバ k-3	"	10.65	3.4	6.3	直刃	93.04	ホルンフェルス	
23	18住	楔形	13.4	4.7	6.65	斜刃	117.18	点紋粘板岩	54	ドクスタバ H-4	"	11.0	3.0	4.3	円刃	53.38	点紋粘板岩	
24	20住	短冊	9.3	4.0	4.15	直刃	59.92	"	55	ドクスタバ I-6	"	15.15	4.0	5.5	直刃	138.30	粘板岩	
25	21住P-46	楔形	14.55	4.15	6.5	斜刃	252.90	細粒砂岩	56	ドクスタバ J-6	短冊	12.65	5.0	5.45	円刃	151.43	点紋粘板岩	
26	22住	短冊	13.6	4.1	5.0	円刃	93.46	点紋粘板岩	57	ドクスタバ H-6	楔形	12.8	4.4	5.7	"	112.03	粘板岩	
27	22住	"	10.6	4.0	4.6	"	111.14	"	58	ドクスタバ I-5	短冊	10.5	4.6	4.7	"	97.56	点紋粘板岩	
28	9・10土	楔形	11.85		5.0	"	116.76	"	59	石斧集中G-15	"			3.7		103.44	"	
29	9・10土	"	1.8			107.90	ホルンフェルス	60	石斧集中G-15	楔形	10.65	3.7	5.2	円刃	74.30	"		
30	110土P-22	短冊	14.3	3.3		96.19	点紋粘板岩	61	石斧集中G-15	短冊	3.5	4.5	斜刃	224.47	"			
31	ドクスタバ g-6	分冊	10.25	4.0	4.5	円刃	85.98	"	62	石斧集中G-15	"	23.2	5.7			321.30	"	

番号	出土位置	形態	長さ (cm)	柄頭幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃形	重量 (g)	石 材	番号	出土位置	形態	長さ (cm)	柄頭幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃形	重量 (g)	石 材
63	石斧集 <sup>①</sup> 中G-5	短冊	24.0	6.75	6.2	直刃	348.80	点紋粘板岩	76	G-15	短冊			6.3		118.44	粘板岩
64	F-7	分銅	13.2	7.3	7.7	円刃	300.90	"	77	F-16	楔形	12.2			直刃	68.81	点紋粘板岩
65	E-7	短冊	13.55	3.6	4.6	円刃	111.48	"	78	G-11・7	"	11.6	3.5	5.1	円刃	97.36	"
66	D-11	"	13.55	4.1	4.2	"	105.42	"	79	E-15	短冊		5.0	6.1	直刃	215.51	"
67	E-13	"	10.5	4.0	4.5	"	108.37	"	80	D-3・107土	"			4.5	円刃	106.81	"
68	I-10	"	13.45	5.0	5.5	"	124.12	粘板岩	81	ドキステパ H-7	楔形	11.1	3.1	4.8	"	82.90	"
69	E-13	分銅	11.0	3.9	5.65		116.63	中粒砂岩	82								
70	G-10	短冊	11.45	4.9	5.2	円刃	143.56	点紋粘板岩	83								
71	I-11	楔形	13.9	5.8	7.3	直刃	231.32	点紋粘板岩	84								
72	C-9	短冊	11.8	5.0	5.0	円刃	117.69	点紋粘板岩	85								
73	M-5	"	11.45	4.5	4.6	"	96.98	粘板岩	86								
74	表土	楔形	13.1	3.0	5.7	"	141.10	点紋粘板岩	87								
75	F-17	短冊	11.1	4.0	4.7	"	84.63	"	88								

打製石斧 (計測のみ)

出土位置	形態	長さ (cm)	柄頭幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃形	重量 (g)	石 材	出土位置	形態	長さ (cm)	柄頭幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃形	重量 (g)	石 材
F-7	短冊	12.95	3.8	4.6	円刃	110.84	粘板岩	9住 S-5	楔形 (8.95)	3.5	(4.5)		斜刃	72.07	点紋粘板岩
G-7	分銅	14.7	3.9	5.05	"	148.38	"	110土 P-18	" (7.8)	2.35	3.95			24.80	"
D-15	短冊	12.2	5.15	5.15	斜刃	124.15	ホルンフェルス	10住	短冊 (11.85)	4.05	5.4			97.58	粘板岩
D-15	"	12.8	4.95	5.5	円刃	248.70	点紋粘板岩	ドキステパ h-7	"	9.3	(3.2)	3.75	円刃	58.18	点紋粘板岩
C-18	"	(12.4)	4.05	4.35	"	85.13	"	E-8	楔形	11.7		(4.1)		67.69	"
F-16	"	14.15	4.55	4.5	"	168.86	"	19住	分銅 (13.6)					247.90	"
F-15	楔形	14.9	2.7	3.95	直刃	149.53	"	ドキステパ G-5	短冊	11.6	(3.55)	4.85	円刃	88.45	粘板岩
F-10	"	16.8	5.2	9.95	斜刃	311.00	"	8住	楔形	10.0	3.65	(6.0)		73.90	"
表採	短冊	15.35	3.8	4.8	円刃	169.70	"	ドキステパ J-4	短冊 (10.8)	3.6	3.7	円刃	120.31	点紋粘板岩	
H-3	"	10.5	3.0	3.5	直刃	48.58	"	I-8	楔形	7.9	2.7	3.35	斜刃	39.78	"
G-4	楔形 (10.0)	4.6				135.51	"	G-5	"	9.3	3.5	5.25	直刃	62.18	"
22住	短冊 (10.7)		5.15		円刃	128.08	"	4住	" (10.6)			3.85		37.70	"
F-7	" (10.15)		5.25		"	145.92	"	C-5	短冊	9.35	2.7	3.05	円刃	38.10	"
22住	楔形	11.0	3.0	4.3	"	81.46	"	"	" (9.5)	3.35	3.95			61.08	"
D-7	短冊 (10.5)		4.25		"	113.91	"	G-9	"	9.65	3.2	4.0	円刃	52.08	"
E-3	" (10.45)		5.8		直刃	251.10	"	F-3	"	9.2	2.75	3.5	斜刃	35.56	粘板岩
C-16	楔形	11.3	3.2	3.3	円刃	56.19	"	E-7	楔形	8.2	3.15	4.4	"	48.48	点紋粘板岩
D-10	短冊	14.2	3.4	4.4	斜刃	75.76	"	21住	"	10.9	3.2	4.5	"	52.98	"
F-16	楔形	11.75		3.2	円刃	48.27	"	E-7	短冊 (10.4)			5.1	円刃	77.70	"
21住 P-45	短冊 (10.0)		6.75		"	210.66	細粒砂岩	G-16	"	9.6	3.6	3.95	"	55.59	"
13住	" (10.1)	3.8				52.51	点紋粘板岩	H-7	" (10.3)	4.35				131.79	"
6住	楔形	8.85	4.25	5.5	円刃	71.45	"	H-7	楔形	10.3	2.9	5.2	円刃	79.69	"
6住 フク土	"	7.7	4.3	直刃	44.02	粘板岩	F-8	短冊 (12.25)		7.65	斜刃			277.10	"
15住・7土	短冊	7.95	3.65	4.5	円刃	49.12	点紋粘板岩	ドキステパ J-6	楔形 (7.35)	3.4				28.95	粘板岩
表土	" (11.0)		6.95		直刃	159.87	粘板岩	D-6	"	12.5	3.7	5.1	円刃	119.58	点紋粘板岩
66~70土	" (9.0)		4.9		斜刃	108.04	点紋粘板岩	13住	"	14.5	2.1	4.45	"	144.87	"
ドキステパ J-4	" (6.55)		5.2		"	53.93	粘板岩	H-4	"	9.15	3.2	4.5	"	57.49	"
ドキステパ h-7	短冊	12.5	2.7	4.2	"	65.48	"	ドキステパ J-6	短冊	10.2	3.8	4.4	斜刃	80.24	"
ドキステパ i-8	"	8.65	(2.55)	3.5	円刃	29.63	点紋粘板岩	ドキステパ J-4	" (6.65)	3.5				54.04	"
表採	短冊	11.3	5.0	5.2	斜刃	113.99	"	C-12	"	9.8	3.5	4.15	直刃	65.89	"

出土位置	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃形	重量 (g)	石 材	出土位置	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃形	重量 (g)	石 材
G-10	楔形	7.45	3.15	4.65	直刃	58.36	細粒砂岩	E-15	楔形	8.5	1.65	2.7	斜刃	29.28	点紋粘板岩
ドクステパI-5	"	9.3	4.2	5.7	円刃	86.49	粘板岩	D-10	"	10.95	3.15	3.35	直刃	59.23	"
G-5	短冊	9.75		4.5	"	54.07	点紋粘板岩	10住	"	12.35		4.4	円刃	52.03	"
C-18	楔形	(8.5)		4.75	"	74.08	"	ドクステパI-5	短冊	9.6	4.2	4.25	"	57.85	"
D-8	短冊	10.95	3.0	5.2	"	81.64	"	15住 フク土	"	(6.95)	2.8		"	32.37	"
5住	"	(8.3)	3.6	4.3	直刃	46.84	"	ドクステパJ-6	楔形	9.3	2.9	3.85	円刃	39.5	粘板岩
表土	"	10.8	3.5	3.2	円刃	105.39	"	22住	短冊	9.85		3.8	"	43.40	点紋粘板岩
17住 E-10	"	11.8	4.6	5.5	斜刃	84.09	"	13住	楔形	10.65		3.6	"	37.03	"
ドクステパK-6	楔形	(11.1)				81.74	"	E-2	短冊	10.85		4.85		75.84	"
F-5	短冊	(13.6)	4.8	5.0	円刃	88.30	"	E-10	"	8.0	5.0	5.4	円刃	84.18	"
L-6	"	11.95	4.0	4.3	直刃	71.90	粘板岩	F-9	"	8.35	6.8	6.2	直刃	83.09	"
F-16	"	11.1	3.35	4.0	円刃	89.85	点紋粘板岩	E-7	"	10.2	4.2			73.49	"
	"	11.15	4.05	5.0	"	117.54	"	4住 E-3	楔形	10.1		4.3	円刃	74.14	"
G-2	楔形	13.85	3.75	5.7	斜刃	175.94	ホルンフェルス	表採	短冊	9.6	4.6	5.2	"	93.54	"
L-6	分銅	14.8	4.65	5.65	円刃	143.27	粘板岩	22住	"	(8.35)		4.9	"	59.91	"
F-17	楔形	10.55	2.9	5.5	斜刃	91.84	細粒砂岩	G-6	"	11.55	4.1	4.9	"	83.76	"
D-8	分銅	10.75	4.1	6.35	"	197.27	粘板岩	G-18	楔形	7.1	2.6	3.4	"	33.25	"
H-4		10.0	2.7	3.15	円刃	30.17	点紋粘板岩	13住	"	(8.35)		4.5	斜刃	47.02	"
I-5		(12.45)		7.1	"	232.77	粘板岩	ドクステパR-6	短冊	(9.3)		4.65	円刃	49.01	"
22住 P-185		(8.95)		4.2	"	81.82	点紋粘板岩	H-3	"	9.6	3.65	4.95	斜刃	76.83	ホルンフェルス
表土	楔形	11.1	2.7	4.45	斜刃	47.74	"	ドクステパI-6	"	9.7	4.7	5.5	円刃	83.40	粘板岩
13住	短冊	12.35		5.1	円刃	105.42	"	表採	"	9.65	3.15	3.55	"	32.97	点紋粘板岩
N-5	楔形	9.7	3.0	4.2	斜刃	58.92	"	ドクステパI-5	楔形	8.6	2.5	3.8	"	38.43	"
F-9	短冊	13.2	4.6	5.3	円刃	218.11	"		短冊	11.15	2.95	3.1	"	43.24	"
G-9	"	12.15		7.6	直刃	203.88	"	D-10	"	9.65	3.2	4.0	"	70.28	"
K-6	"	10.8	4.4		"	111.49	"		楔形	(8.25)				29.19	"
F-8	"	12.05	4.5	4.6	斜刃	111.86	"	ドクステパJ-6	短冊	8.95	2.75	3.35	円刃	59.56	"
ドクステパK-4	楔形	12.15				216.90	点紋粘板岩	一括	"	(8.2)	4.5			72.28	"
	"	10.55		3.95	円刃	33.63	粘板岩	G-16	楔形	8.5		3.25	円刃	30.96	砂質粘板岩
	短冊	9.45	3.65	3.9	直刃	59.18	点紋粘板岩	4住 E-3	短冊	(8.6)		4.5	"	51.56	点紋粘板岩
D-11	"	(13.4)				55.32	"	G-4	"	(9.05)		4.4	"	57.77	"
D-13	"	11.6	3.6	4.2	円刃	141.27	"	G-7	"	12.0	3.6	4.05	直刃	85.53	粘板岩
7住 P-1	楔形	(9.9)		3.1		40.35	"	ドクステパ セクションベルト	"	(10.4)	4.6			89.01	"
D-13	短冊	(11.45)	4.35	4.5	円刃	74.92	粘板岩	22住	楔形	10.0	2.5	3.8	円刃	48.05	点紋粘板岩
表採	"	10.6	2.3	3.05	"	44.27	点紋粘板岩	ドクステパI-5	短冊	11.7	3.3	3.9	直刃	102.14	"
	楔形	13.6	2.15	5.7	"	218.76	"		楔形	8.1		3.5	円刃	52.76	"
22住	短冊	9.1		4.65	"	52.36	"		短冊	10.5		4.4	"	102.16	"
H-6	"	(9.2)		4.4	"	78.38	"	I-9	"	13.55				103.99	"
D-6	"	11.5		3.8	円刃	72.52	"	表採	楔形	8.3		3.0	円刃	32.36	"
D-6	"	9.3	4.4	4.95	直刃	81.43	"	I-8	"	(8.95)		6.05	直刃	65.88	"
H-14	"	9.4	2.75	3.0	円刃	30.13	"	G-6	"	8.55		4.1	円刃	45.56	"
ドクステパJ-3	楔形	6.55	3.05	4.15	"	34.27	"	ドクステパP-8	"	(8.65)	3.5	4.0	"	38.95	粘板岩
	"	(9.4)		3.85	"	73.79	"	表採	短冊	(9.2)	4.05			78.07	点紋粘板岩
E-9	短冊	9.95	3.45	3.65	円刃	54.71	"	ドクステパI-6	楔形	9.95	3.05	5.1	直刃	85.12	砂質粘板岩
E-15	"	9.45		5.25	"	92.17	ホルンフェルス		"	10.25		4.15	斜刃	59.21	点紋粘板岩
E-6	"	(9.1)		4.7		103.06	点紋粘板岩	19住	短冊	8.15	2.9	3.45	円刃	39.25	"

出土位置	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃形	重量 (g)	石 材	出土位置	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	刃幅 (cm)	刃形	重量 (g)	石 材
9住	楔形	9.8		4.4	円刃	58.67	点紋粘板岩	2住 F-3 層土	短冊	12.85	3.5	3.9	斜刃	90.81	点紋粘板岩
F-6	"	10.5		4.5	"	49.52	"	2住 F-3 層土	"	10.7	3.6	3.8	"	64.03	"
C-9	短冊	(9.2)	2.8	(2.9)		30.69	粘板岩	22住	"	14.7	4.1	4.5	"	97.29	"
D-8	"	9.0	3.2	3.5	円刃	63.06	点紋粘板岩	2住 F-3 フタ内	"	8.35	3.2	4.1	"	32.58	"
H-8	楔形	8.0		3.45	"	43.20	粘板岩	4住 E-2 ベルト内	"	11.25	4.6	4.75	円刃	91.90	粘板岩
ドキスタバI-6	短冊	(10.55)	3.45			59.68	点紋粘板岩	ドキスタバE-4	"	8.95	3.5	4.4	斜刃	57.67	点紋粘板岩
M-5	楔形	8.2	4.15	6.5	直刃	82.27	粘板岩	ドキスタバE-8				円刃	66.21	"	
F-3	分銅	10.75	5.5	6.1	斜刃	128.02	点紋粘板岩	ドキスタバO-6	短冊	10.5	3.95	4.1	"	99.02	"
F-8	短冊	13.1	3.6	3.9	円刃	132.75	"	ドキスタバ	"	7.9	4.35	4.7	"	63.81	"
3住 E-2	"	10.9	4.1			82.80	粘板岩	ドキスタバI-7	"	10.25	3.65	4.1	円刃	60.06	粘板岩
5住	"	13.3			円刃	106.35	点紋粘板岩	ドキスタバI-7	"	4.5				86.09	点紋粘板岩

## b 磨製石斧

磨製石斧は41点を報告するが、乳棒状磨製石斧を第173・174図に、定角式磨製石斧を第175図に示してある。この他に基部、胴部、刃部などの小破片が14点と剥離片13点が確認されている。これらはすべて乳棒状磨製石斧の破片であるため、磨製石斧全体での比率は乳棒状が91%、定角式9%となる。これらの資料については第9表に示すが、このうち特殊な状況を呈しているものについて以下に述べてみたい。

第173図-9 16号住居址出土。幅に比べて長さが異状に短いが、これは本来もっと長かったものが胴部で折れて、そこを再研磨して基部としたものである。-11 20号住居址ピット内出土。これも中央部で欠損したものであるが、本資料は欠損部を再研磨して刃部を造り出したものである。第174図-25 C14グリッド出土。体部の片側に浅い抉りが入る。刃部形は斜刃である。-27 G2グリッド出土。砂岩製のため、焼けて赤変している。-28 H9グリッド出土。使用が激しかったと思われ、着柄部に光沢がある。-37~39 37・39はF7グリッド出土。38は表探資料である。これらはいずれも刃部を破損したために、再研磨して刃部を造り出そうとしたものであるが、すべて再研磨途中の未製品である。第175図-34 土器捨て場J5グリッド内出土。本資料は片面だけではあるが、明瞭な稜がみられ、定角式であることは疑いない。しかし、基部と刃部の断面をみてみると厚みが非常に違い、かつ断面形が不整形を呈している。おそらく、乳棒状磨製石斧の製作あるいは使用途中で破損、剥離したものを再研磨して小型の定角式磨製石斧を作ろうとしたものと思われる。

第9表 磨製石斧観察表

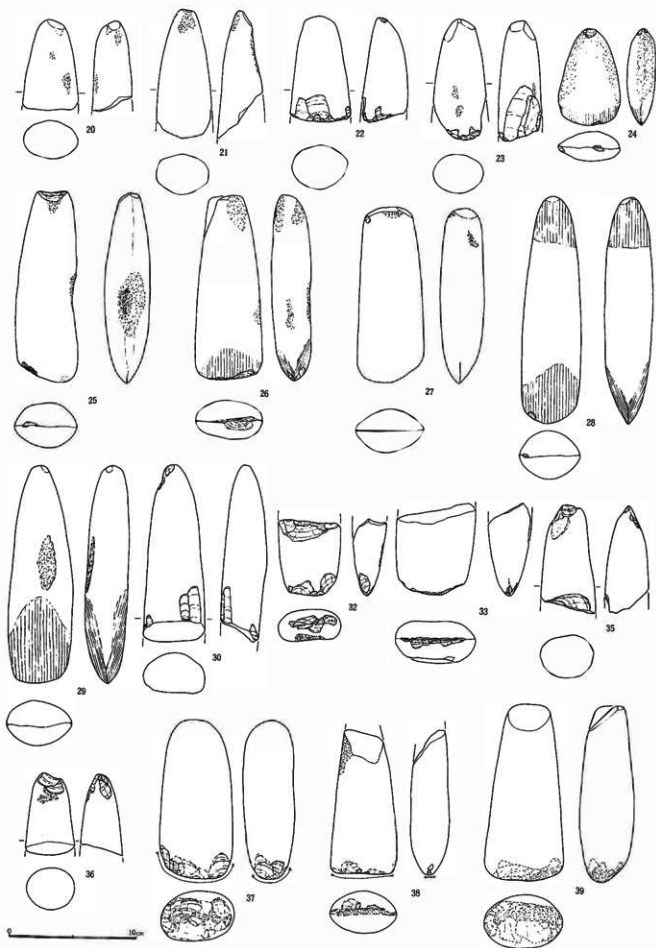
番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	そ の 他	石 材
1	2住 pit5	(5.7)	(4.95)	(2.25)	(86)		緑色、細粒、凝灰岩
2	2住	(6.95)	(3.2)	(2.15)	(64.5)	定角式	緑色、凝灰岩
3	4住	13.9	3.15	2.45	180.5		緑色、中粒、凝灰岩
4	5住	(8.45)	(4.4)	(2.9)	(125.5)		緑色、細粒、凝灰岩
5	10住 S-8	(6.7)	(3.5)	(3.15)	(104)		"
6	10住 S-1	13.7	3.9	3.35	279.5		"
7	12住 S-1	12.35	5.8	2.55	321.5	定角式	凝灰質、粗粒砂岩
8	16住 炉内	(12.85)	(5.25)	3.45	(350)		緑色片岩
9	16住	8.5	6.4	3.0	254.5	上部で折れたの多、再研磨して磨斧とする	玄武岩
10	17住 磨斧2	(11.85)	(5.0)	(3.75)	(305)		塩基性火山噴出岩
11	20住 pit2	9.75	4.0	2.55	153	中央部で欠損、その部分を研磨、刃部をつくり出す	緑色、凝灰岩
12	E-14 (22住)	10.8	4.3	2.65	208	片面の磨きは極めて雑	"
13	D.E-14 (22住)	(12.8)	(5.25)	(3.95)	(405)		凝灰質、粗粒石岩

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	その他	石材
14	D-14集石斧2(22往)	(11.9)	(4.1)	3.6	(277.5)		粗粒砂岩
15	ドキステバ h-4	(8.15)	(4.45)	(3.75)	(210.5)		"
16	ドキステバ e-3	(4.6)	(4.45)	(2.15)	(57.5)		細粒砂岩
17	ドキステバP-7	(8.45)	(4.95)	(3.2)	(201.5)		凝灰質砂岩
18	ドキステバ H-5	(9.7)	(6.1)	(4.85)	(526.0)		塩基性火山噴出岩
19	ドキステバ H-6	(5.7)	(4.3)	(3.05)	(116.0)		緑色細粒凝灰岩
20	ドキステバ H-6	(7.0)	(4.35)	(3.05)	(150.0)		細粒砂岩
21	ドキステバ I-5	(10.0)	(4.3)	(3.2)	(171.5)		塩基性火山噴出岩
22	ドキステバ J-4	(8.2)	(4.8)	(3.6)	(211.0)		凝灰質細粒砂岩
23	ドキステバ J-4	(9.4)	(4.1)	(3.35)	(179.5)		緑色塩基性火山噴出岩
24	G-15石斧集中⑩	(7.55)	(4.8)	(2.25)	(119.5)		凝灰質砂岩
25	C-14	(14.9)	(4.8)	(3.55)	(401.0)	片側に抉りが入る、斜刃	中粒砂岩
26	F-7	14.45	5.25	3.1	408.5	磨き雑でざらざら	緑色中粒凝灰岩
27	G-2	13.8	5.2	3.4	409.0	挽けて赤変している	緑色細粒凝灰岩
28	H-9	17.9	4.6	3.6	541.0	着柄部光沢がある	緑色凝灰岩
29	I-10	17.0	5.0	3.2	487.5		
30	E-14 (=22往)	(13.9)	(4.8)	(3.4)	374.0		細粒凝灰岩
31	F-11	(7.0)	(4.5)	2.1	(129.0)	定角式	ハンレイ岩
32	109土	(6.0)	(5.0)	(2.45)	(116.0)		中粒砂岩
33	I-5 (=ドキステバ)	(7.25)	(6.2)	(3.3)	(201.5)		"
34	ドキステバ J-5	(8.9)	(4.4)	(2.0)	(114.0)	乳房状石斧作中あるいは使用中に破損(刺離)	塩基性火山噴出岩
35	I-4 (=ドキステバ)	(8.5)	(4.15)	(3.45)	(168.5)	その部を再研磨して定角式磨斧を作ろうとしたと思われる	"
36	K-4 (=ドキステバ)	(6.5)	(3.85)	(3.2)	(112.0)		緑色細粒凝灰岩
37	F-7	12.6	5.75	4.0	(496.5)	破損部、再研磨の途中	凝灰質粗粒砂岩
38	表採	(11.45)	5.3	3.3	(276.0)	" "	緑色凝灰岩
39	F-7	13.8	6.15	4.2	583.5	破損部再研磨して刃部を作り出す→未製品	"
40	D-10				386.6	定角式	緑色片岩
41	E-8				480.6	定角式	粘板岩
他に遺構では107土 から乳棒状の小破片1点と、ドキステバ内から同状の基部1点が出土しているにすぎない。							
番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	その他	石材
	表採				(216.0)	両端欠損かつ裏面刺離	塩基性火山噴出岩
	D-4	(12.6)	(5.8)	(4.0)	(426.5)	刃部欠損	粗粒凝灰岩
	I-9	(14.1)	(4.9)	(3.75)	(360.5)	刃部欠損	緑色片岩
	G-6	(13.35)	(4.55)	(3.55)	(360.0)	両端欠損	ドレライト
	G-13	(11.9)	(4.75)	(2.7)	(209.0)	刃部欠損	中粒砂岩
	J-6	(11.1)	(3.9)	(2.2)	(155.5)	両端欠損	凝灰質粗粒砂岩
	D-9	(8.4)	(4.9)	(3.4)	(213.5)	両端欠損	中粒砂岩
	E-7	(6.9)	(5.3)		(123.0)	刃部のみ、斜め刺離	凝灰質粗粒砂岩
	F-9	(8.5)	(5.15)		(122.5)	刃部のみ、斜め刺離	緑色中粒凝灰岩
	表採	(4.55)	(4.35)	(2.7)	(64.0)	刃部のみ	"
	F-17	(8.8)	(4.35)	(3.1)	(154.0)	刃部のみ使用痕跡	緑色凝灰岩
	H-2	(7.65)	(6.1)	(2.35)	(175.0)	刃部のみ、刃部先端欠損、斜め刺離	凝灰質中粒砂岩
	C-7	(7.6)	(5.0)	(3.0)	(183.0)	胴中央部	緑色細粒凝灰岩

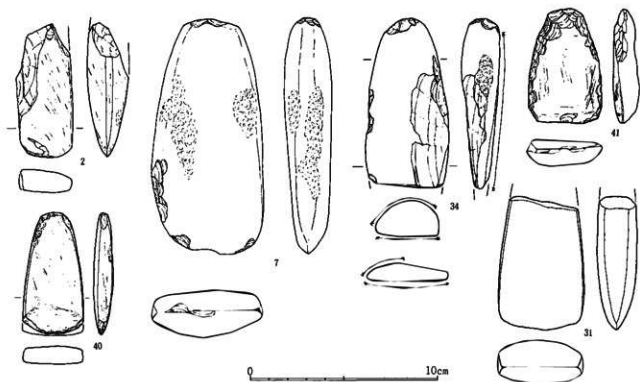


第173図 磨製石斧その1





第174図 磨製石斧その2



第175図 磨製石斧その3

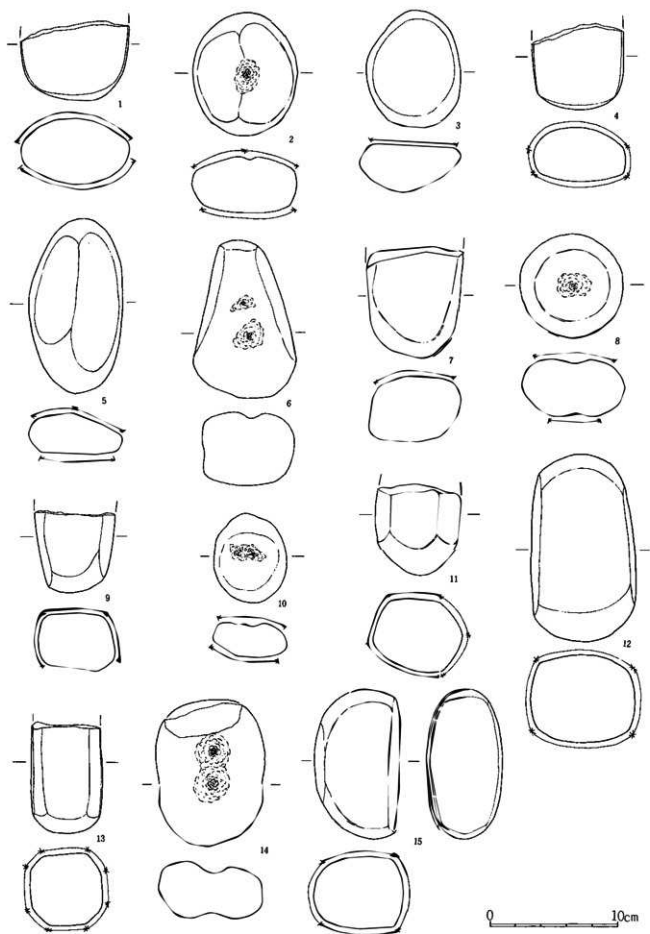
### c 磨石・凹石

磨石・凹石は44点を報告するが、この他に破損品など31点と磨石・凹石の小破片・剝離片が6点確認されており、合計で81点が確認されている。このうち、磨石としてのみ使用されているものは27点で、多くは凹みを磨り面に有するものである。個々の資料の計測値、使用面数、凹みとのセット関係などについては第10表に示しておくが、特殊なものについてのみ以下に記すことにする。

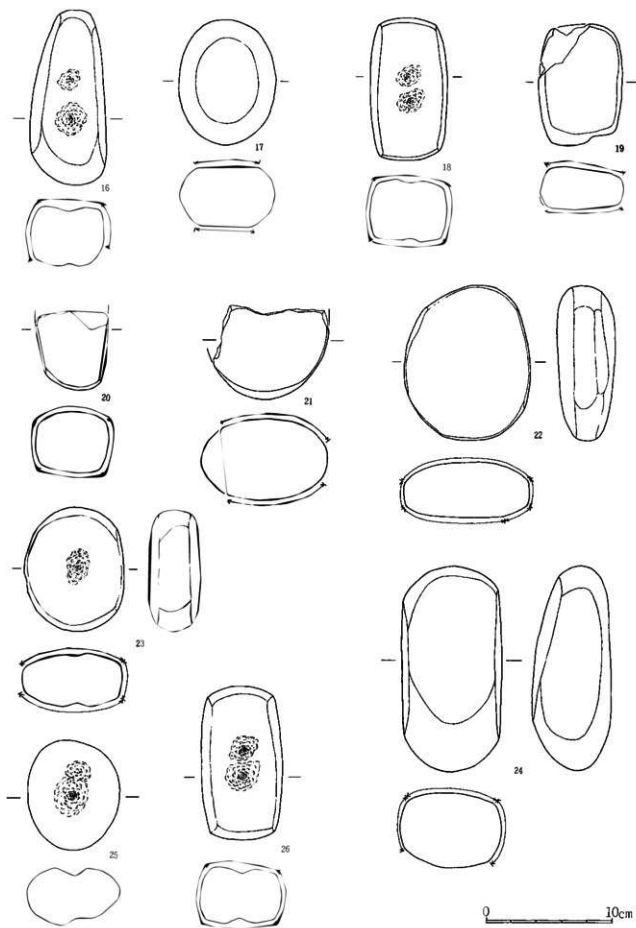
まず注目されるのは、非常に良く使い込んだために、本来丸い河原石であったものが半円形を呈するまでになったものが存在することである。15・24・27・32などがこれに当たる。とくに15は丸石の3分の1ほどが磨り減っており使用頻度が高かったことを示している。本資料は使用面は4面であるが、とくにこの1面が集中して使用されたと考えられる。ただ、「磨り」だけでこれほど減るものか、という疑問を感じる。例えば、民俗例をみると、トチむき石の使用法は「たたき」が基本であるが、使用面は長く使用することによってツルツルの状態になるのであり、「たたき」によっても磨石の使用面と同様の面になることが明らかである。もちろんすべての磨石を「たたき」によることは危険であるが、このような磨り減りの度合いの大きいものについては、その可能性を考慮する必要がある。なお、図示しなかったものなかにも表採資料中に2点だけであるが類例が認められる。

この他では、図示していないが、使用により表面に光沢のあるものが、1点だけであるが存在する。他の磨石・凹石にはこのような例はなく、特殊な使用法であったか、あるいは対象物が違っていた可能性がある。また、本遺跡資料中にも、凹み部が、その後の磨石としての使用のために浅く小さいものになった例が何点かみられる。凹みを付けたうでの使用例と言えるものであろう。この逆の順序で磨石として使用した後に凹みを付け、凹み石として使用した例は確認されていない。

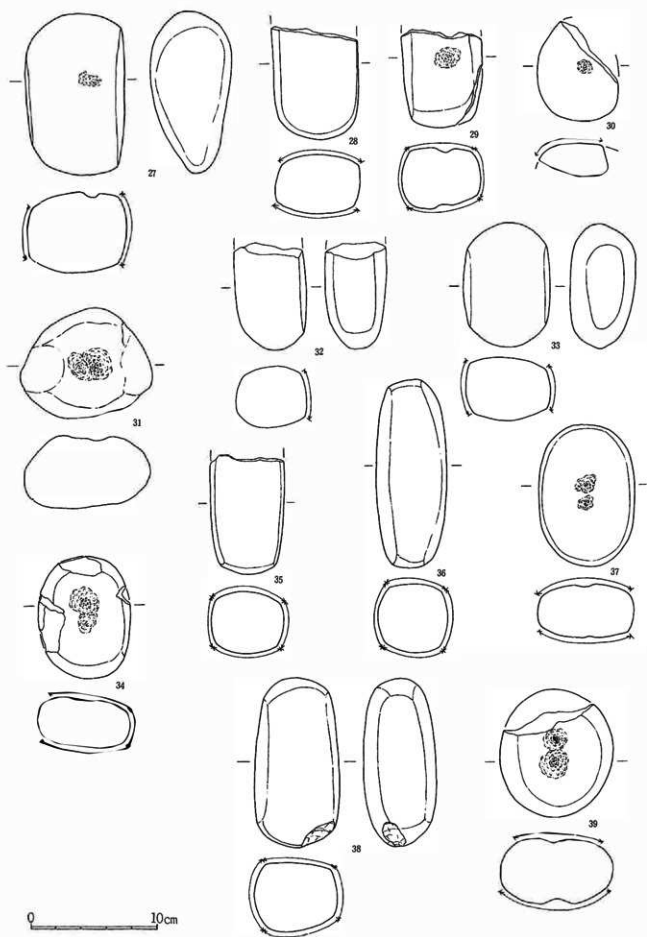
形態では細長い河原石を用いたものが多い。なかには正円にちかいものもあるが、数は少ない。やはり手に持って使用することから細長い形態の河原石が好まれたものと思われる。とくにこの形態の場合、4面全部が使用されているものが多く、さらにそれによって作り出された稜の部分を再び使用し、使用によって作り出された「面」が8面に及ぶものも確認されている。



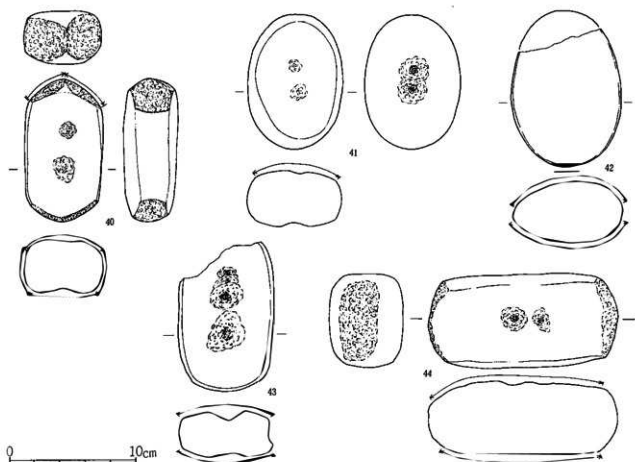
第176図 磨石・凹石その1



第177図 磨石・凹石その2



第178図 磨石・凹石その3



第179図 磨石・凹石その4

第10表 磨石・凹石観察表

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	使用面	その他	石材
1	2住 S-1	(6.15)	8.5	5.15	(411.5)	2	スリ	安山岩
2	4住	9.55	8.15	4.3	496.0	2	スリ・上下面に凹み、また上面は中央に縁、3面にスリ面あり	アイサイト
3	4住 pit9	9.2	7.45	3.8	367.5	1	スリ	石英閃緑岩
4	4住 E-3	(6.75)	7.2	4.2	(296.0)	4	スリ	玄武岩
5	6住	13.6	7.4	3.2	551.5	2	上面は中央に縁を有し、3面使用の形態	安山岩
6	7住 S-5	12.35	8.0	5.7	768.5	1	上面のみ凹み2ヶ	石英閃緑岩
7	7住 23	(8.65)	(7.5)	(5.1)	(596.0)	1	スリ	〃
8	12住	8.1	8.0	4.5	387.5	2	スリ・両面に凹み2ヶづつ	輝石安山岩
9	13住	(6.35)	6.25	4.6	(305.0)	3	スリ	石英閃緑岩
10	15住	7.0	5.7	2.8	129.5	2	凹みのみ	安山岩
11	18住	(7.15)	6.8	4.8	(446.0)	5	スリ	輝石安山岩
12	20住 S-2	14.6	8.15	6.8	1348.5	4	スリ	石英閃緑岩
13	20住	(8.6)	5.6	6.6	(515.5)	8	スリ・4面使用後4面の各コーナを磨りにつかう	カコウ岩類中の捕獲岩
14	21住 182	(11.2)	8.5	4.5	(526.5)	2	凹み・両面2ヶづつ	玄武岩
15	21住 127	11.7	6.9	5.75	759.5	4	スリ・横方面はよく使い込む	石英閃緑岩
16	21住 P-62	13.75	6.0	4.6	573.0	4	スリ3面、うち上面凹4ヶ、下面はみ凹のみ	安山岩
17	22住	9.8	7.6	5.0	580.0	2	スリ	閃緑岩ポーフイラー

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	使用面	そ の 他	石 材
18	15土	11.15	6.15	4.8	533.5	4	スリ・上下面には凹み2ケづつ	安 山 岩
19	55土	(9.6)	6.55	3.45	(345.0)	2	スリ・わずかに凹み上下面各2ケ	閃 緑 岩
20	109土	(6.1)	5.7	4.8	(268.5)	4	スリ・上面凹み1ケ	安 山 岩
21	122土	(7.35)	(8.5)	6.35	(607.5)	2	スリ	安 山 岩
22	5 埋室内	12.15	9.8	5.4	838.5	5	スリ・全周5面形成	輝 石 安 山 岩
23	ドキステバ f-6	9.6	7.8	4.15	506.5	3	スリ・上下面には凹みあり	安 山 岩
24	" k-4	16.15	7.75	5.9	1234.0	3	スリ・とくに横片面はつかい込む	玄 武 岩
25	" m-9	8.6	7.15	4.5	341.0	2	凹み各2ケづつ、磨きはなし	安 山 岩
26	ドキステバ	12.15	6.35	4.5	591.0	4	スリ上下面には凹み2ケあり	安 山 岩
27	ドキステバ o-7	12.65	7.85	6.3	971.0	3	スリ・横面のみ使用、片側は非常によく使い込む	デ イ サ イ ト
28	" l-6	(8.95)	6.7	4.7	(443.0)	2	スリ・上面に凹み1ケあり	安 山 岩
29	" l-7	(7.65)	6.15	4.8	(330.0)	4	スリ・上下面には凹み各1ケあり	玄 武 岩
30	" n-5	(7.75)	(6.2)				スリと凹み1ケ	安 山 岩
31	" H-5	10.55	8.6	5.7	664.0	1	2ケの凹み(スリは全くない)	ア プ ラ イ ト 質 岩
32	" I-6	(8.35)	5.6	4.8	309.5	1	横面使用	安 山 岩
33	" H-3	9.7	6.7	5.0	527.0	2	横面のみスリ	玄 武 岩
34	ドキステバ内	9.5	7.3	3.65	392.0	2	スリ・上面2ケ、下面1ケの凹み	石 英 閃 緑 岩
35	ドキステバ	(9.4)	5.9	4.95	(464.5)	4	スリ	玄 武 岩
36	C-7	14.7	5.5	5.4	749.0	4	スリ	デ イ サ イ ト
37	D-6	11.1	7.5	4.15	544.0	2	スリ・両面2ケづつの凹みあり	石 英 閃 緑 岩
38	D-9	13.1	6.6	5.5	849.5	4	スリ	輝 石 安 山 岩
39	D-10	(8.7)	8.7	5.15	(521.0)	2	スリ・両面2ケづつの凹み	安 山 岩
40	E-7	11.2	6.05	4.15	461.5	7	4面スリ・上下面に凹み各2ケづつあり、上端2面にスリあるいは縦きか、下部に縦きあり	石 英 閃 緑 岩
41	F-6	10.5	7.55	4.35	573.0	2	凹みが2面に2ケづつ、1面はスリに使う	
42	F-9	(10.8)	8.55	4.9	(645.0)	2	スリ	玄 武 岩
43	G-7	(11.65)	7.45	3.6	(455.0)	2	スリ・上面に凹み4ケ、下面に凹み2ケあり	安 山 岩
44	GH-7	14.9	7.5	5.8	985.0	2	2面 縦横 スリ面には2ケづつ凹みあり	玄 武 岩
45	C-9	16.6	10.15	6.5	1787.0	2	スリ・不明瞭	閃 緑 岩
46	F-7	(11.7)	10.1	7.15	(1270.0)	2	スリ・不明瞭	"
47	D-9	10.55	6.2	3.6	427.0	4	スリ・上下面凹み各2ケづつあるがほとんどわからず、凹後スリ石として使用	安 山 岩
48	F-8	12.85	7.8	4.7	755.0	2	凹みのみ上下各2ケづつあり	ホルンフェルス
49	D-7・127	11.6	6.45	4.75	641.0	4	スリ・各面2ケづつの凹みあり	玄 武 岩
50	I-10	8.45	7.35	4.4	394.0	2	スリ	玄武岩～安山岩
51	G-8	(9.45)	7.6	5.0	(579.5)	2	スリ	閃緑岩ボーフィラー
52	D-8	9.8	7.5	3.9	473.0	2	スリ・上下各2ケの凹みがあるが不明瞭、凹後スリ石として使用	安 山 岩
53	B-11	10.1	8.0	4.35	553.5	2	スリ・上下各2ケの凹みがあるが不明瞭、凹後スリ石として使用	石 英 閃 緑 岩
54	D-13	(8.7)	9.9	5.85	(751.0)	1	スリ・凹みが4ケあるがごく浅い、凹後磨り石として使用	閃 緑 岩
55	G-18	(8.5)	8.35	5.35	(500.0)	4	スリ・各面に凹みが2ケづつあり	安 山 岩
56	I-6	(5.65)	(7.35)	(4.55)	(214.5)	2	スリ・各面に凹みあり	"
57	H-4	(9.1)	(8.45)	(5.8)	(657.5)	1	スリ	石 英 閃 緑 岩
58	(22住?)D.E-14	(9.1)	(8.5)	(5.6)	(534.0)	2	スリ	"
59	C-9	(9.2)	6.15	4.3	(412.0)	2	スリ	"
60	K-4	(6.5)	6.5	4.1	(229.5)	4	スリ・上下面に凹みあり	玄武岩～安山岩

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	使用面	その他	石 材
61	C-4	(5.1)	(8.85)	(4.85)	(247.0)	3	スリ	安 山 岩
62	I-6	(16.4)	10.15	6.85	(1878.5)	2	スリ	"
63	K-6	(5.6)	(7.55)	(4.0)	(203.5)	4	スリ	"
64	E-8	(8.6)				2	スリ・上面に光沢あり	閃 緑 岩
65	I-6	(7.1)				2	スリ・各面に凹みあり	安 山 岩
66	D-7 126	11.1	8.9	4.45	697.0	2	スリ・上下面に凹みが各2ヶあり	"
67	ドキステパ I-7	(8.7)	(7.65)	(3.65)	(337.5)	2	スリ・凹みは2ヶづつあり	"
68	表 採	(7.5)	6.75	6.0	(497.5)	5	スリ	"
69	表 採	12.5	7.05	5.7	779.5	4	スリ・1面は非常に使い込む、15・24等に類似	ホルンフェルス
70	表 採	11.2	9.0	5.4	837.5	2	スリ・凹みが各2ヶづつあり	石 英 閃 緑 岩
71	表 採	(8.0)	(6.2)	4.25	(357.5)	3	スリ・横方面はよく使い込む、15・24等に類似	安 山 岩
72	表 採	13.05	6.75	3.75	585.5	2	スリ・凹みが各2ヶづつあり	閃 緑 岩
73	表 採	11.45	8.3	(5.55)	(587.0)	2	スリ	安 山 岩
74	表 採	(14.7)	(6.9)	(6.5)	(919.5)	4	スリ・横方面はよく使い込む	閃 緑 岩
75	ドキステパ I-6	8.6	6.0	4.35	368.5	2	スリ・各上面に凹みが1ヶづつあり	石 英 閃 緑 岩

その他：J3・ドキステパ I-6・F-4・ドキステパ F-4・D-3・D-10の各1点、磨石・小破片・剥離片が6点あり

#### d 石皿

石皿の出土量は少なく15点である。完形品は1点も存在しない。形態はいずれも周縁部に稜を有するもので、9・11・14は掻き出し口部の破片である。7はほぼ完形にちかいが、明瞭な掻き出し口を持たないものであり、2種類が存在することは明らかである。他はいずれも小破片であり、どちらのタイプか特定することはできない。また、磨り面についてみれば、部位によるものであろうが、1のような凹みの深いものと、7・9のように浅いものが存在する。

個々の資料については第11表に示すことにする。

第11表 石 皿 観 察 表

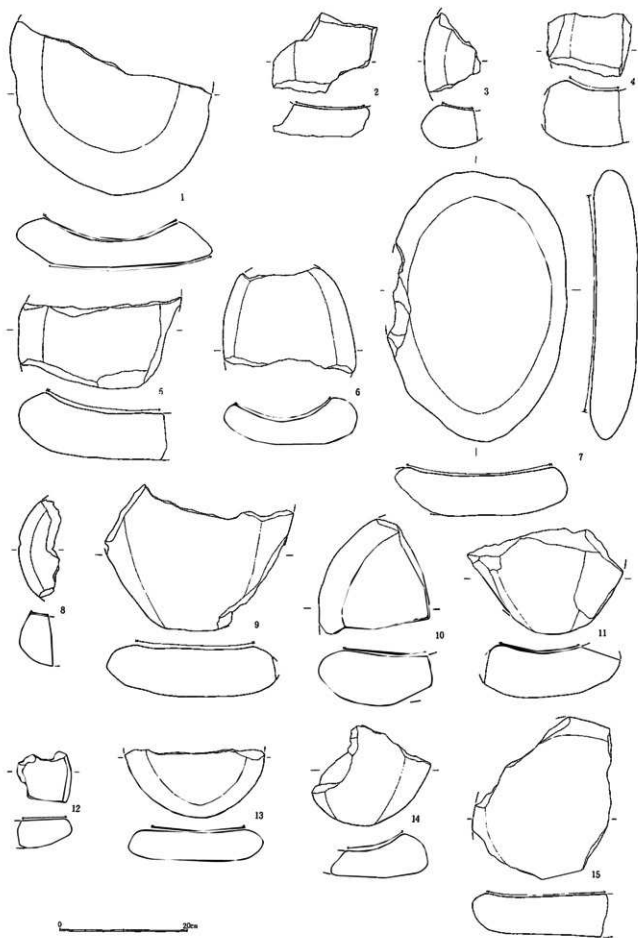
番号	出土位置	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	石 材	番号	出土位置	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	石 材
1	10住 S-2		30.6	4.0	輝石安山岩	9	ドキステパ I-5			7.4	玄 武 岩
2	11住			4.6	玄 武 岩	10	B-12			5.0	"
3	11住				"	11	F-7			7.0	"
4	15住				"	12	F-8				"
5	21住			7.2	"	13	G-2			4.4	"
6	22住 P-23			3.6	"	14	I-9			4.2	"
7	111土	42	27	6.2	玄武岩～安山岩	15	I-10			6.6	"
8	ドキステパ				輝石安山岩						

#### e 石匙

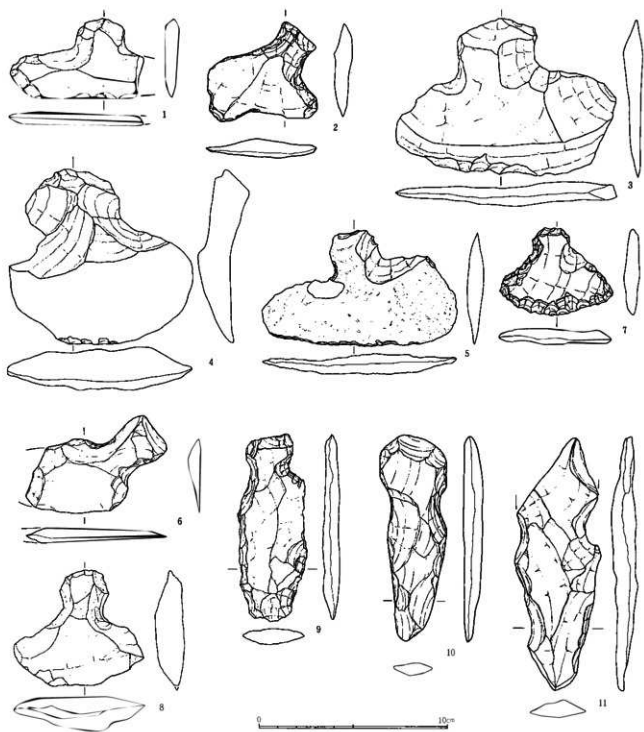
石匙には大型と小型のものがああり、大型のものを第181図に、小型のものを第182図に示した。図示しないものを含めると合計で28点の出土である。小型はすべて横形であるが、大型のものでは縦形が7点、横形が15点となっている。石材からは大型のものには粘板岩などが用いられ、実用的と言いつてもいい面もあるが、小型のものは黒曜石・チャートなど、鋭い割れ口をもつものが利用されている。

個々の資料については第12表に示すことにする。

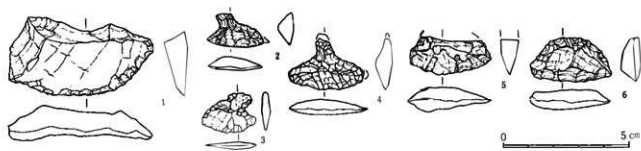




第180圖 石 皿



第181图 大型石匙



第182图 小型石匙

第12表 石匙 観察表

番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
1	10住	横	(6.95)	4.15	0.85	(22.0)	粘板岩
2	15住	"	5.9	5.15	1.0	(26.0)	安山岩
3	17住	"	(11.5)	8.3	1.0	(96.0)	点紋粘板岩
4	7土	"	9.5	9.1	2.2	145.5	ホルンフェルス
5	E-10	"	10.3	6.1	1.05	49.0	点紋粘板岩
6	E-14	"	7.1	5.4	0.7	21.0	砂質粘板岩
7	G-1	"	5.85	4.55	0.85	18.5	安山岩
8	表 採	"	6.8	6.0	1.85	48.53	ホルンフェルス
9	D-16	縦	9.65	3.6	0.9	37.0	砂質粘板岩
10	E-1	"	10.8	3.5	1.0	40.0	点紋粘板岩
11	H-6	"	(13.25)	4.5	1.35	(64.0)	点紋粘板岩
	H-5	横	8.55	6.55	1.3	70.5	ホルンフェルス
	D-9	"	(6.6)	5.05	0.95	(29.5)	点紋粘板岩
	I-6	"	(7.7)	(5.05)	1.35	(45.0)	チャート質頁岩
	D-8	"	7.7	5.45	1.15	39.5	点紋粘板岩
	C-9	縦	8.3	5.8	0.85	36.5	点紋粘板岩
	G-10	横	(6.15)	6.9	1.2	59.0	点紋粘板岩
	D-7	"	(5.7)	7.4	1.45	55.0	ホルンフェルス
	EF-4	縦	(7.7)	4.85	0.95	35.5	粘板岩
	A-12	"	(10.8)	4.0	0.75	34.0	点紋粘板岩
	I-9	"	(10.9)	4.15	0.85	49.0	点紋粘板岩
	I-7	横	(6.55)	5.3	1.1	47.0	点紋粘板岩

## 小型石匙

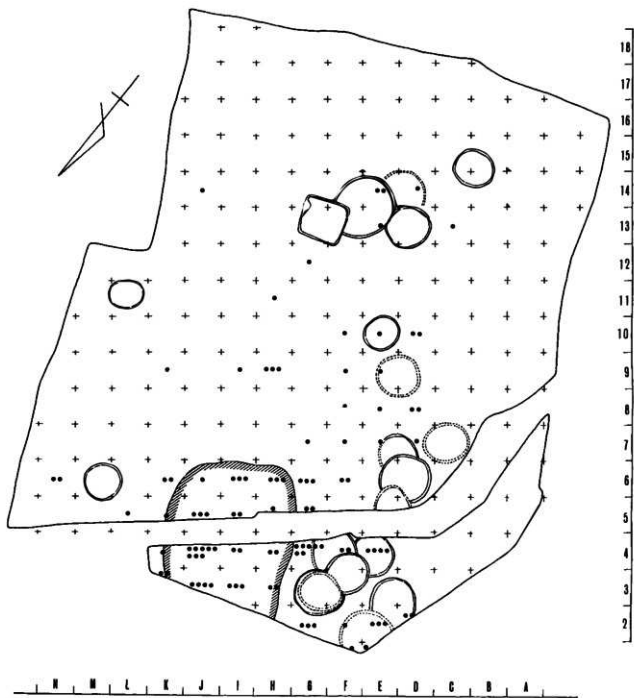
番号	出土位置	形態	長さ	巾	厚さ	重量	その他	石材
1	4住	横	5.65	3.1	1.2	19.86	ツマミなし	チャート
2	10住 S-3	"	2.25	1.35	0.5	1.23		黒曜石
3	13住 S-7	"	2.15	1.6	0.3	0.84		黒曜石
4	G-6	"	3.05	2.05	0.6	2.29		黒曜石
5	I-6	"	3.25	1.5	1.0	3.44	ツマミ部欠損	黒曜石
6	K-6	"	3.2	1.8	0.8	4.34	ツマミなし	黒曜石

## f 石鏃

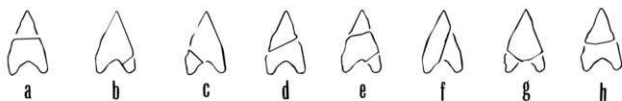
石鏃は出土量が多く、図示した54点の他に破損品を含め90点が確認されており、合計で144点となる。ただし、破損品のなかには脚部の破片も含まれており、ドリルや小型石匙の端部の破片である可能性もある。

形態では最も多いのが凹基無茎鏃で、図示したもので、基部の明らかなものでは44・51を除いたすべての資料が凹基無茎鏃である。44・51は尖基鏃であり、平基無茎鏃は図示していないものの中に3点存在するのみである。その他の形態は存在しないが、36は両側部に浅い抉り込みをもつもので、柄を取り付けるさいの紐掛け用の抉りと考えられる。

144点の石材をみてみると、チャート4点、水晶2点の他はすべて黒曜石である。黒曜石の産地については釈迦堂、豆塚、天神堂、天神、丘の公園などの諸遺跡の資料が分析されているが、信州系のものがほとんどである。神津島産のものも入って来てはいるものの、僅かである。S-I区(塚越北A遺跡)の中期の住居址から出土し

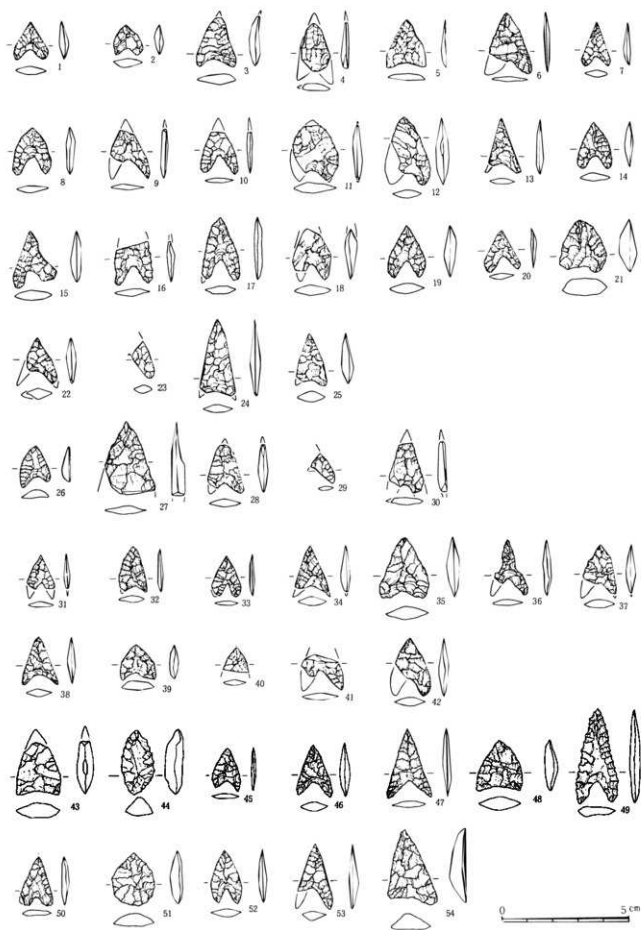


第183図 石鉄分布図



第184図 石鉄破損部位模式図

た剥片10点の同定結果では信州系のもので星ヶ塔産が8点、和田峠産が2点となっている。本遺跡の黒曜石についても同様に信州産で、星ヶ塔と和田峠の2種が存在するであろうと思われる。水晶については産地同定は行っていないが、甲府盆地北部の山間地（秩父山系の一部）では古くより水晶の産出が知られており、地理的に



第185圖 鐵 石

も近いことから、そのあたりの水晶であろうと推定される。

第183図にはグリッドおよび土器捨て場内から出土した石鏃の分布状況を示した。これも調査区域の北側に集中する傾向があり、かつ土器捨て場からの出土が最も多いが、特殊遺物として報告した土偶・土製円盤・有孔鈎付土器などに比べて土器捨て場への集中の度合いは少ないようである。土器捨て場から出土したものには完形品も含まれている。これは打製石斧や磨製石斧にも言えることであるが、土器捨て場から土器の完形品が出土しないということからすれば、石器についても同様のことが言えるものと思われ、その場合、打製石斧や磨製石斧では柄が、石鏃では矢柄が折れたものを廃棄したということも考えられよう。

さて、第184図には石鏃の破損品の割れ口のパターンを示した。a：先端部が真っ直ぐに欠けているもの、b：脚部の片方のみが欠けているもの、c：bの逆で脚部破片、d：先端部だけの破片であるが体部と斜めに割れているもの、e：先端部と脚部の片方を欠いているもの、f：bに類似するが脚部が中心から欠けているもの、g：両脚を欠いているもの、h：aの逆で真っ直ぐに割れた先端部、以上の8つパターンに分類してみた。最も多いのがbのパターンで35点を数える。次いでaとgが同数で11点、eが9点、cとfが同数で6点、hが4点、dが最も少なく2点となっている。この結果からは凹基無茎鏃では脚部が最も破損し易いということになる。個々の資料については第13表に示すことにする。

第13表 石 鏃 観 察 表

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
1	4住 pit7	1.55	1.35	0.4	0.39		27	42土	(2.9)	(1.95)	(0.55)	(2.29)	
2	4住	1.2	1.15	0.35	0.44		28	65土	(1.95)	(1.9)	0.4	(0.69)	
3	6住 炉	(1.95)	1.55	0.35	(1.0)		29	109土					(0.13)
4	6住	(1.9)	(1.15)	0.3	(0.67)		30	122土	(2.0)	(1.4)	0.4	(0.84)	
5	9住	1.9	1.55	0.2	0.62		31	ドキステパyl-3	(1.35)	(1.1)	(0.25)	(0.24)	
6	9住	2.4	(1.65)	0.25	(0.67)		32	" f-7	1.8	1.1	0.25	0.48	
7	10住	1.75	1.15	0.3	0.29		33	" g-5	1.6	1.15	0.2	0.23	
8	10住	1.9	1.55	0.4	0.61		34	" h-5	(1.85)	(1.45)	0.4	(0.64)	
9	10住	(2.0)	(1.55)	0.3	(0.47)		35	" i-7	2.4	1.95	0.5	1.83	
10	10住	(1.65)	1.45	0.25	(0.36)		36	" i-5	2.2	(1.3)	0.3	(0.38)	
11	10住	(2.15)	1.8	0.4	(1.49)		37	" i-6	(1.95)	(1.3)	0.4	(0.61)	
12	10住	2.7	(1.5)	0.5	(1.57)	チャート	38	" k-5	1.9	1.45	0.3	0.49	
13	11住	2.15	(1.3)	0.3	(0.34)		39	" k-9	1.4	1.4	0.35	0.6	
14	13住	1.85	1.4	0.35	0.63		40	" l-7	(1.0)	(1.0)		(0.21)	
15	13住	2.25	1.75	0.4	0.76		41	" l-8		(1.65)		(0.4)	
16	13住	1.6	1.5	0.3	(0.64)		42	" n-8	2.3	(1.4)	0.4	(0.63)	
17	13住	2.5	1.5	0.3	(0.78)		43	E-7	(2.25)	1.8	0.65	(2.78)	
18	13住	(1.95)	1.55	0.5	(0.93)		44	E-13	2.55	1.3	0.7	2.06	
19	13住	2.1	1.5	0.5	0.89		45	F-2	1.7	1.1	0.2	0.28	
20	13住	1.6	1.45	0.2	0.35		46	F-9	2.1	1.4	0.4	0.72	
21	13住	2.05	1.85	0.7	2.16		47	G-4	2.75	1.75	0.35	0.72	
22	16住	(1.8)	1.2	0.4	(0.47)		48	H-5	2.0	1.8	0.5	1.88	水 晶
23	21住				(0.33)		49	H-9	3.75	1.7	0.45	2.07	チャート
24	21住	(3.0)	(1.4)	0.45	(1.24)	チャート	50	J-4	1.35	(1.3)	0.3	(0.64)	
25	22住	2.0	(1.2)	0.5	(0.77)		51	E-4	2.15	1.7	0.5	1.83	水 晶
26	28土	1.65	1.2	0.35	0.44		52	i-5	2.1	1.2	0.35	0.52	チャート

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
53	J-4	2.65	(1.4)	0.4	(0.61)				2.05	1.3	0.55	(1.46)	h
54	K-6	3.0	1.95	0.7	2.59			23住	2.1	1.3	0.5	(1.08)	g
	E-1	2.2	1.4	0.3	0.67	完形もしくはほぼ完形		E-2 1周溝	1.9	1.15	0.35	(0.45)	b
	F-7	1.5	1.1	0.3	0.3	"		J-6	2.3	1.05	0.5	(0.73)	b
	E-14	2.1	1.6	0.65	1.21	"		E-4	1.85	1.2	0.45	(0.9)	g
	E-4	2.05	1.75	0.5	0.34	"		G-4	1.1	1.5	0.25	(0.32)	a
	F-4	1.95	1.5	0.65	1.70	"		L-5	2.1	1.1	0.25	(0.55)	b
	G-4	2.05	1.4	0.55	1.47	"		表採	1.9	1.35	0.35	(0.7)	g
	E-14	2.1	1.4	0.4	1.05	"		I-6	1.55	1.05	0.25	(0.32)	g
	F-1	1.6	1.1	0.3	0.42	"		F-6	2.2	1.4	0.5	(1.23)	b
	表採	2.05	1.2	0.45	0.86	"		表採	2.4	1.9	0.4	(1.31)	b
	J-5	1.6	1.2	0.3	0.38	"		I-3	1.3	1.1	0.5	(0.42)	b
	E-8	2.0	1.55	0.4	0.79	"		G-2	1.45	1.8	0.5	(1.26)	a
	G-7	1.8	1.4	0.3	0.5	"		G-12	1.8	1.25	0.25	(0.57)	a
	C-13	1.8	1.45	0.4	0.59	"		H-3	2.05	1.3	0.35	(0.71)	g
	D-10	2.65	1.55	0.4	1.0	"		D-2	1.8	1.35	0.35	(0.46)	b
	10住	2.15	1.35	0.6	1.23	"		E-4	1.7	1.1	0.4	(0.42)	g
	F-10	1.45	1.3	0.45	0.64	"		H-4	2.8	1.2	0.4	(0.71)	f
	E-2	1.55	1.45	0.45	0.29	"		D-8	1.9	1.55	0.6	(1.11)	b
	I-9	1.6	1.2	0.6	0.9	"		J-4	1.4	1.6	0.4	(0.72)	a
	J-5	2.2	1.9	0.75	2.15	"		G-2	2.15	1.65	0.3	(0.73)	b
	N-6	1.9	1.5	0.45	1.02	"		J-4	3.3	1.5	0.4	(1.50)	f
	H-6	1.75	1.45	0.5	0.8	"		G-4	1.85	1.5	0.35	(0.79)	b
	E-10	1.85	1.2	0.3	0.49	"		E-9	2.35	1.15	0.3	(0.47)	f
	F-4	2.7	1.95	0.55	1.94	チャート*		I-6	1.55	1.1	0.35	(0.36)	b
	G-6	1.4	0.75	0.25	0.16	"			1.7	1.1	0.5	(0.58)	b
	K-5	1.8	1.35	0.4	0.62	"		G-6	1.8	1.6	0.65	(1.71)	a
	E-15	1.9	1.6	0.4	0.84	"		D-14	2.0	1.75	0.55	(1.33)	h
	E-15	1.5	1.1	0.25	0.2	"		H-4	1.35	1.5	0.35	(0.65)	e
	J-14	2.3	1.45	0.4	0.85	"		I-4	1.8	1.4	0.35	(0.81)	g
	G-5	1.45	1.0	0.35	0.46	"		G-5	1.7	1.35	0.4	(0.7)	c
	N-4	1.35	0.9	0.35	0.3	"		H-6	1.6	1.1	0.45	(0.73)	a
	H-6	2.0	1.9	0.4	(1.01)	割れパターン		G-4	1.8	0.8	0.35	(0.33)	c(長脚薄片)
	D-8	1.6	1.0	0.3	(0.27)	d		I-6	1.4	0.8	0.35	(0.27)	c
	G-4	2.2	1.5	0.4	(0.81)	b		H-9	1.85	1.45	0.4	(0.73)	b
	E-9	2.0	1.2	0.4	(0.63)	b		G-6	1.6	1.6	0.4	(0.85)	e
	K-3	2.3	1.2	0.35	(0.62)	f		F-8	1.7	1.4	0.35	(0.68)	b
	D-10	2.1	1.85	0.35	(1.05)	e		G-2	2.25	1.2	0.35	(0.49)	d
	K-6	2.25	1.65	0.35	(0.74)	b		H-9	1.95	1.05	0.4	(0.37)	b
	表採	3.3	1.8	0.5	(1.95)	b		N-6	1.6	1.4	0.2	(0.4)	e
	H-11	2.0	1.5	0.4	(0.70)	b		F-6	2.2	1.3	0.4	(0.79)	b
	H-3	1.8	1.3	0.35	(0.49)	g		D-7	2.35	1.6	0.45	(0.98)	b
	J-5	1.8	1.2	0.4	(0.62)	b		P-7	2.4	1.7	0.5	(1.42)	b

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
	I-5	2.1	1.25	0.45	0.81	e		G-4	1.25	1.4	0.25	0.25	c
	K-3	2.8	1.35	0.4	0.83	b		E-2	1.6	1.65	0.25	0.5	a
	D・E-2	2.15	1.4	0.45	0.79	b		E-2	1.6	1.05	0.35	0.46	水晶b

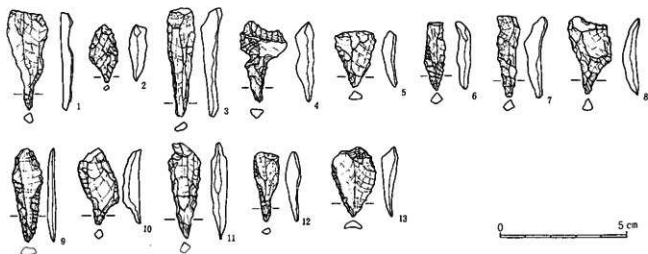
### g 石錐

石錐の出土量は少なく、16点を数えるに過ぎない。第186図にはこのうちの13点を図示した。7がチャート製である他は、すべて黒曜石製である。細長い剥片を利用して先端部に調整加工を施したもので、明瞭に錐部と頭部に分かれるものと、そうでないものがある。2・4・10が前者で、それ以外が後者である。後者が多いのも、剥片をわざわざ石錐にするために作り出したというのではなく、剥片残片を利用して、先端に調整を加えたものが多いためだと思われる。前者では頭部や両側縁部にまで調整が及んでいるが、1・6などは先端部のみの加工である。また、13は幅広の剥片を利用して、錐部を作り出すために側部を加工したもので、頭部の調整は行っていない。

個々の資料については第14表に示しておく。

第14表 石錐観察表

番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他	番号	出土位置	長さ	巾	厚さ	重量	石材・他
1	2住S-1	3.9	1.65	0.5	2.04	黒曜石	9	H-7	3.75	1.2	0.35	1.13	黒曜石
2	6住覆土	2.3	1.1	0.8	1.33	"	10	I-4	3.05	1.6	0.7	1.92	"
3	10住 S-3	4.3	1.1	0.7	2.18	"	11	I-8	3.8	1.3	0.6	2.4	"
4	E-4	3.2	1.85	0.75	2.41	"	12	J-5	2.75	1.0	0.6	1.03	"
5	E-9	2.25	1.65	0.5	1.33	"	13	O-10	2.8	1.8	0.65	1.9	"
6	E-14	2.7	0.85	0.55	0.96	"		E-10	3.15	1.05	0.6	1.16	"
7	G-8	3.2	0.85	0.7	1.48	チャート		E-14	3.0	1.75	0.85	1.05	"
8	H-5	3.1	1.7	0.5	2.22	黒曜石		J-14	2.8	(0.8)	0.5	2.88	"



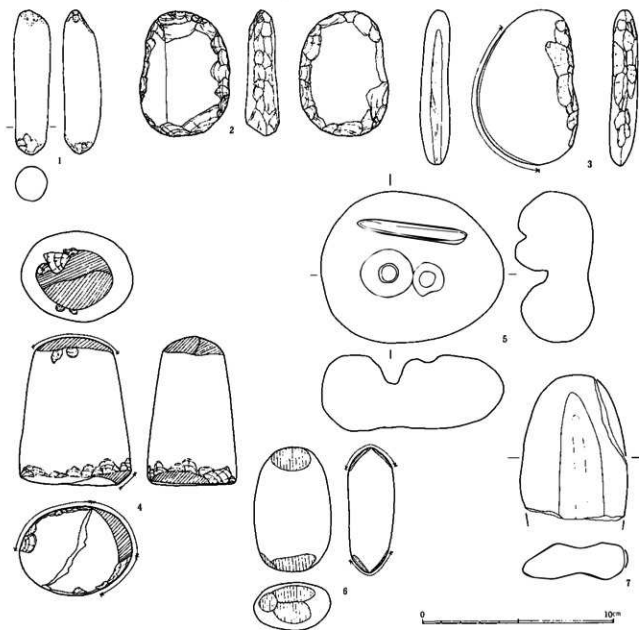
第186図 石錐



## h その他の石器

ここでは前述したa～gに属さない石器をまとめて報告することにする。

第187図—1 75号土坑出土。細長い河原石の両端部を叩いて使用したもので、叩きによって両端は磨滅している。重量46g。粗粒砂岩製。 —2 土器捨て場H4グリッド内出土。偏平な礫の周縁部を叩いて使用したものである。重量70g。中粒砂岩製。 —3 B11グリッド出土。やはり偏平な円礫の稜部の、一部を叩きに、反対側を磨りに使用したものである。重量93g。中粒砂岩製。 —4 表採資料である。一見、磨製石斧の基部～胴部の破片のようにみられるが、下面はほぼ真っ直ぐな面であり、破損品とは考えられない。下面の周縁部には叩きによる小さな剝離や、磨ったような表面の滑らかな部分が存在する。あるいはこの部分も叩きが集中したために、このような状況になったかもしれない。また、上部は滑らかであるが、これも叩きあるいは磨りに使用されたものと思われる。いずれにしても、手に握るようにして、上・下面を叩き付けて使用したものであろう。民俗資料中に類例をみるならば、形態的にはトチむき石が類似するものであろう。重量352g。緑色凝灰岩製。 —5 土器捨て場H6グリッド内出土。軽石である。上面には溝と孔がみられる。孔は円錐状にけられ、中段か



第187図 その他の石器

ら垂直に落ち込んでいる。裏面には細かい傷と浅い溝がみられるが、用途不明である。重量72g。 — 6 F 4 グリッド出土。楕円形の円礫の両端部を擦っている。擦り面は図の上部に二面、下部に三面存在する。手に持ってこすりつけたものであろう。重量101g。中粒砂岩製。 — 7 F 14グリッド出土。砥石。両面とも使用されているが、溝は極めて浅い。重量107g。粗粒砂岩製。

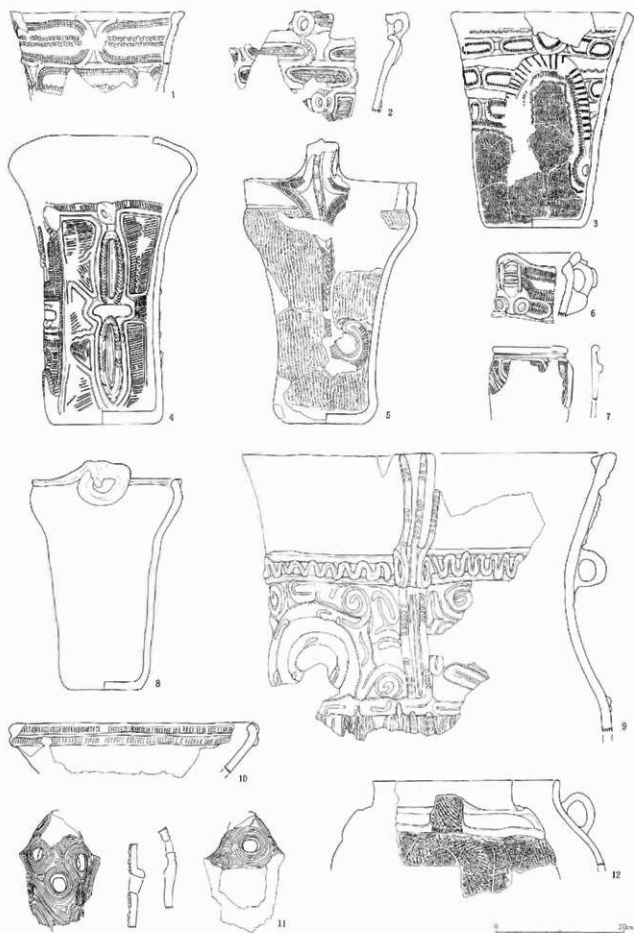
## 8. グリッド出土土器。

前述したように、本遺跡では遺構以外からの出土遺物が非常に多い。グリッドからの出土土器も膨大な量があるが、ここではそのうちの、完形・半完形の資料について概要を記すことにする。

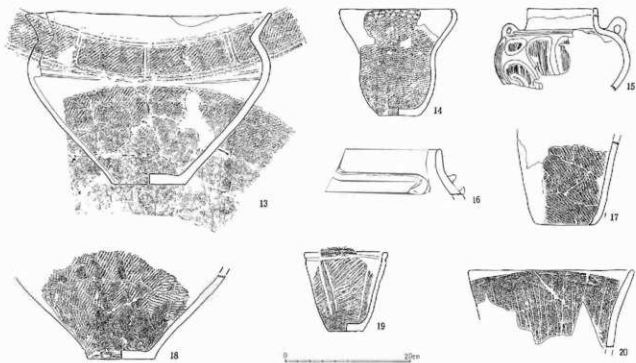
第188図—1 E 8グリッド出土。深鉢口縁部。推定口径27cm、現存高13cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、内面が荒れている。 — 2 I 6グリッド出土。深鉢口縁部破片。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨き・施文とも丁寧である。 — 3 表採資料である。深鉢。口径28cm、器高34cm、底径15cmを計る。明褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、内面の磨きは非常に丁寧である。 — 4 G 6グリッド出土。深鉢。口径16cm、器高45cm、底径16cm、最大径30cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。内面下半は黒変している。胎土は精選されており、磨き・施文とも丁寧である。 — 5 C 14グリッド出土。深鉢。推定口径24cm、器高44cm、底径12cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。 — 6 L 5グリッド出土。深鉢口縁部。褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、磨き・施文とも丁寧である。 — 7 M 5グリッド出土。深鉢。口径11cm、現存高9cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。 — 8 I 10グリッド出土。深鉢。口径22cm、器高36cm、底径11cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。内面下半にススが付着している。磨きは丁寧である。 — 9 F 15・16グリッド出土。深鉢。推定口径58cm、現存高44cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。 — 10 K 6グリッド出土。深鉢。推定口径37cm、現存高8.5cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。 — 11 B 15グリッド出土。深鉢把手。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、長石が目立つ。施文は丁寧である。 — 12 F 9グリッド出土。鉢。把手は2単位で両耳となるかもしれない。推定口径29cm、現存高18cmを計る。黄褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。 第189図—13 D 10グリッド出土。鉢。推定口径39cm、器高26cm、底径12cmを計る。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨き・施文とも丁寧である。 — 14 D 17グリッド出土。推定口径18cm、器高17cm、底径6cmを計る。明褐色を呈し、焼成は良好。内面は黒変している。胎土に砂粒が多く、表面が荒れている。 — 15 E 15グリッド出土。壺。2単位の小把手が付く。推定口径11cm、最大径21cm、現存高13cmを計る。黄褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、磨きは丁寧である。 — 16 F 9グリッド出土。壺か。灰褐色を呈し、焼成はやや不良である。胎土に砂粒が多い。 — 17 G 7グリッド出土。深鉢底部。底径9cm、現存高12cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多い。 — 18 H 7グリッド出土。鉢底部。赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多いが、磨きは丁寧である。 — 19 表採資料である。深鉢。推定口径13cm、器高13cm、底径6cmを計る。褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、磨きも丁寧である。 — 20 F 3グリッド出土。深鉢口縁部。推定口径25cm、現存高12cmを計る。暗褐色を呈し、焼成は良好。胎土に砂粒が多く、雲母が目立つ。内外面とも荒れている。

以上、完形・半完形の資料について述べたが、この他に、遺構の覆土を含めて繊維土器の破片が出土しているので第190図に示しておく。ここでは16片を拓本に示したが、破片は全部で50片ちかく出土しており、もっとも出土量が多いのはグリッドである。

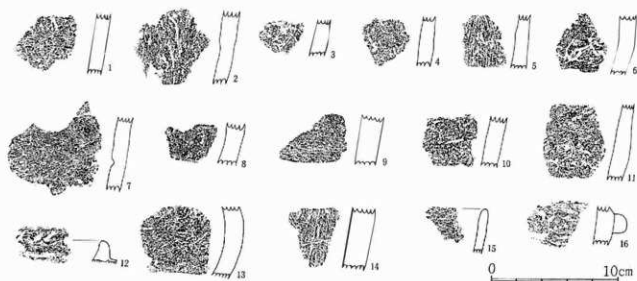
繊維土器は胴部の破片がほとんどであり、口縁部の破片は12・15の2片だけである。また、底部の破片は1片も確認されていない。16は隆帯を貼り付けたもので、胴部で文様が付くものはこの1片だけである。口縁部破片とした12にも口唇に刻み目が施されている。いずれの資料も繊維以外に小砂粒を多く含んでいる。なお、器壁の厚さについてみると、最も薄い15が6mm、最も厚い14が20mmとなっており、14は底部にちかい部分の破片かもし



第188図 グリッド出土土器その1



第189図 グリッド出土土器その2



第190図 繊維土器拓本

れないが、その開きが大きい。各資料の出土位置は、1は7号住居址、2は9号住居址、3は10号住居址、4・5は12号住居址、6は21号住居址、7は109号土埴、8～12は土器捨て場、13～16はグリッドからの出土である。これらは早期末に位置付けられるものであろう。該期の遺構は本遺跡では確認されなかったが、塚越北・三口神平の両遺跡で、下吉井式、神之木台式期の「集落」が調査されている。このような、集落と同時期の土器片の散布から、本遺跡をこれらの集落に住んだ人間の生活範囲と考えると差し支えないものと思われる。

## 第4節 平安時代

本遺跡では平安時代の住居址が1軒確認・調査された。また、グリッドからも該期の土師器が僅かながら出土しているが、これについては小破片でもあり、割愛する。以下に14号住居址について記すことにする。

### 14号住居址

(位置) F13・14、G13・14グリッド。

(形状) 方形を呈する。

(規模) カマドの張り出し部分を除けば、東西 510cm、南北 480cmを計り、壁高は南壁で60cm、北壁で50cmを計る。

(覆土) 覆土は暗褐色粘質土を主体とするもので、大きく二層に分かれている。ともに焼土・カーボンを含んでいるが、下層には多く含まれている。また、壁際には流れ込みによると思われる三角堆積土がみられる。

(カマド位置) カマドは東壁の南コーナー寄りに構築される。

(床面) 床は全体に硬く踏み締められているが、カマド前面はとくによい状態である。また、床面上には焼土・カーボンが飛び散っているが、図中の線内にはとくに多くみられた。

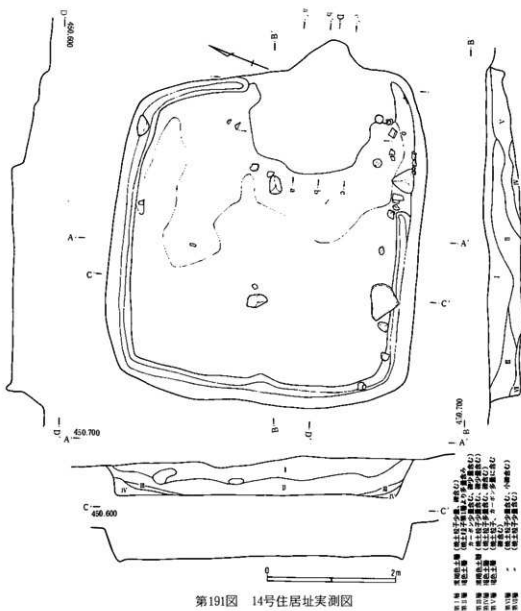
(柱穴) 本住居址では柱穴、貯蔵穴は精査したにもかかわらず全く検出されなかった。

(周溝) 周溝はほぼ全周するが、カマドおよび南壁の東寄りとは途切れている。巾10~20cm、深さ5~10cmを計る。

(遺物出土状態)

遺物のほとんどは土師器であるが、カマド内およびカマド前部に集中していた。

(カマド) カマド構築部分には花崗岩の巨礫が2個存在しており、燃烧部本体の掘り込みは全くみられない。煙道の掘り込みは30cmほどの長さである。

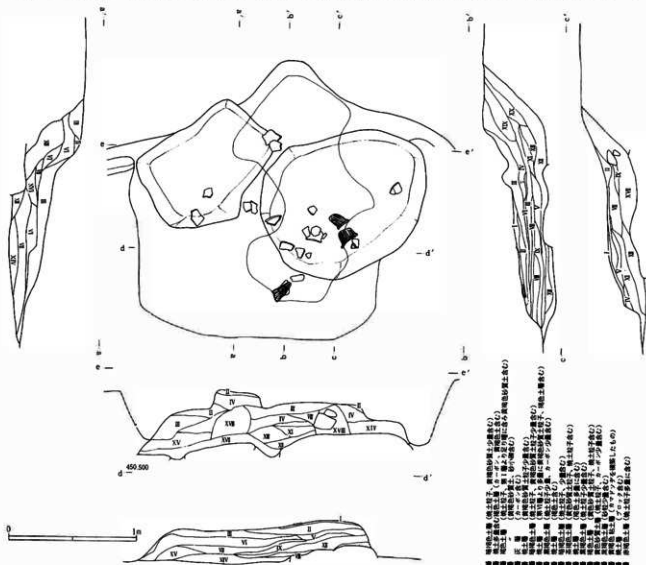


第191図 14号住居址実測図

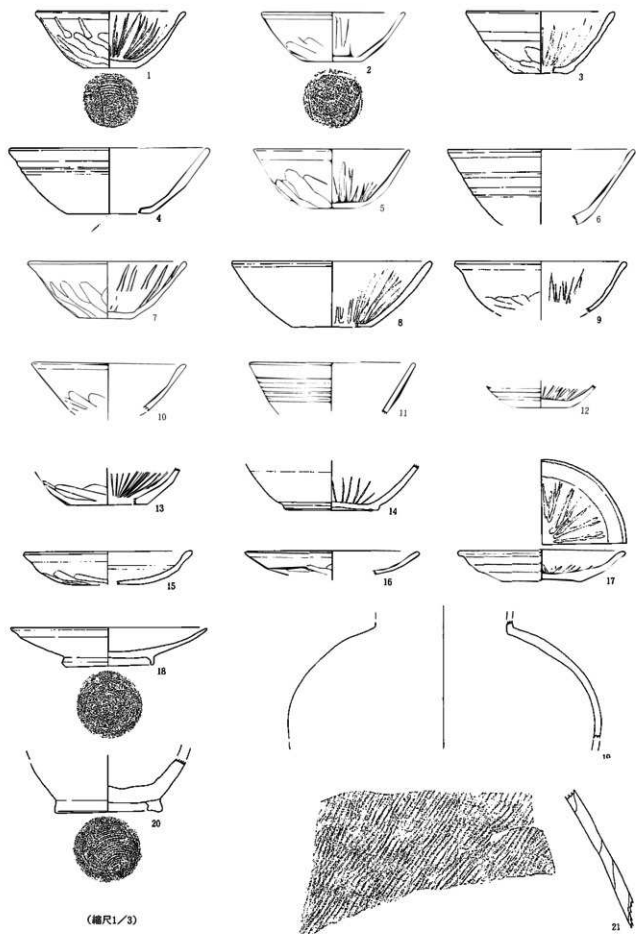
内部に袖石は存在せず、袖石代りに黄褐色粘土を積み上げている。セクション図は非常に複雑になっているが、これは主体となる暗褐色土の間に、焼土・カーボンが僅かず詰まっているためである。焼土層は何ヶ所にもみられるが、最も厚いところで12cmを計る。また、灰層も存在し、約5cmを計る。

(遺物) 遺物では土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、銅製品、古銭などが出土しており、第193図～第195図に示した。以下に各々について記すことにする。

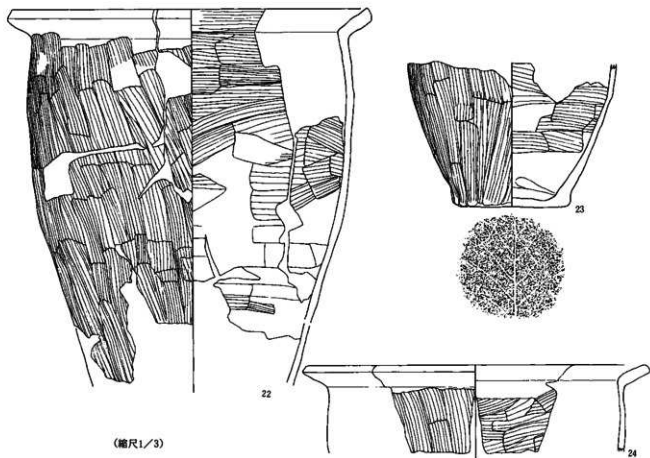
・土師器 土師器には環、皿、甕の3器種が存在する。環(1～14)は玉縁口縁を有し、体部下部および底面をへら削りしている。底面の糸切り痕は削りによってほとんど消えているが、1・2などには一部残っている。内面には放射状暗文の施されるものが多いが、4・6・10・11などには暗文はみられない。また、4・8は内面黒色を呈するものであり、他に小破片で2点認められる。これらの環は明褐色を呈し、焼成は良好。胎土は精選されており、赤色粒子を多く含んでいる。なお、4は暗文がみられないが、内面には磨きが施されている。皿(15～17)はいずれも破片であるが、この他に小破片が1点存在する。さて、図示した3点は15・16と17とで異なった様相を示すものである。15は16に比べやや身が深いが、成形、調整は同じである。これに対し17は、体部中段に稜を有し、内面のみこみ部に暗文が施されている。なお、下半および底面は回転へら削りが行なわれている。このようなみこみ部に暗文の施されるものは、本住居址出土の土師器とは期的に全く違うものであるとするのが一般的であるが、出土状況からは同時期に使用されていたと思われる。希に、このような前段階の名残を持つものがあるかもしれない。甕(22～24)は木葉底で体部外面が縦方向の、内面が横方向のヘケ



第192図 同カマド実測図



第193図 14号住居址出土土器その1



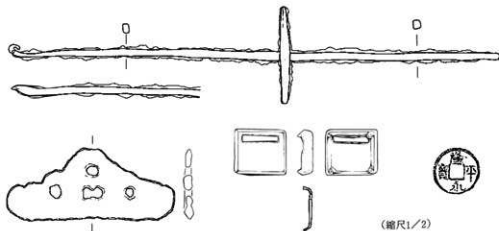
第194図 14号住居址出土土器その2

目が施されるものである。

・須恵器 須恵器は少なく、3点(19~21)のみである。21は大甕の破片で、外面には叩き目がみられる。成形はやや雑で、割れ口は輪積みに沿っている。また、明赤色を呈していることから酸化したものとと思われる。19は壺の破片であるが、長頸壺と思われる。20は底部で、これも長頸壺と思われる。

・灰軸陶器 灰軸陶器は1点(18)だけであるが、完形である。カマド脇から出土している。高台付きの皿で、台部は外縁に調整が施され、接地区が三角形になっている。また、灰軸は内面のみで、全面に施されている。灰軸の施軸状況と台部の形態とが合致しにくい面があり、前者では黒笹14号窯に、後者では同90号窯に比定されるものと思われ、本資料の位置付けは10世紀前半まで、としておきたい。

以上、出土土師器等について述べたが、主体となる土師器環からは10世紀第2四半期への位置付けが妥当であろう。また、灰軸陶器については土師器の時期および搬入の時間差を考慮すれば、時間的にやや遅れることが予想される。



第195図 14号住居址出土鉄製品・銅製品・古銭



・鉄製品 鉄製品は紡錘車と鎖が1点ずつ出土している。紡錘車は出土時点では先端のフック部分まで残っていた(写真図版27下段参照)が、折れたものを接着して保存処理を行なったために、処理過程で先端部分を紛失した。フック部分までの前長25.8cmを計る。鎖は凸形を呈した鉄板で長さ8.9cm、幅3.6cm、厚さ0.4cmを計る。中央には直径5mm程の孔が5個あいている。ただ、中央の孔2個はつながっており、結果として、4個の孔となっている。これらの孔は台板に取り付けるための孔と考えられる。鎖は県内では3例目と思われ、本資料以外では山梨市日下部遺跡から1点、塩山市雲峰寺経塚から1点が出土している。ともに実見していないが、日下部遺跡資料は、実測図からみる限り本資料と形態的には類似するが、5.4cm程と小型で、4ないし5個の孔ではなく、中央部が長さ2cm、幅0.9cmほどで不整形に孔があげられている。雲峰寺経塚例は石田茂作博士により火打鎌として報告されている。

・銅製品 銅製品は鈎帯金具で、2.7cm×2.4cmを計り、裏面に4個の鈎を有する。

・古銭 古銭は1点だけの出土で皇朝十二銭の一つ、隆平永宝(796年鑄造)である。

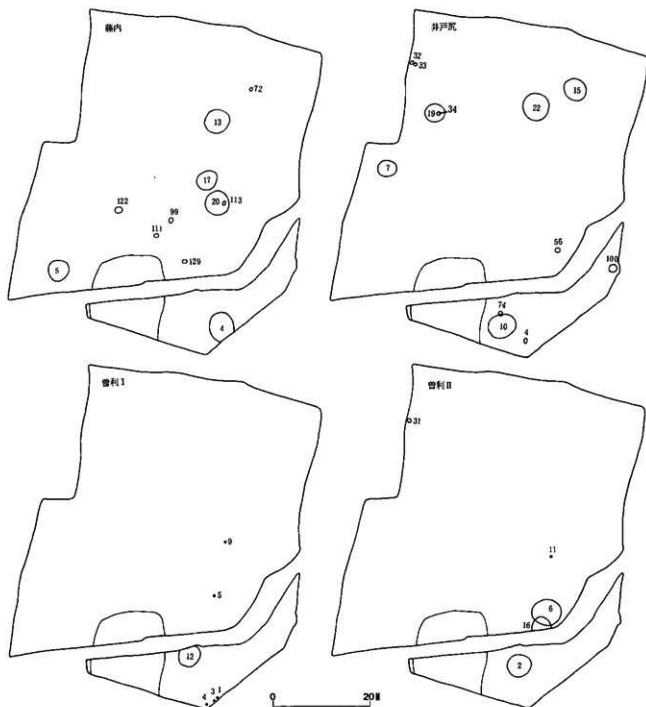
以上、個々の遺物について述べてみた。ただ一軒だけの住居址ではあるが、帯金具、古銭、鉄製品、灰釉陶器など遺物は豊富で、かつ一般の住居址から出土しないものも含まれていることから、10世紀前半の特殊な住居址であると言えよう。

## 第V章 ま と め

### ・野呂原遺跡の縄文時代の遺構変遷について

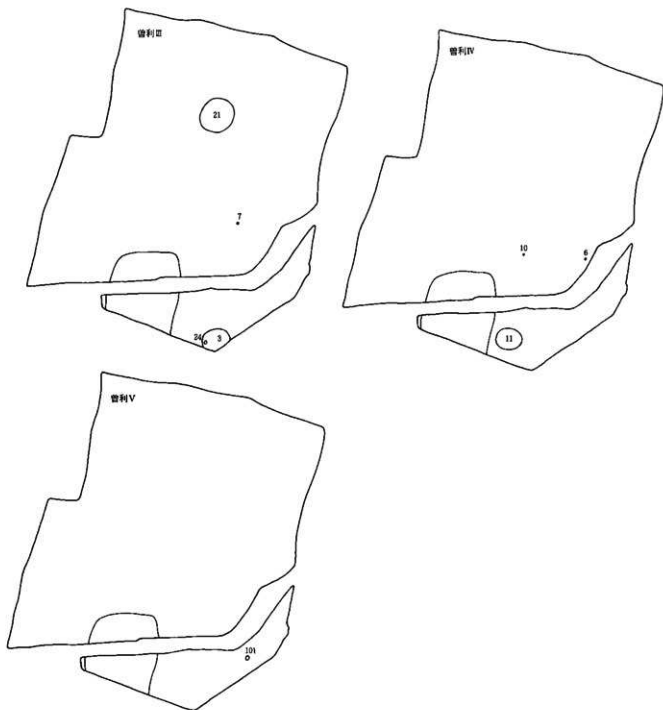
野呂原遺跡で確認された縄文時代の遺構は、住居址20軒、土坑125基、および土器捨て場1ヶ所である。以下に、時期のほぼ確定できる遺構について、時期毎の変遷を追ってみたい。なお、時期を確定するのは、完形または大破片を出土した遺構に限った。そのため、確認された遺構の内、とくに土坑のほとんどは変遷からは漏れることとなった。また、土器捨て場については、時期毎の面的広がりまで把握できなかつたため、すべての時期について同一の広がりとしてあるが、時期によって広がりには差があるであろうことは想像に難くない。

さて、ここで対象とするのは、住居址17軒、土坑16基である。土坑は確認されたものの1割程度に限られてし



第196図 遺構変遷図その1

まったが、出土した土器片が小破片で、しかも複数時期にまたがるものであるため、危険を避けてこの数となった。第196・197図に時期別の遺構位置を示したが、確認された遺構で最も古い時期は藤内期である。4・5・13・17・20号の5軒の住居址と72・99・111・113・122・129号の6基の土壇が存在する。遺構の配列は4軒の住居址が西側に縦に並び、土壇群および土器捨て場を挟んで、東に1軒の住居址が存在するという状況である。住居址と土壇の配置だけをみてみれば、内側に土壇群、その外側に住居址群が展開しており、調査区域内で環状を成すことが考えられる。しかし、この場合、東西の住居址の間隔が約30m、さらにその内側に8m以上離れて土壇群が集中することになり、中央部の広場が存在しなくなる。また、この時期に既に土器捨て場が形成されていたことは明らかであるが、土器捨て場が同心円のほぼ中心部にまで入り込む状況であることなどから馬蹄形あるいは環状という集落形態は、本遺跡のこの時期にはみられないとしておきたい。この時期の集落は、釈迦堂遺跡群で



第197図 遺構変遷図その2

はS-I区(塚越北A遺跡)で8軒の住居址から構成されていることが確認されており、出土土器からはさらに二分され、4軒ずつ二時期に渡って存在したとのことである<sup>1)</sup>。S-I区での集落形態が環状となるか馬蹄形となるかは集落を構成する住居数が少ないため不明であるが、ほぼ対面に存在すると思われる住居址間で約52mを計り、この内側に土塊群が存在する。この集落では土器捨て場は伴っていない。また、土塊群には完形土器が埋納されている例が多いようである。これに対し、本遺跡では上記の状態を示している。土塊については完形土器および大破片を出土したものについてのみ該期としている訳であり、土器を含め、遺物を全く出土しない土塊が存在することも充分考えられるが、曾利期などに比べ、完形土器を出土する土塊が多いことも事実であろう。次に、集落形態および土器捨て場については本遺跡と近接する塚越北A遺跡とで、明らかな違いが認められる。前者は環状あるいは馬蹄形を呈さず、土器捨て場を有する。後者は全く逆である。同一時期、近接という条件でこのような全く違う集落形態が併存する例とすることができよう。

井戸尻期は7・10・15・19・22号の5軒の住居址と4・32・33・34・56・74・100号の7基の土塊が存在する。調査区域の南側に4軒、北側に1軒と住居址は分かれるが、土塊群は必ずしも住居址群の内側に構築されるとは限らない。とくに、32・33号土塊などは花崗岩をくり抜いて作られていることから、作るべき場所に対する拘わりが強くあったと考えられる。この場所が、住居群の外側に位置することは当然承知していた訳であり、そのうえでここに土塊を掘り込んでいるのである。しかも、その中には数少ない出土遺物である顔面把手が完形土器とともに埋納されていたことから、この土塊が様々な意識の基にこの場所に造られたとすることができよう。さて、南北の住居址間は約40mを計る。また、中央の遺構空白域(広場)は直径30m程度と推定される。土器捨て場は、出土遺物からこの時期が最も面的広がり大きい時期であると言える。位置は集落の広場にやや入り込む状況であるが、これによって広場の存在が危うくなるという状況ではない。したがって該期は土器捨て場の位置にやや問題があるものの、環状あるいは馬蹄形の集落形態を成すと言ってよいであろう。県内での該期の集落は境川村一の沢西遺跡が知られている。そこでは同心円状の遺構配置が確認されており、住居址群の内側に土塊群が存在し、さらにその内側が広場となるが、住居址間が70~80m、広場の直径が30mと考えられている<sup>2)</sup>。本遺跡とは広場の大きさがほぼ同じであるが、同心円での住居と土塊の位置が逆であること、その規模などが相違点としてあげられる。また、74号土塊は北関東系大木8a式土器の完形品を出土しており、一の沢西遺跡に次いで二例目の確認となり、該期に北関東からの物あるいは人の流入があったことが窺われる<sup>3)</sup>。

曾利I式期は12号住居址と1・3・4・5・9号の5基の単独埋葬が存在するだけである。土塊については確実に該期とできる資料は存在しなかった。さて、住居址1軒に対し、単独埋葬が5基という数値は不自然である。第Ⅲ章第3節3項で述べたように、大型の単独埋葬については個々の家族あるいは住居にのみかわりをもつ、とするよりも複数の住居もしくは集落で共通のかわりを有するという性格も考えるべきであろう。本住居の該期の単独埋葬では、9号を除いて内部からごく僅かではあるが、骨片が出土している。この骨片の分析は行っていないが、該期には確実に住居内埋葬が存在するのであり、このような大型の屋外単独埋葬を埋葬施設とのみ、とは考えにくい面もある。大型の単独埋葬は、該期だけにみられるものであり、土塊墓などを想定すれば、埋葬のうち、住居内を小児用、住居外をやや成長した子供用とする考え方は必ずしもそれがすべてとは言えないと思われる。具体的用途は不明ながらも、大型の単独埋葬のうちいくつかは複数住居あるいは集落に帰属するものと考えたい。またすべてを埋葬施設とすれば住居址を挟んで二ヶ所に集中し、墓域の直線上の中間地点に住居址は存在することとなる。いずれにしても、単独埋葬5基に対し、住居址1軒というのは考えられず、また、土器捨て場の存在からも調査区域が該期の集落の東の外れに当たるものと思われる。どの程度の規模で、何軒から構成されるかは全く不明である。

曾利II式期は2・6・16号の3軒の住居址と32号土塊および11号単独埋葬とが存在する。該期も集落の形態、規模など全く不明である。土塊は住居と全く離れた場所に作られているが、これも花崗岩を削っており、作るべき場所に対する強い意識があったものと推定される。その結果、住居と離れた場所になったのである。土器捨て場は該期も確実に続いている。これらの位置関係を考慮すれば、とくに土器捨て場と住居址との位置から、集落

はさらに西側に広がると推定され、土坑は特殊な事情により、離れた場所に作られたとするのが妥当であろう。

曾利Ⅲ式期は3・21号の2軒の住居址と24号土坑および7号埋壘が存在する。住居址は約40m離れているが、集落の規模・形態は不明である。また、単独埋壘は加曾利E式で、4段階に分けた場合のⅢ式に位置付けられるものである。明らかな搬入品であるが、連弧文系土器の埋壘使用例もあり、このように搬入品が埋壘に用いられる例も散見される。

曾利Ⅳ式期は、11号住居址と6・10号単独埋壘が存在するが、確実に該期と考えられる土坑は認められない。該期も集落の規模・形態は不明である。

曾利Ⅴ式期は101号土坑だけの確認である。また、土器捨て場からの出土遺物も該期のものは極めて少なく、集落の規模自体も小さいものであったと推定される。

以上、各時期毎の遺構の消長について述べてきたが、集落としての規模・形態がある程度判明したのは井戸尻期だけで、他の時期についてはほとんど不明であるとした。井戸尻期については、2ないし3段階に細分されることが明らかにされている。本遺跡においても、4あるいは100号土坑などが古い様相を示し、逆に10号住居址の一括資料は最も新しい時期に位置付けられるものであることは明らかであり、細分を行なうことは可能であるが、該期の土器編年はまだ充分検討されておらず、ここでは一時期として扱うことにした。

#### ・土器捨て場について

本遺跡の土器捨て場からは早期末～前期初頭の繊維土器が僅かと中期全般の土器、さらには土製品、石器などが出土している。また、本文中には記載しなかったが、土器捨て場埋土中からは骨片も僅かながら出土している。焼土・カーボンの集中する部分が確認されていることについては触れたが、これと係わりを持つものであるのかもしれない。さらに、土器片に混ざって炭化したクリも出土しており、炭化物以外の自然遺物も、出土していないもの、土器捨て場中に廃棄されていたことが予想される。

さて、土器捨て場については、調査例が少なく、また、それについての考察も当然のことながら少ないものとなっている。そのなかで、中野修秀氏は土器捨て場をゴミ捨て場と解釈している<sup>4)</sup>。中野氏は集落における土器捨て場の位置に方位の意識がなく、地形的な制約を受ける、すなわち、集落内での行動に邪魔にならない場所が土器捨て場の場所に選ばれていることなどから宗教的意識はとくにない、としている。特殊遺物の代表例とも言える土偶の出土についても、破壊し、ばらまいた時点で効力を失ったものを土器捨て場に廃棄したと解釈されている。本遺跡の土器捨て場からは特殊な遺物である土偶・土製円盤・有孔罅付土器などが、揃って他の遺構、グリッドから出土したものよりも遙かに多いという事実がある。とくに土偶についてみると、200m以上離れた、別の集落に伴う土器捨て場（三口平平遺跡の西側の土器捨て場）から出土した土偶との接合例がみられることから、単にすでに効力を失ったものを廃棄したとは考えにくいのである。接合した左右の脚部は明らかに人によって二つに分けられ、別々の土器捨て場に捨てられている。「捨てる」という表現は適切ではないかもしれないが、仮りに捨てたものとしても、とくに土偶が集中する部分に捨てている訳であり、ゴミとして捨てた可能性ももちろん否定はできないが、逆に捨てることにこそ意味があったのかもしれない、とすることも可能であろう。一方、土器についてみると、本遺跡の土器捨て場には完形品が「埋納」されている訳ではなく、使用不能になった破損品が捨てられているのであり、また、完形で出土する打製石斧や石鏃などについては、前述したように柄・矢柄の破損したものを捨てていることが考えられることなどからゴミ捨て場という機能は否定できないものであろう。しかし、このような特殊遺物の集中度や接合例などから、単にゴミ捨て場としてのみ土器捨て場を捉えて良いものか疑問を感じる。

土器片の接合例では、複数が接合し、ほぼ完形にちかくなったものは存在するが、完形になったものは1点もない。それらは、前述したように小破片であっても1m以内にまとまっていたものが多く、遠くから投げ込んだというよりその場所まで行って、そこに捨てたと解釈したほうが良い状態で出土している。このことに関して、東京都多摩ニュータウン№3遺跡で小葉一夫氏により興味深い指摘がなされている。小葉氏は勝坂式期と加曾利

E式期からなる土器捨て場について、「土器捨て場は、谷頭から谷底にかけて形成されており、谷頭に完形を含む、まとまった土器が多く谷中・谷底では小破片となっている。また、接合関係では谷頭を基点として、谷の傾斜に沿ったかたちでの接合関係を示しており、本来の土器捨て場は谷頭にあり、そこから自然に拡散されていった」としている<sup>5)</sup>。この状態は、尾根の先端部からの投げ捨てを、しかも谷底に向かって放り投げるのではなく、足元の傾斜地に捨てたことを意味するものであろう。本遺跡は扇状地扇中央部に位置しており、多摩ニュータウンNo3遺跡とは土器捨て場の立地条件は全く違うが、捨てる際の状況（本遺跡での、1m内外での接合例が多いと言う事実）は同様であると言える。

さて、そのような状況があって遺物が集中していればこそ土器捨て場という遺構が出来上がっている訳であるが、そのような条件下で、住居内覆土と土器捨て場出土の破片の接合例も2例だけではあるが、確認されている。住居址はいずれも10号住居址で、第31図-9および第127図-19に示した破片がそれである。前者は10号住居址の床面から約20cm浮いた破片複数と土器捨て場のe6小グリッドから出土した破片1点が約6mの距離を置いて接合したものである。後者は土器捨て場のf4、h4・5、85各小グリッドから出土した破片複数と10号住居址の破片1点とが接合したものである。ただし、この両者は胎土・施文などから同一個体の可能性もある。10号住居址は土器捨て場と最も近い住居址ではあるが、接合資料は6m程の距離を置いているのであり、住居内と土器捨て場の接合例として良いであろう。整理段階では、10号住居址出土の多くの破片のうち、この2点以外の接合例は認められなかった。本遺跡においても、10号住居址を含めたほとんどの住居址の覆土中から廃棄された遺物、とくに土器片が多く出土している。一般的にみられる廃絶住居（凹地）への廃棄行為である。こういった廃棄行為があるにも係わらず、一方では土器捨て場にまで割れた土器を運んで行ってその場所へ捨てているのである。そこで、土器捨て場に廃棄するものと廃絶住居の凹地に廃棄するものとの違いがあるのか、という問題が提起されるのであるが、住居址内と土器捨て場の接合例が確認されたことで、とくに土器についての違いはないとすることができる。しかし、逆に10号住居址の多くの破片のうち僅かに2例しか接合が認められないという解釈も可能であり、土器捨て場に運ぶべき土器片の一部が、凹地に落ち込んだとすることもできよう。前述した特殊遺物の出土状況からは、土器捨て場の特殊性、言い換えれば住居内への廃棄より遙かに多く土器捨て場に特殊遺物が捨てられていることから、土器捨て場に捨てられるものが有る程度選択されているように見受けられる。これについても、他のグリッド出土の特殊遺物と土器片との比率が出していないため、土器捨て場出土の特殊遺物の総量は確実に多いが、遺物総量における比率がどの程度であるか判断していない現状では、一概に土器捨て場に捨てるものが選択されたと言えない面もあろう。ともかく、土器捨て場と住居址内の出土遺物の接合例は現段階では様々な解釈が可能であり、類例の増加が強く望まれる。

#### 註

- 1) 小野正文 1986 『釈迦堂』I 山梨県教育委員会 甲府
- 2) 長沢 他 1986 『一の沢西・村上・後呂・浜井場』 山梨県教育委員会 甲府
- 3) 長沢宏昌 1986 「曾利I式大渦巻把手成立の一要因」『山梨考古学論集』I p117～p137 山梨県考古学協会 甲府
- 4) 中野修秀 1984 「土器捨て場考(1)」『日本考古学研究所集報』VI p14～p44 日本考古学研究所 千葉県佐倉市
- 5) 小栗一夫 1982 「埋没谷における中期の遺物出土状態」『多摩ニュータウン遺跡』昭和56年度・第5分冊 p213～p215 東京都埋蔵文化財センター 東京都多摩市

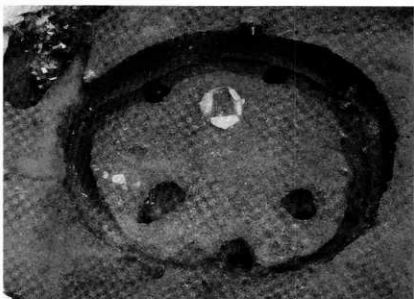
版 圖

図版1 野呂原遺跡全景(調査前・右端は三口神平遺跡)





図版 2  
(上・中 2号住居址 下 3号住居址)



図版3  
(上・中3号住居址 下4号住居址)



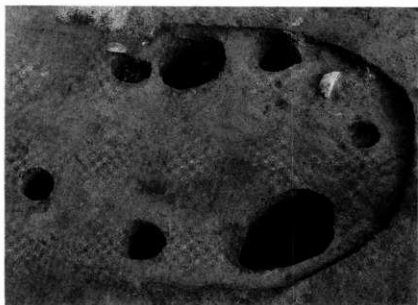
図版4  
(上・中 4号住居址 下 5号住居址)



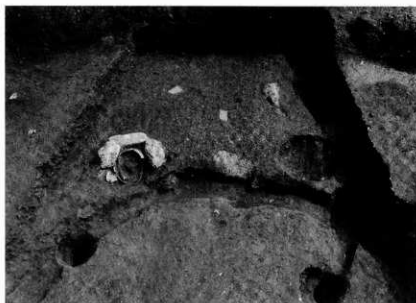
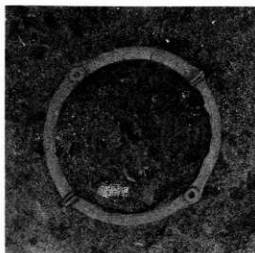
図版 5  
(上・中・下 6号住居址)



図版 6 (上 7号住居址 中 10・11号住居址 下 10号住居址)







図版9 (上・中13号住居址 下15号住居址)





圖版 10  
(上・中・下 15号住居址)



図版11 (上・中・下16号住居址)

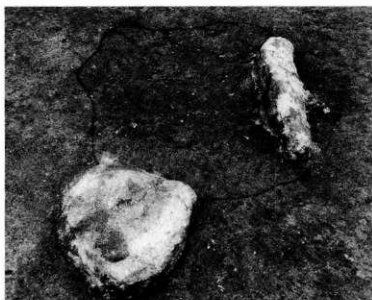


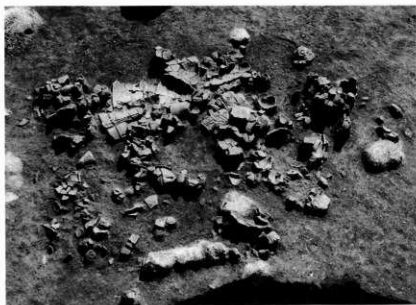
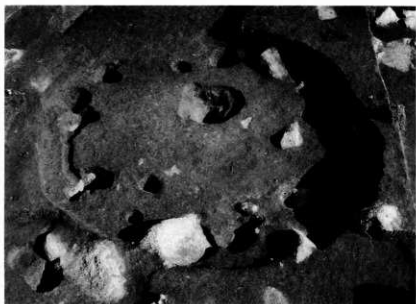


図版13  
(上 19号住居址 中・下 20号住居址)



図版 14  
(上・中・下 21号住居址)







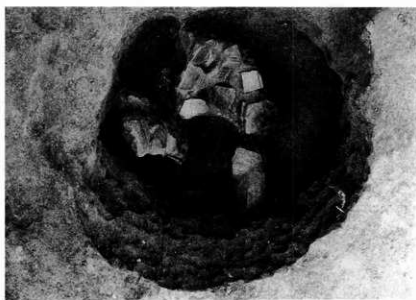
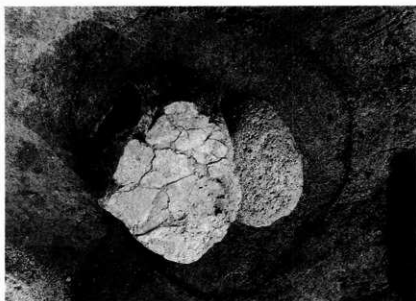
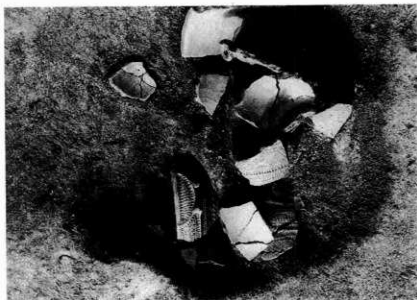






圖版 19  
（上 74 号土塚 中 100 号土塚 下 101 号土塚）





図版 21 (上山号土塚 中・下128号土塚)

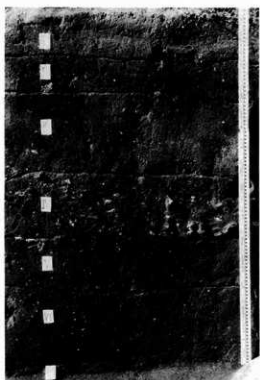








図版25 (上) 土器捨て場セクション 中・下 土器捨て場遺物出土状態)





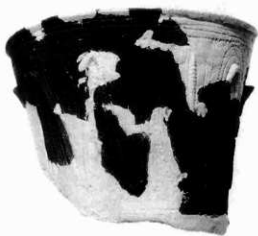


图版 27  
(14号住居址遗物出土状态)

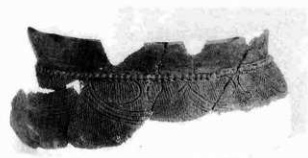


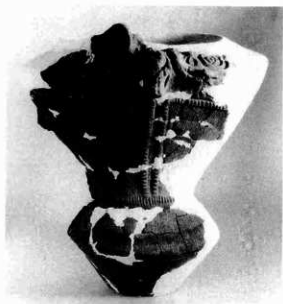


図版 29 住居址出土土器（上 4号 下 5号）

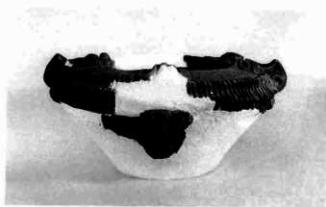


図版 30 住居址出土土器(6号)









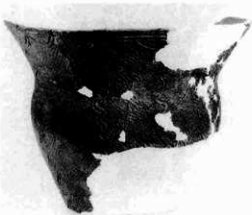
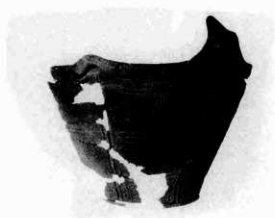


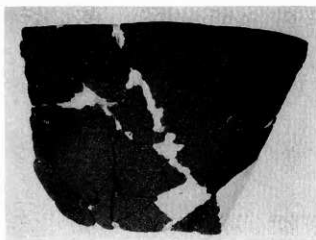




図版 36 住居址出土土器 (22号)







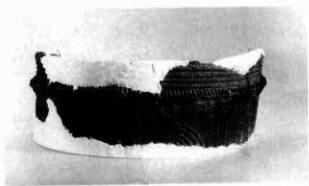
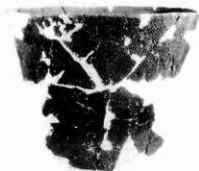
図版39 土城出土土器（上左101号 上右111号 中左112号 中右128号 下129号）



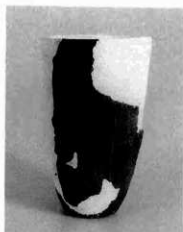
図版 40 单独埋甕（上左 1号 上右 3号 中左 4号 中右 5号 下 6号）



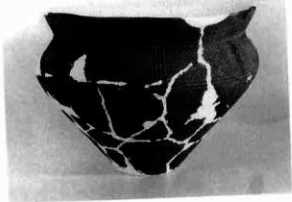
図版 41 単独埋瑛 (上左 7号 上右 8号 中左 9号 中右 10号 下左 11号 下右 12号)

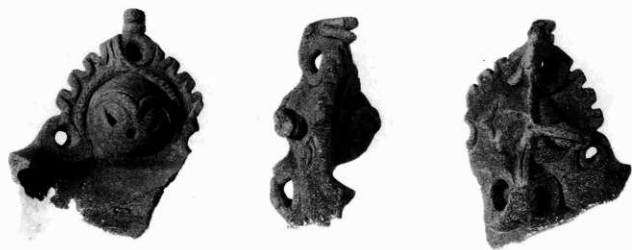


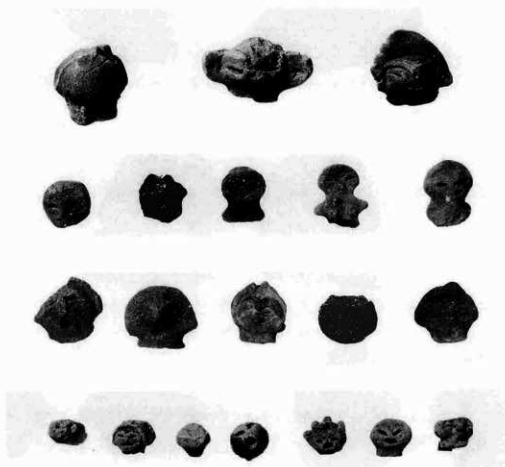
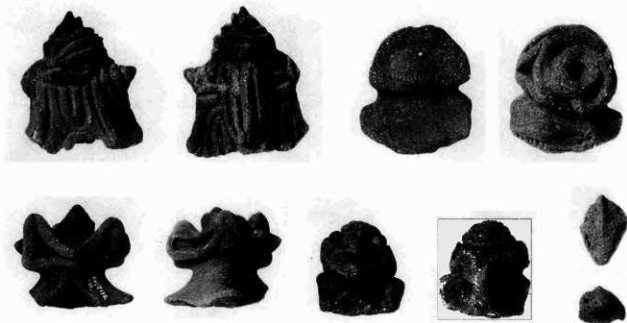






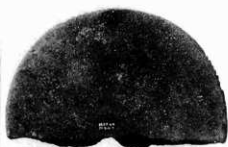
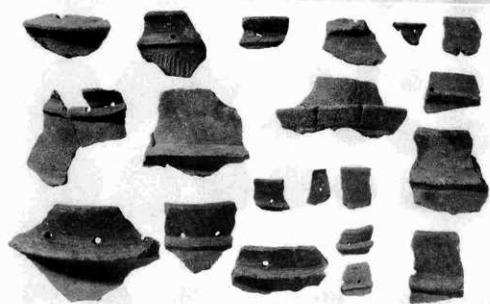
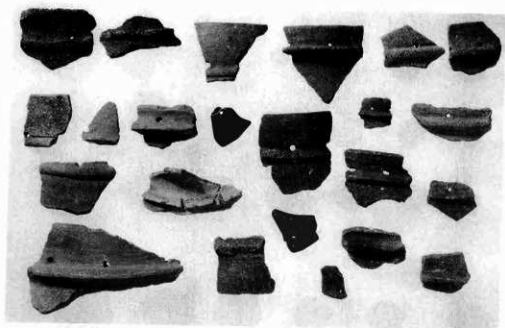




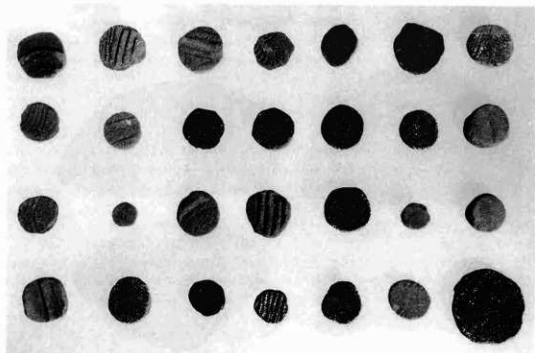
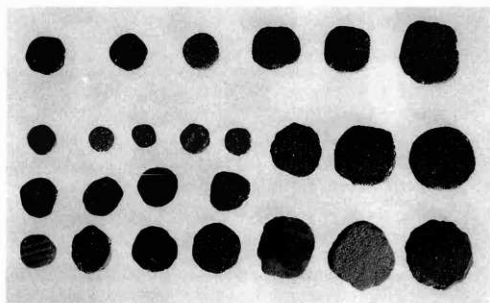
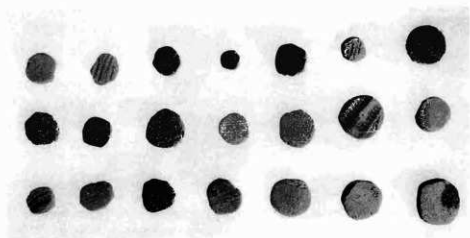




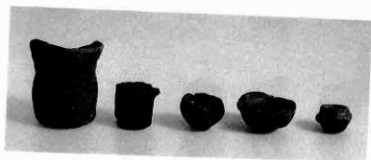
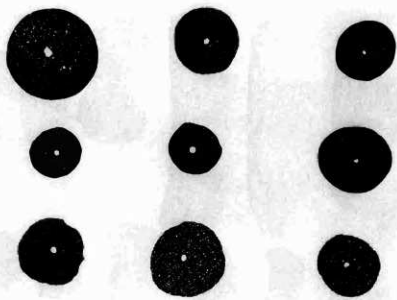


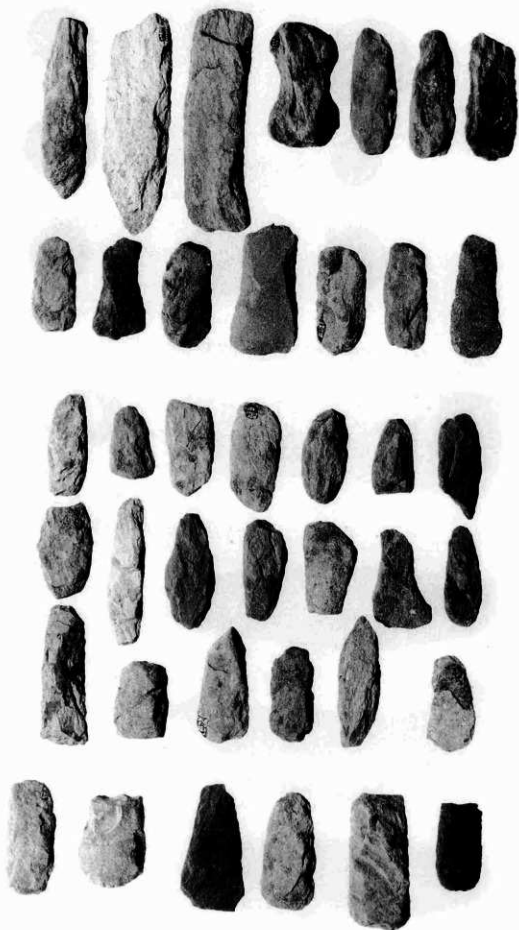




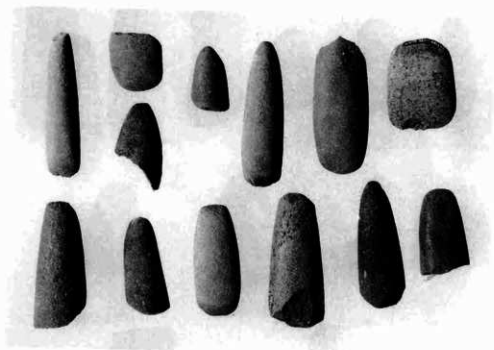
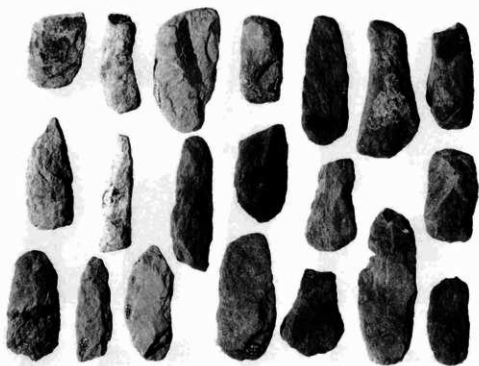


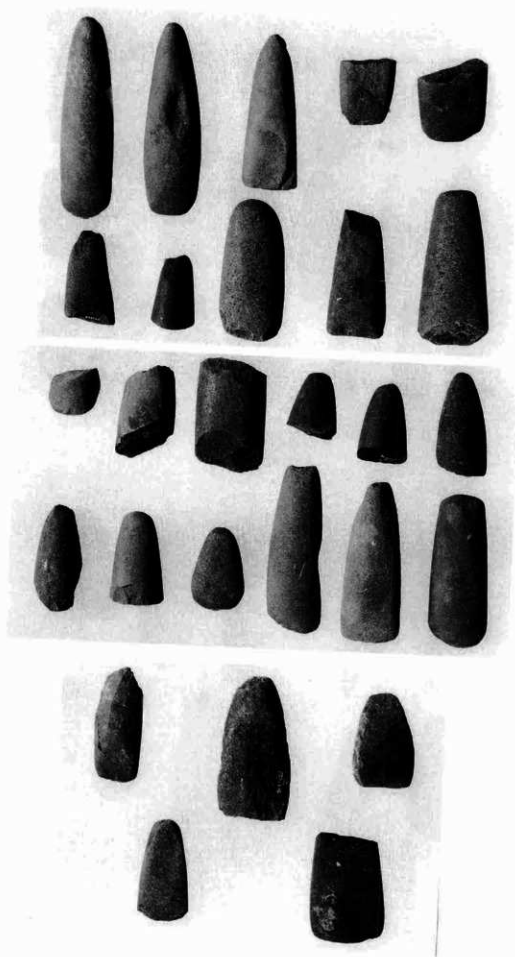
図版 51 その他の土製品（上有孔内盤 中左 ミニチュア土器 中左 耳飾 下左 不明土製品 下右 土種・土玉）

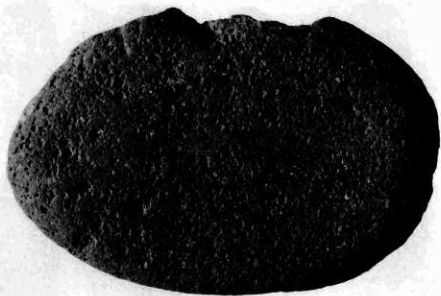


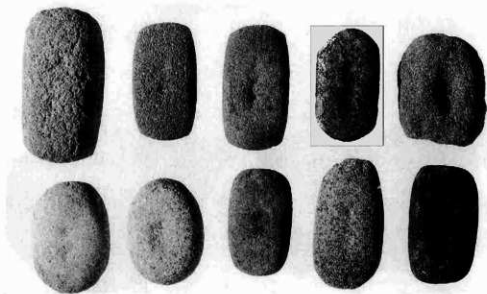
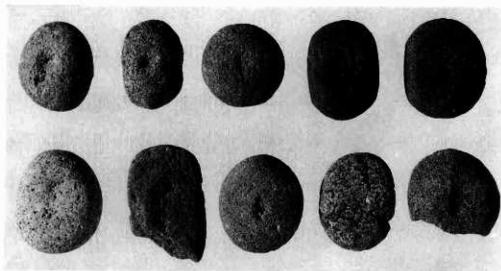
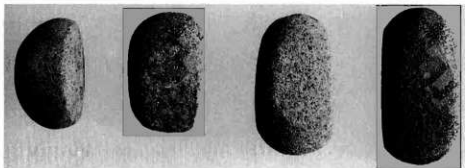


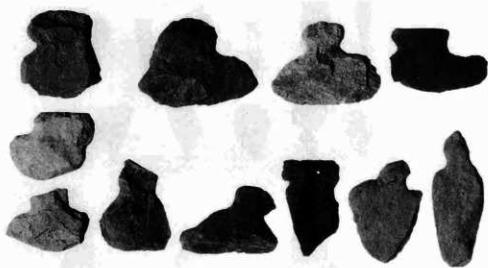
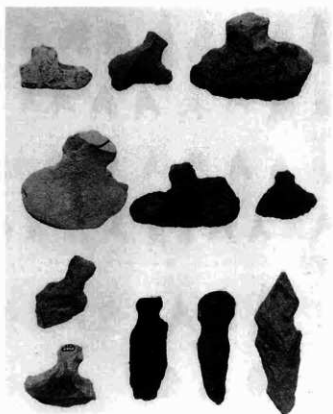
圖版 53 上 打製石斧 下 磨製石斧



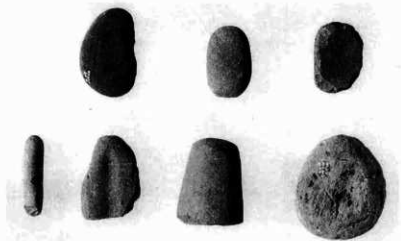
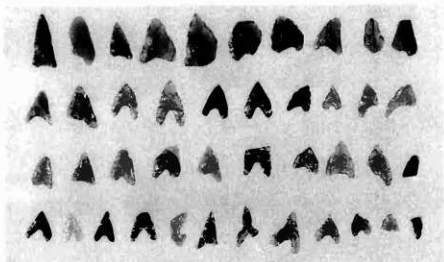


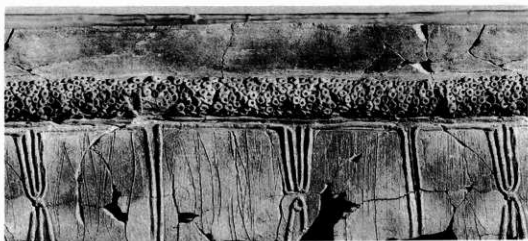












图版60  
展筒写真(10号住居址出土土器・74号土塚出土土器)





昭和62年3月25日 印刷

昭和62年3月31日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第22集

## 积 迦 堂 III

山梨県中央自動車道  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

発行所 山梨県教育委員会  
日本道路公団  
印刷所 勝峽南堂印刷所

